標準問題

國文新鈔

教授資料

上篇

3759
K06
資料室

41751
教科書文庫
4
810
41-1934
200030
2018

375.9
Ko6
資料室

光風館編輯所編

標準問題 國文新鈔教授資料 上篇

東京 光風館藏版

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
39188
図書

標準問題

國文新鈔教授資料

目次

上篇　近古文

方丈記鈔……一
一　行く川の流(一)……二
二　朝顔の露(二)……五
三　難波の京……八
四　かしこき御代……一〇
五　心念念に動く……一二
六　末葉のやどり……一三
七　觀念のたより(一)……一五
八　口業をさめつべし(二)……一八
九　假の庵……二〇
一〇　身の爲に住家を結べり……二二
一一　人の友たるもの……二四
一二　衣食のたぐひ(一)……二六
一三　身をば浮雲になずらふ(二)……二八
一四　三界はただ心一つ(三)……二九
一五　一期の月影……三一
東關紀行鈔……三五

一　逢坂の關……三五
二　不破の關屋……三八
三　熱田の宮……四〇
四　濱路……四二
五　本野が原……四三
六　天龍のわたり……四五
七　富士の高嶺……四七
八　都がへり……四八

平家物語鈔……五一

一　祇園精舍の鐘の聲……五一
二　世に四恩候ふ……五三
三　是非の理……五四
四　不孝不忠……五六
五　諫むる子……五七
六　俊寛僧都……五八
七　三年の春秋……六〇
八　福原落……六一
九　せめての事……六五
一〇　さらば與一呼べ……六五
一一　仕つてこそ見候はめ……六六
一二　弓の惜しさに取らばこそ……六七
一三　淺ましげなる朽坊……六八
一四　小原御幸（一）……七〇
一五　寂光院（二）……七二

十訓抄鈔……七五

一　つたなき身……七六
二　庶人のふるまひ……七七
三　あるまじきわざ……七九
四　寄るべからず……八一
五　さるべき遊の席……八二
六　能は必ずあるべきなり（一）……八三
七　花のあたりの常磐木（二）……八五

十六夜日記鈔……八九

一　細川の流……八九
二　あづまの龜の鑑（一）……九一
三　さだめなき空（二）……九三
四　小野の宿……九五
五　心の闇……九六

神皇正統記鈔……九九

一　天津日嗣……九九
二　四民……一〇一
三　有德の君……一〇三
四　德政……一〇三
五　兵馬の權……一〇五
六　武備の勝……一〇七
七　皇恩……一〇八
八　人臣の道……一一〇
九　言語は君子の樞機……一一三
一〇　もとよりの皇都……一一四
一一　夢の世（一）……一一六
一二　三種の神器（二）……一一八

徒然草鈔

一 人物……一三一
二 家居……一三四
三 山里の庵……一三七
四 心の友……一三九
五 常ならぬ世……一三一
六 過ぎにし方……一三三
七 なき人……一三五
八 よき人……一三七
九 大事を思ひ立たむ人……一三八
一〇 物知り顔……一四一
一一 もろ矢……一四三
一二 道を學する人……一四四
一三 寸陰をしむ人なし……一四五
一四 分を知れ……一四七
一五 月花のあはれ……一四九
一六 目にて見るものかは……一五二
一七 身後の財……一五三
一八 能をつかむとする人……一五五
一九 あらぬ道のむしろ……一五八
二〇 物にほこることなし……一五九
二一 疾くかへるべし……一六二
二二 萬の道の人……一六五
二三 是非すべからず……一六七
二四 人の物を問ひたるに……一六九
二五 ぬしある家……一七一

增鏡鈔

一 昔物語……一七五
二 道ある世……一七七

三 いとまだしかるべき御事……一七九
四 雪のむらぎえ……一八一
五 源平の二流……一八三
六 君にふた心われあらめやも……一八四
七 今を限りと思へ……一八六
八 明日しらぬ世(一)……一八八
九 新島もり(二)……一九一
一〇 むらさめの露(三)……一九四
一一 最明寺入道……一九六
一二 志賀の浦波……一九九
一三 相模守高時……二〇〇
一四 楠木兵衛正成……二〇二
一五 笠置落……二〇三
一六 沈みはつべき報……二〇五
一七 さまことなる御幸……二〇八
一八 おはしまし所……二一〇
一九 大塔宮……二一三
二〇 あまの釣舟……二一四

太平記鈔

一 公家武家……二一九
二 代代の聖主……二二一
三 延喜天暦の跡……二二三
四 十善の天子……二二四
五 萬仭の青壁……二二六
六 粱園の昔の御遊……二二七
七 阿部野の合戰……二二九
八 如意輪堂……二三一

目次終

廣島大學圖書之印

標準問題

國文新鈔教授資料

上篇　近古文

方丈記鈔

解題　方丈記一卷は、鴨長明の著で、わが古文學の隨筆ものの中で、枕草紙につぎ、徒然草と肩をならべると推稱されて、廣く世に愛讀される一傑作である。この內容は、作者が安元の大火・治承の旋風、さては養和の飢饉・元暦の地震等、種々な天災地變を經驗して厭世の念を深め、遂に日野山の奧に草庵を結んで一生を終へるまでの事を記してゐる。又その文章は流麗明確、いかにも整然としてゐる。而してこれが後の所謂和漢混淆體の先驅をなしてゐることが、珍重に價するものである。

著者長明は、賀茂社の禰宜長繼の子で、和歌管絃を善くし、後鳥羽上皇に仕へて北面となり、又和歌所寄人ともなつたが、後故あつて剃髮して蓮胤と號し、大原山に入つた。時に年五十。建暦元年(一八七一年)に鎌倉に遊んで將軍源實朝に謁し、やがて歸京して日野山に閑居し、建保四年(一八七六年)に歿した。年六十四。(一八一三—一八七六)但しその歿年には異說がある。

一　行く川の流（一）

行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。（第一節）世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。玉しきの都の中に、棟を竝べ甍を爭へる、尊き卑しき人のすまひは、代代を經てつきせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年やぶれて今年は造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。ところもかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人なり。あしたに死し、ゆふべに生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。（第二節）

〔よどみ〕〔うたかた〕〔かつ…かつ〕〔玉しきの〕〔つきせぬ〕

○和歌山高等商業學校
○桐生高等工業學校
○金澤醫科大學豫科
○東京商科大學豫科
○熊本高等工業學校
○東京女子醫學專門學校

要旨　此の（一）（二）は方丈記の總序で、人生の無常を說いてゐる。

そして（一）は、其の第一節に於て、人生の無常なことを、川の流の絶えず變り、水の泡の消え易きにたとへてゐる。第二節に於て、住みかとその中に住む人との久しくないことを、自己見聞の事實を例證して記述してゐる。

釋義

【行く川の流は……久しくとどまることなし】　流れゆく川の水は暫くも絶えることがなくして、いつも同じ水が流れてゐるやうであるが、それでも今眼前を流れてゐるのは、以前流れてゐた水ではなく、一瞬前の水ともちがつた水である。又その常ならぬ水の淀んだ處に浮んでゐる泡沫は一層はかないもので、今消えたかと思ふと直ぐに又出來るといふ風に、同一の泡がいつまでも同じ狀態でゐることがない。（第一節）

「**行く川の流**」　日々夜々に流れ行く川水。論語子罕篇「子在二川上一曰、逝者如レ斯不レ舍二晝夜一。」とあるのが本據である。

「**しかも**」　それでも。

「**よどみ**」　川水の流の滯つて緩漫な所。ま行四段活用の動詞の連用形の名詞法（假體言）。

「**うたかた**」　水の泡。泡沫。みなわ。消え易いので、よく無常なものの譬に引かれる。

「**かつ消えかつ結ぶ**」　一方で消えたかと思ふと他方では又出來る。消えたり出來たりする。

「**かつ**」　は、玆では副詞であつて、此の「かつ……かつ……」（即ち、動詞の上にかつの加はるものが重つた形）は、一方では何々し一方では何々する、即ち何々したり何々したりする、の意を表はす。

「**結ぶ**」　は、泡の出來ること。

【世の中にある人とすみかと、……大家はほろびて小家となる】　此の世の中に生存してゐる人と、その住家との有樣も、やはり丁度かの流れゆく水と水の泡との有樣のやうなもので、永久に存在してゐるものではない。（住家を川流の無常に譬へ、人生を水泡の無常に譬へ、更に、無常な住家の上に無常な人間が生を託してゐる有樣が、無常な水流の上に無常な水泡が浮んでゐるのに似てゐる意をも含めてゐる。）玉を敷きつめたやうな美しい都の中、屋根を竝べ屋根瓦を押合つて、ぎつしりと立竝んでゐる（大小高低、樣々に立込んでゐる）貴賤貧富樣々の人の住家は、幾代たつても無くならぬものであるが、ではそれが眞實に變つてゐないのか（常住の眞相か）とよく調べて見ると、多くは變つてゐて、昔あつた家は極めて稀である。即ち或は去年破損して今年新しく建て直したとか、或は大きな住家がなくなつてその跡に小さな住家が建てられたとかいふやうな有樣である。

「**すみか**」　住む處の意であるから、住處と書くを正しいとする。住宅の意にも用ひられる。住家と書くは俗であるが、今姑く之に從ふ。

「**かくのごとし**」　上を受けて、世の中の人と住みかとも亦、流れ行く水と且つ消え且つ結ぶ水泡のやうにはかなく變り易いものである、といつたのである。

「**玉しきの**」　玉をしきならべたやうに美しい、の意。普通に、都の枕詞と說かれてゐるが、「玉しきの庭」といふやうに用ひられることが多い。萬葉集にも、その卷十九左大臣橘卿の和歌に、「牟具良波布伊也之伎屋戸母大皇之座牟等知者玉之可麻思乎。」とあるだけで都の枕詞としては用ひてない。それ故之は枕詞的修飾語と見る

べきである。

「**棟を竝べ甍を爭ふ**」「棟・甍を竝べ爭ふ」意で、多くの家が狹い場所に、大小高低、ぎつしりと立並んでゐる有樣をいふ。

棟は、屋根に横たへた大木（棟木）のことであるが、轉じては屋根の意にも、家の意にも用ひる。玆は、屋根の意。

甍は、屋根に葺いてある瓦、轉じて瓦葺きの屋根の意。

爭ふは、我れがちに、場所を奪ひ合ふ意。

「**驕き卑しき**」　尊き人卑しき人の略。身分の高い人や身分の低い人。高貴富裕・卑賤貧困、それ〴〵の身分の人。

「たかき」に對して「ひくき」といはないことに注意すべきである。伊勢物語「おぶなおぶな思ひはすべしなそへなくたかきいやしきくるしかりけり。」

「**すまひ**」「すむ」の延言。「すまふ（は行四段活用の動詞）」の連用形の名詞法（假體言）。因に「すまる」は漢語「ヂュウキョ」の直譯。（國語の「すまひ」と誤用してはいけぬ。）

「**代代を經て**」　多くの時代をすぎて。長い時代に亙つて。幾代たつても。

「**つきせぬ**」　つきることのない。つきは、上二段活用の連用形名詞法（假體言）、それに、さ行變格活用のせを添へたものである。單につきぬとかつきざるとかいふよりは語調が强い。

「**これをまことかと**」　これが果して事實であるかどうかと。

「**たづぬれば**」　たゞして見ると。調べて見ると。

「**昔ありし家**」　もとあつた家。

「**あるは**」　或は。

【住む人もこれに同じ。……ただ水の泡にぞ似たりける】

住みかの變つてゐる事は、この通りであるが、その中に住む人もやはりこれと同樣に變つてゐる。その家のある場所も以前と變つてをらず、その邊に住んでゐる人も澤山あるが、それをよく見ると、かつて見知つて居た人は二三十人の中で、僅かに一人か二人といふ有樣である。朝方死ぬ人があるかと思ふと、夕方生れる人があるといふのが、此の世の習であるが、此の人間の常に生れたり死んだりするならはしは、全く消えたり結んだりする水の泡によくまあ似てゐる。（第二節）

「**多かれ**」　多くあれの約で、多かりといふ形容動詞の已然形。

「**いにしへ見し人**」　かつて見た人。

「**あしたに死しゆふべに生るるならひ**」　朝に死ぬるものもあり、夕に生れるものもある此の世の常相。ならひは、世の常態をいふ。

「**ただ**」　副詞。つよい喩意の語調。

分解

第一節（行く川の流は——とどまることなし）

一、行く川の流……　すみかの無常な譬喩。

二、うたかた……　人間の無常な譬喩。

第二節（世の中にある人——ただ水の泡にぞ似たりける）

一、世の中にある人云々……　喩義と本義との連結。

二、玉しきの—小家となる……　住家の無常を具體的に細敍。

三、住む人も—似たりけり……　人間の無常を細敍。

大意

人の住家の無常で久しくないことは、流水の流れ來り流れ去るやうであり、また人生の果敢ないことは、水上の泡沫の消えたり出來たりするのに同じである。實際大小の家々も絶えず新陳代謝してをり、又人間も絶えず生死して新陳代謝して行くさまは全く水泡と何の變る所もない。

二　朝顏の露（二）

知らず、うまれ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心を惱ましなほ何によりてか目を喜ばしむる。（第一節）その主とすみかと無常を爭ひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり、殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへどもゆふべを待つことなし。（第二節）

〔無常〕

要旨　前文のつづきで、住家を朝顏の花に比し、人間を朝顏の露にたとへて、共にその無常な事を述べてゐる。第一節に於て、人間生死の理のたづぬるに由なきことと、住居に心を惱ますことの愚かさとを敍し、第二節に於て、人間とすみかとの無常を爭ふさまを、朝顏の花（住居）とその露（人間）とのはかなさに譬へてゐる。

釋義

【知らず、うまれ死ぬる人……何によりてか目を喜ばしむる】

このやうに多くの人間が生れたり死んだりするが、その生れる人

は一體何處から來るのであらうか、又死ぬ人は何處へ行つてしまふのであらうか、此の人間の生死の理は全くたづねるによしがない。又住家とても、吾々人間が僅か五十年の人生を託する一時的のもので、永遠に住みはてられず、結局自分の爲の家とはいへぬのであるが、それならば、世人は誰の爲に立派な家を造らうと苦心したり、どういふ理由で、住家の立派なのを見て喜ぶのであらうか、その理由もわからない。まことに愚の至りである。（第一節）

「知らず」　倒置語法で、下の「いづ方へか去る」の後につくと同じである。

「いづ方より來りて、いづ方へか去る」　人生の生死の理のたづねるに由なきをいつたのである。西行法師の撰集抄にも「生れ生れ、生れ生れて、生のはじめを知らず。死し死し、死し死して、死の終をわきまへず。三途、つひに住家にあらず。めぐりめぐる所、皆しばしのほどのやどりなり。」とある。

「假の宿」　吾々の僅か五十年の生を託する一時的のもの故、假の宿といつて、住家をさしたのである。

「誰が爲に心を惱まし」　世俗のならはしとして住家を立派にいとなみ立てることをするが、いかに立派にみがき立てても、どうせ永久に住みはてられない假の宿であるのに、世人は一體誰の爲にそのやうに苦心して立派な家を造らうとするのであるか、どうもわからない。（本人は勿論、自分の爲に建てた積りであるが、その實自分の爲とはいへぬのであるから、それならば「誰の爲にするのか。」と問ひ、結局誰の爲でもない、無駄骨折をなしてゐるのであるといつてゐるのである。）

「何によりてか目を喜ばしむる」　どういふ心で、一時的の住家をみがき立てその美しいのを見てよろこんでゐるのだらうか、どうもわからない。（一寸考へると、見てよろこぶのも道理のあるやうではあるが、悟つて見ると、少しも喜ぶに足らぬことである。その喜ぶに足らぬことを喜ぶのは何故か、それがどうも不可解であるといふのである。）

【その主とすみかと、……ゆふべを待つことなし】　住家の主人である人間とその住家とが、はかないことを競爭するやうに此の世を去つてしまふ有樣は、譬へていふなら、朝顔の花についてゐる露によく似てゐる。或時は朝顔の花の露が先に落ちて花だけが後に殘つてゐることがある。しかし花だけが殘つてゐても、間もなく朝日に照らされて枯れ萎んでしまふ。（丁度そのやうに、人が先に死んで家があとに殘ることもあるが、その家も間もなく破滅してしまふ。）又或時は花がしなびてしまつても、露だけがまだ消えないでゐることもある。しかしその露だけが消えずに殘つてゐても、夕方の來るのを待たないで間もなく消えてしまふ。（丁

度そのやうに、家が先に滅びて、人だけがあとに殘ることもあるが、その人も間もなく死んでしまふ。）（第二節）

「無常を爭ひ去る」　住家と主人と競うて亡び死んで行つてしまふことで、その無常の方へ、はかなく急ぐさまをいひあらはしたのである。即ち兩方とも此の世から去つてしまふことをいふ。

無常　佛教語。一切萬物の生滅變轉して、常住でないことにいふ語。

「いはば」　譬へていふなら。

「朝顔の露」　朝顔の花の上にやどつた露の意で、朝顔の花を住家に譬へ、露を人間に譬へたのである。往生要集「止觀にいふ、無常の殺鬼といふものは貴人賢人選ばずして、威勢ありといへども、この身はあやふくもろければ、朝顔の露の泡あだにたのもしからぬなり。」新古今集釋教歌「何かおもふ何かは嘆く世の中はたゞ朝顔の花の上の露。」

「朝日に枯れぬ」　朝日によつて枯れてしまふといふほどの意。

ぬ　は、現在完了の動詞。

「萎みて」　しなびてしまつて。

「夕を待つことなし」　露が夕までは保ち得ないのを修辭的にいつたのである。

分解

第一節（知らず、うまれ死ぬる――何によりてか目を喜ばしむる）

一、知らず――去る……　人間生死の理のたづねるに由なきを略敍。

二、知らず――喜ばしむる……　住居に心を惱ます愚かさを略敍。

第二節（その主とすみかと――ゆふべを待つことなし）

一、その主と――異ならず……　人間とすみかとの無常を爭ふさまを、朝顔の花（住家）と露（人間）とのはかなさに譬へる。

二、あるは露――枯れぬ……　花（住家）の方が生命の長いこともあるが、やがて朝日に枯れてしまふ。

三、あるは花――待つことなし……　露（人間）の方が生命の長いこともあるが、やがて夕を待つことがない。

大意

生者は何處から來て、死者は何處へ去るのか。住家は生れてから死ぬまでの假のすまひである。その假のすまひを造る爲に心を勞した

り、よきすまひを造つて喜ぶ人の心が知れぬ。主人も家も、遲速の差こそあれ、早晩この世から亡び去つて行く運命を持つてゐるではないか。かく無常な世に、家のために心を苦しめたりよろこんだりする人を愚しく思ふ。

文脈

（一）（二）を一つに圖解すると、大體次のやうになる。

行く川の流は、云々。／世の中にある人とすみかと、云々。／よどみに浮ぶうたかたは、云々。／知らず、うまれ死ぬる人、云々。／玉しきの都の中に、云々。／又知らず假の宿、云々。／住む人もこれに同じ。云々。／あるは露落ちて、云々。／あるは花は萎みて、云々。／その主とすみかと云々。

三　難波の京

御門（みかど）よりはじめ奉りて、大臣・公卿（くぎやう）悉く攝津國難波の京に移りたまひぬ。世につかふる程の人、たれかひとり故郷（ふるさと）に殘り居らむ。官位におもひをかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりとも、とくうつらむとはげみあへり。時を失ひ世にあまされて、期（ご）する所なきものは、うれへながらとまり居たり。

〔世にあまさる〕〔世につかふる程の人〕〔期する所〕

○海軍兵・機關・經理學校

要旨　平家が福原に遷都したので、安德天皇をはじめとして、苟くも官途にあつた人々は皆爭うて新都に移つたことを記してゐる。

釋義

【御門】　天皇の敬稱。天皇の御身を指すのを憚つてその御居所なる皇居の御門（ごもん）に就て申し奉つたのである。玆は、第八十一代安德天皇を申し上げる。

【大臣・公卿】　朝廷に仕へる高位高官の人々。

「**大臣**」　太政官の上官の稱で、太政大臣・左大臣・右大臣・內大臣等をいふ。

「**公卿**」　**公**は、攝政・關白・大臣をいひ、**卿**は、大納言・中納言・參議及び三位以上の人々をいふ。

然し「**大臣公卿**」と熟して用ひる時には公卿は、大納言・中納言・參議及び三位以上のものをいふ。玆は、此の意味に取つたがよい。

【攝津國難波の京に移りたまひぬ】　福原の新都にお遷りになつたことをいふ。時は治承四年（一八四〇年）六月の事である。

備考　參照。

【世につかふる程の人】　苟くも官位についてゐるくらゐの身分の人は皆。

【故郷】　今は舊都となつた平安京をさす。

【官位におもひをかけ……とくうつらむとはげみあへり】　高位高官にのぼりたいと望んだり、又は主君のおかげを蒙りたいと願ふほどの人は、一日でも早く新都に遷らうと勵みあつてゐた。

「**おもひをかけ**」　望みをいだく意。

「**主君の蔭をたのむ**」　主君のおかげ（恩惠）に浴したいと賴り願ふ意。古今集東歌に「筑波ねのこのもかのもにかげはあれど、君がみかげにますかげはなし。」とある。

【時を失ひ世にあまされて……とまり居たり】　仕官の時機を失つたり、世の中からのけものにされて、前途に出世のあてのない者は、うれへ悲しむものの、さりとてどうすることも出來ないで、そのまゝ舊都に留まつてゐた。

「**時を失ひ**」　世にあはない意。文選答賓戲に「得レ氣者蕃滋、失レ時者零落。」とあり、古今集序に「きのふは榮えおごりて、時を失ひ世をわび、云々。」とある。

「**世にあまされて**」　世にのこされる。卽ち世に用ひられないとか、世に容れられない意。

「**期する所なきもの**」　出世ののぞみのないもの。榮達の見込のないもの。期は、期待（あらかじめ待つ）のことで、前途の望。

「**うれへながら云々**」　うれへ悲しむものの、さればとて仕方がないので、そのまゝ舊都に留まつてゐた。

備考

【福原遷都】　福原遷都は、平淸盛の專權の餘、急に思ひ立つて實行したものである。その福原は攝津輪田泊の附近で、大體今の神戸市の地にあたる。

卽ち、治承四年五月三十日に遷都の事を發表し、早くも六月三日遷幸といふことに御治定になる。更にその三日を二日に引上げ、愈〻主上安德天皇を始め奉り、後白河法皇・高倉上皇同じく遷御あり、八條より草津（今の下鳥羽）に至る。武士數千騎、二行に轡を竝べて行幸の路を夾み、其の夜大物の浦につき、翌曉に入られた。

主上は平中納言頼盛の邸に、法皇は清盛の別業に、上皇は平宰相教盛の邸に遷られ、攝政藤原基通は、安樂寺別當安能房に落ちついたが、供奉の輩宿所なくして、「道路に立つが如し」とある。清盛の我意を通すに如何に傍若無人であつたかが、之で知れる。然し、かくて數月を經て、新内裏も漸く成つたが、源頼朝の擧兵もあり、高倉上皇の御病氣にかゝられたことなどもあり、玆に流石剛愎な清盛も漸く悔恨の心を起したので、公卿の意見を徵した結果、同年十一月急にまた復都の事に定まつて、主上をはじめ法皇・上皇の新都御滯在僅かに半年に滿たないで京都に還幸ましまし、福原京は廢してしまつた。（喜田貞吉博士の帝都に據る）。

四　かしこき御代

ほのかに傳へきくに、いにしへのかしこき御代には、あはれみをもて國を治めたまふ。すなはち御殿に茅をふきて軒をだにもととのへず。煙のともしきを見給ふときはかぎりあるみつぎ物をさへゆるされき。これ民を惠み世をたすけ給ふによりてなり。

〔ほのかに〕〔ともし〕

要旨　福原遷都の話の結びの文である。そして古の聖天子の御代では仁惠を以て國を治められたことをのべ、その實例として支那の堯帝の儉德と、本朝の仁德帝の仁德との故事をあげてゐる。

釋義

【ほのかに傳へきくに】「はつきりとは知らないが、かすかに傳へ聞く所によると」といふ意で、作者の謙遜した語。

【かしこき御代】聖天子の御代、即ち聖代の意。

【御殿に茅をふきて軒をだにもととのへず】堯帝が質素な家造りをして、茅を葺きつばなしにして、軒のさきのところをすらきりそろへずに置いた故事をさしていふ。

「御殿」古語としては「みやらか」と訓む。

祝詞式大殿祭に「瑞之御殿古語云阿良可」とあり、萬葉集卷二に「宮柱ふとしきいまし御在香を高しりまして、云々。」とある。

「茅をふき云々」墨子に「堯堂高三尺。土階三等、茅茨不剪、采椽不刊」とあるをいふ。

【煙のともしきを見給ふときは……ゆるされき】仁德天皇の御聖德の故事をさしていふ。

「煙のともしきを見給ふときは」民の竈の煙の乏しいのを御覽なされては、の意。紀卷第十一、仁德天皇紀四年春二月己未朔甲子の條參照。

ともし　は、古語。「とぼし」に同じ。不足である。少い。乏。

【かぎりあるみつぎ物】「かぎりある」は、きまつた。一定の、といふほどの意。「みつぎ物」は、人民から官に奉る租稅の泛稱。

備考

平家物語の「新都の事」の條に、

いにしへのかしこき御代には、すなはち内裏に茅を葺き、軒をだに整へず、煙のとぼしきを見給ふ時には、かぎりある貢物をもゆるされき。これすなはち民をめぐみ、國をたすけ給ふによつてなり。

と、之と殆ど同文章で書いてある。

五　心念念に動く

もしおのづから身數ならずして權門のかたはらに居る者は、深くよろこぶことはあれども、大いに樂しぶにあたはず。歎きある時も、こゑをあげて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをののくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。（第一節）もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつつ出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念念に動きて、時として安からず。（第二節）

〔權門〕〔すぼし〕〔ないがしろなるけしき〕〔念念〕〔時として〕

○京都高等蠶絲學校

要旨　作者が、出家の動機を述べた文の一部分である。即ち作者の無常觀は幾多の天變地災及び人事の變によつて、いよ〳〵痛切になつて行つた。さうして當時の世態人情のあさましさは愈〻彼に出家遁世を急がせるのであつた。

本段は、住處に就ての不安を述べてゐるもので、その第一節（もしおのづから……雀の鷹の巣に近づけるが如し）は、數ならぬ身を以て、權門のかたはらに住む不安の心情を說いてをり、第二節（もし貧しくして……時として安からず）も、貧しき身を以て富家の隣に住む不安の心情を說いてゐる。

釋義

【もしおのづから、身數ならずして……雀の鷹の巣に近づけるが如し】或はひよつとして、人の數にもはひらぬほどの微賤の身で、權勢ある人の傍に住んでゐて、そのお蔭を蒙つてゐるものは、自然と何かにつけて遠慮をしなければならぬから、心の中に大層喜ぶことがあつても、それを言語や擧動にあらはして、大いに樂しむ事が出來ない。また心の中に歎き悲しむことがあつても、遠慮して大聲を出して泣くことも出來ない。その他すべての振舞につけて、いつも氣がねばかりして、機嫌をそこなふ事はないかと、恐れふるへてばかりをる、このありさまを譬へて見ると、丁度雀が鷹の巣に近づいたやうなものである。（第一節）

「**もし**」或はといふに通ふ。思ひ設けていふ。

「**おのづから**」強ひて求めて居るのでなく、自然さういふ所に居る者は、の意。ひよつとして自然に。文脈からいふと、「權門のかたはらに居る」にかゝるのであつて、「身數ならずして」にかゝるのではない。

「**身數ならずして**」自分の身が人の數にもはひらぬ程の身であつて。即ち、出世せずに微賤な身分であつて、の意。

「**權門**」朝廷に仕へて權勢のある臣の家。高位高官で幅を利かしてゐる者の家。

「**深くよろこぶことはあれども、云々**」心の中に深くよろこぶ事があつても、とかく遠慮してゐて仰々しく笑ひ樂しむことは出來ない。

「**樂しぶにあたはず**」は、當時の一種の語法であつて、十訓抄にも「十德なからん人は判者にあたはず。」とある。普通ならば、樂しぶ（こと）能はず」とあるべきである。此の「樂しぶに」は副格と見るべきである。「あたふ」は、當て合ふの約で、かなふ・ふさふ・適合す、等の義から、なし得・できる、の義に轉じたものである。常に、打消を添へて用ひる。

「**こゑをあげて泣くことなし**」やはり、その隣の權門にはゞかる上から、泣きたくも泣かずにをることをいつたのである。

「**進退やすからず**」事をするのにも其の機嫌をそこなひはしないかと安心の出來ぬことをいつたのである。

「**立居につけて**」一擧一動につけて。立つたり坐つたりするにつけて、の意。

「**恐れをののく**」おそれふるへる。

以上は本朝文粹の十二卷にある慶滋保胤の池亭記に「近二勢家一容二微身一者、（中略）有レ樂不レ能二大開レ口而咲一、有レ哀不レ能二高揚レ聲而哭一、進退有レ懼、心神不レ安。譬猶二鳥雀之近二鷹鸇一矣。云々。」とあるに據つたものであらう。

【もし貧しくして富める家の隣に……時として安からず】或は自分が貧しい身でありながら、富貴な人の家の隣に住んでゐる者は、朝夕の別なく、自分のみすぼらしい身なりを恥づかしく思つて、その富貴の人々の御機嫌を取り取り、へつらひながらその家に出入りをする。更に自分の妻子や召使どもが、富貴の家の樣子を見て羨ましく思つてゐる樣子を見るにつけても、又富貴の家の人々が自分等を輕蔑してゐる樣子があるのを聞くにつけても、自分の心は時々刻々に動搖して、一時でも落ちついてゐられる時がない。（第二節）

「**すぼき姿**」**すぼし**は、すぼみて細し、の義から轉じて、みすぼらしい意に用ひる。前に引いた池亭記に「南院貧、北院富、富者未二必有レ德、貧者亦猶有レ恥」とあるによつてかいたものであらう。

「**僮僕**」召使。僮は、小僧。一に、妻子・僮僕と讀ませてゐるが、妻子・僮僕とよんだものであらう。

「**ないがしろなるけしき**」こちらを輕蔑したやうな樣子。見さげたやうな態度。

「**聞くにも**」上の「見るにも」に對する。畢竟同じことをいつたのであるが、前者は直接であり、後者は間接である。

「**念々に**」見るにつけ、聞くにつけて、其の度毎に心の動く意。又は、時々刻々に。一瞬毎に。

「**時として**」一時も、の意。しばらくでも。如何なる時でも。常に。（時々・折々、の意ではない。）

「**安からず**」落ちつかぬをいふ。

大意

微賤な者や貧困な者が、權門や富家の傍に住むと、色々の氣がねやら、癪に障る事があつたりなどして、少しも心が著ちつかぬものである。

六　末葉のやどり

爰に、六十の露、消えがたにおよびて、更に末葉のや

どりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し。これを、中頃のすみかになずらふれば、又百分が一にだにも及ばず。

〔末葉のやどり〕〔なずらふ〕〔だに〕

要旨　本段は、日野山（山城國宇治郡木幡山の東北にあたる）の閑居の冒頭である。卽ち晩年に及んで方丈の庵を造つたことを述べてゐる。

此の草庵に就ては二説あつて、一つは日野山の草庵であるとする説と、一つは何處かに方丈の草庵を結んだのであるとする説とである。前説に從ふと敍事に重複があるので、今姑く後説に從つて、日野山の草庵は、此の方丈の庵を移轉したものであると見る。

釋義

【爰に六十の露……まゆをいとなむが如し】　今この場合に、もう六十となり、餘命いくばくもない頃になつて、晩年の住家を造つたことがある。譬へていふならば、餘命の幾らもない自分の住家のことであるから、丁度旅人が旅路に行きくれて露宿して夜を明かし、老熟した蠶が繭を作つてそれに籠るやうなものである。

「六十の露消えがたにおよびて云々」　もう六十になつて餘生のいくばくもないことをいふ。一説に六十の命の消えがた、卽ち六十の命も將に盡きようとする時といつて、五十七八になつたことを譬へたものであるといふが、とらない。

六十の「ち」は、箇で、數をかぞへる時數詞の下に添へる語の連濁。人の命のはかないのを「露」にたとへていふ所から、「消えがた」といひ、更に「末葉のやどり」と緣語を使つたのである。

「末葉のやどり」　晩年の住家。末葉にやどる露、の意で、その最も消え易いはかないさまを比喩にして、晩年のやどりの意にしたのである。

「結ぶ」　住家を作ることを、露のおくことにかけていつたのである。

「旅人の一夜の宿を作り」　旅人が一宿して立つごとく、今、草庵を結ぶのも年老いて長く住むこともかなはぬ、の意。古、旅するに旅宿のない時は、旅人は用意して來た幕などで、行き暮れた處で、露宿するのであつた。旅人は、一本狩人に作る。亦通ずる。

「老いたるかひこのまゆをいとなむが如し」　晩年になつて、假住の庵を結んだのをたとへていつたのである。蠶は幼蟲から四回の休眠を經て老熟し、始めて繭を作る。池亭記に、「亦猶行人之造旅宿、老蠶之成中獨繭上矣。其住幾時乎。」とあるに據つたのであらう。

【中頃のすみかに云々】　この住家を中頃に作つた家にくらべて見ると、亦その百分の一にでも及ばない。

「中頃のすみか」　一説は、「空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をかへぬる」とあるその大原山の住家を指す。二説は、「三十餘にして、更にわが心と一つの庵を結ぶ」とあるのを指す。玆は、大原山の住家をさすか。

「なずらふれば」　くらべて見ると。

「百分が一」　勿論、誇張していつたのである。

「だに」　口語の、でも・さへ・せめて・なりと、に當る。事物の輕きをあげて、其の餘の重きを言外に理解させる助動詞である。

修辭

本文は、殆どすべて比喩の修辞でかいてある。ことに「いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し」の對句の二句がきいてゐる。又「百分が一にだにも及ばず」の誇張法もわざとらしくなく一種の趣をあらはしてゐる。

七　觀念のたより（一）

その所のさまをいはば、南に筧あり、岩をたたみて水をためたり。林のき近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら、跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春はふぢ波を見る。紫雲のごとくして、西の方ににほふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳に滿てり。空蟬の世をかなしむかときこゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま、罪障に譬へつべし。

〔爪木〕〔外山〕〔觀念のたより〕〔しも〕〔にほふ〕〔死出の山路をちぎる〕〔あはれむ〕〔罪障〕〔譬へつべし〕

○東京外國語學校

要旨　（一）（二）は、やはり日野山の閑居の一部分であつて、その草庵のあたりの有樣や四時の景物や又自己の自由な心境を述べてゐる。

本段は、草庵の四圍の狀態と四時の景色を數へあげて、それを佛敎のことに引きつけて說いてゐる。

釋義

【その所のさま】日野山の作者の草庵のあたりの有樣。

【筧】懸樋の義。埋樋に對して、地上に架して或場所から他の場所へ水を引くやうにした樋。字彙に「以レ竹通レ水」とある。

【岩をたたみて云々】石をたゝみ築いて、筧から流れて來る水を溜めておく。

【のき】軒。家の屋根の裾の四方へたれてさし出てゐる所。そして玆では、軒端（軒のはし）の意で、あたりの林が、すぐのきば近くにおほひかぶさつてゐることをいふ。

【爪木】薪。詳しくは、手で折りあつめるほどの小枝の薪。白氏六帖に「大曰レ薪小曰レ蒸」とある。

【乏しからず】不足を感じない。不自由しない。卽ち薪の心配はいらない、の意。

【名を外山といふ】その邊の土地の名を外山といふ。

「外山」端の山をいふ。「日野山の外山」の義から地名となつたのであらう。今、日野山のあたりに、外山といふ地があつて、そこに方丈の遺趾があるといふが、眞僞は確かでない。

【正木のかづら跡をうづめり】そのあたりには、正木のかづらが一面にはえて、行き來する人の足跡もわからない。

「正木のかづら」常綠である蔓草の一種。然し之に就ては諸說あつて、その一は薜荔をさし、四時凋まず、厚葉堅强、花が咲かないで、實がなるといふもの。その二は、葉は南天に似て黑みがあり、冬のはじめに紅葉して美しいといふもの。又名義に就ても、一說は、常に綠色なものであるから、眞幸の意だらうといひ、又一說は、眞析に析きて蔓とする義だらうといふ。

「跡をうづめり」跡は、人跡の義。蔓草におほはれて、人の足跡もわからない。卽ち訪ね來る人も稀な閑居のさまにいふ。紀齊名の賦の辭に「山遠雲埋二行客迹一」とある。新勅選集に「外山にはあられ降るらし谷しげき、まさきのかづらあとをうづめり。」とあるによる。又一說に「人の行き來の路をふさいで居て、足跡の印せらるべくもないほどにしげりあつてゐる」の意と。亦通ずる。

【谷しげけれど、西は晴れたり】谷間には草木が多く生ひ茂つてゐるが、西方淨土の方はからりと開いて遠方まで見晴らされる。

「谷しげれど」玆は、谷が多い意ではない。

【觀念のたよりなきにしもあらず】西方が晴れてゐるので、西方極樂淨土を想ひ浮べて、深く悟道を念ずるのに都合がよい。

「觀念」瞑目して氣を靜め、一心餘事を思はず、諸法の實相を悟得することをいふ。天台止觀に「寂而常照名レ觀。念者但念二涅槃寂滅一不レ念二餘事一」とある。

「たより」便宜の意。

「しも」强助詞なるしにもの添つたもの。玆は、單に語調を整へるために用ひられたものである。

【藤波】藤の花。藤擘の義。その蔓の樣しなひ擘くよりいふ。その花房の擘き動くさまを波に見立てていふとの說もある。萬葉集三には「藤波」とあり、同十七には「布治奈美」とある。

【紫雲のごとくして西の方ににほふ】念佛行者の臨終に、來迎の佛・菩薩の乘つておいでになる紫の雲のやうに、西の方に美しく咲いてゐる。

「紫雲」藤の花を紫雲にたとへたのである。紫雲は祥雲であるとせられる。山家集寄二藤花一述懷に「西をまつ心に藤をかけてこそ其の紫の雲をおもはめ。」とある。

「如くして」如くにして、又は如くあつて、の意。

「西の方」西方淨土の意をこめていふ。來迎の佛・菩薩は西方から來られるから、特に「西の方ににほふ」といつたのである。往生要集卷五に「廿五の菩薩、百十の比丘衆もろともに來りたまふや、西の空紫雲たなびき云々。」とある。

「にほふ」色にも香にもいふ。玆では、よい香をはなつといふのではなく、美しく咲く、の意である。源氏物語桐壺に「いとにほひやかに美しげなる人のいたうおも痩せて、云々。」とあり。萬葉集一に「紫の爾保敝類いもをにくくあらば、人妻ゆゑにわれ戀ひめやも。」とある例は、何れも香に就ていふのではない。

【かたらふごとに死出の山路をちぎる】時鳥と話しあふ度毎に（時鳥の鳴くのを聞くごとに）、冥土にゆく時、死出の山路を一緒に辿らう（一解に、案內してもらはう）と約束する。山家集に「待賢門院の女房、堀川の局のもとよりいひおくられける。」と詞書して、「此の世にてかたらひおかん時鳥しでの山路のしるべともなれ。」とあり、その返しに「ほととぎすなくなくこそはかたらはめ、しでの山路に君しかからば。」とある。

「死出の山路」佛說にいふ、死後辿りゆく山路。冥途のこと。

「ちぎる」やがて一緒に死出の山路を辿らうと約束する、との意。但し、時鳥の異名を「しでの田長」といふので、かくあやなしていつたものであらう。「しでの田長」とは、「賤田長」の轉で、農業にいそしむ頃、勸農のために鳴くといひ傳へてゐる。「しでのたをさ」のしに、死の義をよせて詠んだ詩歌が多くある。十王經（僞經）に、かの蜀魂の故事に附會して、冥途に此に鳥が鳴くといつて

ゐるのなどを、典據としたものであらう。

【日ぐらし】　茅蜩、略して蜩。山野樹林の中にあつて、夏の末秋の初に、日暮方、かなかなと鳴く。その聲寂寥。世に、かな〳〵蟬、又は、かな蟬といふ。白氏文集卷十三に「相思夕上二松臺一立、蜀思蟬聲滿耳秋」とある。

【空蟬の世】　「空蟬」は、現身即ち現在世にある人の身の義から、命・世・人などにかゝる枕詞。玆は、蟬の蛻の義をかねて、蜩のさびしげに鳴くのを「世をかなしんで鳴くのか」と聞くといふ意。

【冬は雪をあはれむ】　冬は雪を面白いと思つて見る。玆は、不便に思ふのではなくて、心にしみ〴〵と感じてながめるの意。古今集序に「霞をあはれみ露をかなしむ。」とある。

【積り消ゆるさま罪障に譬へつべし】　積つたかと思ふと消え、消えたかと思ふとまた積る有樣は、かの極樂往生の障となる罪業が積つたり、懺悔行法によつてそれが消えたりするさまに譬へることが出來る。

「罪障」　佛說にいふ凡夫の煩惱が、罪科があつて往生の障碍となるものをいふ。佛者は濁世にあつて作つた罪障を消滅させる事につとめる。夫木集源信僧都の歌に「さとりえておもひとく日にあひぬれば、ほどなく消えぬ罪のあは雪。」とある。

句法

本文は、殆ど作者得意の簡明直截な句の連續によつて成つてゐる。そして同じ句法でつゞけて行きながら、しかも平板單調の弊に陷らぬところに、特に作者の周密な用意と筆致の巧妙とが見えるのである。之は、この書の全篇に亙つての事であるが、本文に於て特に目立つてゐる。

八　口業をさめつべし

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば、口業をさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。

〔まめ〕〔口業〕〔禁戒〕〔境界〕

○明治大學據科

要旨　前文の續きであつて、作者の草庵に於ける悠々自適の心境を敍し、山中の生活言行おのづから佛戒にかなふことの心安さを說いてゐる。

釋義

【念佛】　佛敎語。廣く諸佛に通じて、いはゆる佛の相好を觀察し、その功德を憶念し、その佛名を稱念するに名づけることばではあるが、しかし最も普通には、阿彌陀佛の御名を稱念するにいふ。

猶詳說すると、先づ、心念・輕聲念・高聲念の三種に別れ、又、稱名念佛・觀念念佛・觀想念佛・法身念佛の四義に別れる。淨土門では、たゞ南無阿彌陀佛の六字の名號を稱する事をいつてゐる。（法華經に「以二深心一念佛、修二持淨戒一。」とある。南無は、歸命の義、救我度と譯す。阿彌陀とは、無量光・無量壽の義。即ち、南無阿彌陀佛とは、無量光覺者また無量壽覺者に歸命する、の意。）

【ものうく】　氣が進まない意。靈異記には倦の字をよんでゐる。

【讀經】　經文をよむこと。誦經・看經といふに同じ。

【まめならざる時】　身に入らぬ時。たいぎな時。

【みづから】　自分勝手に。

【妨ぐる】　おせつかいをする。

【恥づ】　遠慮する。氣がおける。

【殊更に……口業をさめつべし】　わざわざ佛戒を守つて、無言の行はしないが、たゞ一人でゐるのだから、口業を犯す憂もなく、自然と口業を修める事が出來る。

「殊更に」　わざわざ。

「無言」　無言の行。佛者はことに言語を愼しむべき事を戒めてゐる。報恩經に「一切衆生禍、從レ口生、口舌者鑿レ身之斧也。」とある。砂石集卷五、行基遺誡の文中に「口の虎、身を害し、舌の劍、命を絕つ。口を目鼻のごとくしぬれば、殘して後も科なし。口を守り、心を節して、身を犯すことなかれ。かくの如く行ふもの、世わたる事を得。」とある。

「ひとり居れば」　一人でゐるのだから。

「口業」　三業（身業・口業・意業）の一。十惡の中、口を以てなす罪業。妄語・綺語・惡口・兩舌・自讃・毀他の類をいふ。

「つべし」　現在完了の助動詞のつにべし（此の場合は可能の助動詞）が添つたものである。

【禁戒】　佛敎語。人の所作惡業の制禁。五戒・八戒・十戒などあつて、いづれも身・口・意の三方面に於て惡行實踐するを旨とするものである。一に戒行ともいふ。

【境界なければ何につけてか破らむ】（必ず禁戒を守るといふわけでもないが、）心を動かされる對象がないから、何事につけて禁戒を破らうか、破ることはない。

「**境界**」佛教語。境域界別の義で、凡聖迷悟の十境界に、世界を別けていふことばであるが、玆では、心識の對象たるものをさしていふ。わが心を動かす四圍の事物、卽ち、眼・耳・鼻・舌・身・意の接するところのもの。

「**何につけてか破らむ**」**破る**は、禁戒を破るをいふ。上の守ると相對する。

九　假の庵

大かたこのところに住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、今までにいつ年を經たり。假の庵もややふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都を聞けば、山に籠りゐて後、やむごとなき人の隱れ給へるも、あまたきこゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たびたびの炎上にほろびたる家、又いくそばくぞ。ただかりの庵のみ、のどけくして恐れなし。

〔**あからさま**〕〔**土居**〕〔**やむごとなし**〕〔**炎上**〕〔**いくそばく**〕

○長崎高等商業學校

前數段を重ねて、日野山の外山の草庵の閑居の趣を敍しゝくし、これより又、遁世の靜かな生活、愁なき境界を願ふことを說き出すのであるが、此の段は、前の閑居の感興の敍事と後の遁世の談理との中間の接續をなして、「自分がこゝに隱遁して以來、都では人も多く死に、家も多く燒失して、少しも安心のならないのに、自分だけは心安く閑居してゐる。」と、その閑居の心安さを說いてゐる。

釋義

【大かた】大抵といふ意であるが、玆では「まあ一體」といふくらゐな輕い調子でいつたのである。

【あからさまと思ひしかど】さういつまでも久しく住むといふ考もなく、たゞほんのかりそめにと思つたのであるが。

「**あからさま**」かりそめに・たゞちよつと・ほんの暫くだけ、などの意。白地と漢字をあてる。因に、うちあけて・あらはに、の意ともなることをも說明されたい。此の場合は、明る狹閒の義か。

【ややふる屋となりて、云々】かりの庵もだん〳〵に古びた家となり、軒ばには朽ちた葉が積り、家の土臺には苔がついてしまつた。

「**やや**」やう〳〵。漸く。だん〳〵。

「**土居**」どゐとよむは非。家の土臺のこと。

【おのづから事の便に都を聞けば】わざ〳〵ではなく、ふと何かの事の序に、都の樣子を聞いて見ると。

「**おのづから**」わざ〳〵求めて聞きたゞしたわけではなく、自然何かの折の事の序にきいたことをあらはす。ふと位の意にあたる。

「**事の便**」事のついでに、の意。

「**都を**」をの助詞を以て、都の樣子をといふほどの意にいひなした巧な用法である。

【この山】日野山をさす。

【やむごとなき人】尊貴な人。たふとい人。**やむごとなし**は止む事なし」の義。打捨てておかれぬといふ意から轉じて、常竝でなく貴い、の意となる。

【隱れ給へるもあまたきこゆ】おかくれになつた（死なれた）方も澤山あるといふことである。

「**あまたきこゆ**」隨分耳にします、といふに近い。

【ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず】まして、數にも入らぬやうな身分の低い人達の死んだのは、殘らず之を知ることが出來ないほど、多いことであらう。

「**數ならぬたぐひ**」上の「やむごとなき人」に對する。身分の卑しい者でも。たぐひは、連中・者ども。

「**盡して、云々**」「不二可二盡知一之」の漢文直譯風。悉く之を知り盡すことは出來ないの意。**盡して**は、殘らず・悉く。

【たびたびの災上にほろびたる家、又いくそばくぞ】度々の火災の爲に燒けうせた家も亦、どれ程あらうか、數限りなく多からう。

「**炎上**」城廓や殿堂などのやうな巨大な建造物の燒けることであるが、玆は、燃え上がる意で、火災で燒けること、猶單に火災の意。

「**いくそばくぞ**」どれほどであらうか、實にたいしたもので、數へきれないほどである。幾十許の義。この場合のぞは、係詞でない。活用語の連體形または體言について之を此結ぶ。

を略してゐると見る說もあるが、なりの代に、ぞと抑へた言方と見るべきか。(日本高等文法に據る)

【のどけくして】 靜かにゆつたりとしてゐて。安穩であつて。

句法

主語　述語
やむごとなき人の　隱れ給へるも、
主部　述部
あまたきこゆ。

一〇 身の爲に住家を結べり

すべて世の人の住家をつくるならひ、かならずしも身のためにはせず、或は妻子・眷屬のためにつくり、或は親昵・朋友の爲につくる。或は主君・師匠および財寶馬牛のためにさへこれをつくる。われ今、身の爲に結べり、人のためにつくらず。ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひひろくつくれりとも、たれをかやどし、たれをかするゑむ。

〔眷屬〕〔親昵〕〔ともなふべき人〕〔たのむべきやつこ〕

○東京帝國大學農科大學實科

要旨 中略した前をうけて、世人の用もない家造に心を勞する愚を評し、更にわが庵の上に言及してゐる。

釋義

【すべて世の人の……身のためにはせず】 概していへば、世の人の住家をつくるならはしを見るに、きつと自分一人の爲につくるとは限らないやうである（自分一人の爲につくるものもあるが、さうでないものも多い）。

「必ずしも……ず」 これは漢文の「不必」と同じであつて、「きつと何々とは限らない。」の意。「必ず……ず」(必不)」と併せ力說して、生徒によく會得させられたい。

「身のため」 わが身一人を入れるため。

【或は妻子・眷屬のためにつくり……馬牛のためにさへこれをつくる】 或者は妻子や親族のものを安住させるために作り、或者は親しい人や友達などを招じ入れるために作る。又或者は、主君や先生を迎へるために作り、猶又、財寶や馬牛などを入れるためにまでも家を建ててゐる。

「眷屬」 もと佛敎語で、親眷愛屬の義からして、父母・兄弟・姉妹等をいつたことばであるが、轉じて一般に親屬の意に用ひられる。一族・親類。

「親昵」 親しみむつびあつてゐる人。

「財寶馬牛のためにさへ、云々」 財寶の爲には倉庫を、馬牛の爲には廐舍を建てるといふやうなことをさす。

【われ今、身の爲に結べり】 然し自分は、自分一身の爲に庵を作つたので、決して他人を入れるためではない。

【ゆゑいかんとなれば】 そのわけはどうかといふに。

「いかん」 は、いかにの音便。

【今の世のならひ……たのむべきやつこもなし】 人情輕薄な今の世の風習から察すると、信賴するに足るほどの召使もなくまた孤獨な佗住居の我が身の上を顧ると、伴ふべき妻子もないからである。

「今の世のならひ、云々」 今の世のならひといひ、我が身のありさまといひ云々の意。卽ち當時は亂世で、人情輕薄となり、賴むに足るほどの人もなかつたし、作者自身の境遇は、世に背いて孤獨な佗住居をしてゐたのである。

「伴ふべき人」 「この身のありさま」に對する語。妻子などをいふ。孤獨な身の上であるから、伴ふべき妻子・眷屬もないといふのである。

「たのむべきやつこもなし」 上の「ゆゑいかんとなれば」の句に對して「たのむべきやつこもなければなり」と結ばなくてはいけぬ。たのむべきやつこ は、信賴すべき召使（奴婢）。上の「今の世のならひに」に對する語。今の世は人情が輕薄になつてゐるから、信賴すべき召使はないといふのである。

【ひろくつくれりとも、たれをかやどし、たれをかするゑむ】 たとひ廣くつくつたとしても、宿らせるべき者もなく住まはせるべき者もないのである。(これが、私が、自分一人のために庵をつくるといつたわけである。)

「作れりとも」 つくつたところで。つくつたとしても。

とも は、未定の條件を假定する時に用ひる助詞で、動詞の將然形・形容詞の連用形に連續する。

「するゑむ」 するは、据ゑて住まはせる意。

大意

世人の住家を作るのは、多くは自分の爲につくらず、或は虛榮の爲に作つたり、或は餘計なものを入れる爲につくつたりしてゐる。然

し自分は孤獨で、他に入れるべきものもないから、全く自分一人の爲につくつたのである。從つてそんなに廣い家をつくることはいらない。

文脈

(一) 今の世のならひ、……(三)
(四) ともなふべき人もなく、……(二)
(三) この身のありさま、……(四)
(一) 今の世のならひ、……(二)
(三) この身のありさま、……(四)
(四) ともなふべき人もなし。
(二) たのむべきやつこもなし。
(一) たのむべきやつこもなく

とあるべきを、操して書いたものである。

一一　人の友たるもの

それ、人の友たるものは、富めるをたふとみ、ねんごろなるを先とす。かならずしも情あると、直なるとをば愛せず。ただ糸竹花月を友とせむにはしかず。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを顧み、恩のあつきを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすくしづかなるをば願はず。ただわが身をやつことするにはしかず。

〔ねんごろ〕〔顧みる〕〔恩のあつきを重くす〕〔はごくむ〕

○長崎高等商業學校

要旨　前段の、今の世の人のたのみにならぬことを受けて、茲は、更に友人や召使の利慾にのみ走つて信頼するに足らぬことと、之に對するわが身の上の用意とを述べてゐる。

釋義

【それ、人の友たるものは、云々】　一體、今の世の友人なるものを見るに、彼等は、金持の人を貴び、さも親切らしく世話をやいてくれる人を第一として、之と交ることにつとめてゐる。

「それ」　文の冒頭に用ひる語。一體・そも〳〵。漢文調である。

「人の友たるもの」　世間の友といふ者は。慶滋保胤の池亭記に「人之爲レ友者以レ勢以利。不レ以二談交一、不レ如レ無レ友。」とある。

「ねんごろなる」　うはべだけ親切らしく世話をやいてくれる人。

「ねんごろ」　は、勿論、鄭重・慇懃の意であるが、茲では、轉用の意に見る。猶茲では、媚び諂ふ意もある。

「先とす」　第一とする。まづかういふ人をさがして交はらうとする。

【かならずしも情あると、直なるとをば愛せず】　そして彼等はきつと情愛の深い人や、實直な人を愛しよろこんで交はるとはかぎらない。（さうする人もあるが、さうしない人の方が多い、の意。）

「情ある人」　眞に情愛のこまやかな人。

「直なる」　實直な人。正直な人。

「愛せず」　よろこばない。よろこんで交はらない。

【ただ糸竹花月を友とせむにはしかず】　それ故、そんな輕薄な者を友とするよりは、いつそ（たゞもう）無心な音樂とか、自然の景物や風光とかを友として、自ら樂しむに越したことはない。

「糸竹」　樂器の義より音樂の意にとる。糸は、琴・琵琶などのやうに、絲のある樂器、即ち絃樂器。竹は、笛・笙などのやうに管になつてゐる樂器。

「花月」　春花・秋月の意より廣く自然の景物風光等の意に用ひる。

「しかず」　及ばない。越すことはない。

【人の奴たるものは……恩のあつきを重くす】　又今の世の召使（奴僕）を見るに、彼等は主人から貰ふ賞與の多くあることを願ひ望んで、物質的に恩惠を施して呉れることの多いことばかりを非常に有難がつて、さういふ人に使はれることを望んでゐる。

「人の奴たるもの」　上の「人の友たるもの」に對していふ。

「賞罰」　單に賞の意。罰は、陪字で意味をとらない。「緩急・異同・多少」などの場合に就ても說明しておかれたい。

「顧み」　氣にかける。心にかける。念頭におく。即ち、願ひ望んでゐることをいふ。

「恩のあつきを重くす」　物質的に惠まれることを非常に有難く思つて使はれる。（即ち、心身の安靜を得させてもらふことなどは望まないで、たゞもう金品などの賞與の多いことばかり喜んでゐる、といふ意。次の句參照。）

「重くす」　重んずに同じ。重く見る。重大視する。有難く思ふ。矢張り、願ひ望むことをあらはしてゐる。

【更にはごくみあはれぶといへども、云々】　主人が大層いたはり可愛がつて、心身の苦勞のないやうにしてやつても、彼等は心身の安靜なことなどをば、少しも願はない。

「更に」　此の副詞は、その上に・あらためて、などの意となること

もあるが、茲では、少しも・ちつとも、の意である。そして此の場合は、最後の願はずの語にかゝるものである。（更に……やすくしづかなるをば願はず。）

「**はごくみあはれぶ**」　此の語は、前の「賞罰の甚だしき」「恩惠の厚き」を物質的優遇と解したに對して、精神的の愛撫慰安と解する。**はごくむ**は、はぐくむに同じ。もと親鳥が羽翼を以て雛鳥をかばひ養ふ意から出たもので、撫育す・養育す・保護す、などの意であるが、茲では「心にかけて愛撫する」とか、「親切にいたはりつかふ」意にとる。

「**やすくしづか**」　心身ともに氣安く呑氣なこと。

【ただ身をやつことするにはしかず】　前の「ただ糸竹・花月を友とせむにはしかず」といつたのと同一手法。「このやうな打算的功利的な奴僕を使ふよりは、いつそ萬事自分の手足でした方がましである」の意。

一二　衣食のたぐひ（一）

衣食のたぐひ、又おなじ。藤の衣・麻のふすま、得るに從ひて肌をかくし、野邊のつばな、峯のこのみ、わづかに命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。かて乏しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうのことたのしく富める人に對していふにはあらず。ただ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

〔つばな〕〔たくらぶ〕

要旨　此の（一）（二）（三）は、日野山の閑居の結末である。これまでは、多くは住居のことを述べて來たが、更に衣食の事に及んで、その簡易生活の心やすさを説いてゐる。そして出家遁世のこの身、この命には、もはや何の執着があらう。疑懼の念、全く去つて、安心決定の境界に入ると敍してゐる。

本段は、衣食に就ての簡易生活の心やすさを述べてゐる。

釋義

【衣食のたぐひ又おなじ】　衣食の類も（住居と同じやうに、）なるべく簡易にしてゐる。（これが結句氣安くある。）

【藤の衣、麻のふすま、……わづかに命をつなぐばかりなり】　藤の皮や葛などで織つた粗末な衣服でも、麻で作つた粗末な夜具でも、得るがまゝに、何をでも、身にまとつたり着て寢たりして强ひて立派なものを、求めようとせず、野邊のつばなや、峯の木の實をたべて、僅かにわが命をつないでゐるだけで、少しも不足に思はず、全くの簡易生活をしてゐる。天台止觀四卷に「衣以蔽レ形遮二醜陋一、食以支レ命慎二彼飢瘠一。」とあり、白氏文集に「布衾不レ周レ體、藜莠纔充レ腹。」などとある文意に似てゐる。

「**藤の衣**」　藤の皮や葛などで織つたそまつな布でこしらへた衣、即ち、麁服をいふ。賤者の用。

「**麻のふすま**」　麻の衾。麻布で作つた夜具。

「**得るに從ひて云々**」　得るがまゝに、（別にことさらに得ようとするのでなく、）たゞ手に入つたものを何といふ事なく、身にまとつたり、きて寢たりする。即ち何ででもあるもので間にあはせておくといふほどの意。往生要集卷四に「麁服なりといへども、肌を隱し寒をふせぐに足れり。惣じて内心の德をたつとぶは、則ち外物おのづから輕くして、人の錦繡をもうらやまず、己の藏衣も愧づる事なし。」とあるを思ひよせてかいたものであらう。

「**つばな**」　茅花。茅の花。茅は山野に自生し、高さ二三尺、禾本科の多年生草本。早春花莖を出し、上部に花をつける。果實は白色の長毛を具へて、食用となる。一に、ちばな。

【人にまじはらざれば、云々】　人と交際しないから、身なりの見苦しいのを恥づかしく殘念に思ふことはない。

【かて乏しければ、云々】　食物が不足で常に空腹を感じてゐるので、粗末な食物であつても、それでもやはりうまくたべられる。

「**かて**」　食物。

「**おろそか**」　粗末。

「**味を甘くす**」　味をうまいとする。うまいと思つて食ふ。

【すべてかやうのことたのしく富める人に對していふにはあらず】　一體このやうな事は、氣樂で金持の人に對して、自分のやうにせよといふのではない。

【ただ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり】　他人には關係なく、たゞ自分一人の身について、昔の餘裕のあつた生活と今の不足がちな生活とをくらべて、今の生活が、決して昔のに劣つてゐないといふことをいつたまでである。

「**昔**」　作者がまだ世を捨てずに居た頃をさす。

「たくらぶ」　くらべる・比較する。たは、發語。

「ばかりなり」　たゞそれまでの事で、別に富者を羨むの何のといふやうな他意あつての事ではない、といふ言ひ方。

大意

自分は粗衣粗食で、十分滿足してゐる。山中の生活故、粗衣もはづかしいと思はない、空腹勝故、粗食もうまい。但し自分の現在に滿足して、富貴を願はないといふのは、自分の過去の生活が望ましくなかつたからといふのであつて、富貴の人に對してもかくせよといふのでない。

一三　身をば浮雲になずらふ（二）

大かた世を遁れ、身を捨てしより、うらみもなく、おそれもなし。命は天運に任せて惜まず、いとはず。身をば浮雲になずらへて、賴まず、まだしとせず。一期（いちご）のたのしびは、うたたねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をりをりの美景に殘れり。

〔なずらふ〕〔まだし〕〔一期〕〔うたたね〕

要旨　閑居の說のその結論に入らうとする段で、世を遁れ身を捨ててからは、うらみもなくおそれもなく、悠々自適、四季折々の景物風光をたのしんで、後生をおくつてゐることを述べてゐる。

釋義

【世を遁れ】　浮世をはなれて、隱遁し。

【身を捨てしより】　出家してから後は。

「身を捨つ」　佛教語。捨身。形身を捨離する意。

【うらみもなく】　人をうらみ世をうらむこともなくなり。論語に「天不レ怨（ヲモミ）、人不レ尤（ヲモメ）。」とあるに同じ。又夫木集に「身をば雲心は水になしつれば、人をも世をも恨みざりけり。」ともある。

【おそれもなし】　不安に思ふこともなくなつた。

【命は天運に任せて惜まず、いとはず】　自分の生命は天の與へる運命の儘に放任して、生命を惜んで長生をしたいとも思はない。さうかといつて、世の中を厭つて早く死にたいとも思はぬ。

「命」　生命。一に、天命。周易に「樂レ天知レ命、故不レ憂。」

「惜まず」　生命を惜んで長生をしたいと思はぬをいふ。

「いとはず」　世を厭つて、早く死にたいと思はぬをいふ。

【身をば浮雲になずらへて、賴まず、まだしとせず】　自分の身をば空に浮いてゐる定めない雲と同樣に思つて、この定めない身をばあてにせず、また不足にも思はない。

「身をば浮雲になずらふ」　人生のたのみ難きを浮雲のやうだと觀じて、の意。維摩經十喩「是身如二浮雲一、須臾變滅、云々。」

「なずらふ」　比べる。同樣に思ふ。

「賴まず」　あてにしない。人の身の上は浮雲のやうに定めなくたのみ難いものであるから、あてにしないの意。

「まだしとせず」　まだしは、いまだしに同じ。まだ十分でないの意。不足と思はない。

【一期のたのしびは、うたたねの枕の上にきはまり】　何の慾もなく何の望もないことをいつたので、たゞ一寸、いゝ心地で轉寢をしてゐる間に、自分の生涯の樂みがきはまる、これが無上の樂みであるといふのである。即ち一期のきはまりたる（無上の）樂みは、枕の上にあり。」との意。

諸註書に「すべて人の世にある盛衰興亡、死生變化、つら〳〵おもへば、皆夢にあらずといふ事なし。」と、說いてゐるのは、餘りに考へすぎた解で、贊成しがたい。

「一期」　佛教語。一生死間、即ち生涯（しやうがい）をさしていふ。死期の意に用ひることもある。

【生涯の望は、をりをりの美景に殘れり】　自分は既にすべての望をすててしまつた。然したゞ、わが生涯に殘された唯一の希望がある、それは春夏秋冬四季折々に、自然の風光に接して心を慰める事であつた。「生涯の望は、をりをりの美景に殘れり。」

「生涯」　莊子の養生主篇に「吾生有レ涯、而知也無レ涯。」の語から出たことば。

「をりをりの美景」　春夏秋冬のその折々に於ける自然の風光。

一四　三界はただ心一つ（三）

それ三界（さんかい）はただ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしきすまひ、一間（ひとま）の庵、みづからこれを愛す。おのづからみやこに出でては、乞食（こつじき）となれることを恥づといへども、かへりてここに居（を）るときは、他の俗塵に著（ぢやく）することをあはれぶ。

〔三界〕〔よしなし〕〔望なし〕〔おのづから〕〔著す〕

○桐生高等工業學校

要旨　閑居の趣の結論で、人間は心の持ち方一つでどんなつまらぬものにでも滿足することが出來る。自分にとつては、此の閑寂な一間の草庵が甚だ樂しいものであるといふ事を述べ一ゐる。

釋義

【それ、三界はただ心一つなり】　一體、浮世の一切のものは、たゞ己の心の持ち方一つで、同じ物が樂しくも思はれ苦しくも思はれ、又面白くも思はれ悲しくも思はれるのである。

「**三界**」　佛教語。欲界・色界・無色界の三つをいふ。一切衆生の生死輪廻する世界といふ意から、迷ひの世界、即ち、人間界の意に用ひる。玆も、後の意で、浮世をいふ。

「**ただ心一つなり**」　たゞ心の持ち方一つで、喜憂・苦樂、どうにでもなる。即ち、樂しいと思へば樂しいし、苦しいと思へば苦しいものである、の意。華嚴經に「三界唯一心。心外無別法。」とある。

【七珍】　七種の珍寶。即ち、金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・珊瑚・琥珀をいふ。玆は、單に、多くの寶物の意に解すればよい。

【よしなく】　つまらなく。

【宮殿樓閣】　宏壯な建物の意に解すればよい。

【望なし】　たのむに足らない。何にもならない。どうにも仕樣がない。

【今さびしきすまひ、一間の庵、云々】　ところが、今此の寂しい住家である一間の狹い庵は、自分にとつては、實に樂しい愛すべきものなのである。

「**さびしきすまひ、一間の庵**」　は、「さびしきすまひなる一間の庵」といふことを、二語に分けていつたのである。

「さびしいすまひ、即ち一間の庵」の意と見てもよい。

「**一間の庵**」　は、たつた一間の外はない庵。

【おのづから都に出でては……俗塵に著する事をあはれぶ】　何かの序にふと、自分が都に出て行つた時には、托鉢してあるくことを恥づかしく思ふのであるけれども、歸つて來てこの庵の中にゐる時には、實に氣樂なもので、他人が浮世の名譽や利益等のけがらはしい欲望に執著してゐるのを氣の毒に思ふのである。

「**おのづから**」　わざ〳〵でなく何かの折にふと、の意。此の語は、直ぐ下の「都に出でては」に係けて解くのが普通であるが、一說としては「乞食となれることを恥づ」にかけて、「都に出でては、自然自分が乞食となつて居ることを恥ぢるけれども」と解く。

「**乞食**」　托鉢僧・乞食坊主。持律の僧は、右に錫杖を提げ、左に鉢を携へて信者の浮施を乞ひ歩くのである。釋氏要覽に「出家は成道のために行きて食を乞ふ。一切憍慢を破らんがためなり。」とある。諸の貪慾を離れる頭陀の行の一つではあるが、玆は、それほど嚴密な意味ではなく、主として外形上からさういつたのであらう。

「**他の俗塵に著することをあはれぶ**」　他の人が浮世の名利に囚はれてゐるのを氣の毒に思ふ。

他の　は、主語で著するに係る。

俗塵　は、浮世の名利。

著す　は、「ヂヤクす」と讀む。執著する。囚はれること。

あはれぶ　は、可哀さうに思ふ。氣の毒に思ふ。ふびんに思ふ。

備考

本文の下略された部分を補つておく。

本文　もし、人このいへる事を疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとらむ。

大意

自分は狹く見苦しい家の中に貧乏暮しをしてゐるが、心が安樂であるから、不安な金殿玉樓よりもはるかにまさつてゐる。（人はこの言を信ぜぬかも知れぬが、實際このやうな住居をして見た事のない人にはこの味がわかる筈はない。）

一五　一期の月影

そもそも一期の月影かたぶきて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇に向はむ時、何のわざをか、かこたむとする。佛の人を教へたまふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかが用なき樂みを述べて、空しくあたら時を過ぐさむ。

〔三途の闇〕〔かこつ〕〔執心〕〔いかが〕〔あたら〕

要旨　閑居の趣の餘論と見るべきものの一部分であらう。すでに名利を棄て、世を遁れて、安心立命の境界を得たやすでに名利を棄て、世を遁れて、安心立命の境界を得たや

うに見えるが、今死期到來の時に當つてなほよく思うてみると、草庵を愛するも閑寂に著するも、皆大悟の障碍であるから、之をも棄去つて、大悟の境に到らうといふことを述べてゐる。

釋義

【そもそも】一旦段落の切れた文章を更に起す時に用ひる語。「其も其も」の義。之を一篇の文の冒頭に唐突に用ひるのは本義でない。さて位の意。

【一期の月影かたぶきて】人の一生を月のめぐるに見立て、老衰するのを月影の西に傾くといつた隱喩法。卽ち、わが年老いて餘命のいくばくもなく、死期に瀕してゐるのをいつたのである。後拾遺集に「ながむれば月かたぶきぬ、あはれわがこの世のほどもかばかりぞかし。」とあり、增鏡には「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。わが身の上の心ちこそすれ。」ともある。

「一期」生涯の意。

【餘算山の端に近し】月が西の山に入らうとして山際にあるやうに、このわが身も餘生幾程もなく、今生のきはに立ち到らうとしてゐることをいつたものである。

「餘算」餘生。餘命。菅雅規の倚齒會の詩に「眠思」餘算」淚先落」とある。

「山の端」山のはし。山の空に近いところ。

【忽ち三途の闇に向はむ時】「忽ち三途の闇に向つて行かなければならぬ（死期到來の）時が來る、（この時に當つて）」の意。

「三途の闇に向はむ時」死期到來の時をいふ。

三途　火道（地獄道）・血道（畜生道）・刀道（餓鬼道）の三惡道のこと。三惡趣ともいふ。

【何のわざをかかこたむとする】（かういふ切迫の時に當つて）今更何をぐづ〳〵と嘆きいはうとするのか、まことに愚なことである。（これは、前に閑居の趣に就て頻りに言葉をつひやしたのを、われながらとがめてゐるのである。）

「かこつ」なげく。

【佛の人を敎へたまふおもむきは、云々】「佛の人を敎へたまふ趣旨は、事に觸れて執心無かれと敎へたまふなり。」の意。卽ち佛敎の旨とする所は、一切盡捨といふにあるから、塵俗の事とする名利は更なり、何事につけても、愛惜の情はすて去らなければならぬをいふ。

「おもむき」旨（むね）・趣旨。

「執心」とりついて離れない心。執念深いこと。執著の心。

【科】とがむべき所行。あやまち。佛戒に背くよりいふ。

【閑寂に著するも障なるべし】閑寂に處して糸竹・花月を友とすることも罪障の一つである。

「閑寂」しづかなこと。さびしいこと。

「障」罪障。大悟の境に到る障碍とする一切の罪業。

【いかが用なき樂みを述べて、云々】何で、用もない樂みの事などを述べて、無駄に惜しい時を過さうか、そんなことをすべきではない。

「いかが」いかで・何として、の意。

「用なき樂み」上述の閑居のたのしみをさす。

「あたら時」あたらは、俗にいふあつたらに同じ。惜しき・惜しむべき、の意をあらはす。

東關紀行鈔

解題 東關紀行一卷は、著者が第八十七代四條天皇の仁治三年(一九〇二年)八月十日すぎに、京都東山邊の住家を立つて東路の旅に向ひ、爾來十餘日の間、何くれと見聞した道々の狀、さては鎌倉到著後見廻つた所々の有樣、それにつけての情懷などを記したもので、文體は當時專ら行はれた和漢混淆體である。而も平安朝詩文の影響をうけた駢儷文であるともいへよう。猶、詩句・和歌・故事を多く引用して錦上花を添へてゐる。

著者に就ては諸說あつて定說がない。或は鎌倉時代の人である源光行とも、その子の親行ともいひ、或は鴨長明とも傳へられてゐるが詳でない。

一 逢坂の關

東山のほとりなる住家を出でて、逢坂の關うち過ぐる程に、駒引きわたる望月の頃もやうやう近き空なれば、秋霧立ちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥(ゆふつけどり)かすかに音づれて、遊子猶殘月に行きけむ函谷の有樣思ひ合せらる。むかし蟬丸といひける世捨人、この關のほとりにわらやの床を結びて、常は琵琶を彈(ひ)きて心をすまし、大和歌(やまとうた)を詠じて懷(おもひ)を述べけり。嵐の風はげしきを佗(わ)びつつぞ過しける。ある人のいふ、蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆゑに、この關のあたりを四宮(しのみや)

河原と名づけたり。」といへり。

古のわらやの床のあたりまで、

こころをとむる逢坂の關。

〔駒引きわたる望月の頃〕〔木綿付鳥〕〔音づる〕〔遊子猶殘月に行きけむ函谷の有樣〕〔世捨人〕〔心をすまし〕〔偲ぶ〕

要旨　近江國の逢坂の關を通つた時の有樣や感想を記してゐる。

釋義

【東山】　京都市の東邊に連亙してゐる山々。三十六峰と稱する。

【逢坂の關うち過ぐる程に】　逢坂の關を通つたところが、(その時は)。

「**逢坂の關**」　大津市の南、山城との國境なる逢坂山にあつた關。東海道は山上を通り、鐵道は、隧道によつて山下を通つてゐる。

【駒引きわたる望月の頃も云々】　駒引(こまひき)といふ公事(くじ)の行はれる八月十五夜の月の頃も、段々近づいた空模樣であるから、秋霧が一面に立ちわたつてゐて、深夜の月の光は薄くぼうつとしてゐる。

「**駒引きわたる望月の頃**」　望月(もちづき)の駒(信濃國佐久郡の望月といふ牧場から出る駒)と十五夜月(もちづき)とをかけて、駒を引いて通る八月十五夜の月の頃も(近い空模樣であるから)、と解するが、八月仲秋の十五夜の月の頃も、といふべきを、修辭上から面白くいつたのである。

「**駒引**」　平安朝時代に、毎年八月十五日から、十數日間、諸國の御牧場(信濃の望月、甲斐の穗阪、武藏の小野・秩父・立野、上野)から、馬を牽き來つて、朝廷に貢獻する儀式が行はれた。之を駒引といつた。そして諸方から馬を牽いて來ると、左馬寮の官人が逢坂の關まで來て之を迎へた。之を駒迎といつた。御牧場は甲斐・信濃・武藏・上野等にあつた。古今集、紀貫之の歌「逢坂の關の清水に影見えて、今や引くらん望月の駒。」とあるのは此の駒引の事を詠んだものである。

公事根源八月十六日の條に「今日は信濃の勅旨牧の駒を六十疋奉るなり。もとは十五日にて侍りしかども朱雀院の回忌に當るにより十六日になさる。」とある。そして此の式は、上卿が解文(げぶん)を奏して後、公卿以下、次第に馬を賜り、各〻御前に駒を牽き一拜して去る。鎌倉末期より諸國の駒引が絶えたが、信濃の望月だけは後醍醐天皇の頃まで行はれた。

「**空なれば**」　下に「夜深けれど月ありて」等とあるべきところで、下の「秋霧立ちわたりて」に係るのではない。

「**ほのかなり**」　かすんでぼうつとしてゐる。秋霧がかゝつてゐるからである。

【木綿付鳥かすかに音づれて、云々】　折しも鷄の鳴く聲がかすかに聞えて、昔遊歷の士たる孟嘗君が、殘月の光を踏んで通つたといふ函谷關の故事が思ひ出された。

「**木綿付鳥**」　鷄。むかし疫病や騷亂のある時に、都にそれ等の入るのを防ぐ爲に、東は近江の逢坂、西は丹波の大枝、南は攝津の關門、北は山城の龍花の四境で神を祭り、鷄に木綿(楮の白布)をつけた供物をしたので此の名が出來た。

「**音づる**」　聲をたてる。鳴くのが聞えて來る。玆は、訪問の意味ではない。

「**遊子猶殘月に行きけむ云々**」　唐の賈島の「佳人盡飾(リテ)於晨粧(ヲ)、魏宮鐘動(キ)、遊子猶行(キテ)於殘月(ニ)函谷鷄鳴(ク)。」(文選・和漢朗詠集)といふ詩句によつて書いたものである。

「**遊子**」　は、諸侯の國々を遊歷する士をいふ。それより旅人の意にも用ひる。玆は、齊公子の孟嘗君を指し、此の故事は、例の孟嘗君が、秦の昭王の處に使して危い所を遁れ、函谷關で食客の鷄鳴をよくする者の力で免れたことをさす。

「**猶**」　は、まだの意で、まだ月の殘つてゐる未明の時に、の意をあらはす。

「**殘月に行く**」　は、殘月の下を行く事。殘月の光をふんで行く事。

「**けむ**」　は、過去推量の助動詞であるが、殘月に行つたといふ意位に口譯すればよい。

「**函谷**」　秦の東關。今の河南省に屬する。

【蟬丸】　宇多天皇第八の皇子敦實(あつみ)親王に仕へた雜色(ざふしき)(下役人)で、琵琶又は和歌の名人として聞えてゐる。然し此の人に就ては異說があるが略する。

かつて博雅三位が京都に出て住むやうにとすゝめた返歌に「世の中はとてもかくても過してむ宮も藁屋も果しなければ。」と云ひやつたとのことである。

【世捨人】　隱遁者。僧侶の異稱にもいふ。

【わらやの床】　藁葺きの家。

「**床**」　は、一部を以て全部を代表させる言ひ方によつたものである。卽ち、家。

【結びて】　つくつて。昔、蕓などは、藁草や繩などで結んで作つたからいふ。

【心をすまし】　心を慰め落著かせる。嚴密にいへば俗念を去つて心を淸淨に保つこと。それに心を奪はれて俗念を去ること。

【大和歌】　和歌。漢詩をからうたといふのに對する稱。

【懷を述べけり】　感懷をのべたりしてゐた。

【嵐の風のはげしきを佗びつつぞ過しける】　蟬丸の歌の「逢坂の關の嵐の烈しきに、強ひてぞ居たる世を過すとて。」とあるに據つて書いたのである。

然し、嵐のはげしいのをば、苦にして月日を送つてゐた、の意。

「**佗ぶ**」　つらくおもふ。苦にする。

【延喜第四の宮】　醍醐天皇の第四皇子。蟬丸を延喜の御子と云ふのは、謠曲にもいはれてゐるが、實說とは思はれない。

「**延喜**」　醍醐天皇御治世の年號で、一五六一年から一五八二年に亙る。

【四宮河原】　山城國宇治郡山科町にある。溪流が流れてゐるので河原といふ。四の宮は、實は、仁明天皇の四の宮人康親王の館の跡であるから云ふのであると。

【古のわらやの床の云々の歌】　（自分が此處を通る折、かういふ歌を詠んだ。）逢坂の關では、昔蟬丸のゐた藁屋の小屋のあつた邊までが、こゝがあの蟬丸のゐた趾かなあと吾が心をとめさせる。まことに興の深いところである。

「**とむる**」は、關所の緣語として用ひてある。

備考

【鷄鳴狗盜】

孟嘗君者齊湣王之從兄弟也。食客數千人。名聲聞於諸侯。秦昭王聞其賢乃先納質於齊以求見。至則止囚欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姬求解。姬曰、願得君狐白裘。蓋孟嘗君嘗以獻昭王無他裘矣。客有能爲狗盜者。入秦藏中取裘以獻姬。姬爲言得釋。即馳去、變姓名夜半至函谷關。關法、雞鳴方出客。恐秦王後悔追之。客有能爲雞鳴者。雞盡鳴。遂發傳。出食頃、追者果至。而不及。孟嘗君歸、怨秦、與韓・魏伐之入函谷關。秦割城以和。（十八史略）

二　不破の關屋

柏原といふ處を立ちて、美濃國關山にもかかりぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の、荒れにし後はただ秋の風。」と詠ませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、いやしき言の葉を遺さむもなかなかに覺えて、ここをば空しくうち過ぎぬ。

〔**しぐれわたる**〕〔**風情**〕〔**いやしき言の葉**〕〔**なかなか**〕

○旅順工科大學

要旨　近江國の柏原といふところを立つて不破の關屋を通つた時のことを記してゐる。

釋義

【柏原】　近江國の東部、美濃との國境に近いところにある。

【關山】　すべて關所のある山をいふ。茲は、不破の關のある山をさす。

【かかりぬ】　さしかゝつた。

【谷川霧の底に音づれ……あはれに心細し】　谷々の水の音が、霧の立罩めてゐる底から聞えて來、山風が時雨のやうに松の枝に吹きかけて、日の光も見えない木の下道を行くこととて、感深く心細いことである。

「**音づる**」　音を立てること。深い谷に霧がかゝつて底は見えないで、谷川の流れる音だけがしてゐる有樣。

「**しぐれわたる**」　實は秋の末から冬にかけて小雨が降つたり止んだりするのに云ふのであるが、茲は、風が雨の音のやうに、ざあと一時音を立ててはしばしやみ、又ざあと音を立ててはやみ〳〵して、丁度時雨が降つてゐるやうな音を立ててゐるさまをいふ。一說に、時雨を含んで吹く、と解する。亦通ずる。

【越えはてぬれば】　この關山を越えきつてしまふと。

【不破の關屋】　不破の關の番人の居る家。

「**不破の關**」　美濃關不破郡關ヶ原村松尾の大木戸坂にあつた。古よりあつた關で、上古は大切な關所であつたのである。然し逢坂の關が置かれるやうになつたので、桓武帝の延喜八年七月詔勅によつて、廢せられてから、後には荒れはててしまつた。此の事は後京極殿の歌によつても知られる。今遺跡がある。

「**關屋**」　すべて、關所の番人の居る家をいふ。

【萱屋の板庇云々】　その萱葺の關屋の板庇も、年數が經つて大分古くなつたやうに見えるにつけても。

「**板庇**」　家の軒に別に差出した、板で作つた小屋根。

【後京極攝政殿】　藤原良經のこと。兼實の第二子。和歌に長じてゐたので後鳥羽上皇から寵遇された。

「**攝政**」　古昔、天皇の幼沖なるか、女性なる時などにおかれ、その天皇に代つて大政を行つた職。

【荒れにし後は云々】　新古今集の雜中に「和歌所の歌合に、關路秋風といふことを」といふ詞書があつて、出てゐる歌で「人住

まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし後はたゞ秋の風。」とある。
此の一首の意は「人も住まない不破の關屋の板庇は次第に荒れ果てて、今ではたゞ秋風が淋しく吹いてゐるだけである。」

【…と詠ませ給へる歌思ひ出でられて】　……と、およみになつた歌が、自然と思ひ出されて。

「**思ひ出でらる**」　おのづから思ひ出されるのである。

【この上は風情もめぐらしがたければ】　この良經の歌以上には、趣向もめぐらしにくかつたから。

「**風情をめぐらす**」　趣向をめぐらす。趣のある歌を作る。

風情　は、事柄のおもむき。

【いやしき言の葉を遺さむもなかなかに覺えて】　まづい歌を詠んで、後にのこすのも、却つてよくないと思つて。

「**いやしき言の葉**」　まづい歌。くだらぬ歌。

いやし　は、拙い・まづい・下手、の意。

「**なかなかに覺えて**」　「なかなかに」の下に「よくない・拙い・不興に」等の語を補つて解するがよい。

なかなかに　は、かへつて、の意。

【ここをば空しくうち過ぎぬ】　こゝをばそのまゝ（即ち、歌を詠まないで）通りすぎた。

「**空しく**」　茲は、歌を詠まないことをいふ。

三　熱田の宮

尾張國熱田の宮に至りぬ。神垣のあたり近ければ、やがて參りてをがみ奉るに、木立年ふりたる杜の木の間より、夕日の影たえだえさし入りて、朱の玉垣色をかへたるに、木綿四手風に亂れたることがら、物にふれて神さびたる中にも、塀爭ふ鷺むらの、數も知らず梢に來ゐるさま、雪の積れるやうに見えて、遠く白きものから、暮れゆくままに靜まりゆく聲聲も、心すごく聞ゆ。

〔**朱の玉垣**〕〔**木綿四手**〕〔**神さぶ**〕〔**遠く白きものから**〕

要旨　熱田神宮に參拜して、其の宮居の神々しさや、折しも鷺むらの森の梢に塀を爭ふ有樣などを記してゐる。

釋義

【熱田の宮に至りね】　熱田神宮に來たといふのではなく、茲では、熱田神宮のある宿驛に來た、といふ意に取る。

「**熱田の宮**」　熱田神宮。官幣大社。名古屋市南區熱田町に鎭座。日本武尊が東夷征討の御歸途、草薙の寶劍を納められたところ。その草薙劍・日本武尊以下三神が奉祀してある。

【神垣あたり近ければ、やがて參りてをがみ奉るに】　神宮の垣のある邊が、道から近いので、早速行つてお拜み申したが。

「**神垣**」　神社の四周の垣のこと。それから轉じて、神社の境内の意にも用ひる。

【木立年ふりたる杜】　立木（樹林）が年を經て茂つてゐる杜。

「**杜**」　森。神社の森をさす時によく此の字を用ひる。

【夕日の影たえだえさし入りて】　夕日の光がきれ〴〵にさし込んで。

「**たえだえ**」　絶えようとして僅かにつゞくさま。即ち、日光が樹林の幹や枝葉に遮られて十分に照らさぬことをいつたのである。

【朱の玉垣色をかへたるに】　朱塗の垣が色をかへて一層美しく見えてゐる上に。

「**朱の玉垣**」　朱塗の玉垣。**玉垣**は、神社の周圍に設けてある垣。**玉**は、美稱。因に、玉垣の內構なる垣を瑞垣（みづがき）といふ。

「**色をかふ**」　朱塗の玉垣が、夕日の赤い光に照らされて赤い色が一層濃く美しく見えることをいふ。

【木綿四手風に亂れたることがら、物にふれて神さびたる中にも】　白布（又は白紙）の御幣（ごへい）が、風に吹かれて亂れてゐる有樣など、何かにつけて、神々（かうがう）しく尊い趣がある中にも。

「**木綿四手**」　**木綿**は、楮（かうぞ）の纖維で製した布（又は紙）をいふ。**四手**は、幣の宛字。紙又は布で作つて、玉串（たまぐし）・注連繩（しめなは）などに垂（し）でかけるもの。

「**ことがら**」　有樣。亂れたると切つて、その下に入れた語氣。

「**物にふれて**」　朱の玉垣以下の有樣を受けたものである。

「**神さぶ**」　神進。かうがうしくある。すごく尊く覺える。森嚴である。ふるめかしくある。

【塀爭ふ鷺むらの……雪の積れるやうに見えて】　寢場所を爭ひ求める鷺の群が、數もわからないほど多く、森の梢に來てとまつてゐる有樣は、丁度雪の積つてゐるやうに見えて。

【遠く白きものから】　ずうつと遠くまで白く見えて美しく感ずるものの、（然し、心すごく聞ゆ。と、つゞく。）

「**ものから**」　ものに當る逆態の語。ものながら・ものではあるが・ものではあるけれども、の意。

【暮れゆくままに……心すごく聞ゆ】　日の暮れてゆくにつれて、その鳴聲がだん〴〵靜まつてゆくのも、心にすごく聞きなされる（感ずる）。

「心すごし」　心に荒涼の思を起させる。物さびしく感ぜさせる。

四　濱　路

熱田の宮をたち出でて、濱路におもむくほど、有明の月影更けて、友なし千鳥ときどきおとづれわたれる、旅の空のうれへすずろにもよほして、あはれかたがた深し。

ふるさとは日を經て遠くなるみ潟、
いそぐ潮干の道ぞくるしき。

〔有明の月〕〔友なし千鳥〕〔すずろに〕〔かたがた〕〔日を經て遠くなるみ潟〕

○高等學校

要旨　鳴海潟の海濱を通る時の有様を記してゐる。

釋義

【熱田の宮をたち出でて……あはれかたがた深し】　熱田神宮を出立して海邊の路にさしかゝつた時分には、有明の月のその光が夜更けの色を帶び、友にはなれた千鳥が時々鳴いて通り、そのさびしさに旅先の憂愁の情がむやみに起つて來て、あれやこれやで、しみ〴〵と悲哀を感じた。（そこでかういふ歌を作つた。）

「濱路」　すべて、海邊の路をいふ。玆では、鳴海潟海濱の通路である。**鳴海潟**は、尾張國愛知郡にある。

「**有明の月**」　**有明**は、月が空にありながら夜の明ける義で、**有明の月**は、普通は夜明け方の月をいふのであるが、陰曆十六日以後の月は、皆有明になるのである。玆は、十六夜以後の月の意で、夜が深いけれども、有明の月といつたのである。

「影」　光の意。

「更けて」　もと、深くなる・たけなはになる、の意である。玆は、さえることに見たい。

「**友なし千鳥**」　友にはなれて一羽寂しく飛んでゐる千鳥。千鳥は普通群れて飛ぶから、友千鳥とかむら千鳥とかいふ。

「**おとづれわたれる**」　此處で切つて、その下に、はとかそれはとか或はそれによつてとかを補つて見るべきである。

「**旅の空のうれへ**」　旅愁をいふ。

「**すずろに**」　そゞろにと同語。何といふ理由なしに心の進むこと。むやみに、何となく。何故ともなく。

「**あはれ**」　悲哀の意にも取れるし、風情・情趣・感興の意にも取れる。

「**かたがた**」　一方にこれがあり、他方に又かういふ事があるといふ時に用ひる語で、玆は、物につけ事によつて哀の深いこと。あれやこれやで。あちらにこちらに。いろ〳〵の點に於て。

【ふるさとは日を經て遠くなるみ潟云々の歌】　故郷は日を經るに隨つて次第に遠くなつて、今や尾張の鳴海潟を歩きつゝある。海邊の道を潮の引いてゐる間に通つてしまはうとして、急いでゆくのは實に苦しいことである。

「**遠くなるみ潟**」　遠くなる（隔る）のなるを、地名の鳴海潟にかけてある。

「**いそぐ潮干の道**」　いそぐ道を、潟の緣で、潮干といつたのである。

五　本野が原

本野が原にうち出でたれば、四方の望かすかにして、山なく岡なし。秦甸の一千餘里を見渡したらむ心地して、草土ともに蒼茫たり。月の夜の望いかならむとゆかしく覺ゆ。茂れる笹原の中にあるふみ分けたる道ありて、行末も迷ひぬべきに故武藏の前司道のたよりの輩に仰せて、植ゑおかれたる柳も、いまだ蔭と頼むまではなけれども、かつがつまづ道のしるべとなれるもあはれなり。

〔秦甸の一千餘里〕〔ゆかしく覺ゆ〕〔踏み分けたる道〕〔故武藏の前司〕〔道のたよりの輩〕〔蔭と頼む〕〔かつがつ〕〔道のしるべ〕〔あはれなり〕

○高等學校

要旨　本野が原の有様及び此處を過ぎる時の感想を記してゐる。

釋義

【本野が原にうち出でたれば、云々】　本野が原に行き出たところが、あまりに廣くあるので、何方を見てもぼうつと霞んでゐて、山もなければ岡もない。

「**本野が原**」　三河國賓飯郡にある。八幡から東、吉田川に至る間の野原。近頃大方開墾されて田畝となり、本野原の大字は、今豐川町の管内に殘つてゐる。

【秦甸の一千餘里を見渡したらむ心地して、云々】　明月の

夜には氷を敷きつめたやうだとかいふ秦甸の一千餘里の景色を見渡したやうな心持がして、草と土との別ちもなく、たゞ青く霞んで廣々としてゐる。

「秦甸の一千餘里」 秦の都を中心に直徑一千餘里の間。**秦**は、支那古代の國名、**甸**は、王都を中心にして、之を距る五百里四方の地。それ故徑は一千里になるわけである。そして之は、公乘億の句に「秦甸之一千餘里、凜々氷鋪（トシテケリ）。漢家之三十六宮、澄々粉飾（トシテレリ）。（明月隈なく照り渡つて秦の都を中心に直徑一千餘里の間、白く冴えて氷を敷きつめたやうに見え、漢庭三十六の宮殿は月光に彩られて胡粉（ごふん）を塗つて飾り立てたやうに見える。――和漢朗詠集）」とあるに據つて書いたものである。

「蒼茫」 青く廣々としてゐる形容

【月の夜の望いかならむとゆかしく覺ゆ】 この分では月夜の眺望はどんなによからうかと、それをも見たいやうな氣がする。

「ゆかしく覺ゆ」 知りたいやうな氣がする。見たいやうな氣がする。

ゆかし は、奥ゆかしともいつて、たゞそれだけでは滿足せず、もう一つその奥が知りたいといふ場合に用ひる語。

【茂れる笹原の中に……かつがつまづ道のしるべとなれるもあはれなり】 生茂つてゐる笹原の中に、幾筋も人が踏分けて通つた道があつて、どれが本道であるかわかりにくく、行く先の道を踏み違ひさうになつてゐたので、今は故人となつた（亡くなつた）武藏の前の國守北條泰時が、その道の近邊に住んでゐる民どもにいひつけて、植ゑておかれた柳も、まだ立寄つて休息する蔭とたのむ程までには大きくなつてゐないけれども、どうにかかうにか、まあ道案内の目じるしにはなつてゐるのを見るにつけても、しみ〴〵と感を催させる。

「ふみ分けたる道」 人が踏み歩いて分けひらいた（つけた）道。

「行末」 道の行く先。道の方角。時の去來をいつたのではない。

「故武藏の前司」 故人となつた武藏の前の國守。北條泰時をさす。泰時は生前武藏守であつた。

泰時は、仁治三年六月に卒去してゐる。そして此の紀行はその年の八月である。

「道のたよりの輩」 その道の近くに住んでゐる民ども。**たより**は、ついで・便宜、などの義で、その道に手を加へるのに都合のよい者どもの意。（わざ〴〵他所から人夫を徵發しないで、以前からその道の近邊に住んでゐる連中にさせたことをいふ。）

「仰せて」 いひつけて。

「蔭と頼むまでは」 立寄つて日や雨を凌ぐ木蔭と頼みにするほどの大きさまでには。

「かつがつ」 わづかに。不十分なり。からうじて、どうにかかうにか。

「道のしるべ」 道の案内。

「あはれなり」 深い感を催させる。感が深いことである。

六　天龍のわたり

天龍と名づけたるわたりあり。川ふかく、流激しく見ゆ。秋の水みなぎり來て、舟の去ること速かなれば、往還（ゆきき）の旅人たやすくむかひの岸につき難し。此の川水まされる時、舟などのおのづから覆りて、底の水屑（みくづ）となるたぐひ多かりと聞くこそ、彼の巫峽（ふけふ）の水の流おもひよせられて、いと危き心地すれ。しかはあれども、人の心に比ぶれば、靜かなる流ぞかしと思ふにも、たとふべき方なきは、世にふる道のけはしき習なり。

此の河の早き流も、世の中の
人の心のたぐひとは見ず。

〔わたり〕〔おのづから〕〔底の水屑〕〔彼の巫峽の水の流おもひよせらる〕〔世にふる道〕

要旨 遠江國の天龍川の激流を見て、人生の行路や人情は、此の激流よりも更に險しく亦危いものであるといふ感想を記してゐる。

釋義

【天龍と名づけたるわたりあり】 天龍川と名づけた渡し場がある。

「天龍川」 遠江國、濱名・磐田二郡の境を流れる大川。

「わたり」 渡し場。

【川ふかく……むかひの岸につき難し】 此の天龍川は水が深く、流が激しく見えてゐる。今は丁度秋季の增水がいつぱいに流れて來て、渡し船の、下流に押流されて行くことが早いから、この川を渡つて往復する旅客は、容易に對岸に著くことが出來ない。

「秋の水」 秋に出る大水。

「みなぎり來て」 いつぱいに溢れ流れて來て。

「往還」 往復・往來に同じ。

【此の川水まされる時……いと危き心地すれ】 一度此の川

の水がふえた時には、どうかすると、渡し船が顚覆することなどもあつて、水死を遂げる人たちが多いといふことを聞くと、かの白樂天が「巫峽之水能覆レ舟」と詠じた巫峽の激流のことが聯想されて、非常に危險に感ぜられる。

「おのづから」 自然。やゝともすると。どうかすると。

「底の水層となる」 水の底の藻芥となる意で、溺死することにいふ。水層は、水中の藻芥。

「たぐひ」 人々。手あひ。輩。

「多かり」 形容動詞。多くあり。

「巫峽の水の流云々」 白氏文集卷三の太行路の詩の「太行之路能(ハク)摧(クヲ)レ車。若比(シセバノニ)君心(レ)是坦途。巫峽之水能覆(ヘクフス)レ舟。若比(シセバノニ)君心(レ)是安流。(中略)行路難、不(キハ)レ在(ラニ)レ水、不(ラニ)レ在(ラニ)レ山。只在(リニ)人情反覆間(ノニ)」の句に據つて書いたのである。

巫峽 一に、ブカフとも讀む。支那四川省にある。揚子江の上流で、兩山の間に峽まれた急流の處。三峽（西陵峽・瞿塘峽・巫峽）の一。兩岸絶壁、風景に富むが、舟行最險惡の所である。

「おもひよせらる」 聯想される。

【しかはあれども……世にふる道のけはしき習なり】 しかしながら、世の中の人の心の險惡なのに比べると、この天龍川の流は寧ろ靜穩であると思ふにつけても、何にも譬へやうのないものは、人心の險惡な此の世の中を渡つて行く方法の、いつも困難であることである。

「人の心に比ぶれば靜かなる流ぞかし」 人の心の僞が多くて、危險なのに比べると、却て此の川の流の方が靜穩である。前掲白氏の詩句の「若比(ニ)君心(ニ)是安流。」に據つたものである。

「思ふにも」 思ふにつけても。

「世にふる道のけはしき習なり」 世渡りの方法の困難である世の常態である。白氏の詩句の「行路難、不レ在レ水、不レ在レ山、只在(ニ)人情反覆之間(ニ)」に據つたものである。

【此の河の早き流も、云々の歌】 此の天龍川のおそろしい急流も、世の中の險惡な人心と同一程度の危險なものとは思はない。

「たぐひ」 此の場合は、同一種類・くみ・なかま、などの意。

大意

天龍川に來て、流の激しいのを見、時折船の顚覆して溺死する人があることを聞き、白樂天の詩句を思ひ浮べて、巫峽の水を聯想し、詩中の句によつて、人生の行路の實に危險であり、人情の更に險惡なことを述べてゐる。そして自然から人事にうつつた興味ある文である。

七　富士の高嶺

田子の浦にうち出でて、ふじの高嶺を見れば、時わかぬ雪なれども、なべて未だ白妙にはあらず。青うして天によれる姿、繪の山よりもこよなう見ゆ。

〔時わかぬ雪〕〔なべて〕〔白妙〕〔天によれる姿〕〔こよなう〕

○海軍・兵・機關・經理學校

要旨 田子の浦から、富士山を見た時の感想を記してゐる。

釋義

【田子の浦にうち出でて……白妙にはあらず】 田子の浦に出て富士の高嶺を見ると、元來此の山の雪は、季節の區別なく年中降積つてゐる消えない雪ではあるが、今の所は、まだ頂の方に積つてゐるばかりで、山全部が一樣に眞白にはなつてゐない。

「田子の浦」 駿河國庶原郡蒲原の管内である、富士川河口の南岸の地で、吹上邊の舊名。然し昔は、薩埵坂の東方から浮島が原あたりまでを廣くさしたものである。風光の勝地。萬葉集に「畫見れど飽かぬ田子浦、大君のみこと畏み夜見つるかも。」とある。

「うち出でてふじの高嶺を見れば、云々」 萬葉集卷三、山部赤人の「望(ニ)不盡山(ニ)作歌」と詞書して出てゐる歌の反歌に、「田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ、富士の高嶺に雪は降りける」とある。

高嶺 は、高い嶺。高根ともかく。

「時わかぬ雪」 一年中降積つてゐる雪。春夏秋冬、季節をわかたず絶えず降積つてゐて消えない雪。山が高いからの事である。

「なべて」 おしなべて、に同じで、おしならして・一樣に。卽ち山全體の意。

「白妙」 純白なものを形容する語。白栲の意。栲は、楮の木の纖維で織つた布で、甚だ色が白いから、白栲といふ。白妙の妙は、借字である。

【青うして天によれる姿……こよなう見ゆ】 このために山の色が青々としてゐて天空に屆いてゐるやうな雄大な姿は、繪に書いた山よりも、ずつとすぐれてゐる。

「天によれる姿」 天に屆くやうな雄大な姿。天空に屹立するさまをいひあらはしたものである。

「繪の山」 繪に描いた山。

「こよなう」 こよなくの音便。他の物とはかけへだたつてゐる。

格別である、の意。玆では、ずつとすぐれて、の意にとる。

八　都がへり

かかる程に、神無月の二十日あまりの頃、はからざるに、とみの事ありて、都へかへるべきになりぬ。其の心の中、水莖のあとにもかきながしがたし。錦をきる境は、もとより望む處にあらねども、故郷にかへる喜は、朱買臣にあひたる心ちす。

故郷へ歸る山ぢの木がらしに、
　おもはぬ外の錦をやきむ。

十月二十三日の曉、すでに鎌倉を立ちて、都へ赴くに、宿の障子に書きつく。

なれぬれば、都を急ぐ今朝なれど、
　さすが名殘の惜しき宿かな。

〔神無月〕〔とみの事〕〔水莖のあと〕〔錦をきる境〕〔さすが〕

○金澤醫學專門學校

要旨　鎌倉から都に歸るに當つての感想を記してゐる。

釋義

【かかる程に……都へかへるべきになりぬ】　かうしてゐるうちに、十月の二十日過ぎの頃、意外にも、急な用事が起つて、都へかへらねばならぬことになつた。

「**神無月**」　陰曆十月の古稱。

「**はからざるに**」　思ひがけなく。意外にも。

「**とみの事**」　急な用事。急な出來事。**とみ**は頓の轉音であらうとの事である。

「**かへるべきに**」　**べき**は、連體形、下に「事」を補つて解くがよい。

【其の心の中、水莖のあとにもかきながしがたし】　その時の嬉しい心持は、到底文章には書きあらはすことが出來ない。

「**水莖のあと**」　文字。玆では、文章。水莖は本來は消息文の事をいふのであるが、轉じて筆跡の意に用ひる。

「**かきながしがたし**」　十分に書きあらはしにくい。

ながし　は、水莖の水に對する緣語。

【錦をきる境は……朱買臣にあひたる心ちす】　立派な著物を著飾つて故都に歸るといふやうな、立身出世して故郷に歸る富貴な地位を得ることは（榮譽ある身分になることは）、もと〳〵自分の望むことでないけれども、とにかく故郷に歸るといふ嬉しさは、あの富貴の身となつて、故郷に歸つた漢の武帝の臣の朱買臣によく似寄つてゐるやうな氣持がする。

「**錦をきる境**」　**境**は、境遇、又は身分。立身出世して立派な著物を著飾つて故郷にかへる境遇、單に富貴になること。出世すること。榮達すること。漢書、朱買臣傳に「上謂二買臣一曰、富貴不レ歸二故郷一、如二衣レ繡夜行一。今子如何。買臣頓首辭謝。」とあり、又、史記、項羽本紀にも「富貴而不レ還二故郷一、如二衣レ繡夜行一。」とある。これ等に據つて書いたものである。

「**朱買臣**」　吳の人。漢の武帝の臣。初め家貧で、讀書を好み、家業を治めなかつた。妻見捨てて去つた。然るに其の後武帝に知られて、遂に拔擢されて會稽の太守となり、故郷にかへり、鄉人を驚かした。

【故郷に歸る山ぢの木がらしに、云々の歌】　自分は今故郷にかへるのであるが、その歸郷の途中、山路で吹く木枯の風によつて、紅葉が吾が著物に散りかゝつて來、その爲に自分は、思ひがけない紅葉の錦を著るので、丁度錦の著物を著て故郷に歸るやうな心持がするであらう。（即ち、上の錦を著る境は自分の望むところではないと云つたのを受けて、山路ではら〳〵と散る紅葉の下を通る意から、思はぬ外の錦を著ると云つたのである。）

「**おもはぬ外の錦**」　思ひもよらない錦の意で、紅葉の錦のことをいふ。

【十月二十三日の曉、……宿の障子に書きつく】　十月二十三日の夜明方に、もはや鎌倉を出立して都へ歸らうとする際に、泊つて居た家の襖に、次のやうな歌をかきつけた。

「**障子**」　室内の隔に立てる建具。襖障子・明障子など種々あるが、現時はおもに明障子をいふ。玆では、襖障子、即ち、襖の意に取る。

【なれぬれば、云々の歌】　なつかしい故郷の都へ歸ることを急ぐ嬉しい今朝ではあるけれども、さうはいふものの、こゝは日頃住み馴れた宿所であるから、如何に歸りを急ぐとはいふものの此の宿所を別れ去る事の如何にも名殘惜しく感ぜられてならないわい。

「**なれぬれば**」　下の句の**さすが**に言ひ續けた語であつて、**住み馴れ**たからの意。

「**都を急ぐ**」　「都へ急ぐ」とは、語氣が異なる。都に歸ることを急ぐ、ほどの意。

「**さすが**」　さうはいふものの。早く歸りたいとは思ひながら。

「**名殘の惜し**」　名殘惜しに同じ。心がひかれて別離がつらい・別

離の情に堪へられない、などの意。

備考

【月の古稱】

睦月（一月）・更衣（如月ともかく。二月）・彌生（三月）・卯月（四月）・早月（皐月ともかく。五月）・水無月（六月）・文月（七月）・葉月（八月）・長月（九月）・神無月（十月）・霜月（十一月）・師走（十二月）。

平家物語鈔

解題　平家物語十二卷は、保元物語平治物語の後を承けて華かな平家一門の榮華から、その哀れな凋落を敍し、更に建禮門院の出家に至る、凡そ平家二十餘年間の歷史物語である。その文章は雄健流麗筆致簡淨、含蓄に富み、巧妙を極めた上乘の和漢混淆體であつて、太平記と竝んで戰記文の雙璧ともいふべきものである。

著者に就ては、古來諸說あつて詳かでない。徒然草に、信濃前司行長であるとしてあるので、それが普通の說になつてゐるが、葉室大納言時長であるとの說もある。

一　祇園精舍の鐘の聲

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

〔祇園精舍〕〔諸行無常〕〔沙羅雙樹〕〔盛者必衰〕〔春の夜の夢〕〔風の前の塵〕

○東京商科大學豫科

要旨　諸行無常、盛者必衰の理を述べ、人間萬事の轉變することを說いてゐる。

釋義

【祇園精舍の鐘の聲、……盛者必衰の理を現す】　祇園精舍といふ寺から響いて來る鐘の音には「世の中の一切の事物は、常に轉變して、永久にもとのまゝにとゞまるものでない」といふこ

と（無常觀）を、我々に告げる響がこもつてゐる。又沙羅雙樹といふ木の花の色も、遂には色あせて、「盛なものも遂には必ず衰へてしまふ」といふ道理、（無常觀）をあらはして、我々に示してゐる。

「祇園精舍」 古昔、中印度の摩訶陀國の須達多長者が釋迦如來の爲に其の都なる舍衞城に建てた寺の名。轉じて廣く寺の義とする。**祇園**は、同國の太子祇多の苑地の意。**精舍**は、精練行者の居處の意で、寺のこと。

「諸行無常」 佛教語。宇宙間の一切の萬物は生滅輪廻して、常住不變（つねにとゞまつて變らない）のものでない、といふ意。涅槃經傳燈錄に「世尊說二無常偈一曰、諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂。」とある。その偈中からとつたもの。

今、鐘の音の耳に聞えて忽ち消えるのを、萬物の目前にあつて忽ち滅びるのに譬へたのである。

「沙羅雙樹」 **沙羅**は、梵語。高遠と譯する。餘木に超出する意。印度に產する落葉喬木で、高さ百尺に達する。**雙樹**とは、釋迦が、跋提河の邊なる沙羅林に入つて入滅した時、その四方に、各〻二本宛、特にすぐれた大木が立つてゐたといふところからいふ。毎年この沙羅雙樹の花が咲いて壯觀を呈してゐたが、釋迦がこの樹下で入滅された時、この樹が皆枯れてしまつたといひ傳へてゐる。

【驕れる者久しからず……偏に風の前の塵に同じ】 人間もこの理法に漏れず、おごり高ぶつてゐる者も、久しからずして滅びてしまふ。その有樣は、たゞもう春の短い夜の夢のぢきに覺めやすくはかないのに似てゐる。强い人もしまひにはほろびてしまふ。その有樣は、全く風の吹いて來る前にある塵の吹きとばされて何時の間にか消えうせるのと同樣である。

「春の夜の夢」 覺め易い故、短くはかないことの譬にいふ。春の夜は短くて、華かに見る夢も、見果てないですぐに明けはなれてしまつて實にはかないものである。驕つて居るのも、一時は實に得意の絕頂にあるが、春の夜の夢のやうにすぐに凋落してしまふものである、との喩に用ひた。

「風の前の塵」 散り易い故、滅び易いことの譬にいふ。風の吹く前に、風の吹いて來る事も知らずに塵は得々として居るが、それはほんの一時で、次の瞬間には影も形もなく吹き拂はれてしまふ、實にはかないものである。猛者は豪勇にまかせて得々としてゐるが、それもほんの束の間で、はかなく亡びてしまふものである、との喩に用ひた。

二　世に四恩候ふ

まづ世に四恩候ふ。天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩、これなり。その中に尤も重きは朝恩なり。普天の下、王地に非ずといふことなし。されば彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命の背き難き禮義をば存知すとこそ承はれ。

〔衆生の恩〕〔普天の下〕〔潁川の水に耳を洗ひ首陽山に薇を折りし賢人〕

○海軍機關學校
○米澤高等工業學校

要旨 平重盛が赤誠をこめて非道な父淸盛を諫めた一節で、四恩の中朝恩の最も重きことを說いてゐる。

釋義

【まづ世に四恩候ふ。……王地に非ずといふことなし】

まづ此の世には四つの恩といふものが御座います。天地から受ける恩・國王から受ける恩・父母から受ける恩・諸の生あるものから受ける恩の四つが、之であります。その中で最も重いものは國王から受ける恩即ち朝恩であります。天の普く覆ふ下は、何處でも天子の統治の土地でないところはありませぬ。

「四恩」 一說として、父母恩・國王恩・衆生恩・三寶恩をいふ。

「普天の下」 天の普く覆ふ所の下、即ち全天下の意。詩經、小雅、北山篇に「普天之下、莫レ非二王土一。率土之濱、莫レ非二王臣一。」とある句に據つて書いたものである。

【されば彼の潁川の水に耳を洗ひ……、存知すとこそ承はれ】 ですから支那に於て、堯帝の時、潁川の水で耳を洗つたといふ許由や、周の武王の時、首陽山に登り薇を取つて食とした伯夷・叔齊といふやうな賢人達も、天子の命令に背いてはならぬといふ禮儀は、知つて居つたと聞いてをります。

「潁川の水に云々」 昔、堯帝の時、箕山に居つた隱者の許由といつた人は、堯帝がその德を慕つて、國を讓り與へようといつた事を聞いて、そんなことを聞いたので自分の耳が穢れたといつて潁川といふ川の水で耳を洗ひ淸めたといふ故事。又巢父といふ隱者はその話を聞いて、その川の水をさへきたなく思つて渡らなかつ

たといふことである。

潁川　は、支那の河南省にある川の名。

「首陽山に云々」　支那周代の伯夷・叔齊の兄弟が周の粟を食ふを義とせず、首陽山に隱れ、薇を食つて、終に餓死した故事。史記伯夷列傳に「武王已平殷亂、天下宗周。而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、遂餓死首陽山。」とあるをさす。

首陽山　は、辭源に「在山西永濟縣南。卽雷首山。亦曰首山。」とあり、又寰宇記に「首陽山、卽雷首山南阜也。」とある。

薇　は、わらびと訓じて來てゐるが、實は、ぜんまいである。註に「似蕨而差大、有芒而味苦可食」。とある。蕨は、わらび。幼莖は共に食はれる。薇は、極めて柔軟。根に澱粉を有するのは、蕨である。

「勅命の背き難き云々」　伯夷・叔齊が武王に諫言して容れられなかつたが、それだからとて、君に叛くやうなことをせず、自ら身を引いたことをいふ。

三　是非の理

聖德太子十七箇條の御憲法に、人皆心あり。心各〻執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。爰を以てたとひ人怒るといふも、却つて我が咎を懼れよ。」とこそ見えて候へ。君と臣とを比ぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事を竝べむに、いかでか道理につかざるべき。

〔執〕〔是非の理〕〔環の如くにして端なし〕〔わくかた〕〔いかでか〕

○小樽高等商業學校

要旨　之も重盛が清盛を諫めた一節である。卽ち、聖德太子の憲法に「人の心は人々によつて異つてゐて、どちらが是か、どちらが非か分つたものでないから、人が怒つたからとて、自分も怒つてはならぬ。」といはれてゐるといふことを述べ、さういふわけだから上皇が平家を滅さうと企てられた事をお怨み申す前に、先づ自分を反省なさるがよいと諫めてゐる。

釋義

【聖德太子十七箇條の御憲法に、……とこそ見えて候へ】

聖德太子のお作りになつた十七箇條の御憲法の中にも「人は誰でも皆心をもつてゐる。そしてその人の心といふものは、それ〴〵固く思ひ込んで、是非ともさうしようとする所があるものである。彼は彼をよいとして我をわるいとし、又、我は我をよいとして彼をわるいとする。そんなわけであるから、是非善惡の道理を誰が立派に定めることが出來ようか、定め得るものは恐らく一人もあるまい。人は皆賢であるともいへるし、又、愚であるともいはれる。もと〳〵賢愚の閒には判然たる區別のあるものではない。賢愚の區別は、丁度環のやうなもので、全然境目といふものがない。それであるから、よしや人が怒るやうなことがあつても、自分は怒ることをせず、却つて我が過のあるのと懼れ改めるやうにせよ。」と見えてをります。(ですから、上皇が平家を滅さうとお企てなされた事をお怨み申す前に、先づ御自分を反省してみられるがよいと思ひます。)

「聖德太子十七箇條の御憲法に」　聖德太子が推古天皇の十二年に制定されたもので、其の第十條には「絶レ忿棄レ瞋、不レ怒二人違一。人皆有レ心。心各有レ執。彼是則我非。我是則彼非。我必非レ聖、彼必非レ愚。共是凡夫耳。是非之理、誰能可レ定。相共賢愚、如二環無一端。是以彼人雖レ瞋、還恐二我失一、我獨雖レ得、從レ衆同舉。」とある。

憲法　は、一國の國體・政體を規定した根本の法律。然し聖德太子の憲法は、實は道德的教訓を書いたものである。

「各〻執あり」　各〻執著する所（我執の心）がある。卽ち、固く心に思ひ込んで、是非ともさうしようとする所がある、の意。

執　は、我執の執。

「彼を是し、我を非云々」　流布本には「彼是とすれば我非とし、我是とすれば、彼非とす。」とある。卽ち、人の心は人々によつて異つてゐて、どちらが是か、どちらが非か分つたものではない。だから、人が怒つたからとて自分も怒つてはならない。一歩退いて、先方を怒らせる原因をまいてゐるのではないかと反省せよといふのである。

「是非の理」　是非善惡の道理。是と非とをはつきりと區別し得る根本的原理。

「環の如くにして端なし」　賢といひ愚といつたところで、丁度環のやうで境目がないから、判然たる區別がつくものではない。憲法の原文には、「如二環無一端」とあるのによるならば、「環には境目

といふものがないやうに、賢愚にも判然たる區別がないものである。」と解くべきである。

環　は、中に圓い孔があつて輪狀になつてゐる平圓形の玉。

【君と臣とを比ぶるに、……いかでか道理につかざるべき】今、君（後白河法皇）と臣（清盛）とをくらべて見まするに、親疎の別を置くべきではありませぬ、何れも同樣に親しいものであります。しかし道理ある事（上皇の平氏御討滅の御企）と道に外れた事（清盛の上皇を御幽閉申上げようとした事）とを、ならべて考へて見まするに、どうして道理のある方につかずにをられませうか、をられませぬ。

四　不孝不忠

悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷盧八萬の頂よりも猶高き父の恩、忽ちに忘れむとす。いたましきかな不孝の罪を遁れむとすれば、君の御爲には、已に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へがたし。

〔奉公〕〔迷盧八萬の頂〕

○大阪高等工業學校
○專門學校入學資格試驗

要旨　重盛諫言の一節。重盛が、忠孝兩全し難いことを歎いてゐる。

釋義

【悲しきかな……忽ち忘れむとす】かなしいことには、君（後白河法皇）にお仕へ申して忠義を盡さうとすると、須彌山の八萬四千由旬の高さある頂上よりも、一層高い父の恩義は忽ち忘れることになる。

「**奉公**」公に仕へること。又、主家に仕へることをいふ。

「**迷盧**」蘇迷盧の略で、須彌山をいふ。佛教でいふ極めて高い想像の山の名。

「**八萬**」高さ八萬四千由旬の概數。由旬は、梵語、由旬那の略。六町一里で、四十里・三十里・十六里などの諸說ある。

【いたましきかな、……逆臣ともなりぬべし】いたましいことよ、父に味方して、不孝の罪をのがれようとすると、君の御爲には、早くも不忠義な逆臣とならねばならぬ。

「**不孝**」呉音で、フケウとよむ。父に對する不孝の意。

「**逆臣**」暴虐をする臣。そむく家來。

「**なりぬべし**」この「べし」は、當然何々するにきまつてゐるの意をあらはす。

【進退これ谷れり。是非いかにも辨へがたし】自分は進むことも出來ず退くことも出來ず、どうしてよいかわからない場合に立至つた。あゝ自分は、何れがよいか、何れがわるいかを、どうしても知り分けることが出來ない。

「**これ**」調子を強める爲に用ひられたもの。

「**是非**」是と非とを。目的格である。

「**辨ふ**」辨別する。知りわける。

五　諫むる子

果報こそめでたうて、今大臣の大將に至らめ。容儀帶佩人にすぐれ、才智才覺さへ世に超えたるべきやは。」とぞ、時の人人感じあはれける。「國に諫むる臣あれば、その國必ず安く、家に諫むる子あれば、その家必ず正し。」といへり。上代にも末代にも、ありがたかりし大臣なり。

〔果報〕〔こそ……至らめ〕〔大臣の大將〕〔容儀帶佩〕〔才智才覺〕〔超えたるべきやは〕

○長崎高等商業學校

要旨　當時の人が、重盛の容儀・帶佩及び才智・才覺のすぐれたことを感じ、又よく父を諫めたことを稱へたことを記してゐる。

釋義

【「果報こそめでたうて、……時の人人感じあはれける】「前世でした事に對する報がよくて、今、內大臣兼近衞府長官になることは誰にでも出來ることであらう、然し、その身だしなみや樣子が人竝すぐれて立派であり、その上學才や心の働きまでが世の中の人に立越えてゐることが、重盛公のやうにあることが出來ようか、とても出來まい。」と、その當時の人々は感心しあはれた。

「**果報こそ云々**」右の通釋のやうに解するのが普通であるが、「重盛公は果報がよいために今大臣の大將になつてをられるのであらうが、然し、容儀帶佩も人にすぐれ才智才覺も世に越えて居て、大臣の大將としても少しも不足はない。こんなに容儀帶佩がすぐれ

才智才覺さへ世に越えることがどうして出來ようか、實に立派な方である。」の意ではあるまいかといふ説もある。

「**果報**」　因果應報の略。善因には善果、惡因には惡果があつて、因と果とは互に相應じ報いて違はないこと。轉じて、單にむくいの意。

「**めでたうて**」　めでたくての音便。**めでたし**は、愛で痛しの約。古くは、甚だ愛すべきである・結構である・よい、などの意に用ひる。現代、慶賀すべきである、の意に用ひられてゐるのは、轉義である。

「**大臣の大將**」　大臣で、近衞府の長官を兼ねてゐること。當時重盛は、内大臣・左近衞の大將であつた。

「**容儀**」　禮儀にかなつたやうす。なりふり。身だしなみ。

「**帶佩**」　太刀を佩いたさま。轉じては、たゞ樣子の意に用ひられる。玆は、轉義。

「**才智**」　學才をいふ。

「**才覺**」　心のはたらきをいふ。

「**超えたるべきやは**」　反語。超えられようか、いや超えられない、の意。

【**國に諫むる臣あれば、云々**】　孝經、諫諍章第二十から出た語。即ち「昔者、天子有二爭臣七人一、雖二無道一不レ失二其天下一、諸侯有二爭臣五人一、雖二無道一不レ失二其國一、大夫有二爭臣三人一、雖二無道一不レ失二其家一。士有二爭友一、則身不レ離二於令名一。父有二爭子一、則身不レ陷二於不義一。故當二不義一、則子不レ可下以不レ爭二於父一。故當二不義一、則臣不レ可下以不レ爭二於君一。從二父之令一焉得レ爲レ孝乎。」とあるに據つたものである。

【**ありがたかりし**】　「ありがたくありし」の約。「**ありがたし**」は、ならび少い。過去の代にも、たぐひ稀であつたし、未來の代にもたぐひ少い、の意。

六　俊寛僧都

さるほどに船出ださむとしければ、僧都船に乘りては下りつ、下りては乘りつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には夜の衾、康頼入道が形見には一部の法華經をぞ止めける。既に纜解いて船押出だせば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、「さて各く俊寛をば終に捨て果て給ふか。日頃の情も、今は何ならず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてこの船に乘せて九國の地まで。」と、口説かれけれども、都の御使、如何にも叶ひ候ふまじ。」とて、取りつき給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕出だす。

〔**僧都**〕〔**あらまし事**〕〔**形見**〕〔**法華經**〕〔**日頃の情も今は何ならず**〕〔**如何にも叶ひ候ふまじ**〕〔**引きのく**〕

○東京帝國大學農科大學實科

要旨　足摺の事の一節で、俊寛僧都が、藤原成經・康頼入道等に、鬼界が島から歸京の同道を歎願した悲痛な劇的場面を記してゐる。

釋義

【**さるほどに**】　さうしてをるうちに。

【**船出ださむ云々**】　赦免にあつて、成經や康頼入道が乘つて歸京する船を出さうとしたこと。

【**僧都**】　俊寛僧都。京都法性寺の執行。治承元年藤原成親等と平氏を滅さうと謀つたが、事露れて、鬼界島（大隅國大島郡に屬する。鹿兒島灣口から、南微西に當る六十海里の海上の小島。往昔世人傳へて地獄のやうに思つてゐた。今は人家が五十戸位ある。）に流され三十七歳で歿した。

僧都は、僧官。僧正・僧都・律師の三官の一。

【**乘りては下りつ、下りては乘りつ**】　此の**つ**は、現在完了の助動詞で、動作の反覆の意のこもつたものである。

【**あらまし事**】　荒々しい振舞。精神の錯亂したさま。「あらまし」といふ形容詞が「事」と連結して名詞となつたもの。一説に、豫定の事の意で、かうありたいと思ふこと、即ち、船に乘つて、彼の地に上陸したいとの希望を動作にあらはした事をいふと。

【**少將**】　右近衞少將兼丹波守藤原成經。略して丹波少將成經といふ。成親の子。治承元年、父の事に坐して鬼界が島に流され、翌年赦免されて歸京した。

【**形見**】　記念の品。（一）死んだ人又は別れた人の生存中、又は昵懇中の事の思ひ出される種となる遺物。（二）過去の事の思ひ出される種となる遺物。玆は、第一義。

【**夜の衾**】　夜具。**衾**は、掛蒲團のこと。

【**康頼入道**】　檢非違使であつたので平判官と稱した。治承元年、

成親等と平氏を謀り、露はれて鬼界が島に流され、翌年赦免されて歸京した。

【一部の法華經】　法華經一部の意。

「**法華經**」　妙法蓮華經の略。天台宗・日蓮宗の正依經で、中天竺摩訶陀國の靈鷲山で釋迦が八年間說法したものを、阿難尊者が結集した經文。羅什三藏が之を譯し、分ちて一部八卷二十八品とする。

【既に】　玆は、早の意に用ひた。

【纜解いて船押出せば】　船の艫の綱をとつて、船を出すと。

【取りつき】　つかまり。

【腰になり、脇になり、云々】　水が腰位の深さになり、脇の下位の深さになり、せいの立つ間は、船に引かれて水の中に歩き出た。

【丈も及ばずなりければ】　その中に、せいも立たないほどに深くなつたので。

【「さて、各〻俊寛をば、……九國の地まで。」と口說かれけれども】　さて各〻方よ、此の俊寛をば、たうとう見捨てておしまひなさるのか。(是程無情とは思はなかつた。)たゞお二人が私に情をかけて下さつたのも、今となつては何の意味もなさなくなつた。私一人は御赦免がないのでありますから、都まで御同伴を願ふ事は不可能であつても、少くとも此の船に乘せて、九州の地まで連れて行つて下さい。」といろ〳〵と逼り說いたけれども。

「**日頃の情も、今は何ならず**」　今まで何もないときに、いくら情をかけて呉れたからとて、こんな場合に、情をかけて呉れねば、無情にするならば)、それが何ほどの價値があらう、何にもなりはせぬ、の意。

「**赦されなければ**」　自分は御赦免になつてゐないから。

「**せめて**」　玆は、しかたなくば・やむを得ずば、の意。少くも。

「**口說く**」　繰返して說く。しきりに逼り說く。自己の意に從はせようといろ〳〵に說く。

【都の使】　都から、丹波少將と康賴入道とを赦免する爲に來た使者。名は、丹左衞門尉基康といふ。

【如何にも叶ひ候ふまじ】　どうしてもそれは出來ますまい。

【引のけて】　引放して。

七　三年の春秋

花の散り葉の落つるを見ては三年の春秋を辨へ蟬の聲麥秋を送れば夏とおもひ、雪の積るを冬と知る。白月・黑月の變り行くを見ては三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんなれ。

〔麥秋〕〔白月黑月〕〔ござんなれ〕

○東京外國語學校

要旨　有王島くだりの事の一節で、俊寛僧都の述懷の一部分である。おのづから哀感をそゝる文である。

釋義

【花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ】　花が散つたり、木の葉が落つたりするのを見ては、もう三年の年が經つたと知り。

「**花**」　單に、花といふ時は、多くは櫻をさす。玆は、廣く、春の花と見てよからう。

「**春秋**」　星霜と同じで、一年の意。

【蟬の聲麥秋を送れば、夏とおもひ】　卽ち、麥の成熟期がすぎて蟬が鳴き出すと、あゝもう夏だなとおもひ。

「**麥秋**」　麥の成熟する時、卽ち夏のはじめ。禮記月令の註に「秋者百穀成熟之期、此於レ時雖レ夏、於レ麥則秋。故云二麥秋一也。」とある。

「**蟬の聲云々**」　蟬が麥の成熟期を送るかのやうに鳴きはじめることをいふ。和漢朗詠集、李嘉祐の詩句に「五月蟬聲送二麥秋一」とあるに據る。

【雪の積るを冬と知る】　雪の積るのを見ては、冬だと知つて來た。

【白月・黑月の變り行くを見ては、……はや先立ちけるござんなれ】　それから、滿月がだん〳〵缺けて行つて、月に光る部分のなくなつたのを見ては三十日だといふことを知るのであるが、これによつて指折り數へて見ると、今年は六歲になると思ふ子供も、もはや自分に先立つて死んだのであつたか、あゝさうだつた。

「**白月**」　一日毎に盈ちて明るくなつて行く月、卽ち一日から十五日までの月をいふ。

「**黑月**」　一日毎に虧けて暗くなつてゆく月、卽ち十六日から三十日までの月をいふ。

「**ござんなれ**」　「こそあるなれ」の轉。當時の俗語で、物を强くいふ折の感歎詞ともいふべきものである。

八　福原落

明けぬれば福原の内裏に火を懸けて、主上を始め奉り、人人皆御船に召す。都を出でし程こそ無けれども、是も名殘は惜しかりけり。海士の燒く藻の夕煙、尾の上の鹿の曉の聲、渚渚に寄する波の音、袖に宿れる月の影、千草にすだく蟋蟀、總べて目に見、耳に觸るる事、一として哀を催し、心を傷ましめずといふ事なし。昨日は東關の麓に轡を竝べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解いて七千餘人、雲海沈沈として、青天既に暮れなむとす。

〔名殘〕〔すだく〕〔暮れなむとす〕

○小檜高等商業學校

要旨　福原落の一節。平家の一門、福原を出て西海に落ちゆく悲哀の狀を記す。

釋義

【明ぬれば】夜が明けると。

【福原の内裏】内裏趾は、今の攝津國神戸市、兵庫の岡方の西で、武庫郡林田村大字長田の東方にある。方丈記鈔の**備考**參照。

「**内裏**」天皇のまします宮殿、卽ち大内裏のなかの一部なる皇居。禁闕・禁裏・御所。本段の前文中に里内裏の語が見えてゐる。里内裏は、假の皇居の意。玆も、此の意にとるがよい。

【主上】安德天皇をお指し申す。

【御船に召す】船に乘移られた。天皇の乘られる船だから御と敬語を添へたのである。

【都を出でし程こそ無けれども、是も名殘は惜しかりけり】都を落ちでた時ほどではないけれども、こゝでも隨分、心がひかれて別れがつらくあつた。

【海士の燒く藻の夕煙】海邊の人の燒く海草の、夕方の煙も。

「**海士**」海邊に住み、魚介をとる事を業とするもの。れうし・海人・蜑。

【尾の上の鹿の曉の聲】山の巓の鹿の、曉に鳴く聲も。

「**尾の上**」をのうへと訓んでおいたが、單に、をのへと訓んでもよい。

【渚】波のうち寄せるところ。なみうちぎは。

【袖に宿れる月の影】袖にうつる月の光も。

【千草にすだく蟋蟀】多くの草の間に群り集る、きりぎりすの鳴く聲も。

「**すだく**」語原は巢抱く。群り集る意。

「**蟋蟀**」こほろぎの古稱。今、きりぎりすは、螽蟖とかく。

【耳に觸るる事】耳に聞える事。

【昨日は東關の麓に……青天既に暮れなむとす】前日は關東の山の麓に轡を竝べて、戰場に立つた者が十萬餘騎の多人數あつたが、何時の間にか討滅されて、今日は西海の波の上に船の纜を解いて乘出して行く者が、七千餘人の少人數となつてしまひ、そして落ちてゆく廣々とした海は、しんと靜まつて、青空はもはや暮れかゝらうとしてゐる。

「**轡を竝べる**」馬をならべることをいふ。轡は、單にくつわともいふ。馬の口に含ませる具で、金屬でつくり、之に手綱をつけて馬を御するに用ひる。その形種々あつて、從つて名稱も一つでない。古昔のは、多く圓の中に十文字を置いた形のものである。

「**雲海**」(一)雲におほはれた海。(二)水の雲に接して見える遠方。(三)山が雲におほはれて其の頂上ばかり島のやうに見えるありさま。玆は、第二義の轉義と見て、廣々とした海の意にとりたい。

「**沈沈**」しんと靜まるさま。

文脈

海士の燒く藻の夕煙、尾の上の鹿の曉の聲、渚渚に寄する波の音、袖に宿れる月の影、千草にすだく蟋蟀、總べて目に見、耳に觸るる事、云々。

九　せめての事

御子の一人もおはせぬ事を母の二位殿も歎き、北の方大納言佐殿も本意なき事にし給ひて、萬の神佛に懸けて祈り申されけれども、其の驗なし。賢うぞ無かりける。子だにあらましかば、いかばかり思ふ事あらむ。」と宣ひけるこそ、せめての事なれ。

〔北の方〕〔本意〕〔賢うぞ無かりける〕〔あらましかば〕〔せめての事〕

○北海道帝國大學農科大學

要旨　海道下の一節で、平重衡が生捕れて後、鎌倉へ送られる途中に於ける述懐を記したものであつて、「自分に子のないが、今となつては却つて幸である。」と述べてゐる。

釋義

【御子の一人もおはさぬ事を……其の驗なし】（平重衡には、）御子が一人もおありなさらぬ事を、（重衡自身は勿論）重衡の母の二位殿も歎かれ、又重衡の奥方の大納言の佐殿も不本意なことにお思ひなされて、御子の生れるやうにと、もろ〳〵の神や佛に願をかけて御祈請なされたけれども、其のきゝめがなかつた。

「**おはせぬ事を**」　おありにならぬ事を。

「**母の二位殿**」　平清盛の室時子を指す。重衡の母である。

「**北の方**」　奥方。貴人の妻室の稱。

「**大納言佐殿**」　重衡の妻の名。一本佐は、典侍とある。

「**本意なき事にし給ひて**」　思ふやうにならないで殘念な事だとお思ひなされて。

「**願けて**」　願をかける。願懸をする。

「**驗**」　功驗。御利益。

【「賢うぞ無かりける。子だにあらましかば、いかばかり思ふ事あらむ」】（しかるに、今になつて、重衡が、）「自分には、よくこそ、子供がなかつた。若し子供でもあつたなら、（遠からず殺される今の場合にのぞんで、）どれほど悲しい思をすることであらうよ。」といはれたのは、よく〳〵のことである。

「**賢うぞ無かりける**」　ようこそ子供がなかつた。子供がなくて幸であつたの意。

「**あらましかば**」　假にあつたとしたならば。ましかばは、事實に反して假定するにいふ。

「**思ふ事あらむ**」　思ふ事は、茲では、憂・悲などの意。

「**せめての事**」　よく〳〵思ひ迫つたこと。よく〳〵のこと。

大意

此の文は、句讀を取つてしまふと、隨分解し難くなる。其の場合に最も注意すべきことは、重衡の言葉がどこからどこまでであるかといふことと、通釋中に（　）でつゝんでおいた所を補つて説くことである。

今參考に大意をあげておく。

さきには、子供のない事を、本人は勿論母君も奥方も悲しい事に思つてゐられたが、今になつて、重衡は「子供のないのが却つて幸であつた。若し子供があつたら、やがて殺される今の際に、一層悲しい思ひをしなければならぬだらう。」といはれたのは、よくよくの事である。

一〇　さらば與一呼べ

判官味方に射つべき仁は誰かある」。と問ひ給へば、手垂ども多く候ふ中に、下野の國の住人、那須の太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にて候へども手はききて候へ。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候ふ。かけ鳥などを爭ひて、三つに二つは必ず射落し候ふ。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

〔手垂〕〔手はききて候ふ〕〔さん候ふ〕〔かけ鳥〕

○陸軍士官學校

要旨　扇の的の一節。壽永四年二月十八日、壇の浦の戰に、平氏船頭に扇的を揭げて源軍を麾く。義經之を射んものを物色する。那須與一宗高、その選にあづかつて見出されることを記してゐる。

釋義

【判官「味方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「手垂ども……手はききて候へ。」と申す】　源九郎判官義經が、「我が軍に、あれを射落すことの出來る人物が、誰かをるか。（人物があるか。）」と仰つしやると、おそばに居た者が、「弓の上手な者はいくらもをりますが、その中でも、下野の住人である那須の太郎資高が子に與一宗高といふ者がありますが、その者こそ、小柄ではありますけれども、腕利で御座います。」と申し上げた。

「**判官**」　義經をさす。義經は、源義朝の第九子、幼名は牛若丸、源九郎と稱した。檢非違使、左衞門少尉に任ぜられたので、世に、九郎判官といふ。

「**判官**」　茲は、檢非違使の尉。官の四等級の第三番目のことであるが、「はんぐわん」とよむ時には、專ら檢非違使の三等官（尉）をいふ。因に官の等級は、長官・次官・判官・主典。

「**味方**」　身方の意。敵に對して我に一味同心のものをいふ。

「**仁**」　人の音便。人物・人柄などを含めていふ時に用ひる。

「**手垂ども**」　熟練した者ども、弓を射ることの上手な者ども。

「**與一宗高**」**與一**は、通稱。屋嶋の戰に、一發で扇的を射て美名をあげた。時に年十七。後、那須の總領となる。

「**小兵にては候へども**」**小兵**　弓勢の弱いこと、卽ち非力の意にも用ひられるが、玆では、身體の小さいこと。

「**手はききて候へ**」　腕はすぐれてゐます。弓を射ることは上手であります。

【判官。「證據があるか。」……判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり】　すると、判官が「何か、手きゝだといふ證據があるか。」と仰しやつた。おそばに居た或者が、「左樣で御座います。空を飛んでゐる鳥などを人と射合つて取るに、三羽の中二羽までは、必ず射落します。」とお答へ申したので、判官は、「それならば、その與一を呼べ。」といつてお召しになつた。

「**證據**」　事實を證明するによりどころとなる事物。玆は、腕利である證據。

「**さん候**」　左樣でございます。應答のことば。

「**かけ鳥**」　(一)翔鳥。大空をとびまはる鳥のこと。(二)射て空を飛ぶ鳥を取ること。玆は、第二義。

一　仕つてこそ見候はめ

判官大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ赴かむとする者共は、皆義經が命を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜむ殿原は、是より疾う疾う鎌倉へかへらるべし」。とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりなむとや思ひけむ、左候はば外れむをば存じ候はず、御諚で候へば仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷り立ちけり。

〔**仔細**〕〔**殿原**〕〔**疾う疾う**〕〔**左候はば**〕〔**御諚**〕

○鹿兒島高等農林學校

要旨　扇の的の一節。與一宗高が扇的を射ることを辭退した爲に、判官からお叱りをうけたので、いよ〳〵射ようと決心したことを記してゐる。

釋義

【義經が命を背くべからず】　義經の命令をそむいてはならない。

【それに少しも……鎌倉へかへらるべし】　その事（命に背かないといふ事）に少しでも異議を持たれるやうな方々は、こゝから少しも早く鎌倉へ歸へられるがよからう。

「**仔細**」　事のわけ・いはれ・委細の申立、などの意。あゝだからだと、理窟を考へて不服に思ふこと。

「**殿原**」　高貴の方々。男子を呼ぶ時の敬稱。

「**疾う疾う**」　疾く疾くの音便。はやく〳〵・少しも早く・速刻。

【重ねて辭せば惡しかりなむとや思ひけむ】　此の上二度と辭退しては、わるからうと思つたのであらうか、思つたのであらう。

【左候はば外れむをば存じ候はず。御諚で候へば仕つてこそ見候はめ】　左樣で御座いましたら、外れるかも知れませんが、御命令でありますから、一つ致して見ませう。

「**御諚**」　御命令。諚は、定言の合字。單に、お言葉といふ意味に用ひることもある。

【罷り立ちけり】　退いて行つた。

一二　弓の惜しさに取らばこそ

「弓の惜しさに取らばこそ。義經が弓といはば二人しても張り、若しは三人しても張り、叔父爲朝などが弓のやうならば、わざとも落いて取らすべし。尪弱なる弓を敵の取持ちて、『これこそ源氏の大將九郎が弓よ。』など嘲弄せられむが口惜しさに命にかへて取つたるぞかし。」

〔**取らばこそ**〕〔**取らすべし**〕〔**尪弱なる弓**〕

○長崎高等商業學校

要旨　弓流しの一節。義經が、落した弓を命にかへて捨ひ取つた理由を、家來どもに辨明するところを記してゐる。武名を重んずる武士道的說話で、さすがに源氏の大將たる面影が躍如としてゐる。

釋義

【弓の惜しさに取らばこそ。……命にかへて取つたるぞかし】　僅か弓一張が惜しくて危險を冒して取つたのならば、なるほどわるくもあらうが、實は決してさうではないのである。この義經の弓といつたなら、二人がかりでも張るとか、三人ばかりでも

張るといふやうに、あの叔父爲頼などの弓のやうに強い弓であつたならば、故意にでも落して敵に拾はせよう。ところがこんな弱い弓を敵が拾つて、あちらこちらへ持廻り、「これがまあ、源氏の大將である九郎義經の弓なんだよ。」などと、彼等に馬鹿にされるのがくやしいので、命がけで拾ひ取つたわけなのである。

「取らばこそ」 下に、「惡しからめ」などの語が省略されてゐる。「取らばこそ惡しからめ、まことはさにあらず。」といふほどの意。

「二人しても張り三人しても張り」 強い弓なので、二人も三人もかゝつて張ることをいふ。

「爲朝の弓」 爲朝の弓は、五人張であつたといふ。

「若しは」 もしくは・或は。

「わざとも」 「態とも」とあてる。故意にでも。わざ〳〵でも。

「落いて」 落しての音便。

「取らすべし」 敵の取るのにまかせることをいふ。與へよう・拾はせよう、の意。

「尼弱」 かよわいこと。

「弓よ」 上に、こそがあるから「弓なれ」とするのが正格である。それを單に「弓よ」とするやうなのは、當時の語法。

「嘲弄」 あざけりなぶる。馬鹿にする。

「口惜しさ」 くやしいこと。無念なこと。

「命にかへて」 命がけで。一命を賭して。

一三　淺ましげなる朽坊

住み荒して年久しうなりければ、庭には草深く、軒にはしのぶ茂れり。簾斷え閨あらはにて、雨風たまるべうもなし。花は色色に匂へども、あるじとたのむ人もなく、月はよなよなさし入れども、詠めてあかすぬしもなし。（第一節）昔は玉の臺をみがき、錦の帳にまとはれて、明かし暮させ給ひしが、今は有りとし有る人にも皆別れ果てて、淺ましげなる朽坊に入らせ給ひける御心の中、おしはかられて哀なり。（第二節）

〔あらは〕〔たまるべうもなし〕〔ながめてあかす〕〔有りとし有る人〕〔淺ましげなる朽坊〕

○小樽高等商業學校

要旨　灌頂卷の女院出家の一節、即ち建禮門院が御出家の後、吉田の僧坊に入りてかりずまひをなされたことを記した一節である。第一節は、吉田の僧坊のあれはてた樣を描き、第二節は、朽坊に御すまひの女院の御いとしさを述べてゐる。

釋義

【住み荒して……詠めてあかすぬしもなし】人が住まずにあれてからも永い間たつたので、庭には草が深く、軒端にはしのぶ草が生ひしげつてゐる。御簾がちぎれおちて、その爲に寢室の外も外側から見えすいて、雨風を防ぎとゞめることが出來さうもない。庭の花はさま〴〵な色に美しく咲くけれども、主人としてたよる家主もないし、月は毎晩毎晩家の内にさし込むけれども、それを眺めて夜をあかす人もなくて、如何にも物淋しい有樣である。（第一節）

「住み荒して」 人が住まないで荒れたことにいふ。家といふものは人が住まないと却つて荒れるものである。（住んだ爲に荒れた意ではない。）

「しのぶ」 しのぶぐさ。（忍草）の略。水龍骨科の羊齒類。簷又は舊樹の皮や枝に著生して垂れる草である。

「あらは」 外から見えすくこと。見通しになつてゐること。

「たまるべうもなし」 防ぐことが出來さうもない。

たまる は、遮りとゞめる意。

「色々に匂へども」 さま〴〵に美しく咲いてゐるけれども。

匂ふ は、玆では、香をはなつことではない。

「よなよな」 夜毎夜毎。

「詠めてあかす」 月を眺めたのしんで夜をあかす。

【昔は玉の臺をみがき、……おしはかられて哀なり】さて建禮門院は、昔は玉を鏤めた立派な高樓にお住みになり、錦の垂幕に取りまかれて暮されたのであるが、今はあらゆる人々とも皆別れておしまひになつて、呆れるほどに朽ちた僧坊の内に涙ながらにおはひりなされた御心の中は、どれほど悲しくあらせられた事であらうと、御推量申すことが出來て、何ともあはれなことである。（第二節）

「玉の臺をみがき」 玉をちりばめてある立派な高樓に住むことをいひあらはす。

「錦の帳にまとはれ」 錦で造つた美しい垂幕に取りまかれて暮すことをあらはす。**帳** は、几帳・帳臺などの幕。前の句と共に、昔の榮華を述べて、今のはかないさまと對比する

ためである。

「**有りとし有る人**」　おらゆる人々。

「**淺ましげなる朽坊**」　あきれるばかりに朽ちはてた僧坊。

坊　は、僧侶の住む家。此の坊は第一節に應ずるものである。

「**おしはかられて**」　此の**れ**は、可能の助動詞。

一四　小原御幸（一）

かかりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御すまひ、御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・彌生の程は、嵐烈しう餘寒も未だ盡きず。峰の白雪消えやらで、谷のつららもうち解けず。かくて春過ぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて小原の奥へ御幸なる。遠山にかかる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるる。頃は卯月二十日餘の事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀なり。

〔**北祭**〕〔**夜をこめて**〕〔**花の形見**〕

○東京高等師範學校
○岡山醫學專門學校
○海軍機關學校

要旨　（一）（二）は、小原御幸の一節で、後白河法皇が、小原の建禮門院の御佗居を御訪問になつたことを記してゐる。

本段は、法皇の御微行と、その人跡絶えた御道筋に於ける春の名殘とを描いてゐる。

釋義

【かかりし程に】　かうしてをる間に。本文の前に、女院の「小原への入御の事」があるのである。

【法皇】　後白河法皇。

【文治二年】　皇紀一八四七年。**文治**は、後鳥羽天皇御治世の年號で、一八四六年から一八四九年に亙る。

【建禮門院】　平德子。清盛の二女。高倉天皇の中宮で、安德天皇の御母。壽永の役に海に投じられたが、源氏の兵に獲られて京都に還られた。剃髮して眞如覺と稱し、建保元年に薨去。年五十七。

【小原】　山城國愛宕郡にあつて舊大原莊といふ。京都の北、比叡と鞍馬との兩山脈の間の谷合で、中を高野川が流れてゐる。をはらともおほはらともいひ大原ともかく。八瀨以北の山間。古來貴顯縉紳の隱棲地で、平安の初、不遇な惟喬親王の隱家を、雪ふみ分けて訪ひ參らせた業平の物語は本物語と共に殊に哀れな語草である。寂光院・來迎院・三千院・勝林院・芹生・朧清水、等の名所が多い。此の地方一帶の婦女は京に出て炭薪類を賣る。所謂大原女である。

【御覽ぜまほしう】　御覽なさりたいと。

【二月】　語原は、衣更著。

【彌生】　語原は、彌生。

【峰の白雪……うち解けず】　峰の白雪も消えきらないで、谷の氷も解けないから、御見合せあそばされた。

【つらら】　今は氷柱をいふが、古はすべて氷をいつた。

【北祭】　賀茂神社の祭をいふ。陰曆四月の中の酉の日を國祭として、同日勅使を向けられる。いはゆる葵祭である。男山八幡宮の祭を南祭といふに對する。

【夜をこめて】　まだ夜の明けやらぬに。未明に。枕草子に「夜をこめて鳥の空音はかるとも、世に逢阪の關はゆるさじ。」とある。

【御幸なる】　**御幸**は、上皇・法皇・女院のいでましをいふ。「みゆき」ともいふ。もと行幸と區別がなかつたが、中古以來主上にのみ行幸といつて區別するやうになつた。**なる**は、御幸あらせらるといふ崇敬の言ひ方をなるといつたのである。體言は普通は、さ變に活かせるのであるが、之を自然的に勞せないやうに言つた敬意を含む語である。あり も同じ。

【遠山にかかる白雲は、……名殘ぞ惜しまるる】　遠方の山にかかつてゐる白雲は、散つてしまつた花の遺して行つたものとも思はれてなつかしく、青空に見える梢を眺めると、春の行くのが、惜しまれてならぬ。

〔卯月二十日餘〕　陰曆四月二十日過ぎのこと。

「**卯月**」　は、語源、卯の花月で、卯の花の咲く頃の月の義。

【夏草の茂みが末】　「夏草のしげつてゐる野のはし」の意であるが、「夏草の繁茂してゐる間」の意にとればよい。

【はじめたる】　「はじめての」といふべきところ。獨特の語法。

【御覽じなれたる方もなく】　どちらを御覽になつても、皆目新しい景色ばかりで。

「**御覽じなる**」は、見なれたの意。

【人跡絶えたる程も、……哀なり】　めつたに人も來ない淋しいところだといふ感じをお興しになつたのも、あはれである。

「**人跡絶えたる程**」人の來ないさびしい程合、の意。

一五　寂光院（二）

西の山の麓に、一宇の御堂あり。即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立よしあるさまの所なり。「甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈をかかぐ。」とは、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲をみだりつつ池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、
　浪の花こそさかりなりけれ。

〔**よしあるさま**〕〔**不斷の香**〕〔**常住の燈**〕〔**みだる**〕〔**さらす**〕〔**藤波**〕〔**うら紫**〕〔**八重立つ雲**〕

○海軍機關學校
○米澤高等工業學校
○千葉醫科大學藥學專門部
○滿洲醫科大學豫科
○東京齒科醫學專門學校

要旨　建禮門院の御閑居である寂光院の種々の趣と、法皇の御詠歌とを記してゐる。

釋義

【西の山の麓】西の方にある山のふもと。

【一宇】一軒・一棟。宇は、のき。

【寂光院】大原村字芹生の山下にある。弘法大師の開基で、今は淨土宗の尼寺である。堂内に建禮門院の木像及び阿波内侍の張子の像が安置してある。此の張子は平家一門から贈つた書簡を以て造つたといひ傳へてある。後の山を翠黛山といひ、建禮門院の芳骨が埋めてある。この地は京都を去る北方約四里。人跡殆ど絶えた幽境である。

【舊う造りなせる泉水・木立、よしあるさまの所なり】如何にも古びて造つてある庭池や林があつて由緒のありげな樣のところである。

「**舊う造りなせる**」古めかしく造り設けられた。古色を帶びてゐる樣に造つてある。

「**泉水**」庭前に設けた池。

「**木立**」たち木。はやし。

「**よしあるさま**」由緒ありげな樣。趣の深い有樣。

【甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈をかかぐ云々】「瓦葺の屋根が破れて、霧が入つて來る爲に、室内は絶えず香を燒いてゐるやうである、扉は、こはれ落ちて、月がさし込む爲に、室内は常に燈明をあげたやうである。」とは、丁度此のやうなところをさして申すのでありますか。

「**甍破れて云々**」甍は、棟瓦。玆は單に、瓦と見てよからう。甍が破れたから、屋根から霧が侵入して、室内は香煙が滿ちたやうだといふのである。いつもそんなであるから、不斷といふ。

不斷の香　とは、晝夜閒斷なく燒く香である。因に、冥福追善などの爲に、一定の期閒、晝夜閒斷なく經文を讀誦することを、不斷經といふ。

「**扉落ちては云々**」扉は、とびらの意。扉が破れて月影がそこからさし込む故に、たとひ燭をともさずとも、室内は常に燭をかゝげたやうであることをいふ。

常住の燈　は、何時までも消えない燈明。常住は、佛教語。無常に對する。

かかぐ　は、挑ぐで、燈心をかきたてること。轉じて、燈火をつける・燈火を明るくする。

【庭の若草茂り合ひ……錦をさらすかとあやまたる】草葉は庭一面に生ひ茂り、青い枝垂柳は、その絲のやうな細い枝を風に吹亂され吹亂されしてゐるし、池の浮草は池の上をあちらこちらと流れあるいて、錦を洗ひさらしてゐるのではないかと、餘りよく似てゐて、つい見誤るやうである。

「**青柳絲をみだりつつ**」柳の細い枝を絲に譬へたのである。

みだりつつ　は、現代では、みだしつつとあるべきところである。

みだりは、古文では、自他の別なしに用ひてゐる。

さらす　布などの色を白くする爲に水に浸し流すことをいふ。

【中島の松に懸れる藤波の、……初花よりも珍しく】庭の

池に造つた小島の松にまきつきかゝつてゐる藤の花の紫色に咲いてゐるのが美しくあり、青葉に交つて咲いてゐる遅咲の櫻の花は、最初に咲いた櫻の花よりも、却つて珍らしく眺められ。

「**中島**」庭の池の中に造つた小島。

「**藤波**」藤の花。その花房が靡くによつていふ。

「**うら紫**」單に、紫といふに同じ。うらは、末の義であるが、玆では、それほどの意味のない接頭語。

「**遲櫻**」春の終の頃に咲く櫻。青葉が出てから咲くので、青葉交りと冠したのである。

「**初花**」櫻の初咲の花。

【岸の山吹咲亂れ、……君の御幸を待ちがほなり】又岸の山吹は、今を盛りと咲いて美しく、それから幾重にも幾重にも立つ雲のきれ間から漏れて聞えて來る山郭公の一聲までも、君のおでましをお待ち申してゐるやうである。

「**八重立つ**」幾重にも幾重にも立つをいふ。そして、山吹の緣語にもなつてゐる。

「**山郭公**」山に住むほとゝぎす。

【法皇これを叡覽あつてかうぞあそばされける】法皇が、此の地のあたりの景色を御覽あそばされて、かういふ歌をお詠みになつた。

「**叡覽**」特に、主上（上皇等）の御覽あそばすことに用ひる。

【池水にみぎはの櫻ちりしきて云々の歌】千載集二に「みこにおはしましける時、鳥羽殿に渡らせ給へりける頃、池上花といへる心をよませ給ひける。院御製。」と前書がしてあつて、この歌が出してある。實は後白河院壯時の御製であつたのを、作者の手段で、こゝに出したものである。源平盛衰記には、「池水に岸の青柳散りしきて浪の花こそ盛なりけれ。」となつてゐる。

一首の意は、「水際に咲いてゐた櫻が、池の水に一面に散り浮んで、水の上の花が今眞盛りであるわい。」

「**波の花**」落花の水面に散り敷いてゐるのを、波に見立てたのである。

文脈

中島の松にかかれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。

十訓抄鈔

解題　十訓抄三卷は、その序文に「昔今の物語をたねとして、よき方をばこれをすゝめ、あしき方をば是を誡めむ」として書いたもので「十段の篇を分ちて十訓抄」と名づけたと著者自ら言つてゐるやうに、勸善懲惡の教訓を目的として書かれたものである。其の文章は、和漢のよく混淆した調子を味ふに足るものである。

著者に就ては古來、或は橘成季といひ、或は菅原爲長といひ、或は六波羅二藏左衞門の作といふやうに諸說があつて判明しない。橘成季說は、唯々古今著聞集が彼の作であるところから推測した說で何等の根據がなく、菅原爲長說は、正徹の清巖茶話に「拾訓抄は爲長卿の作かと覺ゆる也。」とある所からかなり信じられた說であるが、菅原爲長は建長四年から七年前に當る寛元四年に死んでゐるから、この說も不合理なことは明かである。六波羅二藏左衞門說は、妙覺寺本の奥書に「或人云、六波羅二藏左衞門入道作云々長時時茂等奉公。」とある古傳に據つたものであるが、此の說も未だ學者間に認められてゐない。此のやうに著者は未詳であるが、序文に「建長四とせの冬神無月の半の比、をのづから暇のあき、心閑なる折節にあたりつゝ、草の庵を東山の麓にしめて、蓮の臺を西土の雲に望む翁、念佛のひまに時をしるし終ることしかなりとなむいへり。」と言つてゐるやうに、建長四年、卽ち北條時賴の時代に出來た書物であることは明瞭である。

一　つたなき身

つたなき身を顧みるに、秋の螢の光を聚めずして風月の望にくらく、春の鶯のさへづりをまねばざれば、絲竹の曲にうとし。藝なく能かけたり。なす事なくして徒らにあまたの露霜を送るばかりなり。

〔螢の光〕〔風月の望〕〔鶯のさへづり〕〔絲竹の曲〕〔あまたの露霜〕

要旨　十訓抄の序の一節で、作者が、自分は、學問を十分に修めてゐないから詩文の才に乏しいし又音曲を學ばないから管絃の道にも暗く、全く無藝無能で多くの年月を過して來たといふことを述べてゐるところである。

釋義

【つたなき身を顧みるに】「自分が、へたでおとつてゐる自分の身をふりかへつて見るに」。又「自分の過去を考へて見るに」の意。

「**つたなき身**」何事も拙劣な自分といふことで、玆は、作者の遜謙の辭。

【秋の螢を聚めずして風月の望にくらく】「學問を十分に修めてゐないから、詩文の才に乏しい」の意。

「**秋の螢云々**」晉の車胤が家貧しくて、油を買求める事が出來ないので、螢の光で學問をしたといふ故事に據つて書いたものである。日記故事に「晉車胤、幼恭勤博覽。貧不二常得一油。夏月以二練囊一盛二數十螢火一、照レ書讀レ之、以レ夜繼レ日。後、官至二尚書郎一。今人以二書窻一爲二螢窻一、由レ此也。」とある。

「**風月**」風流のこと。玆では、「風月の望」で、詩文の才の意にとる。

【春の鶯のさへづりをまねばざれば、絲竹の曲にうとし】「音曲を學ばないから、管絃の道にも暗い」の意。

「**春の鶯**」音樂のことをいふ。春鶯囀といふ曲があるが、之を以て、廣く音樂のことになぞらへたのである。

「**まねぶ**」眞似を活用させた語。まねて習ふ意。學ぶにおなじ。

「**絲竹の曲**」管絃の道の意。絲竹は、方丈記鈔　一一「**人の友たるもの**」に出てゐる。參照されたい。

【徒らにあまたの露霜を送るばかりなり】無駄に多くの年月を送つて來たばかりである。

「**あまたの露霜**」多くの年月。露霜は、星霜（星は一年に天を一周し、霜は年毎に來る。）と同じで、年月の意。

備考

本段は、實は、次の文と合せて、「自分は拙いながらも、此の本を書きはじめた初心を貫いて、世に公にする所以である。」といふことを述べてゐるのである。

本文　かかるにつけては、藻鹽草(一)かき誤れる言の葉も數つもり、梓弓(二)引きみむ人の嘲(三)も外れ難く覺えながら、志のゆく所、ただにはいかがやまむとならし(四)。

（一）「藻鹽草」かくにかゝる枕詞。（二）「梓弓」ひくに掛る枕詞。（三）「外れ難く」梓弓の緣語。必ず嘲りはまぬがれまいとは思ひながら、の意。（四）「ならし」なるらしに同じ。なりといふ位のところを、かくいふは、當時に於ける一種の語法。

二　庶人のふるまひ

庶人のふるまひは、重らかに詞ずくなにて、人をもならさず、人にもならされず、戲好まず、おとなしくふるまひ居たれば、心の中はしらず、よきものかなと見えて、人にもはぢられ、ところをもおかるるなり。かかれども、これはなつかしく思はしき方にはあらず。ただ亂るべき所には亂れ、をりに隨ひて戲をもし、をかしき事をも笑ひ、人のなごりををしみ、友にしたがふ心ありて、わりなく思はれぬる、德多かり。

〔**人をもならさず**〕〔**人にもならされず**〕〔**心の中はしらず**〕〔**ところをもおかる**〕〔**なつかしく思はしき方**〕〔**亂るべき所**〕〔**人のなごり**〕〔**わりなく思はる**〕〔**德多かり**〕

○陸軍士官學校

要旨　謹嚴で戲言などをいはない人は、人から畏敬されるが、然し此のやうな人は、なつかしくなく面白くない人である。それよりも時と場合とによつては戲言もいひ、くだけた態度に出る方が人から愛せられて、利益であるといふことを述べたものである。即ち、謹嚴と打ちとけた態度とを

比較して書いてある文である。

釋義

【庶人のふるまひは……これはなつかしく思はしき方にはあらず】　一般の人の擧動は、重々しい樣子があり言葉が少くあつて、人をも自分に馴々しくさせず、人に對しても自分が馴々しくさせられず、たはむれを好まず、著實らしい擧動をしてゐると、心中はどうともわからないが、表面上は立派な人であるなあと思はれるやうに見えて、人からも恥づかしく思はれ、遠慮をもされるものである。然しかういふ態度は慕はしく好ましい方に屬するものではない。

「**庶人**」　もろ〳〵の民・平民、などの意だが、玆は、一般の人、又は、單に、世の中の人、位の意。

「**ふるまひ**」　擧動。

「**重らかに**」　重々しい樣子があるのをいふ。

「**人をもならさず**」　人をも自分に馴々しくさせない意。即ち、目下のものをも馴近づかせないことをいふ。

「**人にもならされず**」　人に對しても自分が馴々しくさせられない意。即ち、目上のものにも馴近づかせられないことをいふ。

「**戯好まず**」　じやうだんを好まない。

「**おとなし**」　おとなのやうに、諸事おちつきのあるさま。

「**ふるまひたれば**」　擧動をしてゐると。

「**心の中は知らず**」　心の中はどうともわからないが。

「**よきものかなと見えて**」　立派な人であるなあ、と思はれて。

「**はぢられ**」　恥づかしく思はれ。

「**ところをもおかるるなり**」　遠慮をもされるのである。

「**これは**」　かういふ態度は。

「**なつかしく思はしき方**」　慕はしく好ましい方。

【ただ亂るべき所には亂れ……徳多かり】　たゞ禮儀をくづすべき時にはくづし、時と場合に應じては、たはむれをもし、面白い事も笑ひ、別れた人を偲んでいつまでもなつかしく思ひ、友と調子を合せる心があつて、非常に親密に思はれることは、利益が多いものである。

「**亂るべき所には亂れ**」　禮儀をくづすべき時にはくづし。

「**をりに隨ひて**」　時と場合に應じて。

「**人のなごりををしみ**」　別れた人を、いつまでもなつかしがるをいふ。**なごり**は、玆では、別れて後に心の殘ること。

〔**友に從ふ心**〕　友と調子を合はせる心。

「**わりなく思はれぬる**」　非常に親密に思はれることは。

「**わりなく**」　は、一通りならずの意。

「**徳多かり**」　利益が多くある。

三　あるまじきわざ

人は慮なく、言ふまじき事を口とくいひ出し、人の短を誹り、したる事を難じ、隱す事を顯し、恥がましき事をただす。是等はすべてあるまじきわざなり。我は何となく言ひ散らして、思ひもいれぬ程に、いはるる人は思ひ詰めて憤深くなりぬれば、圖らざるに恥をも與へられ、身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劍は、さらでだにも恐るべき物ぞかし。（第一節）又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺顯るるものなり。大方口輕き者になりぬれば、某に其の事な聞かせそ。彼の者にな見せそ。」などいひて、人に心をおかれ隔てらるる、口惜しかるべし。（第二節）

〔**短**〕〔**ただす**〕〔**何となくいひ散らす**〕〔**思ひもいれぬ**〕〔**笑の中の劍**〕〔**さらでだに**〕〔**難ず**〕〔**心をおく**〕

○高等學校
○小樽高等商業學校
○上田高等蠶絲學校
○東京高等師範學校
○神戸高等商業學校
○富山高等學校
○陸軍士官學校

要旨　人の多言の愼むべきことを深く戒めた文である。二節からなつてゐて、第一節は、他人の恥づかしがる事を平氣でいふことの愼むべきを戒めてをり、第二節は、よくも知らぬ事で人を非難すると、却つて失敗するものであるから用心すべきであるといふことを戒めてゐる。

釋義

【人は慮なく、言ふまじき事を……恐るべきものぞかし】　人は、とかく、あとさきの考へもなく、言つてはならぬ事をべらべらと口輕くしやべつたり、他人の短所を惡く言つたり、他人のし

た事を非難したり、他人の隠してゐる事をすつぱぬいたり、他人が問はれて恥づかしく思ふやうな事を問ひ質したりなどする者である。然しこれ等の行爲はすべてしてはならぬ事である。自分の方では何の氣もなくしやべり散して、別段氣にも留めてゐないうちに、いはれる人の方では、かれこれいはれた事を深く氣にして、其の怒る心がひどくなると、いつた人の思ひも寄らない時に、其の人からとんだ恥をかゝせられたり、延いては自分の身命が亡びてしまふやうな大事件にもなるものである。「笑の中につゝまれてゐる劍」といふ喩のやうに、うはべはにこ〳〵と笑ひながら、内面には人を中傷しようとするやうな心を抱くといふことは、前にあげたやうな大事件に至らないにしても、ともかくも恐しいものであるよ。（第一節）

「**慮なく**」　あとさきの考もなく。深い考もなく。輕率に。

「**口とく**」　口疾くの義。口輕に。口輕くべら〳〵とおしやべりする意。

「**人の短**」　人の短所（缺點。）

「**したる事**」　爲した事。行爲。

「**難じ**」　非難し。

「**顯し**」　あかるみへ出す。すつぱぬく。

「**恥がましき事**」　はづかしがるやうなこと。恥になる樣なこと。

「**ただす**」　問ひ質す、糺明する。詮議する。

「**何となく**」　何の心もなく。

「**いひちらす**」　やたらにしやべる。

「**思ひもいれぬ程に**」　別段深く氣にもとめてゐないうちに。

「**いはるる人**」　自分のことをかれこれといはれる人。

「**おもひつめて**」　ひどく氣にして。深く思ひ込んで。又は、根にもつて。

「**憤深くなりぬれば**」　怒がひどくなると。

「**圖らざるに**」　自分が思ひもよらぬ時に。

「**身の果つる程の**」　一身が亡びるほどの。身命を失ふほどの。

「**笑の中の劍**」「笑の中の刀」ともいふ。外觀柔和で内に害心のある事に譬へていふ語。唐書李義府傳に「李林甫貌柔恭與レ人言、嬉怡微笑、凡忤レ意者中二傷之一。時號二義府笑中刀一。」とある。これ等の故事に據つた句。

「**さらでだに**」　さうでなくてさへ。

【又よくも心得ぬ事を……口惜しかるべし】　又自分のよくも知らない事を、惡いといふやうに非難すると、その非難が當つてゐない爲に、反對に自分の不注意なことが人に知れるものである。大體輕率に物事をしやべる者になると、世の中の人がその者を嫌つて、「すぐにおしやべりをするから、あの男（口輕き者）には、その事を聞かせるな。それを見せるな。」などといはれて、世人から憚られ、遠ざけられるものだが、こんなことをされるのは、如何にもくやしいことであらう。（第二節）

「**よく心得ぬ事**」　よく事實のわかつてゐないこと。

「**難じつれば**」　非難すると。

「**不覺**」　不覺悟の略。油斷して失策すること。卑怯・未練、等の意に用ひられてゐるが、茲では、油斷・不用意・不注意・間抜けたこと、などの意に解してよい。

「**某**」（それがし　なにがし）　誰それに。前の口輕き者をさす。

「**その事な聞かせそ**」（すぐに口外するから）その事は聞かせるな。

「**な…そ**」　は、打消命令で、勿れの意。

「**心をおかれ**」　打ちとけず隔ておく。氣をおかれる。憚られる。敬遠される。

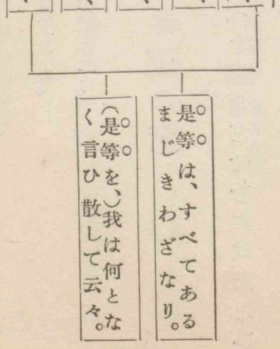
「**隔てらる**」　わけへだてされる。疎外される。下の「口惜しかるべし」の主語。

「**口惜かるべし**」　くやしいことであらう。殘念なことであらう。遺憾なことであらう。

大意

人はどうかすると、他人の大層恥づかしがる事を平氣で口外することがあるが、之はいけない事である。自分は大して氣にとめずにゐるが、恥をかゝされた人は、之を根にもつて復讐を企て、思ひもよらぬひどい目にあはされる事があるものである。（第一節）又よくも事實のわかつて居ない事で人を非難すると、却つて失敗する。大體輕率に物をいふ人は、人が警戒し敬遠して、のけものにしてしまふから、いやな思をせねばならぬ事が多いものである。（第二節）

文脈



四　寄るべからず

人の寄り合ひて、うちささやきなどせむ所へは、は

じめより交り居ざらむには、寄るべからず。おのづから悪しく行きあひたりとも、さらぬやうにて立ちのくべし。

〔ささやき〕〔おのづから〕〔さらぬやうに〕

○第七高等學校

要旨　人の集合して密談などしてゐるやうな所へは、初めから自分が其の仲間に加はつてゐなかつたなら、近づいてはならぬ。又折り悪しく偶然にもそんな場所に出くはせても、知らんふりをして立ちのくがよいといふことを教へてゐる。

釋義

【人の寄り合ひて……寄るべからず】　人が集合して、密談などをしてゐるやうな所へは、最初からその仲間に加はつて居なかつたならば、近寄つてはならない。

「ささやく」　密談をする。内證話をする。

「はじめより交り居ざらむには」　最初から自分がその密談の仲間に加はつて居なかつたなら。

【おのづから悪しく……立ちのくべし】　偶然にも、そのやうな場所に生憎出くはせても、そしらぬ風をして立退くがよい。

「おのづから」　偶然にも。ふとして。

「悪しく」　生憎。折悪しく。都合わるく。

「行きあひたりとも」　出くはせても。

「さらぬやうにて」　知らぬ風をして。

五　さるべき遊の席

人人より合ひて、さるべき遊などせむには、たとひ身にとりて、やすからず口をしき事にあひたりとも構へてその日のさはりあらせじとはからふべきなり。其の人のありて、しかじかの折、事さめにきといはるる、口をしきことなり。

〔さるべき遊〕〔構へて〕〔あらせじ〕〔其の人のありて〕〔しかじかの折事さめにき〕

○高等學校

要旨　多人數會合の席上では、自分に面白くない事に出遇つても、よく我慢して調子をあはせて、その日の遊に支障を生じさせないやうに心がけべきであるといふことを教へてゐる文である。即ち、社交的會合の際に於ける心得を說いてゐる。

釋義

【人人より合ひて……構へてその日のさはりあらせじとはからふべきなり】　多數の人が寄りあつて何かの遊び事などをしようとする場合には、かりに自分に取つて胸穩かでなくくやしく思ふやうな事に出遇つても、よく〳〵注意して決してその日の催しにさしつかへを生じさせまいと、考慮しなくてはならない。

〔より合ひて〕　會合して。

「さるべき遊」　しかるべき遊びごと。何かの遊戯。

「せむには」　するやうな場合には。

「身にとりて」　自分の身にとつて。

「安からず」「氣がかり」の意ではあるが、玆は、胸が穩がでない・癪にさはる、の意。

「口をしき事」　殘念な事柄。

「構へて」　決しての意。又は、愼んで・注意して・氣をつけて。

「その日のさはりあらせじと」「その日の遊戯の催しに故障をおこさせまいと」の意。即ち、自分が不足をいつたり又は腹を立てたりなどすると、折角皆が面白がつてやつてゐる遊も興ざめて、ぶちこはしになつてしまふから、遊興をそいでしまふやうなことにならぬやうに、その場は堪へ忍んでゐる事をいふ。

【其の人のありて……口をしきことなり】「何の某(不平を抱いた人)が居つた爲に、これ〳〵の催しをした時に、その興がすつかり醒めきつて座が白けてしまつた。」などと蔭口をいはれるのは、つまらぬことである。

「その人のありて」　その不平を抱いた人がをつた爲に。

「しかじかの折」　これ〳〵の遊戯をした場合に。

「事さむ」　興味が醒める。

「いはるる」　いはれる事は、の意で、下の「口をしきことなり」の主語。

「口をしきことなり」　無念の意に取つても勿論よいが、玆では、不本意なことである、の意に取る。

六　能は必ずあるべきなり(一)

本より其の道道の家に生れぬるはさる事なり。

さなき類もほどほどにつけて、能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者藝おろそかにして氏をつがぬ類あり。道にあらざる類、能によりて道に至る徳もあれば、氏をつがむがため、道に至らむが爲に、彼も是もともに勵むべし。

〔道道の家〕〔さる事なり〕〔ほどほどにつけて〕〔氏をうけたる者〕

○各醫學專門學校

要旨　（一）（二）に亙つて、人々に才能藝業の必要なことを說いた文である。

本段はその道の專門の家に生れたものは、勿論其の藝能に達せねばならないし、專門の家に生れた者でないものでも、その人相應に藝能を持つてをるべき筈のものである。それ故、一は家をつがんがため、一は道に至らんがために、兩者共に勉强してその腕をみがくべきであることを說いてゐる。

猶此の文はその道の專門家に生れた者と、さうでない者とを兩々相對比して論じてゐる。

釋義

【本より其の道道の家に……能は必ずあるべきなり】　本來いろ〳〵の道の專門の家に生れた者が、それ〴〵の道に就ての藝能に達せねばならぬことは勿論である。又さういふ專門の家に生れない人達も、身分相應に藝能をば必ず持つてゐなければならないのである。

「本より」　本來。「生れぬるは」に係る副詞。

「道道の家」　その道その道の專門家。

「さる事なり」　いふまでもないことである。勿論の事である。

「さなき類」　さうでない人達。專門家に生れない一般の人達。

「ほどほどにつけて」　身分相應に。

「能は必ずあるべきなり」　藝能は必ず具へてゐなければならないのである（持つてをるべき筈である）。

能　は、藝能。

【中にも氏をうけたる者……彼も是もともに勵むべし】　然し、中には、その道の家系を受けた者でありながら、藝能がまづくて、その家系を繼がない連中もあれば、またその道の家に生れない人でも、その人の才能によつて、道に達するといふ有難い事もあるのであるから、人はその專門の道の家系を繼ぐためにも、若しくは、その道に達するためにも、彼の人も此の人も、即ち誰でも、その道に精を出すのがよいのである。

「氏をうけたる者」　專門の藝能を世襲して來た家に生れた者。ある藝能をもつて代々職とする者。菅江兩家の文章道、三善氏の算道、安倍氏の陰陽道等のごときをいふ。

氏は、今日では苗字の意味に用ひられてゐるが、玆は、家筋・家系、などの意。

「おろそかにして」　拙劣であつて。

「道にあらざる類云々」　その道の家（專門の家）に生れないものでも、その人の才能によつて藝をつみ、遂には專門家になり得るといふことも出來るから、專門の家に生れたものは、その家を繼ぐために、專門の家に生れない者も、專門家になるために、ともに藝能を勉强せねばならぬ。

「道に至る」　藝道に達する。

「徳」　よい事。有難い事。

七　花のあたりの常磐木（一）

何となくゐまじりたる折は、そのけじめ見えざれども、藝能につけて召出され、ただうちあるわれどちのあそびにも、かたへにぬけいでて何事をもしたらむは、雲泥の心地して、人目いみじく覺えぬべし。すべて、みめよく品高けれども、あやしく淺しきが能あるに立ちならぶ折は、その品そのみめも、必ず思ひけたるものなり。たとへば、花のあたりの常磐木は、うちみるに、たとへなくさめたれども、春の日かずくれ、峯の嵐過ぎたる後に、綠ばかり殘りて、かりのにほひ留まらざるがごとし。

〔けぢめ〕〔うちあるわれどちのあそび〕〔雲泥の心地〕〔いみじ〕〔みめよし〕〔思ひけたる〕〔さめたれども〕〔かりのにほひ〕

○福岡女子專門學校

要旨　前段のつづきで、人には藝能は大切なものであるといふ所以を說き、更にどんな藝能であ

つても、それに優れたものは、人品を一層高からしめるものであるといふことを述べてゐる。

釋義

【何となくゐまじりたる折は……人目いみじく覺えぬべし】何をするといふ事もなく、たゞ漫然と一緒に坐つてゐる時には、一座の人々は誰も彼も同じやうに見えて、その間に何等の差別も認められないけれども、專門の技藝とか又は才能とかをはたらかせる事の上について、お上から召出されるやうな場合や、又は我我同士がたゞ一寸した遊び事をするやうな場合に、そばの者よりも傑出して何事かを仕出かすやうな事があると、その人と他の人とは、まるで天地の差があるやうに思はれて、人目にも立派に見える事であらう。

「ゐまじる」　一緒に坐つてゐる。ゐは、居ると見ないで、坐ると取る。

「けじめ」　差別。

「われどち」　我々仲間同士。

「かたへに」　かたはらにと同じで、そばの者の意。又一方にといふ説もある。

「雲泥の心地」　天地の差があるやうな心地。

「いみじく」　非常に優れて。

【すべてみめよく品高けれども……かりのにほひ留まらざるがごとし】一般に、いかに容貌がよく人品が高からうとも、何の素養もなくつまらない者が、才能のある人と立並んだ場合には、その人の立派な品位も美しい容貌も、必ず壓倒されて見劣りするものである。譬へていふと、美しい花の附近にある常綠樹は、一寸見ては譬へようもないほどに見映えがしないけれども、花の咲きほこる春の日數がたつてしまひ、峯の嵐が吹き過ぎて花を悉く散らしてしまつた後には、以前とは反對に、常綠樹ばかりが殘つて目に立ち、花の一時的の美しさは消失するのと同じやうな道理である。

「みめよく」　容貌がよく。

「品高けれども」　人品がけだかくあつても、

「あやしく賤しきが」　「あやしく賤しき者が」の意。そして玆では、上に「品高けれども」の句があるから、外貌や身分の卑賤をいふのではなく、寧ろ精神的に卑賤なこと、即ち、學問も貧弱であり、才能も拙劣である意に取る。

「能あるに立ちならぶ折には」　「才能のすぐれた者と立並んだ時には」の意。

「思ひけたる」　壓倒される。案外に見劣りがする。

「花のあたりの常磐木」　花やかなものと、地味なものとを對比したのである。そして風采がよくて無能な人を花の木にたとへ、風采がわるくも能のある人を常磐木にたとへてゐる。

「うち見るに」　一寸見ては。

「さめたれども」　見映え目がしないけれども。趣が少いけれども。

「春の日數くれ」　花の咲く春の日數が經つてしまひ。

「綠ばかり殘りて」　常綠樹の綠色ばかりが殘つて。

「かりのにほひ」　花の一時的の立派さ。

かり　は、かりそめ。一時的、の意。

にほひ　は、玆では、花の色の美しさ、の意。

十六夜日記鈔

解題　十六夜日記一卷は、作者阿佛尼が、後宇多天皇の建治三年(一九三七年)十月に京を立つて鎌倉に下つた日記である。そして、十六夜日記といふ書名は、阿佛尼が京を出立したのが、十六日の夜であつたからである。敍事の間に、或は山川・風土の有樣を寫し、或は旅客の憂愁と心中の怨恨とを洩らしてゐるが、その初と終とには、子を思ふ母性愛が著しくあらはれて、一讀同情の涙を催させる。本書は東關紀行と殆ど同時代に出來たものではあるが、女性の手に成つたものだけに、純國文式で、かの書とは趣を異にしてゐる。其の文章は、甚だ簡潔で、而も、修飾的の技巧に富んでゐる。

著者阿佛尼は、鎌倉時代の女流文學者。平度繁の妹。權中納言藤原爲家の後妻となり、爲相を生んだ。初め安嘉門院に仕へて、四條又は右衞門佐といひ、薙髪して阿佛といふ。夫爲家の歿後、實子爲相の所領なる播州細川の莊を先妻の子の爲氏に横領されたので、幕府の裁判を仰がうと思つて鎌倉に下つたが、まだ其の解決を見ないで、弘安六年九月、彼の地で病死した。享年七十五とかいふ。十六夜日記の外に、夜の鶴の著書がある。世に北林禪尼と稱した。(一一九四三)

一　細川の流

「道を助けよ、子をはぐくめ、後(のち)の世をとへ。」とて、深き契(ちぎり)を結びおかれし細川の流も、故なくせきとめ

られしかば、あととふ法のともし火も、道を守り家を助けむ親子の命も、もろともにきえをあらそふ年月を經て、あやふく心細きものから、何としてつれなく、今日まではながらふらむ。

〔はぐくむ〕〔細川の流〕〔せきとむ〕〔あととふ法のともし火〕〔道を守る〕〔實を助く〕〔きえをあらそふ〕〔ものから〕〔つれなし〕〔ながらふ〕

○大阪醫科大學

要旨　作者阿佛尼が、親子が命と賴む所領なる細川の莊を故なく押奪されて後、不安で心細い身の今日まで平氣で生きながらへてゐたのを、我ながら不思議に思ふといふことを述べてゐる。

釋義

【「道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへ。」とて……故なくせきとめられしかば】　亡夫爲家が生前に「歌道を盛大にさせよ、子供を養育せよ、わが死後を弔へよ。」と私にいはれて、そして行末かけて、爲相に讓與すると深く約束しておかれた細川の莊も、何の理由もなく、爲氏に押奪されてしまつたから、（「家を支へる收入の道もなくなり。）

「**道を助けよ**」　和歌の道は、藤原爲家に取つては父祖傳來の大切なものであつたので、自分の死後もますます之を盛大にせよというたのである。

因に、爲家は、有名な定家の子で、和歌に長じ、又書畫にも巧であつた。累官して權大納言兼民部卿に至る。寶治中後嵯峨上皇の勅を奉じて續後撰和歌集を撰し、正元中續古今和歌集を撰した。康元元年薙髮して融覺と改めた。世に民部卿入道又中院禪門と號する。建治元年に薨じた。年七十九。（一八五七―一九三五）猶その子の爲氏も爲相も共に歌人として名をなした。

「**はぐくめ**」　本來は、養育の意。茲では、養育し敎育する意と見たい。

「**とへ**」　弔へである。後世の冥福を祈ること。

「**深き契云々**」　爲家が深い約束を阿佛尼と固めておかれたことをいふ。爲家の遺書にも、播磨國細川の領邑を爲相に讓與する旨が認められてあつたといふことが、本日記の卷頭にかいてある。卽ち「むかし、壁の中よりもとめ出でたりけん書（古文孝經をいふ）の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上の事とは知らざりけりな。水莖の岡の芋葉（かへすがへすの序）かへすがへすも書きおく跡（爲家の遺書で播磨の細川の莊を爲相に讓與するといふ證書をいふ）たしかなれども、かひなきものは親のいさめ（敎訓又は訓誡の意）なり。」とある。

「**細川の流**」　和歌所の俸邑で、播磨國美囊郡にある。

「**故なくせきとめられ**」　正當の理由もなく奪はれたことをいふ。細川の流といつた所から、せきとむといふ緣語を用ひたのである。

【あととふ法のともし火も……今日まではながらふらむ】　亡夫の冥福を祈ることもいつまで續けて行けることやら覺束なく、又、父祖傳來の歌道を守り、家を興すの任にある我等親子の命もいつ消えるかも知れないといふはかない有樣で、この年月を暮して來たわけで、まことに不安で心細い次第であるのに、それにもかゝはらず、どうして今日まで平氣で生きながらへてゐられたことであらうぞ。（こんなに心細い次第なら、命はとうに消えてしまひさうなものだのに、今日まで生きて來たことが我ながら、不思議なことである。）

「**あととふ法のともし火**」　死後の冥福を祈るために佛前につける燈。茲は、作者が、亡夫爲家の後世を弔ふ意である。

「**あととふ**」　は、死後を弔ふ意で、故跡を訪問する意ではない。

「**法の燈**」　は、佛前の燈明。

「**道を守り**」　代々家に傳つて來た歌道をよく守つて衰へさせないことをいふ。爲家の家系は次のやうである。

道長―長家―忠家―俊忠―俊成―定家―爲家―┬爲氏
　　└爲相
　　阿佛尼―爲守

「**家を助けむ**」　家を興す筈の。

「**親子の命**」　阿佛尼親子の生命。子は、爲家との間に生れた五人の中二人は出家し、一人は女子であるから、主として爲相（及びその弟の爲守）をいふ。

「**きえをあらそふ**」　法の燈と親子の命と、どちらが先に消えるかと互に競ひ爭ふ意で、何れも極めてはかないので、何時消えてしまふかも知れないといふことをいふ。

「**心細きものから**」　心細いものの。

「**つれなく**」　平氣で。今日では他に對して情愛がないといふ意味に用ひられるのが普通であるが、古文では他の情に動かされない。知らぬ顏をしてゐる。平氣でゐる、などの意味に用ひられる。

「**ながらふ**」　生存する。

「**らむ**」　現在推量の助動詞。

二　あづまの龜の鑑（一）

惜しからぬ身一つは、やすく思ひすつれども、子を

思ふ心のやみは、なほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらむ方なく、さてもなほ、あづまの龜の鑑にうつさば、くもらぬ影もやあらはるると、せめて思ひあまりて、よろづのはばかりを忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりなくも、いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ、思ひたちぬる。

〔いざよふ月〕〔子を思ふ心のやみ〕〔あづまの龜の鑑〕〔くもらぬ影〕〔思ひあまる〕〔ゆくりなく〕

要旨　(一)(二)に亙りて、作者が、細川の莊に就ての裁決を仰ぐために鎌倉に行かうと決心して、急いで都を出發したことを述べてゐる。本段は、鎌倉行を決心した理由を述べてゐる。

釋義

【惜しからぬ身一つは……ゆくりなくいざよふ月に誘はれ出でなむとぞ思ひたちぬる】　惜しむに足らぬ我が身一つは何とでもあきらめ捨ててしまふけれども、さて親として、「このままにして置いたなら、子供が行く末困るであらう。」などと思ふと、心が迷はされて、やはり我慢が出來ないし、その上歌道が衰へては殘念だと思ふ心苦しさは、何とも慰めやうもなく、自分はもとよりどうなつても構はぬとあきらめてはゐるけれども、それでもやはり鎌倉幕府の公平な裁判を受けたならば、此方の正當であるといふことが、或は判明するかも知れぬと思ふ切なる思をおさへることが出來ないで、すべての故障をもうちすてて、我が身をばどうなつても構はぬものとしてしまつて、思ひがけなくも、十六夜の月と共に都を立つて、鎌倉へ行かうといふ氣になつた次第である。

「子を思ふ心の闇」　親の子を思ふ心の極めて切なるをいふ語で、わが子のことを思ふ爲に、親の心が亂れて道理も何もわからなくなつてしまふことをいふ。後撰集、雜、藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな。」とあるに據つて書いたもの。

「道をかへりみるうらみ」　歌道の衰へたことを殘念に思ふことをいふ。

「やらむ方なく」　心の慰めやうもなく。心の晴しやうもなく。

「さてもなほ」　それでもなほ。

「東の龜の鑑」　鎌倉幕府の公平な裁判。

東は、關東の意。玆は、鎌倉幕府をいふ。

龜の鑑　は、龜鑑の二字を訓讀したので、龜は、龜の甲を燒き、その裂け目によつて吉凶禍福を卜定するもの、鑑は、物の形を明白にうつすもの、因て玆では、公平な裁判の意に用ひてある。

「うつす」　鑑の緣語で、「龜の鑑にうつす」は、裁判をうける意。

「くもらぬ影もやあらはるると」　「くもらぬ影もあらはるるやと」に同じで、事の眞相がわかるかも知れぬと、の意。

くもらぬ影　は、はつきりとした正しい姿の意。前の鑑に緣のあるいひ方をしたのである。

「せめて思ひあまりて」　切なる思をおさへ切る事が出來ないで。

せめて　は、切に・甚だしく、などの意。

「よろづのはばかりを忘れ」　すべての故障をかへりみないで。

はばかり　は、遠慮すべき事・恐れつゝしむべき事、などの意。

「えうなきもの」　どうなつても構はないもの。

えうなき　は、益無きで、世に益のないつまらぬもの。

「ゆくりなく」　思ひがけなくも。はからずも。下の「思ひたちぬる」にかゝる副詞。

「いざよふ月にさそはれ出でなむ」　十六夜の月に誘はれて出掛けよう。十六夜の月が曉の空にある頃出立しようといふことを面白くいつたのである。十六夜日記といふ書名もこの文句から起つたのである。

いざよふ　は、ためらふ意。十五夜までの月は、夕方迄に上るが、十六夜の月は少し後れて（即ち、いざようて）出るから、「いざよひの月」といふのである。

「なむ」　(一)(イ)過去の助動詞「ぬ」の活用なる「な」に未來の助動詞「む」の加はつた語。未來完了の助動詞。例「行きなむ。」玆は、此の意。(ロ)願望の意の助動詞。例「行かなむ。」(二)物事を指示する助詞。「む」に似て、意味がすこしゆるい。例「これなむ都鳥といひけるを。」

「思ひたちぬる」　さういふ氣になつた。さう思ふやうになつた。

三　さだめなき空（二）

ころはみ冬立つはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともに亂れ散りつつ、事にふれて、心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

〔み冬立つはじめ〕〔降りみ降らずみ〕〔嵐にきほふ木の葉さへ〕〔事にふれて〕〔人やりならぬ道〕〔いきうしとても〕〔何とな

く〕

○山口高等商業學校
○盛岡高等農林學校
○大倉高等商業學校

要旨　都を立つ時の感情を述べてゐる。

釋義

【ころはみ冬つ……何となく急ぎ立ちぬ】　時は十月、冬になつたはじめの、はつきりしない空模樣の折であるから、降つたり止んだり、時雨も絶えないし、おまけに嵐に吹かれて我先にと爭うて散る木々の葉までが、私の亂れ落ちる涙と同じやうに散り亂れて、何かについて心細く悲しくあるけれども、人から强ひられて行くのではなく、もと〳〵自分の心から求めて行く旅のことであるから、今更に行くのがつらいといつて、やめる譯にも行かないので、何といふことなしにたゞそわ〳〵して急いで出立した。

「**みな冬立つはじめ**」　陰曆の十月の初をいふ。陰曆では、十・十一・十二の三箇月が冬なのである。**み**は、接頭語。**たつ**は、來る・になる、の意。後撰集に「神無月ふりみふらずみ定めなき、時雨ぞ冬のはじめなりける。」とある歌を思ひ合せるがよい。

「**さだめなき空**」　時雨常なき空模樣。即ち、時雨の空で、はつきりしない天氣。

「**ふりみふらずみ**」　ふつたりやんだり。動詞の連用形の下にみの添つたものが二つ重つてゐる場合には、「何々したり何々したり」と、譯すればよい。

「**時雨**」　秋冬の頃、降つたりやんだり定めない降り方をする雨。

「**嵐にきほふ木の葉**」　烈しい風に吹かれて、互に我先にと競ひ爭うて落ちる木の葉。

きほふ　は、きそふに同じ。

「**事にふれて**」　何かにつけて。何事につけても。

「**人やりならぬ道**」　人が命じてさせるのではない旅。自ら進んでする旅。（「他人を遣ることが出來ない」などと誤らないやうにすべきである。）

「**いきうし**」　往き憂しで、行くのがつらい・行くのがいやである・行きづらい、などの意。

いく　は、ゆくの古語。現今は、口語に使はれてゐる。（生くと誤つてはならぬ。）

「**何となく**」「何といふはつきりした考もなく」とか、「行くのがつらいのに急がれてならぬ理由が我ながらわからずに」などの意で、何氣なく・何といふことなしに・何といふ深い考もなく、などと解する。

四　小野の宿

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとどまる。月出でて、山の峯にたち續きたる松の木の間けじめ見えて、いとおもしろし。ここは夜ふかき霧のまよひにたどり出でつ。醒が井といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かち人は、なほたち寄りて汲むめり。

〔**夜ふかき霧のまよひ**〕〔**たどり出でつ**〕〔**うち過ぎましや**〕〔**かち人**〕〔**なほ**〕

○廣島高等師範學校
○京都高等蠶絲學校
○水產講習所

要旨　小野の宿の月夜の光景、及び醒が井を通る時の感想を述べてゐる。

釋義

【十七日の夜は……いとおもしろし】　十月十七日の夜は、小野の宿といふ所で泊つた。今まではあたり一面暗くあつたのが、折柄月が向うから出たので、山の峯に立並んでゐる松の木が、一本一本はつきりと見分けがついて、如何にも面白い。

「**十七日**」　建治三年十月十七日。

「**小野の宿**」　近江國坂田郡、彦根の東半里にある宿驛。

「**けぢめ見ゆ**」　物と物とが、はつきりと見分けられることで、茲は、月が山の向うから出て來たので、山の峯（山の脊）に立並んでゐた松の木が、一本一本はつきりとわかることをいふ。

けぢめ　は、差別・區別。

【ここは夜ふかき霧のまよひに……汲めり】　さて此の宿は、翌十八日の早曉、まだ夜明けまでには大分間のある、霧が深く立罩めてゐて、その爲に、何方へ行つてよいのか、方角も迷はされさうな時分に、道をさぐり〳〵出かけた。それから間もなく、醒が井の宿にかゝり、そこにある醒が井といふ清水の傍を通つたが、「若し今が夏だつたら、私も此の水を呑まずに素通りするやうなことはあるまい。」と思つてゐると、徒歩の旅人は、この時候でもやはり立寄つて汲んで飲んでゐるやうである。

「**夜ふかき**」　既に夜が更けて深い場合と、まだ夜が明けないで深い場合と、兩方にいふ。茲は、後者。

「**霧のまよひ**」　霧のまぎれと同じ。霧が立ちこめて方角もはつき

りせず、迷い易い有様をいふ。

「**たどる**」よく分らない道をさぐりながら行く、即ち、困難な所や、知らない道などを、不安ながら探りゆく心持をいふ。

「**つ**」現了完了の助動詞。

「**醒が井**」近江國坂田郡、米原の東北一里餘にある宿驛で、そこに有名な清水があつた。今も東海道線の一驛、醒が井村。

「**うち過ぎましや**」水を汲まずに、そのまゝ素通りしようか、決して素通りせず、必ず立寄つて汲むであらうの意。夏でないから素通りした」といふ事實に立脚して、反對の場合を假設し想像したもの。

まし　は、事實を假定する想像。眞實に反して假に設ける場合に用ひる助動詞。正しくは「夏ならましかば、うち過ぎましや。」とあるべきところである。

「**かち人**」徒歩の人。作者は乘物に乘つてゐたことが、之でわかる。

「**なほ**」それでもやはり。有名な清水だから、夏でもないのにやはり、といふ意。

「**汲むめり**」汲んでゐる樣子である。實は「汲んでゐる」と斷定すべきのを和かにいふ語法。

めり　は、なりを少し和げ（想像して）た意味をもつ助動詞で、口語では、或は、だと斷定しても差支なく、おもむき・樣子・氣、などとも當ててよい。

五　心の闇

侍從の弟、爲守の君の許よりも、三十首の歌を贈りて、これに點合ひて、わろからむことを、こまかに記したべといはれたり。今年は十六ぞかし。歌の口なれば、やさしく覺ゆるも、かへすがへす心の闇と、かたはらいたくなむ。

〔**侍從**〕〔**點合ふ**〕〔**記したべ**〕〔**歌の口**〕〔**かたはらいたくなむ**〕

要旨　我が子爲守の歌を見ての感想を述べたもので、茲にも母性愛のうるはしさがあらはれてゐる。

釋義

【侍從の弟爲守の君の許よりも……いはれたり】　侍從爲相の弟である爲守殿からも三十首の歌を贈り寄せて「之に點をつけ、

わるい所があつたならば、それを精しく批評して記して下さい。」と言ひ越された。

「**侍從**」爲相をさす。爲相は侍從で宰相を兼ねてゐたから、かういふ。

侍從　は、主上の御側に侍して、種々の御用をつとめ、又諫言を納れることを掌る役。中務省に屬する官である。

「**爲守の君よりも**」此の文よりも前に「侍從の宰相の君の許より。五十首の和歌を詠みたりけりとて、清書も爲あへず下されたり。歌もいとをかしくなりにけり。五十首に、十八首點あひぬるもあやしく、心の闇の僻目こそあるらめ。（中略）」とあるので、爲守の君よりも。」といつたのである。

「**點合ひて**」歌などを見る場合に自分の心に叶つたものに點をつけることを合點（ガテン）といふ。現代に、承諾することを合點といふのも、これから來たのである。

「**たべ**」給べ。

【今年は十六ぞかし。……かたはらいたくなむ】　爲守は、今年十六であるなあ。まだ歌の初學者であるのに、その歌は氣高くすぐれてゐるやうに思はれるが、之もやはり、くれ〳〵も子の可愛さに心亂れて眞價以上に見るのであると、他人はさぞ可笑しくてたまらないだらう。

「**歌の口なれば**」茲は、歌の口なるに、の意である。萬葉集卷十に「秋山の木の葉もいまだもみぢねば、今朝ふく風は霜も置きぬべし。」とあり、又新古今集卷一に「卷向の檜原のいまだ曇らねば、小松が原にあわゆきぞふる。」とあると、同語法である。

歌の口　は、歌のよみはじめ。歌の初學。

「**かたはらいたくなむ**」なもの下に、結詞あらむなどを補つて見るべきである。

かたはらいたし　は、傍痛しで、はたから見て居てもはら〳〵する樣だ・はたの見る目も笑止だ・實に笑ふに堪へない・實に笑止千萬だ、などの意。

神皇正統記鈔

解題

神皇正統記六卷は、南朝の忠臣北畠親房卿誠忠の血涙の迸である。神代から後村上天皇の踐祚に至るまでの歴史の大要を記し三種の神器の所在を以て皇統の正閏を論斷するのを主眼とし、併せて政治の得失を論じた歴史であつて、普通の歴史とは其の趣を異にしてゐる。從つて、史論堂々、文章遒勁、言々句々、勤王の至誠と憂國の至情とに燃え、讀者をして慷慨措く能はざらしめる。たゞ、元來政策を旨としたものであるから、文藝趣味に乏しいことは已むを得ない。猶、公の此の一管の筆の力が、數百年の後に、大日本史を生み、遂に明治維新の大業を成さしめたことは、公の英靈をして瞑目せしめるに足ることであり、又我々日本國民として永く忘れてはならぬことである。

著者北畠親房は、村上天皇の皇子具平親王の後裔で、所謂村上源氏である。後醍醐後村上の兩帝に仕へた吉野朝の大忠臣で、晩年三宮に准じて輦車宮中に入るをゆるされ、大に南朝の爲に劃策する所があつたが、壯圖遂に空しく、正平九年四月賀名生の野に薨じた。明治の帝は特にその功を賞し給ひ、別格官幣社の社格を安部野神社に賜はつた。公の著書には、神皇正統記の外に、職原抄・古今集註・元々集等がある。享年六十二。(一九五三—二〇一四)

一　天津日嗣

我が朝の始は、天神の種を受けて國土を建立し、天

祖よりこの方繼體たがはず、唯一種ましまして、天地の開けし初より、今の世に至るまで、天津日嗣を受けたまふこと、よこしまならず。一種姓の中におきても、自ら傍より傳へ給ひしすら、猶正しきに歸る道ありてぞ、保ちましましける。これしかしながら、神明の御誓あらたにして、餘國にその類なきいはれなり、

〔繼體たがはず〕〔一種〕〔天津日嗣〕〔よこしまならず〕〔しかしながら〕〔神明の御誓〕〔あらた〕

要旨　わが皇統の萬世一系で、かゝる國體は、萬國無比である所以を說く。

釋義

【我が朝の始は、……よこしまならず】　我が國の天皇の始（神武天皇を指す）は、高天原にをられた神の御血統を受けて、國を創設され、天祖國常立尊より以來、皇位の受繼き方が正しく、唯一同一の御血統であらせられて、開闢以來今日に至るまで、御位を受繼がれることが、他の系統へそれてゐない。

「天神の種を受けて」　神武天皇が、天照大神の御孫、瓊々杵尊の御血統であることをいふ。

「天祖」　天皇の遠い御先祖。天地開闢の時、初めて生れ出でられた神が即ち天祖であるわけであるが、神皇正統記では、日本書紀に據つて國常立尊としてゐる。古事記では、天御中主神となつてゐる。

「繼體たがはず」　御位の受繼ぎ方が正しい。繼體は、祖先の遺體を受繼ぐ義から、皇位の繼承の意に轉用されたのである。

「一種」　一つの血統。

「よこしまならず」　わきみちへそれない。皇統の他系に移らなかつたことをいふ。

【一種姓の中におきても……その類なきいはれなり】　それから又、同一の御血統の中でも、何かの關係上、自然傍系の皇子が御位を繼承なされることがあつたにしても、それすら、直系に復する道があつて、皇統を正しく保たれたのである。之は全く日神（天照大神）の御誓約が靈驗顯著であることに基く（因る結果）のであつて、他の國にその類例のないわけである。

「一種姓」　一つの血統。姓は、一つの祖先から出た族を、他族と區別する爲の稱號。

「傍より傳へ給ひしすら」（皇嗣があらせられぬ時などに）傍系の皇子が、御位を御受繼ぎなされたにしても、それすら。

「すら」　輕きをあげて重きを想像させる時に用ひる助詞。口語のでさへに當る。

「しかしながら」　全く。

茲では、普通にいふさうであるが、の意ではない。

「神明の御誓」　天照大神の御誓約。神明は、茲では、天照大神をさす。御誓は、天孫降臨の際に、三種の神寶を授けられ、更に「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地。爾皇孫宜二就而治一焉。行矣。寶祚之隆、當下與二天壤一無上窮者矣。（日本書紀）」と、仰せられた御神勅を指す。

「あらた」　あらたかに同じ。靈驗の顯著なこと。

二　四民

凡そ男夫は稼穡をつとめて、己も食し、人に與へても飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として、自らも衣、人をも暖かならしむ。賤しきに似たれども、人倫の大本なり。天の時に隨ひ、地の利によれり。この外商沽の利を通ずるものあり、工巧のわざを好むもあり、仕官に志すもあり。これを四民といふ。

〔稼穡〕〔紡績〕〔人倫の大本〕〔商沽〕〔工巧のわざ〕〔四民〕

○大阪高等工業學校
○山口高等商業學校
○水産講習所

要旨　民に、農工商及び士の四種ありて、それ〴〵分業をなしてゐることを述べてゐる。

釋義

【凡そ男夫は……地の利によれり。】　すべて男子は農業に勵んで、自分も食ひ、人にも與へて飢餓を免れさせ、女子は絲とりを業として、自分も着、人をも暖かにして寒苦を免れさせる。かういふ仕事は賤しい職業のやうに見えるけれども、之が人道の根本をなすものである。彼等農桑に從事する男女は、天の利、即ち氣候の寒暑・風雨の多少等に隨ひ、或は土地の高低・肥瘠等に隨つて仕事をしてゐる。（以上産業について說く。）

「稼穡」　稼は、穀物を種ゑること、穡は、穀物を取りいれること。熟して農業の義とする。

「**紡績**」　紡は、つむぐ・うむ、即ち、麻や綿などを引きのばしより合せて絲にすること。績は、つむぐ・うむ、即ち、繭・綿・麻などから絲を引きだすこと。熟して絲をこしらへること。

「**人倫の大本**」　人道の根本・人道の基礎。飢寒の患なくして、始めて身を修め、榮辱を知り、そして人道が立つのである。故に農桑の業を以て人倫の大本といつたのである。管子牧民に「倉廩實則知二禮節一、衣食足則知二榮辱一。」とある。猶人倫には、人類の義もあるが、茲は、人の守り從ふべき道の意。

「**天の時に隨ひ地の利によれり**」　天の時は、天體の運行によつて生ずる寒暑風雨等の時候をいひ、地の利は、土地からうける利益、即ち地勢の高低・地味の肥瘠等をいふ。

【この外商沽の利を通ずるものあり、……これを四民といふ】　この外に、有無相通じてお互の利益をはかつてくれる商人があり、諸種の工藝に關する業を好んでやる者があり、又官途に就くことを希望する者もある。以上四種の人を四民といふのである。

「**商沽**」　商は、行きながら賣ること、沽は、小賣の意。商沽の利を通ずは、商賣によつて、品物を融通するといふ便利を計つてくれる意。

「**工巧の業**」　諸種の工藝。

「**四民**」　業務による四種の人民。士・農・工・商をいふ。

三　有徳の君

後三條天皇、東宮にて久しくおはしましければ、しづかに和漢の文、顯密の教までも闇からず知らせ給ふ。詩歌の御製も、あまた人の口に侍るめり。後冷泉のすゑざま、世の中あれて、民間のうれへありき。四月より位に居たまひしかば、いまだ秋のをさめにも及ばぬに、世の中のなほりにける有徳の君にてましましけるとぞ申し傳へ侍る。

〔東宮〕〔顯密の教〕〔世の中あれて〕〔秋のをさめ〕

○大阪醫科大學豫科

要旨　後三條天皇の御修養深くましましたこと及び御聖德の高くあられたことを讃歎してゐる。

釋義

【後三條天皇……闇からず知らせ給ふ】　御三條天皇は、久しい間皇太子の位にをられたから、ゆつくりと御勉强がお出來になつて、和漢の學問を始め、天台・眞言兩宗の教義にまで明かにお通じなされました。

「**後三條天皇**」　人皇第七十一代。

「**東宮**」　皇太子。春宮も同じくトウグウと讀むが之は專ら皇太子の御居所をいふ時に用ひる。因に、秋宮は、皇后の別稱である。

「**顯密の教**」　顯は、顯教の略で、天台宗のこと、その教理を顯然と知ることが出來るからかくいふ。密は、密教の略で、眞言宗のこと、その教理が祕奥幽妙で知ることがむづかしいからかくいふ。

【詩歌の御製も、云々】　詩や歌の御製も、澤山と人の口に傳唱されてゐる樣子である。

「**御製**」　天皇の作りたまへる詩文。御制とも書き、聖製ともいふ。

【後冷泉のすゑざま、云々】　後冷泉天皇の末の頃、世の中に火災・盜難などの凶事が多くて、人民は憂愁に堪へなかつた。

「**後冷泉**」　人皇第七十代の天皇。

「**世の中あれて**」　世の中に凶事が多くて。即ち、皇居が火災に罹つたり、地方に盜賊が起つたり、前九年の役などがあつたことを指していふ。

【四月より位に居たまひしかば……申し傳へ侍る】　治承四年四月から位にお即きになつてゐられるので、まだ秋の收穫時にもならないうちに、(そんなに短日月の間に、)世の中が平安に復したといふやうな御德の高い君主であつたといひ傳へてをります。

「**四月**」　治承四年の四月。

「**秋のをさめ**」　秋の收穫時。

四　德政

白河・鳥羽の御代の頃より、政道の古きすがたやうやう衰へ、後白河の御時、兵革おこりて、姦臣世をみだり、天下の民ほとほと塗炭におちにき。賴朝一臂を揮ひて、其の亂を平げたり。王室は舊きにかへるまではなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵を安くし、東より西よりその德に服せしかば、實朝なくなりても、背く者ありとは聞えず。(第一節)これに勝るほどの德政なくして、いかでかたやすく覆さるべき。たと

ひまた失はれぬべくとも、民安かるまじくば、上天もよもくみし給はじ。（第二節）

〔政道の古きすがた〕〔兵革〕〔塗炭〕〔一臂を揮ふ〕〔九重の塵〕〔堵を安くす〕〔德政〕〔まじ〕〔上天〕〔くみしたまはじ〕

○海軍機關學校
○新潟醫學專門學校
○水產講習所
○福岡高等商業學校

要旨　後鳥羽院の北條氏討滅の御企が成就しなかつた理由が述べてある。そして第一節は、源頼朝の天下を平定した勳功を論じてゐるし、第二節は、後鳥羽上皇が幕府に勝る德政を行ひなされた後に、北條氏討滅の擧に出でられるが得策であつた事を論じてゐる。

釋義

【白河・鳥羽の御代の頃より、……背く者ありとは聞えず】白河天皇及び鳥羽天皇の御代の頃から、古の立派な政治の道が、だん〳〵衰へて來て、後白河天皇の御時には保元・平治などの戰爭が起り、それから、心のねぢけたわるい臣下、即ち平清盛が國をみだした爲に、全國の人民は非常な困苦に陷つた。源頼朝が一骨折をして、其の亂を平定した。其のお蔭で、朝廷（皇室）は、昔の盛な有樣に立ち戻る程にはならなかつたけれども、宮中の騷亂もなくなつて平穩になり、萬民も苦痛から免れた。上流の者も下流の者も安心してくらし、日本中の民が頼朝の恩德に歸服するやうになつたから、頼朝の子の實朝が殺されて源氏の正統が絶えても、鎌倉幕府に叛く者があつたといふ噂もなかつた。（第一節）

「白河」　人皇第七十二代の天皇。

「鳥羽」　人皇第七十四代の天皇。

「政道の古きすがた、云々」　院政の世となつて、天皇の大權も行はれず、攝政・關白の威權もなくなつたことをいふ。**政治の古きすがた**は、天皇の大權が立派に行はれてゐた頃の立派な政治の道をいふ。

「後白河」　人皇第七十七代の天皇。

「兵革」　戰爭。**兵**は、兵器即ち刀劍の類をいふ、**革**は、なめしがは、即ち甲冑をいふ。戰爭と解するのは、轉義。

「姦臣」　心のねぢけた臣。わるだくみをする臣。**姦**は、主として平清盛をさす。

「塗炭」　非常な苦しみ。**塗**は、泥、**炭**は、火、泥土や炭火の中に陷つたやうな極めて苦しい境遇をいふ。

「**一臂を揮ひて**」　一力出して・一働して・一骨折つて・一肌ぬいで、などの意。**臂**は、ひぢと訓む。

「**王室は舊きにかへる、云々**」　皇室は古の盛んな樣に回復する程にはならなかつたけれども。政權が武家にうつつて、矢張、王室は以前の權力を持することが出來なかつたことをいふ。

「**九重の塵**」　宮中の騷亂。**九重**は、宮中の別稱。支那で皇居を九天の上に譬へていふのに起る。

「**肩もやすまりぬ**」　負擔も輕くなり苦しみがなくなつた。愁苦を休めることが出來た。

「**堵を安くし**」　堵（宅のまはりの垣。轉じて居所の義。）の中に安心してゐる意で、安堵する・居所に安んずる。安心して日を暮らすことをいふ。

「**東より西より**」　東からも西からも、即ち天下到る所からの義で日本全國の民、の意。

【これに勝るほどの德政なくして、……上天もよもくみし給はじ】　かういふわけであるから、幕府以上の仁ある政治を施さなくては、どうしてたやすく幕府を倒す（北條氏を滅す）ことが出來ようか、出來るものではない。よしやまた幕府を倒す（北條氏を滅す）ことが出來るとしても、これが爲に人民が安穩な生活をする事が出來ないやうになるのならば、天の神樣も、とても武家政治を倒す企（北條氏討滅の擧）には加勢をして下さらぬであらう。（第二節）

「**德政**」　仁政。恩德を施して人民の爲をはかる政治。

因に、足利義政の時に、借錢借財等を一切償還するに及ばぬといふ令を發して、之を德政と稱したが、之は寧ろ惡政である。玆にいふ德政は、眞の字義通りのものであつて、之とは全然異る。

「**いかで……覆さるべき**」　いかで……べきで、反語になる。

「**まじくば**」　推量の打消の助動詞の將然形。

「**上天**」　天帝。天の神。

「**くみす**」　加勢する。又は、同意する。

「**じ**」　推量の打消の助動詞の終止形。

五　兵馬の權

大方泰時、心正しく、政すなほにして、人をはぐくみ、物におごらず、公家の御事を重くし、本所（ほんじよ）のわづら

ひをとどめしかば風の前に塵なくして、天の下すなはち靜まりき。かくて年代をかさねしこと、ひとへに泰時が力とぞ申し傳ふめる。（第一節）陪臣として久しく權を執ることは、和漢兩朝に先例なし。その主たりし賴朝すら二世をば過ぎず。義時いかなる果報にか、圖らざる家業をはじめて兵馬の權を執れりし、ためし稀なることにや。（第二節）

〔すなほ〕〔公家〕〔本所〕〔風の前に塵なし〕〔傳ふめり〕〔陪臣〕〔いかなる果報にか〕〔家業をはじむ〕〔兵馬の權〕

○海軍經理學校

○神戸高等商業學校

要旨　北條泰時の性格及び治績を記し、併せて陪臣として久しく政權を執つたのは、先例のないことであるといふことを述べてゐる。

釋義

【大方泰時、……泰時が力とぞ申し傳ふめる】　概していへば北條泰時は、心が正しく、公明正大で私曲のない政治を行つて、民を愛撫し、人におごらず、朝廷に關した御事を大切にし、莊園の支配者が惹起すいろいろの面倒を止めたから、戰亂がなくなつて、天下は忽ち安らかに治まつた。かくして平和の狀態が何代も續いた事は、全く泰時の力であるといはれてゐる。（第一節）

「大方」　例外を除き、大體に就ていへば、の意。

「泰時」　鎌倉第三代の執權。

「すなほ」　正直。公明正大で私曲のないこと。

「はぐくみ」　羽含むの義より、轉じて、愛撫する・養育する・かはいがる、などの意。

「物」　漢文から來た語で、人の意。玆を、一說に、「物事に就て身分に過ぎた行爲をしない」とも說くが、如何。

「公家」　朝廷。

「本所」　莊園の支配者。本家ともいふ。諸國にある莊園の領主の上に位する支配者。**本所のわづらひをとどむ**は、莊園の支配者が無理な事をして、人民を苦しめるといふやうな弊害を除いたことをいふ。**わづらひ**は、くるしみ。

「風の前に塵なくして」　兵亂なくして天下の靜穩なこと。此の句は、「如く」の語を省いたもので、卽ち、修辭學上の隱喩法である。

【陪臣として久しく權を執ることは、……ためし稀なることにや】　またげらいとして久しく天下の政權を握るといふことは、日本と支那との兩國に、その先例がないのである。北條氏の主人であつた賴朝でさへ二世以上は續かなかつた。義時はまあどういふ前世の報の爲か、思ひがけぬ重職を創めて、天下の政權を握つたが、かういふ事はめつたに例のない事であらう。（第二節）

「果報」　佛教語。むくい。因果應報の義で、前世になした善惡の行によつて、現世に報のあること。普通には、善い報だけにいふ。それ故、幸運・幸福と解してもよい。

「家業をはじめて」　執權職を創始したことを指す。

「兵馬の權」　全國の軍隊を統轄する權力。玆は、天下の政權の意に見てよい。

六　武備の勝

凡そ保元平治よりこの方のみだりがはしさに、賴朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましかば、日本國の人民、いかがなりなまし。このいはれをよく知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ、武備の勝ちにけると思へるはあやまりなり。

〔みだりがはしさ〕〔なからましかば〕〔いかがなりなまし〕

○東京帝國大學農學部農業教員養成所

要旨　源賴朝と北條泰時とに對する世人の誤解をといてゐる。

釋義

【凡そ保元・平治……いかがなりなまし】　一體、保元・平治以來の亂世に、賴朝といふ人もなく、泰時といふ者もなかつたと假定したら、日本の國の人民はどうなつたことであらう。（もつとひどい苦境に陷つたかもわからない。）

「保元」　人皇第七十七代後白河天皇御治世の年號。一八一六年―一八一八年。**保元の亂**は、保元元年に、崇德上皇が重祚なさらうとして起された亂である。

「平治」　人皇第七十八代二條天皇御治世の年號。一八一九年。**平治の亂**は、平治元年に、藤原信賴と源義朝とが相結託して起した亂である。

「みだりがはしさ」　みだりがはしいこと。卽ち、亂世。

さは、形容詞や動詞に添へて、之を名詞とする時に用ひる語。

「なからましかば」　なかつたと假定したなら。

ましかば は、事實と反對の假定をなす時に用ひらるゝ形で、「……と假定したなら」と譯する。そして、上に「ましかば」とある時には、之に對する結は、「……まし」となるのが原別である。ましは、推量又は願望の意を表はす助動詞で、その活用は、

將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
○	○	まし	まし	ましか	○

「いかがなりなまし」 どうなつたであらう。即ち、まだ〳〵もつとひどい苦境に陷つたであらう、の意。ここの「まし」は、即ち上の句の「ましかば」の結である。

【このいはれをよく知らぬ人は、……と思へるはあやまりなり】 頼朝と泰時とが出た爲に、人民の苦しみが輕減されたのであるといふ此のわけがらをよく知らない人は、何の理由もなく、朝廷の威光が衰へて武家が勢力を得たと思つてゐるが、それは閑違つた考である。

「武備」 戰爭の用意・いくさのそなへ、の義であるが、玆では、武家の意にとる。

七　皇恩

固より人臣としては、君をたふとび、民を憐び、天にせぐくまり地にぬき足し、日月の照すを仰ぎても、心のきたなくして、光にあたらざらむことを怖ぢ、雨露の施すを見ても、身の正しからずして、惠にもれむことを顧みるべし。（第一節）朝夕に長田・狹田の稻の種を食ふも皇恩なり。晝夜生井・榮井の水の流を呑むも神德なり。」これを思ひも入れずあるにまかせて慾を恣にし、私を先として公を忘る心あるならば、世に久しき理あらじ。」いはむや國柄を執る仁にあたり、兵權を預る人として、正路をふまざらむにおきては、いかでか其の運を全うすべき。」（第二節）

〔天にせぐくまり地にぬき足す〕〔長田・狹田〕〔生井・榮井〕〔あるにまかす〕〔國柄を執る仁にあたる〕〔いかでか……すべき〕

○東京音樂學校

○海軍兵・機關・經理學校

要旨　人臣の皇恩を思ひ、正路を蹈むべき要道を說いてゐる。

釋義

【固より人臣としては、……顧みるべし】 勿論、臣下の身としては君を尊び、庶民を憐み、高い天の下でも身をかがめて歩き、厚い地の上をも拔足して足音をさせないで靜かに歩くといふ樣によくよく己の身を愼しみ、日月の照すのを見るにつけても、己の心が穢れてゐて、その光に當らぬ（その光を受ける事が出來ない）樣な事がありはせぬかと怖ぢ恐れ、雨露が草木を養ひ育てるのを見るにつけても、己の身が正しくない爲に、此の雨露にも比すべき大君の御惠に漏れる樣な事がありはせぬかと反省しなさい。（第一節）

「固より」 いふまでもなく。勿論。

「人臣」 玆では、官途にある者を指す。

「民」 玆では、官途についてゐない一般の庶民を指す。

「天にせぐくまり地にぬき足し」 天は高く且つ廣いけれども、なほ身を前にかがめて歩き、地は厚く且つ廣いけれども、なほ拔足して足音をたてず靜かに歩いて行くといふ意で、おそれて身のおきどころのない樣、轉じて人に誇らずよくよく身を愼しむ意に用ひる。漢語「跼天蹐地（きょくてんせきち）」の訓讀。

せぐくまる は、「跼」の字の訓讀で「背屈（せくつ）まる」義。かゞむ・こゞむ、などの意。**ぬき足す** は、「蹐」の字を訓讀したもので、足音を立てないやうに、足を靜かに上げ下げして歩くことをいふ。

「日月の照すを仰ぎても、云々」 要するに、「常に心を清く正しく保つて、少しも疚（やま）しい點のないやうにして居よ」といふことを述べてゐるのである。

怖ぢ は、「顧みるべし」 の**べし**に係り、命令である。

「雨露の施すを見ても」 雨露が草木を潤し育てるのを見るにつけても、の意。**雨露** は、萬民を愛撫される君の御惠に喩へられる。

「身の正からずして、云々」 要するに、己が身を正しく持つて、大君の御惠に浴するやうに心掛けよといふことを述べてゐる。

【朝夕に長田・狹田……神德なり】 我々が朝夕に、田から穫た米を食ふことが出來るのも皇恩である。晝夜に、井戸の水を飲むことが出來るのも神樣のお蔭である。〔此の一小節は、吾等が生命を維持することの出來るのは、すべて皇恩と神恩とによるのであるといふことを述べてゐる。〕

（猶、此の一小節は、「朝夕晝夜に、長田・狹田の種を食ひ、生井榮井の水の流を呑むも、皇恩・神德なり。」とあるべきを、修辭上對句としたのである。）

「長田・狹田」 天照大神の御田の名であるが、玆では單に、田を尊

くいひあらはす爲に用ひた語である。**長・狹**は、長大・狹小である から、大田・小田をいふのであるが、之も修辭上の添語と見て、意味を取らぬものと考へてよい。日本書紀に、「定二天邑君一。卽以二其稻種一。始殖二于天狹田及長田一。其秋垂穎。八握莫莫然甚快也。」とある。

「**稻の種**」米。

「**皇恩**」皇室の御恩。

「**生井・榮井**」何れも、井戸をほめていふ古語。飲めば生き榮えるといふ水の出る井戸の義であるが、そのやうな井戸が實際にあるわけではない。

【これを思ひも入れず……、世に久しき理あらじ】 この皇室の御恩。神樣のお蔭といふことをよく考へもしないで、あればあるだけ慾心を增長させ、(あればあり次第に慾望を思ふ儘に滿足させ、)自分一身の利益を第一とし、朝廷(或は國家社會)の事を念頭に置かない樣な了簡がある樣では、世の中に永く生存して居られる道理はない。〔此の一小節は、その皇恩と神恩とに浴する者であつて、私慾を忘にして、公を忘れる樣な事があるなら、その者は天罰を蒙つて忽ちに滅ぶべきであるといふ事を論じてゐる。〕

「**これを**」皇恩と神德とに與つてゐることを指す。

「**思ひも入れず**」深くも考へず。

「**あるにまかせて、云々**」自然のなりゆきにまかせて、之を矯めようとしない意。

「**私**」自己一身の利益。

【いはむや國柄を執る仁にあたり……いかでか其の運を全うすべき】 まして國家の政權を握る人(攝政・關白・大臣など)となつたり、兵馬の權を任され預る人(將軍)となつて、正しい道に從つて事をしないやうな事があつたなら、どうして、我が家運をいつまでも持續させることが出來ようぞ、(必ず中途で破滅の運に陷つて亡びてしまふに相違ない。)〔此の一小節は、まして將相の重任にある者は、正道を履まないでは、家運を全うする事はむづかしいといふことを論じてゐる。〕(第二節)

「**國柄を執る仁にあたり**」國家の政權を握る人となつて、の意。

「**國柄**」は、國土人民を支配する權力。國家の政權。**仁**は、人に通じて用ひる。**仁にあたり**は、人となり、の意。

「**兵馬の權を預る人**」兵馬の權を引受ける人、卽ち將軍をいふ。

「**其の運**」自家の運命。

八　人臣の道

凡そ王土にはらまれて、忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。かならずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども後の人を勵まし、其の跡をあはれびて賞せらるるは、君の御政なり。下として、きほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることは、誠にありがたきならひなりけむかし。

〔**はらまる**〕〔**身の高名**〕〔**其の跡**〕〔**君の御政**〕〔**きほひ爭ふ**〕〔**あらぬにや**〕〔**させる功**〕〔**みづからあやぶむるはし**〕〔**前車の轍を見る**〕〔**ありがたきならひなりけむかし**〕

○海軍機關學校
○陸軍士官學校
○小樽高等商業學校
○專門學校入學資格試驗
○神宮皇學館
○慈惠會醫科大學豫科

要旨　身命をすてて忠義を盡くすのは、人臣として當然なすべき務で、下より過分の望をしてはならぬといふことを說いてゐる。

釋義

【凡そ王土にはらまれて、……きほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや】 一體、天皇が御統治なされる國土に生きて行く以上、天皇のために忠義を盡くして死ぬのは、人臣たる者の當然の務である。忠義を盡くしても、それを自分の手柄であるなどとは、絕對に考へてはならぬ。然し後世の人を奬勵するために、手柄のあつた者の子孫を不便に思し召されて、其の功を賞せしめられるのは、天皇が天皇としてなされる政治上の御取計らひである。(卽ち、天皇が政務執行上自發的になされる御所置であつて、義務としてなされるのではない。)それ故、臣下としては、自分の勳功に對する恩賞に預らうと競爭すべき筈のものではなからうと思ふ。

「**王土**」帝王の領土。茲は、萬世一系の天皇の御支配なさる我が日本國を指す。

「**はらまれて**」**はらまる**は、含まれる意。生活して・生きて、の意。一に、生れて、の意にもとる。

「**忠をいたし**」忠義を盡すこと。

「**人臣**」臣下。人君に對する語

「身の高名」　自分の手柄は。高名は、名が高くあらはれる義から、轉じて手柄の意に用ひる。

「その跡」　國事に功勞のあつた人の子孫。又はその遺族。

「君の御政」　天皇の政治上の御取計らひ。

「きぼひ爭ひ申すべきにはあらぬにや」　互にはりあつて、天皇の御恩賞に預らうとしてはならない筈のものであらう。（臣下として忠義を盡すのは、人臣たるものの當然の務であるから。）

あらぬにや　なからうと思ふ、位の意。「にや」の下には、いつも「あらむ」が省略されてゐる。

【ましてさせる功なくして、……誠にありがたきならひなりけむかし】（よしや相當の勳功があつても、かうなのであるから、）ましてこれといふ勳功もないのに、自分不相應な大きな望を持つといふことは、却て自分が自分を危地に陷れる端緒であるけれども、世人は、分に過ぎた望を抱いて身を亡ぼした先人の過失を見て、其の失敗を再びしないやうに自身の戒となすことは、まことになし難いのが人情の常であつたと見え、相變らず不當の望を起して同じ過失を繰返して、この事の絶えなかつたのは、歎かはしい次第である。

「させる」　これといふ程の。大した。

「過分の望をいたす」　身分に過ぎた大望を抱く（持つ）。

「みづからあやぶむるはし」　自分から自身を危くするいとぐち。

「前車の轍を見る」　前車が覆つたのを見て、後車の戒として、前車と同樣の失敗をするなと云ふことで、先人の失敗の例を見て、自分もそれと同一な失敗を再びしないやうに氣をつけることをいふ。玆は、過分の恩賞を望んで、自分から自分を亡ぼした先人の失敗に鑑みて自分の戒とすることは、實にむづかしい事と見える意。史記の賈誼傳に「前車覆、後車戒。」とある。

「ありがたきならひなりけむかし」　前車の轍を見ることのなし難いのは、世のならはしであつたと見える・人情の常としてさうすることが困難であつたと見える、の意。

ありがたし　は、稀といふ意もあるが・玆では、困難・むづかしい、などの意。

けむ　は、過去の想像の辭。前車の轍を見ることはほんたうにむづかしいことであつたと見える。（昔も失敗を繰り返して居る事だ、の餘意が出る。）

かし　は、終止完結した語句を輕く抑へて咏歎する助詞。

九　言語は君子の樞機

「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも、君をないがしろにし、人におごることは、あるべからぬことにこそ。さきにも記し侍りし如く堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣・賊子といふものは、そのはじめ心・言葉を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人の心のあしくなり行くを、末世とはいへるにや。

〔言語は君子の樞機〕〔あからさまにも〕〔ないがしろにす〕〔堅き氷は霜を履むよりいたる〕〔亂臣・賊子〕〔心・言葉〕〔末世〕

○千葉醫學專門學校
○山口高等商業學校
○海軍機關學校
○專門學校入學資格試驗
○日本齒科醫學專門學校
○東京商科大學豫科

要旨　言語上の放言が、やがては亂心を起す基ともなるものであるから、心や言葉は、愼まなければならぬといふことを說いてゐる。

釋義

【「言語は君子の樞機なり。」といへり。……あるべからぬことにこそ】「言語は、君子即ち學德の共にすぐれた人にとつて最も愼まなければならぬ大切なものである。」と古書に見えてゐる。それ故、かりそめにも君主を輕蔑したり、人に對しておごり高ぶるやうな言辭を弄してはならぬことである。

「言語は君子の樞機なり」　易の繫辭上篇に出てゐる句で、「言行者君子樞機。」とあるを少し改めたもの。樞は、扉のくるる、戸を開閉するに最も大切な所。機は、弩の引金、石弓はこれによつて發せられる。共に、器具にとつて極めて肝要な部分であるので、熟して肝要なものの意に用ひる。

玆では、言語は學德のすぐれた（又は、德行を修める人）にとつては、最も愼まなければならぬ大切なものである、の意。

「あからさまにも」　古文では、かりそめにも・ついちよつとでも、の意。現代では、あらはに・つつみかくさず、の意に用ひる。

「**ないがしろにす**」輕蔑する。

「**ことにこそ**」こその下に、あれが省かれてゐる。

【さきにも記し侍りしごとく、……出でくるなり】　前にも書いた通り、堅い氷の張るのも初めから一度に張るものではなく、わづかに霜の置く樣な輕い寒さから萌して、次第に寒さが加はつて次第に堅氷が張るやうになるのが普通である、それと同じ道理で、國を亂し君父を弑するやうな大惡人も、はじめから亂臣・賊子であるのではなく、最初は、心のもち方や、言葉の使ひざまを愼まず、ちよつと君を輕蔑したり、人におごるやうなことがあつたのが基となつて、それが次第次第に嵩じて　遂に眞の亂臣・賊子となつて來るのである。

「**さきにも記し侍りし如く**」應神天皇の條に「周易に霜を履んで堅氷に至ることを、孔子釋してのたまはく、積善の家に餘慶あり、積不善の家に餘殃あり。君を殺すことも一朝一夕の故にあらず。」とあるのを指していふ。

「**堅き氷は霜を履むよりいたる**」易經には「履レ霜堅氷至。」とある。「大事は些細な事から起る」とか「少しの事が、次第に嵩じて、遂に大患となる」とかいふ比喩に用ひたもので、玆は、「如何なる亂臣・賊子のやうな者も、最初から弑逆を行ふ程の大惡人であるのではなく、そのはじめは、言葉づかひを愼まなかつたのがもとで、それから漸々に惡行が增して、君父を弑殺するほどの大逆をも犯すに至る」の喩。

「**ならひ**」常。

「**亂臣賊子**」國を亂したり、君父を弑殺するやうな大惡人。孟子、滕文公下篇に「孔子成二春秋一而亂臣・賊子懼。」とある。

【世の中の衰ふると申すは、……末世とはいへるにや】　世の中が衰へるといふのは、日月の光が變るのでもなく、草木の色が改まるのでもなく、ただ人の心が惡くなつて行くことを、衰へた末の世といふのであらうと思ふ。

「**末世**」澆季といふも同じ。もとは「佛法の衰へた世」をいつたのであるが、轉じて「道德が衰へ、人情が輕薄になつた世」のことにいふ。上代を理想の世とし、時世を經るにつれて、人心が惡化するといふ東洋思想に基いていふ。

一〇　もとよりの皇都

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して、曆應とぞいひける。芳野の宮には、もとの延元の號なれば、國國もおもひおもひの號なり。もろこしにはかかるためし多けれど、此の國には例なし。されど四とせにもなりぬるにや。大日本島根はもとよりの皇都なり。內侍所も神璽も芳野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。

〔**さても**〕〔**改元**〕〔**四とせにもなりぬるにや**〕〔**いづくか……べき**〕

要旨　曆應・延元の二つの年號が、同時に用ひられたこと、及び吉野が正しい都であるといふことを記してゐる。

釋義

【さても舊都には、……されど四とせにもなりぬるにや】　さて舊都（北朝）では、戊寅の年（延元三年）の冬、年號を改めて曆應といつた。吉野の朝廷（南朝）では、もとの延元の年號をお用ひなされてゐられたから、國々でも、思ひ〳〵の年號を用ひたのである。支那にはこのやうな例が多いけれども、我が國には、前例がない。それでもかういふ狀態のつゞくことが、今日までで、四箇年にもなつたかと思ふ。

「**さても**」さてに同じ。もは、感動詞。

「**舊都**」吉野に對して、平安京即ち京都をいふ。北朝方をさす。

「**戊寅**」訓つちのえとら　音ボイン　延元三年に當る。

昔から、十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）・十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を配合して、之を曆數の上に應用し、それによつて年月日を示す。此の十干と十二支とを、年に配すると六十年で干支が一週し、六十一年目にはもとの干支に還るのである。俗に還曆又は本卦還と稱して、六十一歲を祝ふのは、之が爲である。十干の訓讀の覺え方は、次のやうにするのが便利である。

キ　の　エ……甲
　　ト……乙
ヒ　の　エ……丙
　　ト……丁
ツチの　エ……戊
　　ト……己
カ　の　エ……庚
　　ト……辛
ミヅの　エ……壬
　　ト……癸

即ち、大體に於て、先づ二つづつに組合せ、キヒツカミと頭の音

を覺え、下にエトを配するやうに考へるがよい。
因に、キは木、ヒは火、ツチは土、カは金、ミヅは水。エトは兄弟。

「**改元**」　元年。又は、年號を改める。

「**曆應**」　北朝の年號で、延元三年（一九九八年）から興國二年（二〇〇一年）まで四年閉續いた。因に、興國は、後村上天皇御治世の年號。

「**芳野の宮**」　大和國吉野山にあつた南朝の朝廷。

「**延元**」　後醍醐天皇御治世の年號。一九九六年―一九九九年。

「**國國もおもひおもひの號なり**」　南朝に屬する國は延元の年號を用ひ、北朝に屬する國は曆應の年號を用ひたことをいふ。

「**もろこしには、云々**」　唐土（支那）には、兩朝が竝立して年號も二つあることはいくらもあつた。

「**されど四とせにもなりぬるにや**」　それでも、もう四箇年もかういふ狀態が續いたやうに思ふ。延元元年に、南北兩朝が分立してから、今年（延元四年卽ち興國元年）までで、足かけ四箇年になる。

【大日本島根は……いづくか都にあらざるべき】　日本の國土内でさへあれば、もとよりどこでも皇都となり得るわけである。皇位のしるしである八咫の鏡も八阪瓊の曲玉も吉野にましますのであるから、どうして吉野が都でないといへようか、當然都であるわけである。（たとひ、光明院が、京都を以て皇都と號されても、こゝこそ眞の都である、の意。）

「**大日本島根**」　日本全國。

「**內侍所**」　三種の神器の一である八咫の鏡を指す。今は專ら賢所と申す。之を內侍所又は賢所と申すのは、直接に申すことを畏れ、その奉安してある殿舍の名によつて申したのである。猶、本來、內侍所は、禁中の溫明殿の別名である。女官內侍が常に神鏡を齋き祀つてゐたところから、かく申すことになつたのである。

「**神璽**」　三種の神器の一である八阪瓊の曲玉を指す。
璽は、「しるし」の意。皇位のしるしといふ意味で、曲玉のことを神璽といふのである。

「**いづくか**」　玆は、「いづくんか・いづくんぞ」に同じで、どうしての意。

一　夢の世（一）

さても八月の十日あまり六日にや、御門秋霧におかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。寢ぬるが中なる夢の世、今にはじめぬならひとは知りながら、かずかず目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへとどこほりぬ。

〔**秋霧におかされさせ給ひて**〕〔**寢ぬるが中なる夢の世**〕〔**かずかず目の前なる心地す**〕〔**老の涙もかきあへず**〕〔**とどこほる**〕

○高等學校

要旨　（一）（二）に亙りて、後醍醐天皇の事を記し申してゐる。
本段は、後醍醐天皇の崩御についての記事と感想とを述べてゐる。

釋義

【さても八月の十日あまり六日にや、……かくれましましぬとぞ聞えし】　さて延元四年の八月十六日であつたらうか、御門（後醍醐天皇）は、秋の氣候におあてられなされて、（秋霧が玉體にさはつて）おかくれ遊ばされたとの事である。

「**十日あまり六日**」　十六日のこと。あを省いて「十日まり」などともいふ。

「**御門**」　本來は、皇居の門・宮門・禁門の意。轉じて、天皇の御身にいふ。

「**秋霧におかされさせ給ひて**」　秋霧のかゝる頃の氣候の爲に、御身を冒されたことをいふ。卽ち、崩御の時は、延元四年の八月で、陰曆でいへば、方に秋の最中である。行宮は、山深い吉野にあつた事であるから、その秋霧が御からだに障つて御病氣にかゝられ、遂に崩御あらせられたのである。

「**聞えし**」　といつたのは、當時著者北畠親房は、常陸にゐて此の事を傳聞したのであるからのことである。

【寢るが中なる夢の世……筆の跡さへとどこほりぬ】　此の世は、丁度寢てゐる閒に見る夢のやうに果敢ないもので、その果敢なさは今はじまつた習でないといふことは、かねてからよくよく承知してゐながらも、帝が御在世中の御事を御追懷申すと、どれもこれも、まだ目前に見てゐるやうな氣持がして、まことに悲しく、たゞさへ出易い老人の涙が、とめどなく出て來て、どうにも拭ひきれないので、筆までがしぶつて、思ふやうには書き記るされない。

「**寢るが中なる夢の世**」　寢て居るうちに見る夢のやうに、はかない世の中、の意。

「**夢**」　はかないものの例によく引かれる。

「**今にはじめぬならひ**」　今にはかに始まつたといふ譯ではない、

昔からのならひである、といふ意。

「老の涙も云々」　老人の涙も拭き（拂ひ）きれないから、書きしるす文字までも滯つて書けなくなつた、の意。

かく　は、「ぬぐひ去る・はらひさる」意。**あへ**　は、「敢へ」の意。**とどこほる**　は、「停滯する、即ち思ふやうに進まないの、意。

一三　三種の神器（二）

むかし仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、茲にてとどまりたくはあれど、神皇正統のよこしまなるまじきことわりを申しのべて、素意の末をもあらはさまほしくて、しひて記しつけ侍るなり。かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左大臣の第へうつし奉られて、三種の神器をつたへ申さる。後の號をば仰のままにて、後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふこと二十年、五十二歳おましましき。

〔獲麟に筆を絶つ〕〔神皇〕〔よこしま〕〔ことわり〕〔素意の末〕〔後の號〕〔仰のままにて〕

○大阪高等商業學校

要旨　前段をうけて、後醍醐天皇の崩御に關聯したことで、崩御の前夜皇太子に三種の神器をお傳へなれた事が述べてある。

釋義

【むかし仲尼は……しひて記しつけ侍るなり】　昔孔子（仲尼は字）が、春秋といふ本を書いた時に、魯の哀公が西方諸侯の領地を巡視して、麟を獲たといふところで、筆を止めたといふことである。この獲麟といふことは、終焉といふことを意味するからして、自分も後醍醐天皇の崩御を以て此の記をかくことを止めたいとは思ふけれども、皇位は正しい御系統の御方がお嗣ぎなさるべきもので、正しくない系統へそれてはならぬといふ道理を申し述べて、持論の片端だけでも發表したいので、强ひて書きつけるのである。

「獲麟に筆を絶つ」　これは固より春秋（五經の一で、魯國の歴史）に出てゐる語であるが、鎌倉室町時代では「獲麟」といふ語を終焉の意に用ひた。こゝも其の意に見た方がよからう。吾妻鏡、元仁元年六月の條に、「十三日前奥州（義時）病痾已及二獲麟一之間、……

今日（十三日）寅尅令二落飾一給、已尅遂以御卒去。」とある如きは、其の最も明かな例である。類聚名物考凶事部に「西に獵して麟を獲たるは孔子の憑の時にあたれば、やがて常にも卒去を獲麟とはいへるなり。」下學集下に「呼二一切事終一、云二獲麟一、亦呼二人之臨終一、云二獲麟一。」左傳に「仲尼絶二筆於獲麟一句一。」明月記に「寛喜二年三月廿一日云々、祭主能隆、依レ病獲麟、獻二辭書一云々。」又同書に「正治元年正月廿八日、兼時妻依二所勞一獲麟、行二山里一云々。」塵添壒囊鈔第十六に「人ノ臨終ヲ獲麟トイフハ何事ゾ、獲トハ得トテ、ウル也。麟ハ麒麟也、牡ヲ麒トイフ。牝ヲ麟トイフ云々。魯ノ哀公獲麟時、孔子憑ジ給事ヲイヒ習ハセルナリ。」などとある。獲麟を以て孔子の歿時とするのは誤であるけれども、さる誤解から用ひたものらしい。因に、春秋は、「哀公十四年春、西狩獲レ麟。」の所で文を止めた。

麟　は、支那でいふ想像上の動物で、形は一寸鹿に似てゐる。

「神皇」　天皇。

「よこしま」　正しくないこと。邪の字を宛てる。

「素意の末をもあらはさまほしくて」　平素心に思つてゐる所の一端をもあらはしたくて、の意。

【かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、……五十二歳おはしましき】　天皇は前以て崩御の御時を悟りになつてをられたのであらうか、前夜から皇太子義良親王を左大臣藤原經忠の屋敷へお移しになつて、三種の神器をお傳へ遊ばされた。御謚號は、御遺言通りに、後醍醐天皇と申し上げる。天下をお治めになること二十年間で、崩御の御時は、五十二歳であらせられた。

「かねて時をも云々」　豫め崩御あそばす時刻をも、陛下御自身で豫感あそばしたのであらうか、

「左大臣の第」　左大臣藤原經忠の御第。經忠は、近衞家の嫡流で家平の子。世に堀河關白と稱する。

「後の號」　茲は、謚號をいふ。

「仰のままにて」　御遺言通りに。後醍醐天皇は、御生前に醍醐天皇の御風格を御欽慕遊ばされてゐたので、崩御の後には、「後醍醐」と申し上げるやうにとの御遺言があつたのである。

「おましましき」　**おましまし**は、「おはします」に同じ。神皇正統記の慣用語。

徒然草鈔

解題　徒然草二卷は、我が國隨筆文の泰斗である兼好法師の著書である。本書に隨時見聞感想した事を其の折折に書き綴つたもので、訓戒・評論・叙景・逸話・諷刺等二百四十三段の記事がある。そして之は、兼好の歿後今川了俊が、その僕松命丸の嘗て法師に從つてゐた事を聞いて、その遺墨を尋ねさせ、吉田の草庵に張つてあつたものまで蒐輯させて編成したものであると傳へてゐる。書名は初段に「つれ〴〵なるまゝに云々」とあるのをとつたのである。本書は要するに或は老儒佛の思想を受けて人世觀を述べ、或は文藝を論じ公事有識を說いたものである。文章は暢達麗雅で和漢調和文の優秀なものである。

著者兼好は卜部兼顯の第四子で、吉田に居つたので普通吉田兼好といふ。後宇多天皇に仕へて左兵衞尉となつたが、正中元年(一九八四年)その崩御にあひ、哀悼の餘り僧となり、洛西雙が丘に隱遁した。兼好は和歌をもよくし、頓阿・淨辨・運慶と共に、當時和歌の四天王と稱せられた。晩年伊賀國國見山の麓に住し、後村上天皇の正平五年二月入寂した。年六十九。(一九四二—二〇一〇)

一　人物

人は、かたち有樣の勝れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。物打言ひたる、聞きにくからず、愛敬あ

りて詞多からぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。（第一節）めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性、見えむこそ、口惜しかるべけれ。しな・かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにもうつさばうつらざらむ。（第二節）かたち・心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品下り顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるるこそ、本意なきわざなれ。（第三節）

〔かたち〕〔あらまほしかるべけれ〕〔愛敬〕〔心劣りせらる〕〔本性〕〔しな〕〔などか……うつらざらむ〕〔心ざま〕〔才〕〔下る〕〔にくさげ〕〔かけず〕〔けおさる〕

○海軍兵・機關・經理學校
○長崎高等商業學校

要旨　人物論であつて、三節から成つてゐる。第一節は、人は容貌がすぐれてゐる方がよいといふ意、第二節は、容貌がよい上に、性質がよくなければ、よい人とはいはれないといふ意、第三節は、容貌と性質とがよい上に、學才がなくては、よい人とはいはれないといふことが述べてある。要するに、容貌・性質・學才の三拍子が揃つてはじめて立派な人物といへるといふことを述べてゐる文である。

釋義

【人はかたち・有樣の勝れたらむこそ、……飽かずむかはまほしけれ】　人は容貌・風采のすぐれてゐるのは、望ましい事であらう。即ち、物のいひぶりが聞きにくくなく、かはゆげがあつて人ずきがよく、むやみにしやべり散らさないといふやうな人はいつまでたつても飽きることがなく、その人と對座してゐたいやうな氣がするものである。（第一節）

「**かたち・有樣**」　**かたち**は、貌、即ち容貌。**有樣**は、風采・なりふり。

「**あらまほしかるべけれ**」　あらまほしくあるべけれ、の約。望ましいことであらう、の意。**べけれ**は、「べし」の已然形。

「**物打言ひたる**」　この下に「さま」が略されてゐる。一寸ものをいふ樣子が、の意。又、物のいひぶり・口のきゝかた。

「**愛敬**」　今日いふ「あいきやう」と同意。かはゆげのあること。古語には「禮と和と相兼ねたるかたち也」とある。

「**詞多からぬ**」　多辯でない。文始經に「多レ言少レ品。」とあり又、西諺に「多辯は馬鹿。」ともある。（寂かに對座してゐる事の出來る心持は、我々とても望ましい事である。）

「**飽かずむかはまほしけれ**」　何時までも、その人と對座してゐたいと思ふ、意。

飽かず　何時まで向ひあつて居ても飽きが來ない。

むかはまほしけれ　その人の方へ向はうと欲する意で、「何時までも話しあつて居たい・なつかしいやうな氣のする」をいふ。

【めでたしと見る人の、……賢きにもうつさばうつらざらむ】　しかし、容貌風采が立派なだけでは駄目である。容貌風采などが立派だと見える人が。何かの場合に、案外つまらぬ人だといふ感を起すやうな地金を暴露することがあつては、いかにも遺憾であらう。一體人の品格や容貌は生れつきであるから、どうすることも出來ないであらうが、心の方はどうして賢い上に賢くしようとすれば出來ぬことがあらうか、自分の注意次第でどうにもなるものである。だから、心の修養を怠つてはならない。（第二節）

「**めでたしと見る人**」　茲では、容貌風采等の點からいつて、之は立派な人であると思はれる人をいふ。

「**心劣りせらるる本性**」　案外つまらぬといふ感を起すやうな性質。即ち、一見立派なやうでも、本性がつまらぬので、よゝ見ると心に見劣りがするやうなのをいふ。

本性、氣質・本來の性質。茲では、惡い性質についていつたのであるから、地金と譯してよい。

「**見えむこそ**」　あらはれるのは。人に見せるのは。

「**口惜しかるべけれ**」　遺憾なことであらう。

「**しな・かたち**」　人品・容貌。

「……**こそ生れつきたらめ**」　生れつきでどうすることも出來ないであらうが、即ち茲で、一度休止して讀むところであつて、しかしながら、心はと續く。「しな・かたち・それは生れつきで如何とも致し方がなからうが、心はさうでなくて、」と對比して之を區別する意が**こそ**にあるのである。

「**賢きより賢きにも**」　賢き上にもなほ賢く。

「**などか……うつさばうつらざらむ**」　どうして、移さうと思へば移らないことがあらうか、きつと移るものである。

【かたち・心ざまよき人も、……本意なきわざなれ】　然らば容貌や氣だてばかりが、値打で、これ等が揃つてゐさへすればよいかといふに、またさうでない。容貌や氣だてが立派な人であつても、全く學才がないとなると、自分よりは人品も劣つてをり、顏も憎くらしさうな人の中に立交つても、それらにすらわけもな

く壓倒されるのは殘念な次第である。であるから、人は學問の修養といふことが非常に大切である。（第三節）

「**心ざま**」　心だて・氣だて。前の本性・心などと同じものをさすのである。

「**才なくなりぬれば**」　下の「けおさるる」に係る。「學才が無くなつて了ふと」の意味ではなく、「全く學才がない段になると・全く才能がないとすれば」位の意。

才は、才能。卽ち、學問・諸藝に關する才をいつたのである。

「**品下り**」　人品が劣る。

「**顏にくさげなる人にも立ちまじりて**」　にくげな容貌の人の中にまじつても、

立ちまじる　仲間入をする。

「**かけず**」　わけもなく。たやすく。

「**けおさる**」　壓倒される。**け**は、發語で意味はない。

二　家居

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど興あるものなれ。（第一節）よき人のどやかに住みなしたるところは、さし入りたる月の色も、一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしく、きららかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覺えてやすらかなるこそ心にくしと見ゆれ。（第二節）多くのたくみの心を盡して磨きたて、唐のやまとの、珍しくえならぬ調度ども竝べ置き、前栽の草木まで心のままならずつくりなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るよりも思はるる。（第三節）

〔**つきづきし**〕〔**假の宿り**〕〔**のどやかに**〕〔**しみじみと**〕〔**今めかし**〕〔**心あるさま**〕〔**簀子**〕〔**透垣**〕〔**うちある**〕〔**調度**〕〔**心にくし**〕〔**たくみ**〕〔**前栽**〕〔**さびし**〕〔**さてもやはながらへ住むべき**〕

○高等學校
○海軍經理學校
○東京女子高等師範學校
○金澤醫科大學豫科

要旨　教養のあらはれ、人格の表現としての住宅觀である。三節から成つてゐて、第一節は、住家は假の宿ではあるが、理想的におもしろく出來てゐるのがよい、第二節は、物のわかつた上品な人の住宅は、家だけでなく、庭の草木も、家の調度も、人工を加へないで上品で自然である、第三節は、俗人の住居は、家はきらびやかにみがきたて珍奇の道具をおき、庭の草木も人工を加へて不愉快なさまがあると述べてゐる。

釋義

【家居のつきづきしく……興あるものなれ】　住居といふものは人が短い一生の閒假に住む所であるから、どうでもよいとは思ひながらも、それがおもしろく調和して、かくありたいと思ふやうに（自分の理想に叶つたやうに）よく出來てゐることは、やはり興味のあるものである。（第一節）

「**家居**」　すまひ。

「**つきづきし**」　似つかはしい・ふさはしい、の意であるが、玆は、家の建方や庭の造り樣などがよく調和してゐることをいふ。身分相應といふ意ではない。「つきづきしき（ことこそ）あらまほしき（ことこそ）」と續く。

「**あらまほし**」　人のさうありたいと望み願ふ意で、現想的である。我が意に叶つてゐる・缺點のない、意。

「**假の宿り**」　かりそめのすみか。只ちよつと、この世に生きてゐる閒に住むだけの所、の意。人生は、はかなく短いものと見ていつたのである。古註に「兼好法師の眞實よりおのづから出でたる詞なるべし。」とある。味ふべきである。

「**興**」　おもしろみ。

【よき人のどやかに住みなしたるところは、……心にくしと見ゆれ】　それならば、どんな住宅がよいかといふに、物のわかつた上品な人が、心靜かにのんびりと住んでゐる所は、そこへ差入る月の光も、一層身にしみ入るやうにおもしろく見えるものである。さういふ人の家は、當世風の、きら〳〵と華美にみがきたてた所はないが、庭の樹木も時代がついて、わざとらしく手入などせず自然のまゝになつてゐる庭の草も却つて趣のあるやうに見え、又緣側や透垣（透閒のあるやうに作つた垣）の造り工合

も面白く、そこらに一寸おいてある道具類も、古雅な所があつていやみがなく落着いてしつくりしてゐる所のあるのは、奥床しく見えるものである。（第三節）

「よき人」　身分があり物のわかつた人。物の情趣を解してゐる上品な人。又、教養のある人。即ち、茲は「かたくなる人」の反對で、單に、身分のよい人とか、善人の意ではない。

「のどやかに」　物靜かにゆつたりとしたこと。落着いてのんきに。こせ〳〵したり、せか〳〵したりして暮してゐる反對である。

「月の色」　月の光。

「一際」　一層。一段。

「しみじみと」　心に深くしみて感ずる。

「今めかし」　當世風。現代式に。

「きらら か」　きら〳〵と美しくかゞやく樣。華美。

「木立」　木が群り立つてゐること。庭前の植込みである。

「ものふり」　時代がついて奥ゆかしく見えるをいふ。

「もの」　は、輕く添へた語で、別に意味はない。

「わざとならぬ庭の草」　特に庭造りなどして手を入れず、自然のまゝの庭の草。

「心あるさまに」　心あるさまに見え、の意。

「心あるさま」　は、趣あるさま・風情あるさま。

「簀子」　緣側のこと。簀は、竹又は葦萱であらく編んだ席をいひ、簀子は、之で作つた緣をいふ。又之から延いて、細い板を横に竝べ、雨露のたまらぬやうに板と板との間を少しづつあかせて作つた緣側をもいふ。

「透垣」　「すいがい」とよむ。「すきがき」の音便。竹を竝べて透間のあるやうに目を荒らく作つた垣根。すいがきともいふ。

「たよりをかしく」　作り工合も面白く。たよりは、工合・配置。茲は、簀子・透垣などの布置がところを得てゐる意。

「うちある」　何氣なく一寸置いてある。ちよつとそこいらに置いてある。ありふれた。

「調度」　手まはりの道具。

「昔曇えて」　古雅でそれを見ると昔の事が思ひ出される意。

「やすらか」　いやみがなく、よく落着いてしつくりした所のあるをいふ。

「心にくし」　奥床しい。したはしい。

【多くのたくみの心を盡して……うち見るよりも思はるる】之に反して、俗人の住居は大勢の大工どもが、一所懸命になつて立派に作り立て、家の中には、支那や日本の、珍しく何ともいへぬ立派な色々の道具を竝べて置いてあり、又、植込みの草や木までも、種々の手を加へて不自然に作つてあるのは、見ても不愉快で、いやなものである。私はかやうな家をちよつと見てさへ、すぐと「こんなに立派に家を作つても、その主人はいつまでも生き長らへて住むことが出來ようか、否、すぐにこの家をすてて死んで行かねばならぬ時が來る。且又一朝火事にあへば、またゝく間に燒けてしまふこともあるだらう。」と思はれてならぬ。（第三節）

「たくみ」　大工。

「心を盡して」　一所懸命に。

「みがきたて」　綺麗に造りたて。

「唐ややまとの」　支那のや日本のや、といふやうな意で、兩方を竝べあげたのである。そして此のの は、共に調度にかゝる。

「えならぬ」　何ともいへぬ。非常に立派な。

「前栽」　「せんざい」　とよむ。庭前。茲は、植込み。草木の植込んだ庭。

「心のままならず」　「木の心の儘ならず、の意で、自然のままでないこと。即ち、不自然に枝を曲げたり、葉をすかしたりなどした樣をいふ。

「見る目もくるしく」　見てさへ一種の苦痛を感ずる。見るのもいやなものである。

「わびし」　いやである。不愉快である。

「さてもやは」　さては、さうしてかうして、の意。かうしていつまで住めようやと、下の「住むべき」につゞけて見る。やは は、反語。

「時の閒の煙」　火事にあつてやけてしまふ事をいふ。時の閒は、ちよつとの閒。即ち、忽ちに燒けてしまふ事もあらう、の意。

「うち見る」　ちよつと見る。一寸そんな家を見てもすぐと。

三　山里の庵

神無月のころ、栗栖野といふところを過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる筧の雫ならでは、つゆ音なふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。「かくてもあられけるよ。」と、あはれに見るほどに、彼方の庭に、大いなる柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、「この木な

からましかば」と覺えしか。

〔神無月〕〔筧〕〔つゆ〕〔閼伽棚〕〔さすがに〕〔かくてもあられけるよ〕〔あはれに見るほどに〕〔たわわに〕〔ことさむ〕〔こそ…覺えしか〕

○仙臺高等工業學校
○長崎高等商業學校
○海軍機關學校

要旨 最初、閑靜な住居のさまに感じ入つたが、庭の柑子の木に、果實を盜まれぬ用意のしてあつたのを見て、今までの興もさめはてたといふ事が述べてある。感心した事と、興ざめた事とを對照して說き、後者に重きを置いてをることを見落してはならぬ。

釋義

【神無月のころ、……さすがに住む人のあればなるべし】十月頃、栗栖野といふ所を通つて、或山里に尋ね入つたことがあつたが、その往來から、脇へ、一筋の苔の生えた長い細道を踏み開いてその奥に、見ても淋しさうに人の住まつてゐる草の庵があつた。如何にも森閑としてゐて、落ち積つた木の葉に埋められてゐる懸桶から落ちる水の雫の音の外には、聲を立てて訪ねて來るものは全くない。然し佛に手向ける水を供へる棚に、菊や紅葉などを折散してあるのは、こんなに淋しくあつても、それでも、住む人があるからであらう。

「**栗栖野**」 山城國宇治郡、醍醐邊にある。

「**遙かなる苔の細道ふみわけて**」 苔の生えてゐる長い道を踏みひらいてその奥に、の意。「ふみわけて」の主語は、この庭の主であつて、下の「住みなしたる」へ傳はる文脈である。(作者兼好が、踏み分けて行つたのではない。)

「**庵**」 隱者などの住む家。

「**筧**」 懸けわたしてある樋。

「**つゆ**」 少しも、の意。必ず下に、打消の語がある。

「**音なふ**」 聲をかける意。

「**閼伽棚**」 佛に水を供へる器をのせる棚。閼伽は、梵語。佛前又は墓前に供へる淨水。轉じて淨水を盛る器。

「**折りちらしたる**」 折散らしてあるのは。

「**さすがに**」 それでも。さうはいふものしかし。こんなに淋しくあつてもしかし。又、住む人のありさうにも見えない庭ながらしかし、の意にもとれる。

【「かくてもあられけるよ。」と、……と、覺えしか】「このやうな淋しい所にでも、かうしてよくまあ住んでゐられるものだなあ。」と深く感心して、眺めてゐると、向うの庭に、大きな柑子の木の枝もしなふ程澤山に實がなつてゐるのが、盜人を防ぐ爲に、其の周圍を嚴重に圍つてあつたのが、如何にも殺風景で、その爲に折角の今までの興味もいくらか醒めて、「いつそ此の木が無かつたらよからうに。」と思つた。

「**あられけるよ**」 あればあられけるよ、の意。**ける**は、鼓は、過去ではなく、感嘆である。住めば住まれんだなあ位の意。

「**あはれに見る程に**」 深く感心して見てゐる内に。

「**柑子**」 橘の類。鼓は、蜜柑のことであらう。

「**枝もたわわになりたるが**」 枝がたわむ(しなふ)ほどに實が澤山になつてゐるのが。**なり**は、「實がなる」の意ではなくて「たわわになる」とつゞけて解する方がよい。**なるが**と、連體形で下に來る名詞を略して行くのは、中古文の特徵である。

「**圍ひたりしこそ**」 圍つてあつたのは。

「**ことさめて**」 興味(面白味)が醒めて。今まで風雅な住居のさまに感心してゐたのが、盜人の用心がしてあつたので、その主人の心のさもしさに呆れて、興味が冷却した、の意。

「**この木なからましかば**」 この木がなかつたなら、よかつたらうに。

「**覺えしか**」 此のしかは、上の「圍ひたりしこそ」のこその結詞。過去の助動詞「き」の已然形。

四 心の友

おなじ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆたがはざらむとむかひ居たらむは、ひとりある心ちやせむ。(第一節) たがひにいはむ程の事をば、げにと聞くかひあるものから、いささかたがふ所もあらむ人こそ、我は、さやは思ふ。」など爭ひにくみ、「さるからさぞ」。ともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつ方も、我とひとしからざらむ人は、大方のよしなしごといはむ程こそ

あらめ、まめやかの心の友には、はるかにへだたるところのありぬべきぞわびしきや。（第二節）

〔しめやかに〕〔うらなし〕〔聞くかひあるものから〕〔我はさやは思ふ〕〔さるからさぞ〕〔かこつ方〕〔よしなしごと〕〔まめやかの心の友〕〔わびし〕

○専門學校入學資格試驗
○青山學院
○北海道帝國大學豫科

要旨　同心の友の得難きは、歎ずべきであるといふことを述べたもので、二節からなる。第一節では、自分と同じ心の人と語る事は、如何にも嬉しからうが、さやうな人はあるまいから、たゞ迎合的に話をきいてゐることは、誠につまらないと說き、第二節では、異論をいふ程の友は徒然を慰めるけれども、それも世間話位のもので、結局同心の友には及ばないと說いてゐる。

釋義

【おなじ心ならむ人と、……ひとりある心ちやせむ】　自分と、氣が合ふ人としんみりと物語をして、世の中の趣味のある面白い事も、又、ちよつとしたつまらない事も、互に腹藏なく話しあつて、慰める事が出來たなら、愉快であらうが、とてもさういふ友達は得られまいから、つとめて相手の意を迎へて、少しでも其の人の心に違ふまいと思つて、向ひあつて、考へ考へ話して居たならば、對話の興味はなくなつてしまつて、まるでひとりぼつちで居るやうな心持がするであらう。（第一節）

「おなじ心ならむ人」　お互によく氣のあつた仲のよい友。
「しめやかに」　しんみりと。
「をかしき事」　趣味のある面白い事。
「世のはかなき事」　とりとめのない世間の事。一寸したつまらない事。くだらない世間ばなし。
「うらなく」　少しも心につゝむことなく。**うら**は、心のこと。
「つゆたがはざらむと」　少しもさからはないやうにと思つて。
「むかひ居たらむ」　相手になつてゐるをいふ。
「ひとりある心ちやせむ」　友と一緒に居りながら、心の中は寂しいから、一人でゐるやうな氣がするだらう。

【たがひにいはむ程の事をば、……わびしきや】　お互に一方の言はうとする事は、成程と聞くだけの價値はあるけれども、實は全然意見が同一といふのではなく多少違つた所もあるといふやうな人は、「君はさういふが、自分はさうは思はない。」などと言ひ爭つたり、「かういふわけだからかうであつて、君の說とは違ふ。」などと語りあつたならばいかにも面白く、退屈もまぎれるだらうと思ふが、併し實際のところは、たゞ一寸愚痴をこぼす位の事でも、自分と全然同一でない人は、やはり眞の友とはいへず、それ等の人は、ただ世間普通のつまらぬ雜談などをしてゐる間はよいが、一歩進んで、胸襟を開いて眞實を語り合ふ心の友としては遙かに劣つてゐる所があるに違ひない、それが如何にもつまらなく思はれることであるよ。（第二節）

「げにと聞くかひあるものから」　なるほどと聞くだけの價値はあるものの。
「げに」　尤も・なるほど。**もの**から　ものながら・ものの。
「いささかたがふ所もあらむ人こそ」　大體の意見はあふが、その中いくらか違つた所がある人が。
このこそは、「つれづれ慰まめ」に係つてゐる。
「我はさやは思ふ」　自分はさうは思はない。**やは**は、反語。
「爭ひにくみ」　**にくむ**は、極めて輕く、只言ひ爭ふをいふ。
「さるからさぞ」　**さるから**は、然る故に。**さぞ**は、然るぞ。何か話の時、或理由をあげて說明する語。さうだからさうだ・かういふ理由からかうなるのだ、などの意。
「げには」　少しは慰めになるとはいふものの、實の所は。
「少しかこつ方も」　**かこつ**は、歎きいふ・愚痴をこぼす。ちよつと愚痴をこぼすといふ位の方面の事、卽ち、極めてちよつとした事でも自分の意見と違つた人も、の意。
かこつを、不足に思ふこと、の意に取つて、少しでも自分と意見の違ふ不足に思ふ人も、と解する說もある。
「我とひとしからざらむ人」　自分と同じでない人。
「大方のよしなしごと」　世間普通のつまらぬ雜談。
「いはむ程こそあらめ」　話してゐる間はよいが。
程こそあらめ　「程こそよくあらめ」の略。
「まめやかの心の友」　忠實な心の友。**まめやか**は、まじめな。
心の友　心の底からよく知りあつた友。
「わびしきや」　**わびし**は、面白くない意であるが、玆では、つまらない・困つたことである・不滿足に思ふ、などの意に見てよい。
や　感嘆の助詞。　上に「ぞ」があるから、「き」と承けて、之に「や」が附いたのである。

五　常ならぬ世

飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば、時移り事去

り樂しび悲しびゆきかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬのらとなり、變らぬ住家は人改まりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか昔を語らむ。まして見ぬいにしへのやむごとなかりけむ跡のみぞ、いとはかなき。

〔飛鳥川云云〕〔時移り事去る〕〔のら〕〔桃李ものいはねば云云〕〔やむごとなかりけむ跡〕〔はかなし〕

○海軍機關學校

要旨　この世はまことにはかなくて、無常迅速であることを述べてゐる。そしてはじめに、過去と今との變遷をいひ、「まして」以下は、昔の貴人の遺跡についての感想を述べてゐる。

釋義

【飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、……人改まりぬ】　此の世の中は、古歌にもいつてある通り、飛鳥川の淵（深い所）と瀬（淺い所）とがいつも變るやうに、轉變のはげしいものであるから、時代が變り、事件が過ぎ去り、樂しい事や悲しい事がかはるがはるに現はれて來て、轉變極りなく、その昔榮華であつた所も、今は人の住まない野原となり、また昔からたま〳〵變らずに殘つてゐる家屋はあつても、そこに住む人は昔とは變つてしまつてゐる。

「**飛鳥川**」　大和國高市郡にある川。此の川は河床が常に變動して淵・瀬がよく變るといふので、昔から、世の轉變無常の甚だしい譬によくひかれる。古今集、雜下に「世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬になる。」とある。

「**世にし**」　**し**は、强助詞。

「**事去り**」　世の中の事の變轉するをいふ。古今學序に「たとひ時移り事去り樂しび悲しび行きかふとも」。とある。又長恨歌傳に「時移事去、樂盡悲來、云々。」とある。

「**樂しび悲しび**」　**び**は、みに通ずる。

「**ゆきかふ**」　行き違ふこと。樂しみと悲しみとが、互にかはるがはる來ること。

「**はなやかなりしあたり**」　立派であつたところ。

「**のら**」　野といふに同じ。野原。

「**變らぬ住家**」　昔の通りに變らずに殘つてゐる住家。

「**人改まりぬ**」　住む人は昔と變つてしまつてゐる。

【桃李ものいはねば、……やむごとなかりけむ跡のみぞ、いとはかなき】　桃や李は、今も昔のまゝに咲いてゐるが、これ等が物をいふものなら、共にあつた昔のことを語らうものを、花に口なしで何もいはぬから、それも出來ない。それでは誰と共に昔を語らうか、語りあふべき者は誰もない。普通の人の家ですらあはれであるのに、まして、自分の見もしない昔の貴い人の住まれた所と思はれる跡の、荒れ果ててゐるのを見ると、特に頼みがひない心地がする。

「**桃李ものいはねば**」　非情な桃や李は口をきかぬから。**桃李**は、舊跡に殘つてゐるもの。和漢朗詠集、菅原文時の詩に「桃李不レ言春幾暮。煙霞無レ跡昔誰栖。」とある。又後拾遺集に「ふるさとの花の物言ふ世なりせば、いかに昔のことを問はまし。」とある。

「**誰と共にか昔を語らむ**」　誰ともその土地の昔の有樣を話しあふことは出來ぬ。

「**まして**」　加藤磐齋の説によると、「つねの人の家さへあるにましてやんごとなきはあはれなり。」と、いつて、直下の「見ぬ」へは係けてゐない。此の説を取つて「やむごとなかりけむ跡」の句に係ける。

普通は、「見ぬ」に係けて、「自分の知つてゐる時代の事でも、その樣に變遷してゐるのであるから、まして自分の見たことのない古代の……」と説いてゐるが、如何か。

「**やむごとなかりけむ跡のみぞ**」　尊くあつたらうと思はれる遺跡。

「**のみ**」　意味をつよめる助詞。

「**はかなき**」　定めない・とりとめのない。

六　過ぎにし方

靜かに思へば、よろづに過ぎにし方の戀しさのみぞせむ方なき。人靜まりて後、長き夜のすさびに何となき具足とりしたため、殘し置かじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、ただそのをりの心地すれ。このごろある人の文だに久しくなりて、いかなるをりいつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて變らず久しき、いとかなし。

〔すさび〕〔何となき具足〕〔とりしたたむ〕〔やりすつ〕〔このごろある人〕〔だに〕〔心もなく〕

○秋田鑛山專門學校
○駒澤大學豫科

要旨　秋の夜の追憶で、故人の手跡・現存の人の手紙・己の手道具などに纏はる情趣の忘れがたいことを述べてゐる。

釋義

【靜かに思へば、……ただそのをりの心地こそすれ】　落ちついて考へて見ると、何事に限らず、過去の事の戀しく思はれることばかりは、何とも仕樣のないものである。夜更けて人の寢靜まつた後で秋の夜の手慰みに（秋の夜長の退屈を慰める爲に）是といふきまりもなく手當り次第にいろ〳〵の道具類を取り片附け、後々まで殘して置くまいと思ふ不用の書類などを破つて棄てる中から、今はもう死んでしまつた人の書き散らした文字や繪などを見出すと、丁度その人が在世中それ等を書いた當時のやうな氣持がするものである。

「せむ方なし」「爲ん方なし」で、爲すべき方法がない・仕樣がない・止めようにも止められない、の意。

「人靜まりて後」　下に「夜」とあるから、玆は、夜が更けて人が皆寢靜まつた後をいふ。

「長き夜」　夏の短夜に對して、秋の長夜をいふ。

「すさび」　手慰み。何となくそんなことがして見たいと思ふことで、退屈を慰めようと、の意に。

「何となき」　どれときまつたことのないをいふ。どれといふこともなく、いろ〳〵の。

「具足」　道具。猶、甲冑といふ意もあるが、玆はさうではない。

「とりしたため」　とりかたづけ。

「殘し置かじと思ふ」　後々まで、殘して置くまいと思ふ。つまらないといふわけから棄てるのもあらうし、人に見られてはならないからといふので棄てるのもあらう。

「反古」　何かかいてある不用の紙。反古紙。

「やりすつる」　破り棄てる。

「亡き人」　故人。この世にをらぬ人。

「手習ひ繪かきすさび」　「手習ひすさび、繪かきすさびたる（反古を）」とあるべきところである。

「手習ひ」　歌文などのかき散らしをいふ。「手」は、字を書くこと。普通「手習ひ」と名詞にいへば、字を書く事を習ふ事であるが、玆の「ならひ」は、動詞で、名詞になつてゐるのではない。即ち、字を書くことで、必ずしも字を練習するといふことではない。たゞ、むだ書きをするをいふ。

繪かきすさび　このすさびも、前の「すさび」と同じで、何といふことはなく、筆にまかせて繪をかくをいふ。

「ただ」　恰も。丁度。

「その折の」　彼の亡き人の在世中の、その字や繪をかいた當時。

【このごろある人の文だに……いとかなし】　現に今生きてゐる人の手紙を見附け出した場合でも、その手紙を貰つた時からもう久しい時が經過して、それは如何なる折に來たのであらう、何年頃受取つたのであらうなどと考へて見る事は、誠に感の深いものである。その他、自分が多年持ち馴れた道具なども、自分は昔とは變りはてた身となつてゐるのに、全く無心で、何時までも變らずに昔のまゝに殘つてゐるが、それを見ると、しみ〴〵と感ずるものである。

「このごろある人」　亡き人に對して現存の人。今現在生きてゐる人。

「文」　手紙。

「だに」　でさへも。でも。

「久しくなりて、いかなるをりいつの年なりけむ」　「その手紙を受取つてからもう久しい時日を經過して、この手紙を貰つたのはどういふ折であつたか、又何年頃のことであつたらう」の意。一說としては、「この人が書いてから久しくなつて後に、これは何時の年のどんな折に書いたのだらう。」の意に取る。

「あはれなるぞかし」　感の深いことである。しみじみと感ずるものである。

「手馴れし」　自分が久しく持ち馴れた。自分が、昔からいつも使つてゐた。（玆は、「亡き人の手馴れた道具」といふ意ではない。）

「心もなくて變らず久しき」（具足に對して、自分の變轉して來た後が、ふりかへられる心持をふくむ。）

「心もなくて」　無心に。無生物（非情のもの）であるから、持主の心をも知らずがほに、の意。

「かなし」　前の「あはれなり」と同じ位の意で、玆は、悲哀の意ではない。即ち、しみじみと感じさせる、といふほどの意に取りたい。

七　なき人

雪の面白う降りたりし朝、人のがりいふべき事あ

りて文を遣るとて雪の事何ともいはざりし返事に『この雪いかが見る』と、一筆のたまはせぬほどのひがひがしからむ人の仰せらるること、聞きいるべきかは。かへすがへす口惜しき御心なり」。と、言ひたりしこそをかしかりしか　今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

〔人のがり〕〔ひがひがしからむ人〕〔聞きいるべきかは〕〔言ひたりしこそをかしかりしか〕〔かばかりの事〕

○桐生高等工業學校
○福島高等商業學校
○宇都宮高等工業學校

要旨　ふとした事から、故人の忘れ難いといふ心持を述べてゐる。

釋義

【雪の面白う降りたりし朝、……かばかりの事も忘れがたし】　雪が面白く降つた朝のこと、或人の許へ、いつてやらねばならぬ用事があつて、手紙をやるのに、今朝の雪のことに就ては何ともいつてやらなかつたところが、その手紙に對する先方からの返事に、「お手紙の中に、『今朝の雪景色を見てどう思はれるか、誠に嬉しいではないか。』とたつた一言もおつしやらないほどの無風流な人の申し越れた御用などは、どうして承知されますものですか。(聞き入れますまい。)どう考へても情ないお心です。」と、言つてよこしたのは、まことに面白いと思つた。殊にこの手紙をくれた人は、今は此の世にをらぬ人であるので、これしきの些細な事でも、忘れられないで、追憶の情に堪へない。

「人のがり」　人の許に。
「いふべき事」　いつてやらねばならぬ用事。
「文」　手紙。
「遣るとて」　とて、は、として・といひて、などの意。「遣らうとしてつい」などの心持をふくむ。
「何ともいはざりし返事に」　何ともいはなかつたところが、その返事に、の意。
「この雪いかが見る」　『あなたは、この今朝の雪を何と見なさるか、景色がよいので、如何にも嬉しいではありませんか』の意。
「ひがひがしからむ人」　ひがひがしは、「僻々し」とかく。もと、心がねぢけてゐる意であるが、茲は、物の情趣を解しない・風流を解しない・心の素純でない、の意にとる。

「聞きいるべきかは」　聞き入れじ、の意。承知は出來ない。
「かは」　反語。
「かへすがへす」　どう考へても。まことに〳〵。
「口惜しき」　殘念な。情ない。
「をかしかりしか」　面白くあつた。しかは、「き(過去の助動詞)」の已然形。上のこそ〻の結詞。
「なき人」　故人。この世にをらぬ人。
「かばかりの事」　これぱかりのこと。これしきのこと。こんなつまらぬこと。

文脈

「『この雪いかが見る。』と、一筆のたまはせぬほどの……かへすがへすも口惜しき御心なり。」と、言ひたりしこそをかしかりしか。(「『　』」と、返事の文中に、他の詞のふくまれてゐることを見逃がさぬやうに說かれたい。)

八　よき人

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、われに心おき、引きつくろへるさまに見ゆるこそ、「今更かくやは。」などいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしくよき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

〔なれたる人〕〔ともある時〕〔心おく〕〔引きつくろふ〕〔今更かくやは〕〔げにげにし〕〔うとき人〕

○福島高等商業學校
○北海道帝國大學農科大學
○海軍經理學校
○專門學校入學資格試驗
○成蹊高等學校

要旨　交友の道は、親しい仲にも禮儀のあることをよしとし、疏い仲にも時として打解けた所のあるのをよいとするといふことを說いてゐる。

【朝夕へだてなくなれたる人の、……またよしと思ひつきぬべし】　平生何のわけへだてもなく睦しくしてゐる人が、何かの場合に、自分に遠慮をして、改まつた態度を取るやうに見えるのは、「今更何もさう他人がましく改まつた態度を取るにも及ぶまくやは。」などいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしくよき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

い。」などといふ人もあるだらうけれども、如何に慣れ親しんで來た人であつても、改まるべき時にはあらたまるのがよいので、やはりかういふやうな人は、眞面目らしい著實なよい人だなあと思はれる。又日頃さう親しくない人が、たま〳〵心安さうな事などをいふのも、前と同じやうにその人をよい人だと感ずるやうになるものである。

「**朝夕**」 玆は、朝と夕とに限つたわけではなく、平生・日頃・日常、の意である。

「**へだてなくなれたる人**」 極めて親密な間柄の人。

へだてなく は、わけへだてなく・隔意なく・心おきなく、の意。

「**ともある時**」 何か事のある時・何かの場合に・どうかいふ場合に・ひよつとした時、などと解する。「友ある時」と誤らないやうに注意せられたい。

「**心おき**」 隔ての心を置く・隔てがましくする・遠慮するの、意。

「**ひきつくろふ**」 改まつて禮容をつくる意。衣紋をひきつくろふ・威儀を正す・四角ばつた樣子・改まつた態度を取る、などの意にとる。

「**今更かくやは**」 「今更かくやはあるべき」で、反語。「今になつて、そのやうに他人がましく改まつた風をする必要があらうか、あるまい」の意。

「**ありぬべけれど**」 きつとあるかも知れないが、の意。

此の **ぬ** は、時には關係なく、動作の確實に成立した意をあらはす。

「**なほ**」 やはり。非難する人はあらうが、それでもやはり。

「**げにげにしく**」 尤もらしい・眞實らしい。「さういふ風に、時あつて、ふと妙に改まつても、やはり眞面目らしい著實な善い人だと思ふ」の意。

「**うとき人**」 親密でない人。

「**うちとけたること**」 遠慮のないこと・心安さうなこと。

「**思ひつきぬべし**」 **思ひつく** は、心にさう思ふことで、感ずる・氣づく・思ひあたる、の意。

ぬべし の **ぬ** は、「ありぬべし」の **ぬ** と同じである。「きつと親しみを感ずるやうにならう」の意。

九 大事を思ひ立たむ人

大事を思ひ立たむ人は、さりがたく心にかからむことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。「しばし此のこと果てて、同じくは彼のこと沙汰しおきて、しかじかのこと、人のあざけりぬあらむ、行くすゑ難なくしたためまうけて、年頃もあればこそあれ、其のこと待たむほどあらじ、物さわがしからぬやうに。」など思はむには、えさらぬ事のみいとどかさなりて、事のつくるかぎりもなく、おもひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

〔**大事**〕〔**本意**〕〔**さながら**〕〔**沙汰す**〕〔**年頃もあればこそあれ**〕〔**其のこと待たむほどあらじ**〕〔**物さわがし**〕〔**えさらぬ事**〕〔**おほやう**〕〔**心あるきは**〕〔**このあらまし**〕〔**一期**〕

○北海道帝國大學農科大學

要旨 佛道修行の大事を思ひ立つた人は、萬事を放擲して即時實行しなさい。さもないといろいろの障が出て來て、遂に實行に至らないで死んでしまふやうなことにもなるものであるといふことを說いてゐる。猶本段は、相當にこみいつた難解な文である。よく生徒が咀嚼し得るやうに懇切に說かれたい。

釋義

【大事を思ひ立たむ人は、……さながら捨つべきなり】

佛道修行の大事をなさうと思ひ立つた人は、うちすてがたく、氣にかゝる事があつても、本望通りに、それ等の事を仕遂げないでそのまゝに放棄してしまつて、即時、大目的である佛道修行に取りかゝるべきである。（以上は、六段の冒頭）

「**大事**」 人間一生の大事、即ち、佛教信仰の道に入つて之を修行することをいふ。佛道の修行。

「**思ひ立たむ人**」 直譯すると、思ひ立つであらう人であるが、單に、思ひ立つ人、といふ方が、日本語として適切である。

「**さりがたく**」 **さり** は、避で、避け難いこと。うちすてておけない・せずにおくことが出來ない、の意。

「**本意を遂げずして**」 本望を仕遂げないで。目的を達しないで。

「**さながら**」 そのまゝ。そつくり。すつかり。

「**捨つべきなり**」 放棄せねばならぬ。

【しばし此のこと果てて、……おもひ立つ日もあるべからず】 それであるのに、まだ世事に心を引かれて、「一寸まあ佛道修行に入ることを猶豫して、この用事を濟ませておいてからにしよう。」とか、「同じことなら佛道修業の事は、あの事を片附けておい

てからにしよう。」とか、或は「何々のは、やつて置かないと、人からかれこれいはれて嘲をうけることもあらうから、將來困らないやうに、きちんとよく始末した上で修行に入らう。」とか、「多年かうして差支なくやつて來たのだから、今更急ぐ心要もない、その用事をしてしまふにはいくらも時日はかゝらないであらう、だから餘り急いで騷ぎたてずにゆつくりと處置してからの事にしよう」とかなどと思つてゐると、それこそ已むを得ない用事が澤山に出て來て重なり、どうしても俗事の絶える時がなく、到底佛道修行を思ひ立つてその大目的を達する時期は來まい。

「しばし此の事果てて」 佛道修行の事は、暫時猶豫して、此の用が終つてからにしよう。

「同じくは」 同じことなら、いつその事。

「彼のこと沙汰しおきて」 佛道修行の事は、あの事を處置（始末）しておいてからにしよう。

「しかじかのこと、人のあざけりやあらむ」 これ〳〵（かやう〳〵）の事は、うつちやつて置いては、人から嘲られることがあるかも知れない。

「行くすゑ難なくしたためまうけて」 佛道修行の事は、將來困らないやうに、きちんとよく始末しておいてからにしよう。

難なく云云 は「何事も非難すべき點が殘らないやうに處置して云々」の意にも取れる。

したたむ は、調へること。

「年頃もあればこそあれ」 これまで永年の間、かうして差支へなくやつて來たのであるから、今更急ぐ必要はない。

「其のこと待たむほどあらじ」 その事（自分の企てた用事）をしてしまふまで待つのは、さう手間もかゝるまい。（いくらも時日はない。）

「物さわがしからぬやうに」 あまり急ぎあわてて騷がしくないやうに（落ちついて）處置をつけてからにしよう。

「思はむには」 思つてゐる時には。

「えさらぬ」 已むを得ない用事。避け難いこと。

「いとどかさなりて」 いよ〳〵多くなつて。

「事のつくるかぎりもなく」 用事のなくなるはてしもなく。

「おもひ立つ」 佛道修行を思ひたつ。

【おほやう人を見るに、……一期は過ぐめる】 大體世の中の人を見るに、下賤の者はいふまでもなく、少し物のわかつた連中は何れも皆、この豫定を立てただけで實行に及ばないで、一生涯を送つてしまふやうである。

「おほやう」 大體。おしなべて。

「心あるきは」 物の道理がわかつてゐる程度の人。

きは は、ぶんざい。

「あらまし」 豫期・豫定。佛道修行についての豫定。

「一期」 一生・一生涯。

一〇　物知り顔

何事も入りたたぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知り顔にやはいふ。かたゐなかよりさし出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世にはづかしき方もあれど、自らもいみじと思へるけしきかたくななり。よくわきまへたる道には必ず口重く、問はぬかぎりは言はぬこそいみじけれ。

〔入りたたぬさま〕〔さのみ知り顔にやはいふ〕〔さしいらへ〕〔世にはづかしき方〕〔いみじ〕〔けしき〕〔かたくな〕

○金澤醫學專門學校
○仙臺醫學專門學校
○東京高等蠶絲學校
○秋田鑛山專門學校
○小樽高等商業學校
○長崎高等商業學校
○東京高等師範學校
○京都高等蠶絲學校
○東京商科大學專門部
○京城法學專門學校

要旨　知つた振や、自慢顔をせぬがよいと戒めた文である。

釋義

【何事も入りたたぬさましたるよき】 人は、何事に限らずあまり知つてゐないやうな樣子をしたがよい。（以上、冒頭）

「入りたたぬ樣」 深く立ち入らぬ樣子。知つたかぶりをしないこと。即ち、諸藝・諸道にあまり精通してゐない樣子をいふ。

【よき人は……自らもいみじと思ふけしきかたくなり】 上品で物のわかつた人は、自分がそれをよく知つてゐたからとてそんなに知つたやうには言はないものである。邊鄙な田舍から出て來た人が却つて、すべての道に精通してゐるやうな挨拶をするものである。であるから、まことに都人ですら恥づかしく思ふほ

どに、その人にすぐれてゐる點もあるけれども、自分自身も得意になつて、自分はえらいものだと思つてゐる樣子が、如何にも下品である。（以上、上品五人と、下品五田舍漢とを對比論評してゐる）

「よき人」　上品で物のわかつた人。情趣を解した立派な人。

「さのみ」　そんなに。

「知り顏にやはいふ」　知つた振をして話さない。知つたやうな風はしない。　やはいふ　は、反語。

「かたゐなか」　邊鄙な田舍。かたは、中央から離れて片寄つた意。

「さし出でたる」　出て來た。

「よろづの道」　諸藝諸道。

「心得たるよし」　よく知つてゐるやうな・わかつたやうな・精通してゐるやうな・知つた風な。

「きしいらへ」　返答・應答・挨拶。

「世にはづかしき方」　世には、まことに・大層・殊の外、の意。一說に、「世に面白き」の世にと同じて、たゞ强めるだけの語ともいふ。はづかしは、玆では、此方が其の人に對して恥づかしく感ずる意。方は、すぐれてゐる點・精通してゐる點。

「自らもいみじ、と思へるけしき」　田舍者自身も得意になつて、自分はえらいと思つてゐる樣子。

いみじ　は、何事に限らず、甚だしい意に用ひる語。玆は、勝ること・えらい。　けしき　は、「氣色」と書く。樣子。

「かたくな」　玆は、下品の意。見苦しい意にも取れる。

【よくわきまへたる道には……言はぬこそいみじけれ】　自分のよく精通してゐる道（事）に關しては、必ず輕々しくしやべらないやうにして、人が問はない以上は、自分から言ひ出さないのが、たいさうよいのである。（以上、結論）

「よくわきまへたる」　よく知りぬいた。十分に精通した。

「口重く」　容易に口を開かぬことで、輕々しくしやべりちらさないことをいふ。

「いみじけれ」　非常によい。

文脈

頭（大綱を揭ぐ）
腹（上品な人に就ての評）
腹（田舍者に就ての評）
尾（結論）

一　もろ矢（一）

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初の矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。

〔もろ矢〕〔初心の人〕〔得失なく〕〔懈怠の心〕

○東京女子高等師範學校
○長崎高等商業學校
○千葉醫科大學
○大阪女子專門學校
○立敎大學豫科

要旨　（一）（二）に、亙りて、懈怠心を戒めてゐる。而して、此の（一）は、弓の稽古の話によつて、人は、一所懸命にやつて居ると思ふその瞬間にすら、とかく懈怠の心があるものであるから、こゝに十分注意して、萬事、後の時刻をたのむやうなことをせず、その刻々を最後と思つて專念に勵むべきであると戒めてゐる。

釋義

【ある人、弓射ることを習ふに、……この一矢に定むべしと思へといふ】　或人が弓を射る事を稽古するのに、二本の矢を手に持つて的に向つた。その時弓の先生がいふことには、「習ひはじめの人は、二本の矢を持つてはならぬ。二本の矢を持つてゐると、最初の矢を射る時に、まだ後の矢が一本あるから此の矢はしくじつてもかまはぬと思つて、とかくあとの矢をたのみにして、最初の矢をおろそかにする心が起るものである。一矢を射る度毎に、此の矢を射損じても、あとの矢で取りかへせばよいなどといふやうな損得を考へることなく（掛引の考を起さず）、是非とも此の一本の矢で、結果を定めようと思つて射るがよい。」といふのであつた。（以上、弓術の師が初心の弟子に懈怠心あらぬやうに戒めてゐる）

「もろ矢」　諸矢と書く。一對の矢。矢は必ず、甲矢（端矢とも書く。始に射る方の矢）と乙矢（次に射る方の矢）と一對になつてゐる。

もろ　は、多くの意。

「たばさむ」　手に挾む意であるが、單に、手に持つと解すればよい。

「**初心の人**」習ひはじめの人。初學者。

「**後の方を頼みて**」乙矢をあてにして。

「**なほざり**」おろそかにする。疎略にあつかふ。

「**得失なく**」この矢が當らなかつたら（失）、次の矢で取返さう（得）といふやうな掛引の考を持たないで、の意。句解には「始めの矢にあつることをうしなふとも、後の矢にあて得んと思ひたのむなかれといふ心を得失なくとは言へり。」と註してある。

得は、あたること。**失**は、あたらぬこと、

「**この一矢に定むべし**」あたるもあたらぬも、たゞ此の一本できめるのだと思へ（射直しは出來ぬのであると思へ）、の意。

【**僅かに二つの矢、……このいましめ萬事にわたるべし**】勿論、たつた二本しかない矢のことであるし、その上先生の前で射るのであるから、たとひその一矢でも、おろそかにしようなどと、その當人はどうして思はうか、決して思ひはしないとはいふものの、いつの間にかやはり怠る心の起つてゐるのを、當人は氣づかずにゐるが（意識しないが）、先生の方では、それがよくわかつてゐる。それで上述のやうな訓戒をしたのである。此の訓戒はたゞ弓の稽古の上ばかりでなく、萬事の上にあてはめて必要である。（以上、弓術の師の言に託しての作者の訓言）

「**懈怠**」「ケダイ」と訓む。怠りなまけること。

「**みづから知らずといへども云々**」懈怠の心のあることは自分には氣がつかないが、師匠はすでにその事をよく知つてゐる。

一三　道を學する人（二）

道を學する人、ゆふべにはあしたあらむことを思ひ、あしたにはゆふべあらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。況や一刹那のうちにおいて、けだいの心あることを知らむや。何ぞただ今の一念において、ただちにすることの甚だかたき。

〔**道を學する人**〕〔**ねんごろに**〕〔**一刹那**〕〔**一念**〕

○陸軍士官學校
○東京女子高等師範學校
○旅順工科大學豫科
○富山高等學校

要旨　前文の續きである。とかく學問をする人の懈怠心があつて、時間を空費しがちであることを深く戒めてゐる。

釋義

【**道を學する人、……ただちにすることの甚だかたき**】學問をする人は、一般に、夕方には、あすの朝もあることであるからと思ひ、又朝方には、今日の夕方もあることであるからと思ふやうに、いつも將來を當にして、後でもう一度丁寧に學びなほさうなどと豫期してゐる。このやうに一日とか半日とかのかなり長い時間でさへも空費して氣がつかないでゐる位であるから、まして一瞬間の短い時間の中に於て、自分に怠りなまける心のあることなどに氣のつく筈がない。どうしてまあ人間は、自分が事を爲さうと思ひ立つたその瞬間に於て、すぐさまそれに取りかゝつてやつてしまふ事が、その樣にひどく困難なのであらうか。畢竟、之は懈怠心の然らしめるところである。

「**道を學す**」**道**は、學問上の事でも、修養上のことでもよい。昔は、學問をすることは、道を修養するためのものとされてあつたから修學の事を「道を學ぶ」といつたのである。**學ず**は、さ行變格。

「**ゆふべにあしたあらむことを思ひ**」夕方には明日の朝があるから急ぐには及ばないと思ふをいふ。諸抄大成に「明旦之事、薄暮不レ可レ必、薄暮之事、晡時不レ可レ必、天有二不測之風雲一、人有二旦夕之禍福一。」といふ文を引いてゐる。とにかく道の修行に懈怠の心のあることをいつてゐるのである。

「**重ねてねんごろに修せむ**」再びよく心をこめて勉强しよう。即ち、只今は油斷しても後によく道を修めよう、の意。

修ずは、道を修めるをいふ。

「**期す**」さういふ風に待ち定める。豫期。

「**刹那**」梵語。壯士の一彈指の間に六十刹那があるといふ。非常に短い間。瞬間。

「**けだいの心**」懈怠の心。

「**一念**」玆は、一刹那といふに同じ。二十刹那を一念といふ。一瞬間。

「**甚だかたき**」上の「何ぞ」と續いて、「どうしてさうむづかしいのであらうか」の意。

一三　寸陰をしむ人なし

寸陰をしむ人なし。これよく知れるか、愚なるか。

愚にしておこたる人のためにいはば、一錢かろしといへども、これをかさぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢をしむ心切なり。刹那覺えずといへども、これを運びて止まざれば命を終ふる期たちまちにいたる。されば道人は、遠く日月ををしむべからず。ただ今の一念むなしくすぐる事ををしむべし。

〔寸陰〕〔知れるか愚なるか〕〔切なり〕〔道人〕

○東京高等商業學校
○京都高等蠶絲學校
○高松高等商業學校

要旨　寸陰を惜しむ人のないのを歎じて、生死の大事は絶えず身に迫つて刹那もとゞまる事なきをいひ、道に志す者は、今の瞬間の過ぎ去るを惜んで、修行に專念であれと戒めてゐる。

釋義

【寸陰をしむ人なし。……貧しき人を富める人となす】

世の中を見るに、長い時間を惜しむ事を知つてゐる人はないでもないが、一瞬時を惜しむ人はない。之は惜しむ必要がないといふことをよく知つてゐて惜しまぬのであらうか、それとも又馬鹿でその惜しむべき理を知らない爲であらうか。理窟が分つてゐて惜しまない人に對しては何もいふことはないが、馬鹿であつてその理窟が分らなくてうつかりしてゐる人の爲に、その惜しまなければならぬものであるといふ道理を述べて見ると、譬へば、一錢といふ金は些少なものではあるけれども、之を蓄積してゆくと、遂には貧乏人をも金持とすることが出來るものである。それであるから、商人は、たとひ一錢の金でも惜しく思ふ心が强い（非常に惜しがる）のである。

「**寸陰**」　一寸の日の陰。僅少の時間。一瞬時。「一寸」とは、日の動くに從つて、物の陰が動く、それが一寸動くといふので、極く暫くのこと。

「**よく知れるか**」　「寸陰を惜しまないのは、惜しむ必要がないといふ理由をよく知つて居て惜しまないのか」の意。一に、「之を惜しまぬのは、よく悟つてゐる爲であらうか」と。

「**愚なるか**」　それとも又、馬鹿であるが爲に、寸陰の惜しむべき事に氣が附かない（寸陰の惜しむべき理を知らない）のか。

「**愚にしておこたる人のためにいはば**」　十分に理窟のわかつてゐる、即ち、十分に悟つてゐて惜しまない人には何もいふ必要がないが、馬鹿であつて此の理を知らずに怠つてゐる（うつかりしてゐる）人の爲に多くの道理を述べて見ると、の意。

「**一錢かろしといへども**」　一錢の金は些少なものであるけれども。

「**切なり**」　はげしい。强い。深い。

【刹那覺えずといへども……今の一念むなしくすぐる事ををしむべし】　これと同じ理で、只の一瞬間は、あるもないも同じて、その過ぎ去ることは、自分には氣がつかないけれども、之を閒斷なく進めて行つたならば、死ぬ時期がぢきに來るのである。であるから、佛道に志す人は、何日とか何月とかいふ長いまとまつた時閒をのみ惜しむやうなのんきな事ではいけない。すぐ今のこの瞬閒の無駄に過ぎ去ることを惜しく思はなくてはならない。

「**刹那覺えず**」　瞬時の經過を意識しない。短時閒の過ぎ去ることには自分は氣がつかない。

「**これを運びて止まざれば**」　その瞬閒を次々と送つて行つて止まないと。その瞬閒を閒斷なくつづけていつたならば。

「**命を終ふる期**」　死ぬ時期。

「**道人**」　眞の道に志す人、即ち、佛道に志す人。

「**遠く日月ををしむべからず**」　一瞬時を惜しまないで、何箇日何箇月といふやうな長い月日の無駄に經過するのを惜しむといふやうな暢氣な考ではいけない、の意。

「**ただ今の一念**」　すぐ今の一瞬閒。

一四　分を知れ

貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。おのが分を知りて、およばざる時は、すみやかにやむを智といふべし。ゆるさざらむは人のあやまりなり。分を知らずしてしひてはげむは、おのれがあやまりなり。まづしくて分を知らざればぬすみ、力おとろへて分を知らざればやまひをうく。

〔財をもて禮とす〕〔力をもて禮とす〕〔おのが分を知る〕〔しひてはげむ〕

○東京高等商業學校
○東京高等蠶絲學校

○高松高等商業學校
○名古屋高等工業學校
○慶應義塾大學醫學部豫科
○福岡高等商業學校
○東京女子高等師範學校
○日本齒科醫學專門學校

要旨　貧しき者が分を忘れて、財貨を人に贈り、老人が分を忘れて、筋力を以て人に盡くすことの非を戒めた文である。要言すれば、誤つた禮及びそれに伴ふ弊害を論じ、結局、人は誰でも分相應のことをすべきであると戒めてゐるのである。

釋義

【貧しき者は財をもて禮とし、……分を知らざれば病をうく】貧乏人は、自分が財物を人から贈られると禮儀を盡くされたやうな氣がするものだから、とかく人に對して財物を贈る事を禮儀だと思ひ、又老人は、自分が筋力で人から助けられると禮儀をくされたやうな氣がするものだから、とかく人に對しても筋力で助けることを禮儀だと考へる風がある。然しそれは間違つた考である。自分の身の程を知つて、到底自分に出來ない事がわかつた時には、早速その事を止めてしまふのが智慧がある（賢明である）といふべきである。若し此方が止めようとするのを許さなかつたならば、それは許さない人の了簡が間違つてゐるのである。之に反して、身の程を知らないで、無理に身分不相應の事をしようと努力して行ふならば、それはその人の了簡違である。貧乏であるくせに身の程を知らずに不相應な贈物などをすると、その結果は、自然と盜みをすることになり、體力の衰へた老人であるくせに身の程を忘れて不相應に力わざなどして人を助けたりすると、その結果は、自然と病氣に罹ることになるものである。それであるから、人は誰でも分相應の事をすることが肝要である。

「財を以て禮とす」　財物を人に贈ることを以て、禮儀だと思つてゐる。曲禮に「貧者不下以二貨財一爲ㇾ禮、老者不下以二筋力一爲ㇾ禮。」とある語をかへたのである。

禮とす　は、人に對して禮を盡す道だと思ふ、意。

「力」　筋力の意。力業をすること。

「分」　分限。分際。身の程。

「及ばざる時」　その禮をすることが自分の分以上の（自分に出來ない）時。例へば老人が人の手傳をして、重い物をあげようとする時、力が足りないであらないといふやうな場合をいふ。

「すみやかにやむ」　早速にその事をやめにする。

「智」　茲では、賢い・利巧、の意。

「ゆるさざらむは」　及ばないからといふので、止めようとするのを許さないのは（とがめるのは）。

「人のあやまりなり」　ゆるさない人（とがめる人）の了簡違（心得違）である。先方の間違である。

「しひてはげむは」　到底不可能なことを無理に努力してなさうとするのは。

「力おとろへて」　力衰へた老者で、の意。

一五　月花のあはれ

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。（第一節）咲きぬべきほどの梢散りしをれたる庭などこそ見どころおほけれ。歌のことばがきにも「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。」とも、さはることありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるにおとれることかは。（第二節）

〔隈なし〕〔見るものかは〕〔たれこむ〕〔あはれになさけ深し〕〔咲きぬべきほどの梢〕〔まかる〕〔さはること〕

○山口高等商業學校
○桐生高等工業學校
○北海道帝國大學農科大學豫科
○長崎高等商業學校
○松山高等商業學校
○女子專門學校入學資格試驗

要旨　花ざかりの前後の趣味及び花や月を見ないで、單に心に想像するおもしろさを述べてゐる。詳しくいへば、二節から成つてゐて、第一節は、世人は、花は滿開、月は滿月のみを賞するが、雨夜に月を想像し、室内に閉ぢ籠つて花を眺めずに過すのも趣あるものであることを概説してゐる。第二節は、花は滿開のみを賞すべきでないことを細説したもので、先づ花は咲き揃はぬ前も、散つてしまつてか

らも趣の深いものである事を述べ、次に、歌も、花を見ない恨を詠んだものは、花を見て詠んだものに劣らぬことをのべてゐる。（實は、猶最後に、散つた花を見所がないといふのは無風流な人であるといふ一小節があるのであるが、本題には省かれてゐる。**備考**を參照されたい。

釋義

【花はさかりに……なほあはれになさけ深し】花は眞盛のみを見、月は曇なく照り輝いてゐる時だけを見て賞すべきものであらうか、決してさうではない。月のあるべき筈の夜に折ふし雨が降つた場合に、その雨景に對して、今夜月が出てゐたなら、どんなであらうかと、見えない月を戀ひ慕ひ、或は花時に病にかゝるかなどして、室内に帳などを垂れて閉ぢ籠つてゐて、何時の間に春の月日が過ぎ去つて行くのも知らないでゐる（卽ち、春の花を見ずにたゞ想像して過す）のも、やはり隈なき月を見、盛の花を賞すると同じやうに面白く情趣の深いものである。（第一節）

「**花はさかりに**」「花はさかりなるをのみ」といふ意であるのを、次の「隈なきをのみ」に續けた中止法である。

藤原家隆の歌に「世のなかを思ひつゞけて見る時は、散るこそ花の盛りなりけれ。」西行法師の歌に「なか〳〵に時々雲のかゝることそ、月をもてなすけしきなりけれ。」とある。

花　櫻の花をいふ。歌文に、たゞ花といつたら、多くは櫻の花をさすのである。因に、古來、花は櫻、紅葉は楓、山は比叡山（又は延曆寺）、寺は三井寺、祭は賀茂祭、遊は管絃、行は佛前の行、のことに略していはれてゐる。

「**隈なきを**」少しも曇なく照りかゞやいてゐるのを。

隈　は、雲などにおほはれた部分をいふ。

見るものかは」見るべきものであらうか、否さうとは限らぬと裏返る。**かは**　は、反語の助詞。

「**雨に向ひて**」雨のふる景色に對して。和漢朗詠集、源順の詩に「對レ雨戀レ月」といふ題がある。

「**月を戀ふ**」名月の夜に雨が降るなど、月のあるべき夜に、月が見えないで、あゝ若し月が見えたらなどと、しみ〴〵思ふをいふ。

「**たれこめて**」簾や帳などを垂れて、その中に籠つてゐること。一室に閉ぢ籠つてゐること。

「**春のゆくへ知らぬも**」何時の間に春が過ぎ去つてしまつたかも氣がつかない。春の花景色を見ないで過ごしてしまふことをいふ。古今集、藤原因香の歌に「たれこめて春のゆくへも知らぬ間に、待ちし櫻もうつろひにけり。」とあるによつたのであらう。

「**なほ**」何といつてもやはり。

「**あはれになさけ深し**」感興が深く（非常に面白く）情趣に當んでゐる。

【咲きぬべきほどの梢、……おとれることかは】花を見るにも、これから咲かうといふ頃の花の梢や、又、もう盛も過ぎて、花の散りみだれてゐる庭のさまなどの方が、滿開の時よりもまさつて見る價値が多い（最も面白みがある）ものである。歌の詞書にも、「花見に行つたところが、もう散つてしまつてゐたので。」とか、「差支があつて、花見に行かないで。」などと書いてあるのは、「花を見てよむ。」と書いてあるのにくらべて、劣ることがあらうか、決して劣はしない。（第二節）

「**咲きぬべきほどの梢**」將に咲かうとする時分の櫻の梢。花の咲く前の櫻をいふ。

咲きぬべき　は「咲くべき」を强めていつた形。（咲いたであらう、の意ではない。）

「**散りしをれたる庭**」花が散り亂れて（しをれて）ゐる庭。花の散つた後の櫻をいふ。

「**見どころおほけれ**」見るに足る點が多い。見るべき價値が多い。大層面白味があるの意にとる。

「**歌の詞書**」和歌のはじめに、これを詠むに就ての動機・由來などをしるした短文。前書（まへがき）をいふ。

「**まかれりける**」行きましたところが。**まかる**は、もと退出の意であるが、轉じて、行くことにも去ることにもいふ。茲は、行くこと。又、**まかれりける**は、「まかりにける・まかりたりけるに」と、殆ど同意。

「**はやく**」最早。とつくに。

「**さはること**」さしつかへ。

「**まからで**」行かないで。茲は、ゆかないでこの歌を詠んだ、の意。

「**劣れることかは**」反語。劣つてゐない、の意。

備考

本問題の下略の部分を補つておく。

本文　花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さることなれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。」など言ふめる。（花が散つたり、月が西の山の端に近くなるのを、名殘惜しく思ふ一般のならはしは、人情として無理もないことではあるが、とりわけ、無風流な人になると、「この枝もあ

の枝も散つてしまつた。今はもうつまらない。」などと、いふやうである。）

一六　目にて見るものかは

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。

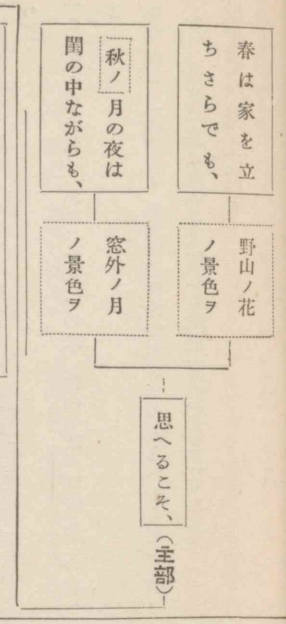
〔さのみ〕〔閨のうちながらも〕

○千葉醫學專門學校
○仙臺高等工業學校
○名古屋高等工業學校

要旨　世の人の、月や花を目でばかり見るものと思つてゐるのは、誤であるといふことを述べてゐる。

釋義

【すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは】概していへば、月や花は、さう目で見るばかりのものであらうか、いやさうでもない。



「さのみ」　そんなに。さうばかり。さう一途に。

【春は家を立ちさらでも、……いと頼もしうをかしけれ】春は、家を出なくとも（家の中に居ても）、心の中で、野山の花の景色のほどを想像してゐても、たいさうゆかしく面白いものであるし、秋の月夜には、寢室の中に居るままでも、窓外の月の有樣を想像して居ても、たいさうゆかしく面白いものである。

「春は家を云々」　諸抄大成に「春といふにて、花をもたせたり。」とある。

「立ちさらでも」　立ち去らないでも・出ないでも。即ち、家の中に居ても、の意。

「月の夜は」　秋を、月でもたせてゐる。

「閨のうちながらも」　寢室の中に居るまゝでも。

「思へるこそ」　花や月を慕ひ思ふことをいふ。

「頼もしう」　頼みとされるやうで、の意。玆では、意を轉じて、ゆかしい（何となく慕はしい）、ととりたい。

「をかし」　趣がある。面白い。

文脈

次の圖解中の［　］の中は、補つた部分である。

一七　身後の財

身死して財のこることは、智者のせざるところなり。よからぬものたくはへ置きたるもつたなく、よきものは心をとめけむと、はかなし。こちたく多かる、ましてロ惜し。「我こそ得め。」などいふものどもありて、あとに爭ひたる、さまあし。後は誰にとこころざすものあらば、生けらむうちにぞ讓るべき。朝夕なくてかなはざらむ物こそあらめ、その外は、何も持たでぞあらまほしき。

〔こちたく多かる〕〔我こそ得め〕〔物こそあらめ〕

○米澤高等工業學校
○小樽高等商業學校
○陸軍士官學校
○東京高等師範學校
○京城醫學專門學校
○滿洲醫科大學豫科

要旨　死後に財物を殘すものでない、從つて朝夕必要なもの以外は持たないがよいといふことを說いてゐる。

釋義

【身死して財のこることは、……こちたく多かる、ましてロ惜し】自分の死後に、財寶が殘るといふやうな事は、分別のある人のしないことである。その遺物の中に碌でもないものを貯へ置いたのも見苦しいし、それかといつて、貴重な品を殘して置いた場合には、あの人は此のやうな品に目をくれて祕藏してゐたのかと、物欲に執著する心のあさはかさが伺はれて氣の毒に思はれる。（あの人はこんな物質的なものに心を奪はれてゐたのかと、氣

の毒なやうな氣がする。）それから遺物がごた〳〵とあまり澤山あるのは、猶一層殘念なことに思はれる。

「財」　財物。所藏の品物。玆は、主として、家財什器の類をいふ。

「智者」　物の道理のわかつた人。分別ある人。

「よからぬもの」　つまらないもの。

「つたなく」　見苦しく見える。俗にいふまづく見える。こんなものを祕藏してゐたのかと、所藏してゐた人の拙く思はれること、即ち、その人の拙劣さをあらはすをいふ。

「よきもの」　貴重なもの。立派なもの。

「心をとめけむと」　そのやうな物質的のものに心を奪はれてゐたのであらうかと。そのやうなものに執著して居たのであらうかと思はれて。

「はかなし」　其の人のあさはかさが伺はれて氣の毒な氣がする、の意。

「こちたく多かる」　あまりに多いのは。此の句は、「口惜し」の主語である。

「こちたし」　「事痛し」の義で、仰山である。うるさい・くどい・煩しい、などの意に用ひる。何れも嫌惡の意が含まれてゐる。

「まして」　猶・一層。

「口惜し」　なげかはしい。殘念である。遺憾である。

【「我こそ得め。」など……何も持たでぞあらまほしき】　本人の死後、緣者どもの中に、「これは、おれが貰はう。」などといふ者があつて、遺產爭ひをしてゐるのは、醜態である。かういふわけだから、自分の死後には、之を誰にやらうかと見當をつけてゐる品があるなら、生きてゐる中に讓つておくがよい。とにかく、日常の生活になくてはならぬものは仕方がないが、その外の餘計な品物は、何も持たずに居りたいものである。

「我こそ得め」　その人の死後、親類緣者の中で、「この品は、自分が貰ふのだ。」と爭ふをいふ。

「あとに」　死後に。

「爭ひたる」　爭ひたるは、の意。遺產を爭つてゐるのは。

「あさまし」　その樣がわるい、の意。見苦しい・みつともない・醜態である。

「あとは」　死後には。

「誰にとこころざす」　誰にゆづらうと思ふ。

「生けらむ中に」　生きてゐるうちに。存命中に。

「生く」　は、普通上二段活用であるが、古くからの使ひ方として四段の活用もある「生けらむ」とあるのは、四段の場合である。

「なくてかなはざらむものこそあらめ」　なくてならぬものだけは致し方がないが、の意。

「ものこそあらめ」は、「ものこそあらばあらめ」の略で、下に、「ど」又は「ども」を添へて解する。「さういふものがあるなら、それはまあよからう（致し方がなからう）けれども」の意。

「あらまほしき」　ありたい。持たずに居る方がよい。

大意

物の分つた人は、死後に財產を殘さない。遺產は、品物のよしあしに係らず、その人の不名譽の種となる。又、死後に遺產爭ひなどの起るのもよくない。それ故、日常の必要品以外は、一物も持たないがよい。

一八　能をつかむとする人

能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに人に知られじ、うちうちよく習ひえて、さし出でたらむこそ、いと心にくからめ。」と、常にいふめれどかくいふ人一藝も習ひうることとなし。（第一節）いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりてそしり笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、德たけ人にゆるされてならびなき名をうることとなり。（第二節）天下のものの上手といへども、はじめは不堪の聞えもあり、むげの瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきてただしく、これをおもくして、放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。（第三節）

〔なまじひに〕〔うちうち〕〔心にくし〕〔堅固かたほなるより〕〔つれなく過ぐ〕〔たしなむ〕〔その骨なし〕〔道になづまず〕〔堪能〕〔德たく〕〔むげの瑕瑾〕〔道のおきて〕〔放埒〕〔世の博士〕

○專門學校入學資格試驗
○文部省檢定試驗
○京城高等商業學校

要旨　藝道修業の心得を說いたものである。三節から

成つてゐて、第一節は、何か藝能をつけようとする者が、最初下手な中はこつそり習つておいて、上手になつたら、人前でやつて見せて驚かせようなどといふやうな事を考へてゐたのでは駄目だといふこと、第二節は、何でも下手な中から、上手の中に交つて、笑はれても謗られても氣にかけず、その道の規則を忠實に守り、熱心にやりさへすれば、天禀の才のない人でも、天下の達人になれるといふこと、第三節は、天下の達人といはれる人も、最初から天禀の才があつたわけではなく、全く眞劍な努力の賜であるといふことを述べてゐる。

釋義

【能をつかむとする人、……一藝も習ひうることなし】何か藝能を習ひ覺えようとする人は、「其の藝道がまだ上手に出來ない間は、なまじつか、自分が此の藝道を習つてゐるといふことを人に知られないやうにしよう、そしてこつそりとよく習ひ覺えてから、人中に出てそれをやつた方が非常に奥ゆかしく思はれるだらう。」と普通にはよく言ふやうであるが、こんなことをいつてゐる連中は、遂に何一つも習ひ覺えることはない。（第一節）

「**能をつかむとする人**」何か藝能を習得しようとする人。

「**つかむ**」は、中古の語法である。現在では「つけむ」といふ。

「**よくせざらむほど**」上手に出來ない間は。下手なうちは。

「**なまじひに**」なまじつか。餘計な事だか、わざ〳〵、の意。

「**うちうち**」内々。ない〳〵。こつそりと、内證で。

「**習ひ得て**」習つて上手になつてから。

「**さし出てたらむこそ**」人中に出ることは。これは、「人中に出て見せることは」の意で、「心にくからめ」の主語。

「**心にくからめ**」奥ゆかしいであらう。「人も感心するだらう」の心持。

「**かくいふ人**」こんなことをいふ人。

【いまだ堅固かたほなるより、……ならびなき名を得ることとなり】まだ腕前が極く未熟な内から、上手な人の中に交つて、惡口をいはれ嘲笑されても恥づかしいと思はず、平氣で通して熱心に習ふ人は、たとひその人は、生れつき不器用でも、修行する藝能を怠り滯らず、慎重に學んで、年數を重ね功を積んで行くと、器用な天分を持ちながら、不熱心で怠けてゐる人よりも、不器用の熱心家の方が、上達して名人の地位に上り、藝も老熟の極に達して、世間からも名人と認められ尊敬されて、天下に雙びない名聲を得るやうになるものである。（第二節）

「**堅固かたほなるより**」一向初心の時より、の意。

堅固　藝が固くて熟せない意。未熟・生硬。

かたほ　片帆（不完全）で、眞帆（完全）に對する語であるといふ。すべて物事の十分でない事にいふ語。未熟。

「**つれなく過ぎて**」人が何といはうと素知らぬ顏でやつて行くをいふ。

つれなく　强面・强顏の義。平氣。知らぬ顏。

「**たしなむ**」好む・熱心にやる。

「**天性**」うまれつき。

「**骨**」骨法・骨柄に同じ。器量。その道に就ての天性の才能。

「**道になづます**」道は、その修める藝能。なづむは、怠り滯る・拘泥する。

「**みだりにせず**」投げやりにしない。即ち、常に慎重な態度で學ぶをいふ。

「**堪能のたしなまざるより**」器量がある人で、その道に不熱心である者よりは。

堪能　藝能をなすに堪へる義で、技に秀でること、又その人。茲は、天性それだけの才能をもつてゐる人。器用な人。

「**上手の位**」名人の地位。

「**徳たけ**」徳は、人を敬服させるに足るだけの藝能。たけは、十分になる・有り餘る程になる。

一に、「その道に於ける徳望が增す」意。

「**人に許されて**」名人上手と、世間の人から認められ、尊敬される。

「**ならびなき名**」天下無雙といふ名聲。

【天下のものの上手といへども……諸道かはるべからず】一體天下一の上手といはれる者でも、最初はやはり不器用だといふ評判もあり、又ひどい缺點もあつたのである。然しその人は、自分の學ぶ藝道の規則を正しく守つて、之を大切にして、自分勝手な事をしないでゐると、遂には斯道の大家となつて、多くの人の師ともなるものである。これは、如何なる藝道に就ても皆同樣である。（第三節）

「**天下の上手**」天下の名人。

「**不堪の聞え**」不器用であるといふ評判。下手だといふ噂。

「**むげの瑕瑾**」非常な缺點。

瑕瑾　きず。玉のきず。又は、缺點。（瑾はもと美玉の名。今は誤つてきずの意に用ひてゐる。）

「**道のおきて正しく**」その道の規則を嚴重に守るをいふ。

「之を貴くして」　道の規則を大切にするをいふ。
「放埒」　馬を埒の外へ放つ意で、氣儘に遊びまはるをいふ。玆は、規則を無視して自ら勝手な事をすること。
「埒」は、馬場の周圍の柵。
「世の博士にて」　世に有名な大家（達人）となり。
「誠道」　學問の道をも技術をも、すべてくるめていふ。

一九　あらぬ道のむしろ（一）

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて「あはれわが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。」といひ、心にも思へること常の事なれど、よにわろくおぼゆるなり。しらぬ道のうらやましくおぼえば、「あなうらやまし。などか習はざりけむ。」といひてありなむ。

〔一道にたづさはる人〕〔あらぬ道のむしろ〕〔心にも思へること〕〔いひてありなむ〕

○高等學校

○東京外國語學校
○東京商科大學豫科
○高等學校入學資格試驗
○長崎高等商業學校
○水原高等農林學校

要旨　（一）（二）に亙りて、自分の知らぬ事に對して、まけをしみをすることなく、自らの智に誇ることのないやうに誡めながらも、猶暗に、自らの眞正の價値を知らねばならぬといふことを說いてゐる。

此の（一）は、自らの藝道に慢し、他人の藝道に對してまけをしみの心を起してはならぬといふことを戒めてゐる。そして此の文は（二）のはしがきとも見るべきものである。

【一道にたづさはる人、……よにわろくおぼゆるなり】　ある一つの藝ををさめてゐる人が、自分とは專門の違ふ道の人が集まつてゐる席に出て、「あゝ、これが若し自分の專門にやつてゐる道であつたならば、自分はこのやうに、たゞ傍觀してはゐまいだらうに、專門外の事いとで、その仲間に入ることの出來ないのは遺憾千萬である。」と、言つたり、又は、口に出して言はないまで

も、心の中にさう思つたりするのは、よくある事だが、このやうな事は非常によくないことであると思ふ。

「一道」　何か或道。道は、和歌でも、音樂でも、すべて或藝能をいふ。
「たづさはる」　關係する。玆は、をさめる・心得る、などの意にとる。
「あらぬ道のむしろ」　自分の專門以外の道の人の居る席。
「臨む」　出る。列する。
「あはれ」　嗚呼といふに同じ。
「わが道ならましかば」　若しこれが自分が專門にしてゐる道であつたとすれば。
「ましかば」　推量の助動詞「まし」の已然形に、助詞「ば」がついたので、假定の條件をあらはす語。
「かくよそに見侍らじものを」　自分はこのやうに傍觀してはゐないでせうに。（その仲間に入つて自分の技倆を示すことの出來ないのは遺憾である、の意を含む。）
「ものを」　此の「を」は、接續の意をあらはす助詞であるから、下に「遺憾である」の語を補つて見るべきである。言葉にあらはれないだけに、內の心持は强いのである。
「心に思へるこそ」　口外しないでも・內心にさう思ふことは。
「よに」　誠に・實に・非常に・甚だ、などの意。

【しらぬ道の、……いひてありなむ】　若し自分の知らぬ道の事が、美しく思はれるならば、「あゝ、美しい。なぜ自分はあの道を習つてゐなかつたのであらう。」といつて、自分にその道の知識のかけてゐることを殘念に思ふがよい。

「おぼえなば」　もし覺えたなら。（將然の意）
「あな」　嗚呼におなじ。
「言ひてありなむ」　たゞ、さう言つておけばよい。（それ以上餘計なことは言はなくてもよい、の意。）

二〇　物にほこることなし（二）

わが智をとり出でて人にあらそふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善に誇らず、物とあらそはざるを德とす。他にまさる事のあるは大なる失なり。品の高きにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、た

とひことばに出でてこそいはねども、内心にそこばくのとがあり。慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひをも招くはただ此の慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、おのづから明かに其の非を知るゆゑに、志つねにみたずして、つひに物にほこることなし。

〔物〕〔徳〕〔失〕〔品の高き〕〔内心〕〔そこばくのとが〕〔をこ〕〔いひけたる〕〔其の非〕〔志つねにみたず〕

○東京帝國大學農科大學實科
○水原高等農林學校
○長崎高等商業學校

要旨　前節の續きで、慢心を戒め、達人の謙德を說いてゐる。卽ち、自分の智慧を取出して人と競爭するのは、人にして畜類の行爲にならふものである。自慢の心のあるのは、その人の缺點であり、人の笑や謗を受ける基となる。達人は自分の缺點がよくわかるから、慢心といふものがないといふ意を述べてゐる。

釋義

【わが智をとり出でて……大なる失なり】　自分の智慧を振りかざして人と爭ふのは、丁度角のある獸類が角を傾けて敵と爭ひ、牙のある獸類が牙をむき出して敵と爭ふのと同じやうなものである。獸類はそれでもよからうが、苟も萬物の靈長たる人間の爲すべきことではない。人間としては、自分が善事をしたからとて之を自慢することなく、他人と爭をしないのを、利益とするのである。他よりすぐれてゐる所のあるのは、とかく、人にまさつてゐるといふ自慢心を起したり、爭つたりし易いから、自分に取つて非常な損失である。

「我が智をとり出でて」　自分の智慧を振りかざして、諸抄大成に「蘇子由曰、以レ智攻レ智、以レ勇擊レ勇、如二兩虎相捽一、齧牙氣力、無二以相勝一。」の文を引いてゐる。

「人にあらそふ」　人と爭ふ。他人と競爭する。

「角あるものの角をかたぶけ」　角のある獸類が角を傾けて敵と爭ふ意で、敵を突かうとする狀をいふ。

「牙をかみ出す」　牙をかみ出して爭ふ、意。卽ち兩虎ともにたつことが出來ないことを意味する。

「たぐひ」　類。類似のもの。

「人としては」　獸類は、それでもよからうが、人間としては、の意。

「善に誇らず」　自分の善事を自慢する。論語、公冶長篇に「顏淵曰、願無レ伐レ善、云々。」とあり、又、八佾篇に「子曰、君子無レ所レ爭。」とある。

「物と」　人と。

「德」　利益。下の「失」に對する。一に「最もよいこと」とするは如何か。

「他にまさる事のあるは、云々」　文段抄に「他人より我まされりと思ふ心ある事なり」と註してゐるが、むしろ、他にまさつた點があると、さうなり易いから、缺點だといふのである。

「失」　損失。一に、德を、最もよいことの義にとるより、「惡いこと」の義とするは、如何か。

【品の高きにても、……慎みてこれを忘るべし】　人品の高いことでも、才智藝能のすぐれてゐることでも、先祖の名譽でも、自分が他人よりも、まさつてゐると思つてゐる人は、かりにそれを口に出しては言はなくても、心の中にはいくらかの慢心の罪がある。さういふわけであるから、注意して、自分が他人よりもまさつてゐるといふほこりの心を忘れてしまふやうにせねばならない。

「品の高き云々」　踏雪抄に「法界次第云。自恃輕レ他之心、ニレ慢、若下恃二種姓富貴有德才能一輕中蔑於他上卽是慢心也。」とある。

品　人品。地位・身分とも取れる。

「先祖のほまれ」　先祖のえらかつたこと。

「ことばに出でてこそいはねども」　口に出しては言はぬが。此の「こそ」に對する結びは、下が、「いはねども」となつた爲に省略されたのである。

「內心」　心の內。

「そこばくのとがあり」　內心にはいくらかの自慢の罪がある、と解する。

そこばく　若干の意。いくらか。そこら（許多）から轉じた語。言海には「其處等許り」とある。數の多いのを、ぼんやり指していふ。

とが　科。罪の意。

「これを忘るべし」　まさつてゐるといふほこりの心を忘れてしまはねばならぬ。念頭におかぬやうにせねばならぬ。

【をこにも見え……つひに物にほこることなし】　馬鹿に見えたり、人からけなされたり、災難をも受けるやうになつたりすることは、唯々此の自慢する心からである。實際一つの藝道にも本

當に熟達してゐる人は、自分でよく其の缺點がわかつてゐるから、自分に對して何時でも一種の不滿を感じ、從つていつまでも人に對して自慢するやうなことはない。

「**をこ**」馬鹿。愚。

「**いひけたれ**」言ひ消され。惡口される・けなされる、の意。

「**一道に誠に長じぬる人**」一つの藝道にも本當にすぐれてゐる人。

「**其の外**」自分の短所・缺點。

「**志つねにみたずして**」何時でも、もうこれで十分だと思はない。即ち、何時でも自分はまだ駄目だと思つてゐること。文段抄に「我才藝名譽等に滿足して、是よりほかはあらじと思ふ故に慢心おこる事なり。實に其道に長じたる人は才藝の極なきことを知つて、我智のいまだ至らぬ事をよく知る故に、志みたずして物にほこらずとなり。」とある。野槌には「志不レ可レ滿、樂不レ可レ極」を引いてゐる。

「**つひに**」いつまでも。

二　疾くかへるべし

さしたる事なくて人のがり行くはよからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事はてなば疾くかへるべし。久しくゐたる、いとむづかし。人と對ひたれば、ことば多く、身もくたびれ、心も靜かならず。よろづの事さはりて時をうつす、たがひのため益なし。いとはしげにいはむもわろし。心づきなきことあらむをりは、なかなかそのよしをも言ひてむ。（第一節）同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれづれにて、今しばし。今日は心靜かに。などいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。（第二節）

〔**さしたる事**〕〔**むづかし**〕〔**さはる**〕〔**いとはしげに**〕〔**心づきなし**〕〔**なかなか**〕〔**阮籍が青き眼**〕

○上田靈絲專門學校
○小樽高等商業學校
○日本商科醫學專門學校
○專門學校入學資格試驗

要旨　人を訪問する時の心得を說いたもので、二節から成つてゐる。第一節は、人と應對してゐると閑寂な氣持も害され、無益に時間も費したりするから、人を訪ねるにも氣をつけねばならぬといふこと、第二節は、同じ心持で何時までも相對して居ることの出來るやうな人は、またおのづからちがふといふことを述べてゐる。

釋義

【さしたる事なくて……なかなかそのよしをも言ひてむ】是といふたいした用事もないのに、人のところへ行くのはよくないことである。又たとひ用事があつて行つたにしても、用事が濟んだなら、さつさと歸るがよい。用もないのにぐづ〳〵して長く居るのは、うるさくて厭なものである。人と向ひあつてゐると、自然多く饒舌り、からだも草臥れ、いろ〳〵と氣をつかふので心もそは〳〵として落ちつかない。且又その爲に萬事にいろ〳〵差支が出來、時閒を空費することともなる。これは主客雙方の爲に益のないことである。さればといつて、折角客の來てゐるものを、主人としては、客の長居してゐるのを、迷惑さうにいふのもよくない。長居を困るやうな場合には、いやさうな風をするよりは、却つてあつさりと、そのわけを打明けて話すがよからう。（第一節）

「**さしたる事なくて**」たいした用もないのに

さしたる事は「然したる事」で、これと取りあげていふ程のこと・これといふ用事・重要なこと・大したこと。

「**人のがり**」人の許。人の所。

がりは、一種の接尾語。「が」は「の」と同義、「り」は「在」の約であらう。從つて正格では、「友がり」「妹がり」とあるべきを、後には、「の」を入れて「人のがり」といふやうになつた。即ち、重複してゐるわけである。

「**はてなば**」終つたなら・濟んだなら。完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に假定をあらはす助詞「ば」が接續したものである。

「**疾く**」早く・直ちに。

「**久しくゐたる**」久しく居たるは、の意。下の「むづかし」の主語。

「**むづかし**」うるさい・いとはしい・厄介な事だ。

「**人と對ひたれば**」人と對ひてあれば、の意。人と對座してゐると。

「**さはりて**」差支が出來て。故障が起つて。

「**時をうつす**」時閒を費す。下に「さういふことは」と加へて見るとよく分る。

「**いとはしげにいはむも**」客に對していやさうにいふのも。如何

にも迷惑さうにいふのも。

「**心づきなきこと**」　好まないこと・氣乘のせぬこと・氣の進まぬこと・氣にくはぬこと・心に添はぬこと。文段鈔に「手前に急用ありて永ばなし心づきなきと思はん折は」と註してゐる。

「**なかなか**」　却つて・寧ろ。默つていや〳〵對座してゐるよりは却つて、の意。

今日普通にいふ「なか〳〵面白い」などは隨分・可なり、などの意。「なか〳〵出來ない」などは、是から轉じて、容易には、の意。狂言などで、返事にいふ「なか〳〵」は、大抵、いかにも、の意である。猶、古く。「葛城や久米路にわたす岩橋のなか〳〵にても歸りぬる哉。」のやうなのは、中途にて、の意。

「**そのよしをも言ひてむ**」　そのわけを話すがよからう。

てむ　は、未來の願望をあらはす。

【同じ心に對はまほしく思はむ人の……誰もあるべき事なり】　但し自分と氣があつて、長く對座して話してゐたいと思ふやうな人が無聊なので（退屈して）、「今暫く御話してゐて下さい。今日はまあ、ゆつくりと話しませう。」などと言ふやうな場合は、この限ではなからう（例外であらう）。昔、晉の阮籍といふ人が、氣に入つた人をば、青い眼を向けて迎へ、嫌いな人には白い眼をして會つたといふやうな好惡によつて表情を異にするやうな事は、誰にでもある筈の事である。（第二節）

「**同じ心に**」　同じ心にて。よく氣があふので。

「**對はまほしく**」　對座して居たいと。

「**今暫し**」　まあもう暫く。まあもう暫くだけはお話しなさい、などの意。

「**今日は心靜かに**」　今日はゆつくりと話しませう、の意。

「**この限にはあらざるべし**」　例外であらう、の意。

「**阮籍**」　晉の竹林の七賢人（嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎）の一人。字は嗣宗、瑀の子。性不羈で、喜怒をあらはさなかつた。尤も老莊を好み、酒を嗜み、能く嘯き、善く琴を彈じた。其の意を得るに當つては形骸を忘れるに至つた。好んで山水に遊び、途窮るに至る毎に輒ち慟哭して歸つた。官、步兵校尉に至つたので、阮步兵と稱した。

因に、竹林の七賢人とは、右の七賢人が、世事を外にして竹林に入つて遊んだところからいふのである。竹林の七遊ともいふ。

「**青き眼**」　親しむ眼付をいふ。心のあふ友には青い眼をし、心のあはぬ友には白眼をしたといふ事から、誰にも好惡の感はあることを言ふ。晉書に「阮籍字嗣宗。不レ拘二禮敬一、能爲二青白眼一對レ之。及二嵇喜來弔一、籍作二白眼一、喜不レ懌而退。喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴造焉。籍大悅、乃見二青眼一。由レ是法禮之士疾レ之若レ讐。」とある。因に、白眼は、喜ばない眼付。

三　萬の道の人

萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなくつつしみてかろがろしくせぬと、ひとへに自由なるとのひとしからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞・心づかひも、愚にしてつつしめるは得の本なり、巧にしてほしきままなるは失の本なり。

〔不堪〕〔堪能の非家〕〔たゆみなくつつしむ〕〔かろがろしくせず〕〔所作〕〔心づかひ〕〔ほしきまま〕

○海軍兵學校
○上田蠶絲專門學校
○愛知醫科大學豫科
○專門學校入學資格試驗

要旨　藝道を學ぶに、魯鈍ではあるが篤實であるものの態度と、英俊ではあるが放恣な態度との損失を說いて暗に慢心を戒めてゐるもので、其の文簡勁で力が籠つてゐる。

釋義

【萬の道の人、……自由なるとのひとしからぬなり】　すべて何の道でも、それを專門に修めた人は、たとひ不器用でも器用な專門でない人々と竝んで一緒にその道を學ぶ時に、その不器用な專門家の方が器用な非專門家に、必ずまさるのは、どういふわけかといふに、畢竟專門家の方は、我が專門の道とて、少しも油斷なく注意をして、粗略にしないのに反して、非專門家の方は、全く我が專門の道でないので、どうしても自分勝手に振舞つて熱心を缺いてゐるとの相違がある爲である。

「**萬の道の人**」　いろ〳〵の藝能を專門にやつてゐる人。その道々の專門家。

「**不堪**」　堪能でないこと。才能がない。不器用。下手。

「**堪能**」　器用。上手。

「**非家**」　その家にあらざる人。專門外の人。非專門家。又は、素

人。

堪能の非家　は、上手ではあるが、それを專門として修めてゐない人。

「ならぶ」　立ち竝ぶ。又は、比較する意にも取れる。

「必ずまさることは」　下手でも專門家の方が、必ず勝つてゐるわけは。

「たゆみなくつつしみてかろがろしくせぬ」（之は、不堪ではあるが、その道の人の學習の態度の眞面目なことをいふ。）

なゆみなく　怠ることなく、油斷なく。

つつしみて　用心深くして。

かろがろしくせぬ　粗略にしない。

「ひとへに自由なる」（堪能の非家の態度の不眞面目なのをいふ。「たゆみなく」以下二つの態度を比較して、專門家の方が必ず優る原因を説いてゐるのである。）

ひとへに　全く。

自由なる　したければする、いやな時はしないといふやうに、氣まゝ勝手にする。（非家の人は我が專門でないので、傳統を重んずるといふこともなく、藝能を尊敬しないから、兩者の間に自然に隔りが出來て來るのである。）

「ひとしからぬなり」　違ひである。　玆は、相違があるからである、の意。

【藝能・所作のみならず……失の本なり】　單に技藝や仕事ばかりでなく、一般の擧動や心の用ひ方なども、たとひ下手ではあつても大事を取つて注意深くやるのは、自分の利益になるもと（その道に成功するもと）であり、たとひ上手ではあつても勝手氣儘にやるのは、自分の損失のもと（失敗するもと）である。

「藝能」　技藝・技術などの意。

「所作」　仕事・しわざ。藝能といふ程でもない仕事をさす。

「大方の振舞」　一般の行爲。平素の擧動（行）。

「心づかひ」　心の用ひ方。

「愚にしてつつしめるは」　「下手（不器用）ながらも、しかし用心深く念を入れてやるのは」の意。下の「巧にしてほしきままなるは」も、同句法である。

「得の本」　成功のもと、の意。

「ほしきままなるは」　勝手氣儘な事をするのは。

「失の本」　失敗のもと、の意。

大意

本文は、文脈が相當にわかり惡い。專門家と非專門家とを對照して書いてあることに留意して解くやうに注意されたい。今大意をあげて參考に供する。

不器用な專門家と器用な非專門家とを比較して見ると、いくら不器用でも、やはり專門家の方が優れてゐる。その理由は、專門家はその道を眞劍にやるのに、非專門家は、氣儘にやるからである。卽ち眞劍にやるのと氣儘にやるのとは、その道の成否に重大な關係をもつてゐるものである。猶此の事は單に藝術や仕事のみに限らず、平素の擧動や心の用ひ方についても同樣にいはれる。

三　是非すべからず

くらき人の人をはかりて、その智を知れりと思はむ、更に當るべからず。拙き人の碁うつことばかりに敏くたくみなるは、賢き人のこの藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばずとさだめて、萬の道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、おのれすぐれたりと思はむこと、大いなる誤なるべし。文字の法師・暗證の禪師たがひにはかりて、おのれに如かずと思へる、ともに當らず。おのれが境界にあらざるものをば爭ふべからず。是非すべからず。

〔くらき人〕　**〔人をはかる〕**　**〔文字の法師〕**　**〔暗證の禪師〕**　**〔境界〕**

○桐生高等工業學校

○高等學校

要旨　世には、自分の專門の道を、他人が知らぬのを見て、それを標準として自他を比較して、自分の方がすぐれてゐると思ふ人が、よくあるが、それは間違つてゐる。それ故、自分の專門外の事に就て、兎角の批評を試みたり、漫りに自分と優劣を比較したりしてはいけぬといふことを戒めてゐる。

釋義

【くらき人の人をはかりて、……大いなる誤なるべし】

暗愚な者が、他人の智識を推測して、その人の智識の程がわかつたと考へても、それは決して當るものではない。例へば、何の取柄もない人で、單に碁をうつ事ばかりに才ばしつてゐて上手で

ある者が、賢い人の碁をうつことにだけには下手なのを見て、世間ではえらいなどといつてゐるが、あの人も私の智慧には及ばないなどと斷定して、自分の方がえらいと思つたり、又いろ〳〵の技術を專門としてゐる人（大工・左官、其の他すべての道の專門家）が、自分のやつてゐることをば、普通の人の知らないのを見て、自分の方がえらいと思ふやうなことなどは、非常な閒違であらう。

「**くらき人**」　暗愚な人。馬鹿な者。

「**人をはかりて**」　他人の智識の程度を推測して。

「**その智を知れりと思はむ**」　その人の智識の程度がわかつた（どれくらゐの智識があるかを知つた）と思ふのは。此の句は、下の「當るべからず」の主語。

「**更に當るべからず**」　決して事實に當るものではない。

更に　全く。少しも。決して。

「**拙き人**」　何事にもすぐれた所のない人。又は、魯鈍な人。

「**敏くたくみなるは**」　才が鋭く上手な人は。

「**賢き人**」　智慧のある人。怜悧な人。

「**この藝**」　碁をうつこと。

「**おろか**」　まづい。

「**おのれが智に及ばず**」　自分の智慧には及ばない。乃公の智慧の方が、あの人よりもすぐれてゐる。

「**定めて**」　下の、「おのれすぐれたりと、云々」につゞけて解するがよい。（文脈參照）

單に、「斷定したり、そして又」と解して、下につゞけてもわかる。

「**萬の道のたくみ**」　いろ〳〵の技藝の道を專門にする技術家。大工でも左官でも、その他すべての道の專門家。

「**わが道**」　自分の專門としてゐる藝道。

【文字の法師・暗證の禪師……是非すべからず】　又法師の中でも、學問本位の文字の法師と、坐禪本位の暗證の禪師とが、互に其の價値を推しはかりあつて、彼は到底我が敵でないと考へあふのも、共に閒違つてゐる。であるから、自分の專門外の事に就ては優劣を爭つたり、批評したりするものではない。

「**文字の法師**」　學問を主として、實踐修行におろそかな僧。教相（理論的教義、卽ち行をする方に對して、經文を讀み教理を教へる方）を習うて、坐禪にうとい法師。（他宗よりの貶稱。）

「**暗證の禪師**」　坐禪工夫を主として教相をおろそかにし、智解に暗い法師。（他宗よりの貶稱。盲禪などともいふ。）

「**たがひにはかりて**」　お互に相手の智慧や價値などを推測評價する。

「**おのれが境界**」　自分の專門の範圍內。

「**爭ふ**」　競爭する。優劣をあらそふ。

「**是非す**」　善いとか惡いとか批評する。又は、褒貶する。

文脈　拙き人の碁……おのれが智に及ばずとさだめて、萬の道のたくみわが道を人の知らざるを見て、おのれすぐれたりと思はむこと、大いなる誤なるべし。

二四　人の物を問ひたるに

人の物を問ひたるに、「知らずしもあらじ。ありのままにいはむは、をこがまし。」とにや、心まどはすやうに返事（かへりごと）したる、よからぬことなり。知りたることも、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。又まことに知らぬ人もなどかなからむ。うららかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。（第一節）人はいまだきき及ばぬ事を、我が知りたるままに、「さてもその人の事のあさましさ。」などばかりいひやりたれば、いかなる事のあるにかと、おしかへし問ひにやるこそ心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、おぼつかなからぬやうに告げやりたらむ、あしかるべき事かは。かやうのことは物馴（ものな）れぬ人のある事なり。（第二節）

〔**知らずしもあらじ**〕〔**をこがましとにや**〕〔**さだか**〕〔**うらら か**〕〔**おとなし**〕〔**聞えなまし**〕〔**あしかるべき事かは**〕

○高等學校
○京都高等蠶絲學校
○東京高等蠶絲學校

要旨　他人の問に答へ、又他人に告げてやるに就ての心得を說いてゐる段で、二節から成つてゐる。第一節は、人が物を聞いたなら、素直（すなほ）に答へてやるがよいといふこと、第二節は、自分だけ知つてゐて、人の知らないことをわざとおぼめかして一部分だけ知らせてやる樣な事はよくないと注意を述べてゐる。

釋義

【人の物を問ひたるに、「知らずしもあらじ。……。」……おとなしく聞えなまし】　他人が、何か物事を問うた場合に、その問はれた人が、「彼の人は、これ位の事を知らないわけでもあるまい。多分、知つてゐながら、わざと自分を試して見るのかもわからないから、事實のまゝに答へるのは、馬鹿げてゐる。」とでも思ふのであらうか、わざと、先方がわからないでまごつくやうに、まはりくどく曖昧な返事をしてやるのは、よくない事である。先方では既に知つてゐる事でも、もつと、はつきりと知りたいと思つて問ふのかも知れない。又實際に知らないで問うてゐる人も、無いとはいへない。であるから曖昧な返答をせず、はつきりと話してやるのは、穩當に聞えるだらう。（第一節）

「知らずしもあらじ」　まさか知らないのでもなからう。知つてゐながらあんな事を尋ねて自分を試みるのかも知れない、と疑ふ意。北村季吟は「必ず知らで問ふにてもあらじと、彼問人の心を、答ふる人がおしはかりておもへるさまなり。」といつてゐる。

しも　此の「し」も「も」も、共に強める助詞。そこから、「必ずしも」といふ意も出て來るのである。

「ありのままに」　事實の通りに。

「をこがまし、とにや」　「とにや」の下に「あらむ」が略されてゐる。馬鹿らしい、とでも思ふのであらうか、の意。

をこがまし　阿呆らしい。馬鹿らしい。間がぬけてゐる。

「心まどはすやうに」　先方が理解しかねてまごつくやうに。即ち、簡單にいへば、すぐわかる事を、むづかしく遠まはしにぼんやりと分りにくいやうに答へるをいふ。曖昧に。

「なほさだかにと」　「さだかに」の下に「知らむ」が略されてゐる。一層明瞭に知りたいと思つて。

「などかなからむ」　どうしてなからうか、必ずあるに違ひない。

「うららかに」　はつきりと。判然と。明瞭に。鮮明に。

「おとなしく」　おだやかに。いやみがなく。穩當に。心に曲つた事がなく、素純な氣持であることをいふ。

「なまし」　**な**は、現在完了の助動詞「ぬ」の未然形で、之に、推量の助動詞**まし**が、接續したものである。「おとなしく聞えまし」といふのと略〻同意ではあるが、此の方が少し強い。

【人はいまだきき及ばぬ事を、……物馴れぬ人のある事なり】　人がまだ聞き知らない事を、自分だけが知つてゐるのにまかせて、その仔細をも言はずに、名ざして問うて來た人の事を、「さてもまあ、その人のなした事は、あきれた事であるわい。」といふやうな事ばかり言つてやると、先方の人は、「一體どんな事があるのだらうか。」と思つて、押返して問ひにやらせる樣な事があるが、此のやうな答へ方は、氣にくはぬ事である。なぜならば、たとひ世間で聞き古した事でも（すでに、舊聞に屬した事でも）、何かの事情で自然と（時には思はず）、聞きもらすこともあるものであるから、何事でも不慥でないやうに（はつきりと）、告げ知らせてやる事は、よい事である。かやうな事をするのは、まだ世事に馴れない人のすることである。（第二節）

「我が知りたるままに」　自分が知つて居るからとて。

「さてもその人の事」　さてもまあ、あの人（たれそれと、誰か第三者に就ていふ）のなした事は。

「あさましき」　あきれた事だ・驚き入つた事だ・ひどい事だ、などの意。

「あるにかと」　あるのであらうかと。

「おしかへし」　おしかへして直ぐに又。

「問ひにやる」　使か何かをやつて問ふ意。

「心づきなけれ」　氣にくはないことである。氣にいらぬ事である。面白くないことである。

「世にふりぬる事をも」　世に事舊りぬる事でも。すでに舊聞に屬することでも

「おぼつかなからぬやうに」　はつきりとわかるやうに。

「あしかるべき事かは」　わるいことであらうか、わるいことではない。よい事である。

べきは、斷定の意と見る。**かは**は、反語。

「かやうのこと」　「心素直でなく、不明瞭な事をいつて相手の心を惑はしたり、氣に喰はぬ樣な事をすることは」の意で、全篇の結語である。

「物馴れぬ」　世間の事に馴れない。世の經驗をつまない。

「ある事」　すること。

二五　ぬしある家

ぬしある家にはすずろなる人、心のままに入りくることなし。」あるじなきところには、道ゆく人みだりにたち入る。狐梟やうのものも、人げにせかれねば、所得がほに入りこみ、こだまなどいふけしからぬかたちも、あらはるるものなり。」（第一例）また鏡には色・形なき故に、よろづの影來りてうつる。」鏡に色・形あらましかば、うつらざらまし。」（第二

例〕虚空よくものを容る。」〔第三例〕（第一節—本論の例證）われらの心に、念念のほしきままに來り浮ぶも、心といふものなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸のうちにそこばくのことは入り來らざらまし。（第二節—本論）

〔すずろなる人〕〔人げにせかれねば〕〔こだま〕〔けしからぬかたち〕〔虚空〕〔ほしきままに〕〔心といふものなきにやあらむ〕

○海軍經理學校
○米澤高等工業學校
○臨時教員養成所

要旨　人は心に、心を主宰するところのものがあると、決して、妄念忘想が起つて、之をみだすものではないといふことを說いてゐる。換言すれば、我等の心にくだらない雜念の起るのは、畢竟本心が無いからである。それ故常に本心あらしめて、雜念の起つて來ないやうにさせなければならないといふ意を含めてゐる。

【ぬしある家にはすずろなる人、……虚空よくものを容る】　主人の住んでゐる家には、用のない者が勝手に入つて來るやうなことはない。（第一例の表）之に反して主人の住んでゐない家には、通行人もやたらに立入り、狐や梟のやうなものも、人のゐる樣子に妨げられないから、得意さうに入りこみ、木魂などいふやうな不思議な形の怪物もあらはれるものである。（第一例の裏）又鏡の面には、色や形がないからして、いろ〳〵の形が來て映るのである。（第二例の表）もし之に定まつた色や形があつたなら、それらの萬物の形はうつらないであらう。（第三例の裏）又、何もないからつぼの所は、どんな物をでも入れることが出來る。（第三例）（以上、第一節—本論の例證）

「**ぬしある家**」　主宰するもののある家。主人の住んでゐる家。

「**すずろなる人**」　みだりな人・用のない人・無關係な人。風來者。

「**すずろ**」　は、漫然。

「**心のままに**」　勝手氣儘に。

「**道ゆく人**」　通行人。通りかゝりの人。

「**みだりに**」　やたらに。むやみに。

「**人げにせかれねば**」　人のゐる樣子に妨げられないから。（人氣があると、それに妨げられて、恐れて妖怪は近づかぬものである。）

「**人げ**」　「人氣」と書く。人間のゐる氣はひ。

「**せいく**」　さへぎる・妨げる・邪魔する、などの意。

「**所得がほ**」　得意顏に。參考抄の註に「此所を己が得たる由にて也。」とある。

「**こだま**」　木魂と書く。木の精の怪物。諸抄は「山彥・木神・空谷響・樹神・木魅・罔象」などをあげてゐるが、實は、何をさしてゐるのか、わからない。一に、天狗の類だともいふ。文段抄は「こゝにてはけしからぬかたちも、あらはるゝとあれば、ばけ物の心を用べし。」とある。此の說、要を得てゐる。

「**けしからぬかたち**」　不思議な形。異樣な姿。異形のもの。

「**あらましかば**」　もしあづたと假定したら。

「**虚空**」　玆では、空の意ではなく、中の空な所の、意。物の存在しない所・何もない空所。參考抄や諺解に「これはあながち天地の外までの虚空といへるには非ず。物のなき所をさして虚空といふ也。こゝにては、只前の主なきと鏡の中のむなしきとを結びていふ也。」とある。

【われらの心に、念念の……胸のうちにそこばくのことは入り來らざらまし】　これと同じく我々の心の中に、絶えずいろ〳〵のつまらぬ考が、やたらに起つて來るのも、畢竟心の中にその主人公たる本心がないからであらうか、さうであらう。もし心の中にしつかりした主人公、即ち本心があつたなら、かくいろいろなつまらない考は入つて來ない（起つて來ない）であらう。（第二節—本論）

「**念念**」　種々の考。雜念。妄念。句解に「念々のほしきまゝに來り浮ぶとは、ひまなく人欲のきざし起るをいふ。是たゞ本心の主人うちにまもる事なきゆゑにてあり。」とある。

「**ほしきままに**」　勝手氣儘に。

「**來り浮ぶ**」　浮んで來る。

「**心といふものなきにやあらむ**」　心の主宰者がゐないからであらうか。本心といふものがないからであらうか。

「**心に主**」　主は、心の中の主人、即ち、心を統一し主宰する所のもの。本心をいふ。

「**胸のうちに**」　心の中に。

「**そこばくのこと**」　若干のこと。澤山のこと。樣々な雜念をいふ。

大意

主人公のない所に、種々のもの が勝手に入り込む。何もない空所には、物を入れる餘地がある。それと同樣に、心に主人公たる本心がないと、色々のくだらない雜念が起るものである。それ故我々は常に心に主あらしめて、雜念の起らないやうにしなければならない。

增鏡鈔

解題　增鏡二十卷は、後鳥羽天皇御即位の初から、後醍醐天皇の隱岐からの御還幸まで、凡そ十五代百五十年間の事蹟を敍した假名文で記した歷史で、大鏡・水鏡と併せて三鏡と稱せられ、又更に今鏡を加へて四鏡と稱せられる。敍事の體裁は、水鏡や大鏡に倣つて、老尼の懷舊談を聞いて書いたことになつてゐる。內容の上から見ると、承久・元弘の二亂を中心とした皇室對北條氏の交涉史であるといつてよい。そしてその中には武家に對する反感と、南朝に對する同情とが籠つてゐることは、一讀して明かである。文章は源氏物語を模した擬古文で、流麗典雅なところがある。

著者に就ては、一條冬良・一條經嗣・二條良基などの諸說があつて一定しないが、古寫本の奧書によつて、後醍醐天皇の御還幸後、卽ち元弘三年から永和二年までの間に於て、南朝に同情ある人によつて書かれたものであるといふことだけは言はれる。

一　昔物語

年の程など聞くもめづらしき心ちして、かかる人こそ昔物語（むかしものがたり）もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつつ、昔の事の聞かまほしきままに、年のつもりたらむ人もがなと思ひたまふるに、嬉しきわざかな。すこしのたまはせよ。おのづから古き歌など書きおきたるものの片はし見るだに、そ

の世にあへる心ちするぞかし。」といへば、すげみたるロうちほほゑみて、「いかでかきこえむ。若かりし世に見聞き侍りしことは、ここらの年頃に、ぬばたまの夢ばかりだになくおぼほれて、何のわきまへか侍らむ。」とはいひながら、けしうはあらず、あへなむと思へるけしきなり。

〔まめやかに〕〔聞かまほしきままに〕〔年のつもりたる人もがな〕〔思ひたまふるに〕〔おのづから〕〔すげみたるロ〕〔ここらの年頃〕〔ぬばたまの〕〔夢ばかりだになく〕〔おぼほる〕〔けしうはあらず〕〔あへなむ〕

○東京外國語學校
○京都高等蠶絲學校

要旨　増鏡の出來た由來を書いた序文の一節で、作者が、京都郊外の清涼寺に詣で、折柄參詣に來合せた一老尼に向つて、昔物語をせがむところを記してゐる。

釋義

【年の程など聞くもめづらしき心ちして、……あへなむと思へるけしきなり】私（増鏡の作者）は、老尼から「自分の年は百歳をずつと越してゐる。」などと、その年配などを聞くにつけても、珍しいやうな氣がして、此のやうな老人こそ、昔物語をもするものであるわいと思ひ浮んだので、しみ〴〵と懇に話し合つて、「昔の事が聞きたいにより、年を取つた人がゐればよいにと思つてゐましたところが、今日あなたのやうな高齢の御方にお會ひ申したのは、誠に嬉しい事で御座いますわい。昔物語を少しお話し下さいましな。昔の人が、古い歌などを書いておいたものの斷片を、何かの序に一寸見ただけでも、その昔の時代に自分も生れあはせたやうな氣持がして、なつかしく感ずるのであります。まして、あなたのやうな御老人に親しく昔のお話を承つたなら、どんなに昔の事がはつきりわかつて嬉しいことでせう。」といつたところが、かの老尼は、齒が拔落ちてつぼまつた口で、ほゝゝと笑つて、「どうして申し上げられませう。若い時分に見たり聞いたりしました事は、數多の年月を經た事とて、夢に見たほどさへも頭に殘つて居ませず、ぼんやりとして、何の辨別が御座いませう。」とは言ひながらも、内心では、話してもわるくはない、一つやつて見ようと思つてゐる樣子である。

「すなれ」　するわい。此の樣に動詞の終止形につくなりは、詠歎の意をあらはす。因に連體形につくなり、は指定の意をあらはす。

「まめやかに」　ねんごろに。すべて心の忠實なさまにいふ語。

「聞かまほしきままに」　聞きたいと思つてゐましたので。

ままに　何々にまかせて何々によつて、などの意。

「年のつもりたらむ人もがな」　年を取つた人があればよいに。

がな　願望の意をあらはす。猶此の「がな」の下に「あれかし」を補つて見ると解しよい。

「思ひたまふるに」　此のたまふは、下二段に活用するもので、自己の動作をあらはす語の下について、卑下する意に用ひる。

「のたまはせよ」　お話し下さいましな・おつしやいませよ・お聞かせ下さいよ、などの意。

のたまはず　使役的の敬相。

「おのづから」　句を隔てて下の「見る」にかゝる。何かの拍子にふと見ただけでも。

「片はし」　斷片。

「すげみたるロ」　齒がぬけてつぼまつた口。老人の口の形容。

「いかでかきこえむ」　きこゆは、言ふ、といふ意の、自卑の敬語。

「ここら」　數の多いのをおほよそにいふ語。澤山の意。

「ぬばたまの」　夢・闇・夜、などに冠する枕詞。

「夢ばかりだになく」　ほんの夢に見たほども殘らず、の意で、甚だぼんやりしてゐる事をいふ。

「おぼほれて」　ぼんやりしてゐて。精神や意識がぼんやりしてゐて明かでないさまをいふ。

「けしうはあらず」　あやしくはあらず。わるくはない。さしつかへはない。

「あへなむ」　敢へてしかしよう、の義で、「やつて見よう」と口譯する。

あへは、「敢ふ」の連用形で、强ひてなす・爲しとげる、などの意。なむは、完了の助動詞「ぬ」の將然段に、未來の助動詞「む」の添つたもので、未來に於て或動作の完了する意を表はすが、玆では、自分の決心をあらはすものと見るがよい。

二　道ある世

建久三年三月十三日に、後白河法皇かくれさせ給ひにし後は、後鳥羽の御門ひとへに世をしろしめし、四方の海波靜かに、ふく風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪、秋津島

の外まで流れ、しげき御惠筑波山のかげよりも深し。よろづの道道に明けくおはしませば、國にさえある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かずしらず人の口にある中にも、

奥山のおどろの下もふみわけて、
　道ある世ぞと人にしらせむ。

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほどしるく聞えて、いといみじくやむごとなくは侍れ。

〔しろしめす〕〔あまねき御うつくしびの涙〕〔ざえ〕〔敷島の道〕〔しるく聞ゆ〕

○山口高等商業學校

要旨　後鳥羽天皇の御親政の御有樣と、同天皇の諸道に御堪能であらせられ、就中和歌に長じてをられたことを記してゐる。

釋義

【建久三年】皇紀一八五二年。後鳥羽天皇御治世の年號。此の年、院政をとつてをられた後白河法皇（人皇第七十七代）崩御、御年六十六歳。猶、源頼朝が征夷大將軍に任じ幕府を鎌倉に開いた。

【後鳥羽の御門ひとへに……御惠筑波山のかげよりも深く】後鳥羽天皇が御自身で專ら天下をお治めなされ、四海は波靜かで吹く風も枝を鳴らさぬといふ泰平の象があらはれて、世はよく治まり、民は生業に安んじ、廣大無邊の御仁德は國外にまでも及び、深き御恩惠は筑波山のよく繁つた木の蔭よりも深くあつた。

「後鳥羽の御門」第八十二代の天皇。

「しろしめす」御治め遊ばす。いろすは、「しらす」に同じで、「知る」の敬語、それを一層敬つて「しろしめす」といふ。

「四方の海波靜かに、ふく風も枝を鳴らさず」天下泰平の有樣をいふ。西京雜記に「太平世、風不レ搖レ枝。」とあり、論衡に「太平世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊。」とある。

「あまねき御うつくしびの涙」廣くゆき渡てゐる御仁德をいふ。うつくしびは、「いつくしみ」に同じで、仁慈・仁德・めぐみ、などの意。玆は、天皇の御仁德を涙に喩へていふ。

「秋津島の外まで流れ」國外にまでも及び。

秋津島　わが日本のこと。

流れ　及ぶ、の意。浪の緣語。

「筑波山のかげよりも深し」古今集二の、東歌に「筑波嶺のこのもかのもにかげはあれど、君のみかげに增すかげはなし。」とあるを取つたもの。

筑波山のかげ　筑波山に茂つてゐる木のかげ、此の「かげ」に「おかげ」の意を含ませてある。

○「あまねき御うつくしびの涙…筑波山のかげよりも深し」は、平面的（廣さ）には海の浪を、立體的（深さ）には山の木蔭をとつて、御仁惠の鴻大なことを對句に組立ててある。そして古今集の序によつてかいたものである。

【よろづの道道に明けくおはしませば、云々】天皇御自身が諸道に通じてをられたから、國中にも學才のある人が多くて、昔の聖代にも劣らぬ立派な御代であつた。

「ざえある人」學才のある人。ざえは、才の字音。

「昔に恥ぢぬ御代」昔の聖代、卽ち、醍醐・村上兩帝の御代に劣らぬ立派な御代。

【中にも敷島の道になむ云々】天皇は御堪能な諸道のその中でも、和歌の道に於て格別に勝れておいでなされた。そしてその御製は無數に人口に膾炙してゐるが、その中でも。

「敷島の道」大和歌の道の義で、和歌の道。歌道をかくいふのは、平安末期になつてからのことである。

敷島　もとは大和の國の地名、轉じて大和の一名となり、又大和の枕詞となり、更に轉じて、日本の總名となつたのである。

「人の口にある」人が好んでとなへる。人口に膾炙する。

【奥山のおどろの下も、云々の歌】奥山の草木の生ひ亂れてゐるひどい所を踏み分けて、かういふ所にも人の歩むべき道はあるものであるといふことを、世の中の人に知らせよう。（不正不義がはびこつて亂れきつた世をも、よく治めて、正義正道の存在することを天下の人に知らせよう、の意。）

「おどろ」雜木雜草の生ひ茂つたところ。荆棘と漢字をあてる。

【と侍るこそ、云々】と、お詠みになつた御歌こそは、それには、どれほど後鳥羽天皇が、政治を大切に思し召されたかが、よくあらはれてゐて、甚だ恐れおほいわけである。

「しるく聞えて」著しく見えて。よくあらはれて。

「やむことなし」「止むことなし」卽ち、「打捨てて置けない」より轉じて、尊いといふ意になり、更におそれ多いの意となる。

三　いとまだしかるべき御事

建久九年正月十一日第一の御子四つになり給ふに、御位ゆづり申させ給ひておりゐ給ふ。御年十九位におはします事十三年なりき。今日明日二十ばかりの御齢にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御有様よりはなかなか安らかに御幸など御心のままならむとにや、世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。

〔おりゐ給ふ〕〔まだし〕〔所せし〕〔御幸〕〔心のままならむとにや〕〔世をしろしめす〕〔めでたし〕

○東京商科大學豫科

要旨 後鳥羽天皇が、まだお若いのに、第一皇子に皇位を御譲りなされて上皇とならせられた事に就ての、作者の感想を記してゐる。

釋義

【建久九年】 皇紀一八五九年。後鳥羽天皇が御譲位なされて、土御門天皇が御即位なされた年である。

【第一の御子四つになり給ふに】 第一の皇子の、四歳におなりになった御方に。

「第一の御子」 土御門天皇を申す。

【御位ゆづり申させ給ひておりゐ給ふ】 御位をお譲りになつて、帝位を去られました。

「申さ」 後鳥羽天皇からいへば自卑の敬語で、東宮（土御門天皇）を敬ふ。

「せ給ふ」 後鳥羽天皇を敬ふ敬語。

「おりゐ給ふ」 おりゐは、下居で、御位を退かれること。因に、上皇のことを「おりゐのみかど」と申す。

【今日明日二十ばかりの御齢にて】 昨今二十歳前後の御年頃で、御譲位遊ばされるのは。

【いとまだしかるべき御事なれども】 たいそうお早すぎる御事であるけれども。

「まだし」 まだ早い。いまだしに同じで、それにはまだ時が早すぎる、といふ意。

【よろづ所せき御有様よりは……御心のままならむとにや】 萬事に御窮屈な思をして帝位についてをられるよりは、寧ろ上皇となつて氣樂に暮し、外出なども隨意にしたがよいと思し召されたのであらうか。

「所せし」 (一)場所が狹い。(二)窮屈である。(三)隙間がない・一ぱいである。 玆は、第二義。

「なかなか」 かへつて。むしろ。

「御幸」 上皇のおでましをいふ。天皇には「行幸」、皇后・皇太子には「行啓」といふ。

「御心のままならむとにや」 「ままにし給はむ」と動作的にいふのを「ままならむ」と狀態的にいつたのである。御隨意になさらうといふ聖意から出たのでもあらうか。

「にや」 此の下に、「あらむ」を補つて解くがよい。

【世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし】 それはそれとして、天下の政治を自らなされるといふことが（世をお治めなさる事が）、御退位の後もなほ御在位當時と同じであるから、至極結構である。

「今もかはらねば」 後鳥羽上皇が御譲位後、院政をなされたことを指す。

「めでたし」 古文では、誠によい・甚だ愛すべきである・結構である、などの意。

四 雪のむらぎえ

宮内卿が仕うまつられし御百首の歌、いづれもとりどりなる中に、

うすくこき野邊の緑の若草に、
跡まで見ゆる雪のむらぎえ。

草の緑の濃き薄き色にて、こぞのふる雪の遲く疾く消えけむほどを推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人はいと思ひよりがたくや。この人年つもるまであらましかば實にいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くてうせにし、いとほしく、あたらしくなむ。

〔とりどりなる中に〕〔こぞ〕〔ふる雪〕〔心ばへ〕〔思ひよりがたくや〕〔動かしなまし〕〔いとほし〕〔あたらしくなむ〕

○大阪高等商業學校

要旨 後鳥羽上皇に仕へた宮内卿といふ官女の秀歌をあげてその歌才を稱へ、更にその早世を惜んだことを記してゐる。

釋義

【宮内卿が仕うまつられし御百首の歌……まだしからむ人はいと思ひよりがたくや】 千五百番の歌合の時に、宮内卿が詠んで奉られたる百首の御歌は、どれも皆、それ〴〵に特殊の趣があつたが、その中でも、

野邊の若草に色の薄い所と濃い所とがある事によつて、去年の雪が一度には消えないで、まばらに消えたといふあとかたが見られる。（即ち、早く雪の消えたところには、早く若草が萌え出たから、綠の色が濃く、遲く雪の消えたところは、若草の萌え方がおそいから、綠の色が薄い。それ故若草の色の濃淡によつて雪の消え方に遲速のあつたことがよくわかる、といふ意。）

といふ意味の歌が、特にすぐれてゐた。草の綠の濃い色と薄い色とによつて、去年の殘雪の或は遲く或は早く消えた具合を推測した趣向などは、歌道に未熟な人は、甚だ思ひつきにくいことであらう。

「千五百番の歌合」 建仁元年に行はれた歌合で、後鳥羽上皇の御製をはじめ、後京極攝政以下三十人の男女に、各〻百首の歌を奉らしめて優劣を競はせた。

「宮内卿」 後鳥羽上皇に仕へた女官の呼名。村上天皇の後裔で、源師光の女。歌人。

「とりどりなる中に」 それ〴〵特殊の趣があるが、その中でも。

「むらぎえ」 まばらに消えること。

「こぞ」 去年。

「ふる雪」 古い雪。殘雪のこと。

「遲く疾く消えけるほど」 後に消えたり先に消えたりした樣子。

「心ばへ」 心のおもむき。傾向。

「まだしからむ人」 歌道に未熟な人。

「思ひよりがたくや」 思ひつきにくいでありませう。

や 輕い疑問の助詞。下に「侍らむ」などを補つて解くがよい。

【この人年つもるまであらましかば、……あたらしくなむ】 もしも此の宮内卿が、年寄になるまで生きながらへてゐたとすれば、まあどんなにか、目に見えぬ鬼神をも感動させるやうな所の歌を詠んだであらうに、若くてなくなられたのは、まことにかはいさうで、また惜しいことである。

「ましかば」 「まし」といふ助動詞の將然形で、事實と反對の假定をなす場合に用ひる。そしてこの結びにも「まし」が來るのが普通である。「……ましかば、……まし。」

「目に見えぬ鬼神をも動かす」 此の句は、古今集の序では、歌の德を稱へたことになつてゐるが、玆では、秀歌を詠む意に用ひてある。

鬼神 荒く恐ろしい神。

「なまし」 **な**は、現在完了の助動詞「ぬ」の將然形。

「いとほし」 ふびんである。氣の毒である。

「あたらし」 惜しい。

五 源平の二流

猛きもののふのおこりを尋ぬれば、いにしへ田村・利仁（としひと）などいひけむ將軍どもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで、源平の二流ぞ、時により折にしたがひて、おほやけの御まもりとはなりにける。

〔もののふのおこり〕〔いひけむ〕〔耳遠ければ〕〔そのかみ〕〔おほやけの御まもり〕〔二流ぞ……なりにける〕

○海軍兵・機關・經理學校

要旨 源平兩氏の起源に就て概說してゐる。

【猛きもののふのおこりを尋ぬれば……耳遠ければさしおきぬ】 勇猛な武士の起源を調べて見るに、その昔、坂上田村麿とか藤原利仁などと言つた將軍があるやうであるが、これ等の事は、あまりに時代のたつてゐる事であるから、さしおいて語らない。

「もののふ」 武士。武事を以て仕へる建士（たけを）の總稱。

「田村」 坂上田村麿。桓武天皇の時の人で、征夷大將軍となつて、蝦夷を平げた。

「利仁」 藤原利仁。醍醐天皇の頃の人で、藤原の時長の長子。鎭守府將軍に任ぜられ、下野國の高座山にゐた賊を平げて、武名が高かつた。

「いひけむ」 過去推量の助動詞。然し、口語には推量から體言に續ける語法がないから、「いひけむ將軍」は、「言つた將軍」と、過去のやうに口譯するより外、いひやうがない。

「耳遠ければ」 時代がひどく隔つてゐて、耳に緣遠い事であるから。大昔のことであるから、あまり耳にしない、といふ意。

【そのかみより今まで、……おほやけの御まもりとはなりにける】 之を除いては、昔から今までに、源平二氏の系統が、時代により、又場合によつて、交互に朝廷の御警護となつて來てゐる。

「そのかみ」 その當時。むかし。

「二流」 二つの系統。**流**は、血筋の意。

「おほやけの御まもり」　朝廷の御警護。

六　君にふた心われあらめやも

源實朝、故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滯る事なく、よろづ心のままなり。建保元年二月廿七日正二位せしは、閑院の內裏つくれる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年、權大納言になりて左大將をかねたり。左馬のつかさをさへぞつけられける。その年やがて內大臣になりても、猶大將もとのままなり。父にもやや立ちまさりていみじかりき。

（第一節）この大臣は、大方心ばへうるはしく、猛くもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き從ふさまも、父にも越えたり。いかなる時にかありけむ。

山はさけ海はあせなむ世なりとも、
君にふた心われあらめやも。

とぞよみける。（第二節）

〔故大將〕〔權大納言〕〔左大將〕〔左馬のつかさ〕〔內大臣〕〔めやすし〕〔ことわりにも過ぐ〕〔あせなむ〕〔あらめやも〕

○愛知醫學專門學校

要旨　源實朝のことを記した一部で、本文は二節から成つてゐる。第一節は、その官位昇進の樣、第二節は、その性格に就いて述べてゐる。

釋義

【故大將の跡をうけつぎて】　故大將頼朝のあとをうけ繼いで。

「故大將」既に故人となつた近衞府の長官。玆は、源頼朝をさす。

【つかさ位滯る事なく】　官位がずん〳〵と昇進して停滯せず。

【よろず心のままなり】　萬事が自分の思ひ通りであつた。

【建保元年】　皇紀一八七三年。第八十四代順德天皇の御治世。

【正二位せしは】　正二位になつたのは。

【閑院の內裏つくれる賞とぞ聞き侍りし】　閑院の內裏を造營し奉つた其の御恩賞であると聞きました。

「閑院の內裏」京都二條の南、西洞院の西一町にあつた御所。高倉天皇以來の皇居が、土御門天皇の承元二年に火災に罹り、建暦二年に再建の工事が始まり、建保元年に竣工したのである。

【權大納言】　假に、補せられた大納言。「數より外の大納言」ともいふ。**大納言**は、太政官の次官。下の言を奏上し、上の言を下に傳達することを掌る。**權**は、假の義。まだ本官に補するには至らず、先づ假りに補せられた官を權官といふ。

【左大將】　左近衞の大將。卽ち、左近衞府の長官。近衞府は、皇宮內の巡警・宿衞の事などを掌つた所で、左右に分れ、その各〻に大將・中將・少將・將監・將曹の官があつた。

【左馬のつかさ】　左馬頭。卽ち左馬寮の長官。馬寮は、官馬の調習及び馬具並に諸國の牧場の馬を掌つた役所で、左右に分れ、その各〻に頭・助・允・屬の官があつた。

【つけられける】　つけ加へられた。兼任したことをいふ。

【その年やがて】　なほその年に閏もなくまた。

【內大臣になりても】　內大臣に進んだけれども。

「內大臣」太政官に屬し、左右大臣に次ぐ官。左右大臣不參の時、それに代つて政務・儀式を執行することを掌る。唐名では、內府といふ。

【猶大將もとのままなり】　左大將の職はやはり以前通りつとめてゐた。

【父にもやや立ちまさりていみじかりき】　かういふわけで、官位は父頼朝よりもいくらか高くてえらくあつた。（以上、第一節）

「父よりもやや立ちまさる」頼朝は從三位權大納言右大將であつたから、實朝の方が上である。

「いみじ」甚だの意。玆は、えらいと解く。

【この大臣は大方心ばへうるはしく、……父にも越えたり】　この大臣（實朝）は、大體に於て、性質が立派で、勇武でもあり、優美でもあつて、萬事非難すべき點がなかつたから、世間並を越えて（道理以上に）武士共も服從して、その有樣は、父頼朝にも立ちまさつてゐた。

「大方」大體に於て。

「心ばへ」性質・氣立。

「うるはし」古文では、端正である・きちんとしてゐる、の意。

「猛くもやさしくも」勇武（剛毅）でもあり、又、優美でもあつて。一に「剛毅な方面に於ても、優美な方面に於ても」とも解する。

「やさし」古文では、優美である・上品である、の意に用ひる。

「めやすし」非難すべき點のないこと。本來は、目によい感じを與へる・見づらくない、といふ意。

「ことわりにも過ぎて」道理以上に。世間並を越えて。

【いかなる時にかありけむ】　どういふ時であつたらうか、（知らぬが、かういふ意味の歌を詠んだ。）

【山はさけ云々の歌】　山は裂け崩れ、海は水が涸れて淺くなるやうな變動の烈しい世の中であらうとも、私は朝廷に對して謀叛を起すやうなことをしようか、其のやうな事は決してしはしない。（貞十、第二節）

「あせなむ」　あすは、さ行下二段活用の動詞で、水が涸れて淺くなる意。なむは、現在完了の動詞「ぬ」の將然形に未來の助動詞「む」の添つたもので未來完了。それ故、「さうなつてしまふだらう」と口譯すべきであるが、「あせなむ世なりとも」のやうに「なむ」が連體形に連つた場合には、「あせてしまふやうな變動の烈しい世であらうとも」位に口譯すればよい。

「われあらめやも」　われは、一本わがとある。　やもは、反語をなす助詞の「や」と、婉曲に感嘆する助詞の「も」との複用辭である。

七　今を限りと思へ

泰時を前にするゑて言ふやう「おのれをこの度都に參らする事は、思ふ所多し。本意の如く清きしにをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顏また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども、義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死をせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄箱根山は越ゆべし。」など泣く泣くいひきかす。「まことにしかなり。また親の顏拜まむ事もいと危し。」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりと、あはれに心細げなり。

〔おのれ〕〔清きしにをすべし〕〔人にうしろを見えなむには〕〔うしろめたき心やはある〕〔横ざまの死〕〔かたみに〕

○専門學校入學資格試驗

要旨　承久の亂に、北條義時が、長子泰時を出陣せしめる時に當つて、教へ諭した事柄を記してゐる。

釋義

【泰時を前にするゑて言ふやう】　北條義時が、その子泰時を前に置いていふには。

「義時」　鎌倉二代の執權。

「泰時」　鎌倉三氏の執權。

【おのれ】　汝。自稱の「おのれ」が、對稱に轉じたもの。

【都に參らする事は】　都（京都）へ差向ける（上らせる）については。

【思ふ所多し】　自分に考へる事が多いのである。種々の目的がある、の意。

【本意の如く清きしにをすべし】　先づ武士たる者の本望通りいさぎよい死方をせよ。

【人にうしろを見えなむには】　敗北して敵に背面を見せるやうな卑怯な振舞があつた場合には。

「見えなむ」　見えは、「見せ」・「見られ」の意。此のなむは、未來完了の助動詞。

【親の顏また見るべからず】　もう二度と親の顏を見てはならぬ。生きて還るな、の意。

【今をかぎりと思へ】　これが此の世の最後の別と思へ。

【賤しけれども義時……うしろめたき心やはある】　吾は微賤な身ではあるが、天皇（朝廷）に對して、聊かも疚しい心がないぞ。

「うしろめたし」　後目痛しの義。目に見えぬ所が心配である・あとのことが氣にかゝる・氣がかりである・やましい、などの意に用ひられる。玆では、不忠などのことがあつて心の不安な意。

「やはある」　何々があるか、ありはしない、の意で、反語をなす。やは、前課で說いた「やも」と同じい複用辭。

【されば横ざまの死をせむ事はあるべからず】　それゆゑ、汝も横死などをする事は、きつとないであらうぞ（横死などすることは無い筈である）。若し自分が、朝廷に對して疚しい心を持つて居るならば、神罰を蒙つて汝が非業の最後を遂げるやうな事にもなるであらうが、自分には決してそんな心がないから、お前にもそんな心配はない、の意。

「横ざまの死」　横死。非業の最後。天命でない死に方。不自然な死に方。

【心を猛く思へ】　氣丈夫に思へ。義時が泰時に勢づけてやるのである。

【おのれうち勝つものならば……越ゆべし】　お前が勝利を得たならば、また彼の足柄山や箱根山を越えて鎌倉に歸つて來い。

【泣く泣くいひきかす】　泣きながらいひきかせた。

【まことにしかなり。……泰時も鎧の袖をしぼる】　すると

泰時も「全く父上の仰の通りである。再び親の顔を拜むことも甚だむづかしいことである。」と思つて、涙で鎧の袖を濡した。

「まことにしかなり」 いかにもその通りである。

「危し」 むづかしい。出來さうもない。

【かたみに今やかぎりと、あはれに心細げなり】 父子互に、今が今生の別かと思つて、何となく感深く心淋しい樣子に見えた。

「かたみに」 互に。

「今やかぎりと」 今が此の世に於ける別れであるかと思つて。

「あはれに」 古文では、感深く・情趣深く、などの意に用ひる。（單に、悲哀の意にとるのは面白くない。）

八　明日しらぬ世（一）

藐姑射（はこや）の山の峰の松もやうやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、いく春を經ても、空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋（とま）に軒をならべて、おのづからことととふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽燒（やき）く煙のなびく方をも、我がふる里のしるべかとばかり、ながめ過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日しらぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいていつをはてとか、めぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の浪、煙の波の幾重ともしらぬ境に、世をつくし給ふべき御さまども、口をしといふもおろかなり。

〔藐姑射の山〕〔霞の洞〕〔ありありて〕〔よしなき一ふし〕〔しるべ〕〔ながむ〕〔それまでと〕〔まいて〕〔いつをはてとか〕〔世をつくす〕〔おろかなり〕

○北海道帝國大學農科大學豫科

要旨　（一）（二）（三）に亙つて後鳥羽上皇の隱岐に於けるわびしい御生活を描いてゐる。

本段は、後鳥羽上皇が、承久の亂の結果、隱岐の島の配所に赴かれて、心細い御住居をなさるに至つたことを述べてゐる。

釋義

【藐姑射の山の峰の松もやうやう枝をつらねて、……いと心細かるべし】 この上皇は、仙洞御所の峰の松が、次第に成長繁茂して、千年に萬年を重ねるやうに、幾久しくめでたくお榮えになつて、何年たつても月日の運行の永久に變りのないやうに、いつまでも安泰であらせられる筈の御境遇であつたものを、たうとうしまひに、北條氏を御討滅なさらうといふつまらぬ一事を御企てなされた爲に、今はかやうに繁華な都からまでもお別れになつて、三上皇（後鳥羽上皇・土御門上皇・順德上皇）御銘々が散り散りに別れて、各地に（後鳥羽上皇は隱岐に、土御門上皇は土佐に、順德上皇は佐渡に）御流浪遊ばされる事になり、そしてその配所では、磯邊の苫葺の賤しい漁家と隣りあつて御すまひになり、自然に見てお慰みになるものとしては、海上で釣をする漁夫の小舟か、鹽を造るために海邊でたく煙位のものであるが、その煙を御覽になるにつけても、あゝあの煙は、その靡く方向に、わが懷しい故郷（都）があることを示してくれるのでもあらうかといふやうにお考へなされて深く物思に沈まれて、其の日其の日を御過しになつてゐられるのであるが、かやうな御すまひといふものは、たとへ何月何日までと期限を定められた場合でさへも、人の命は明日までにどうなるかわからぬといふ氣掛りがあるので、非常にお心細いことであらう。

「藐姑射の山」 上皇の御所。支那で仙人が住むといはれてゐる山。仙人は不老不死の術を得てゐるものであるから、上皇の寶算の長い樣にと祝ひ奉つて、上皇を仙人に譬へ、上皇の御所を仙洞・仙院・霞の洞、又は、藐姑射山といふのである。莊子、逍遙遊篇に「藐姑射山有二仙人一居焉。肌膚若二冰雪一、淖約若二處子一。」とある。

「枝をつらねて」 次第に繁茂して。上皇の御繁榮を藐姑射の山の峰の松がます〳〵成長繁茂して行くのに喩へたのである。

「千代に八千代をかさね」 千年も萬年もつゞいて。千代の上に更に八千代を重ねる意。

「霞の洞の御すまひ」 仙洞御所に於ける御すまひ。

「霞の洞」 仙人は霞を吸つて生きてゐるといふところから、「霞の洞」は、仙人の棲處で、上皇の御住所にたとへたのである。

「いく春を經ても」 幾年を經ても。

「空ゆく月日の」 天空を運行する月や太陽のやうに。月日は永久に空を運行して其の果を知らぬ。それ故よく限無い事に喩へられる。この**の**は、のごとくの意。

「のどけく」ゆつくりと・呑氣に。安泰なこと。

「おはしましぬべかりける世を」おありなさる御境遇であつたのに。

「ぬ」現在完了の助動詞ではあるが、玆では、單に、語調を強める爲に用ひたものと見るがよい。

「世」玆では、境遇の意に解するがよい。

「ありありて」たうとうしまひに・とどのつまり。さういふ狀態が續いた擧句、の意。

「よしなき一ふし」つまらない一事。後鳥羽上皇の北條氏討滅の御企圖をさす。

「花の都を」繁華な都から。華洛から。

「おのがちりぢりに」おの〳〵散り〳〵ばら〳〵に。めい〳〵分れ〳〵に。三上皇が、御めい〳〵に、別々な所へお流されになつたことをいふ。

「おのが」「己(おの)が」ではなく「各が」の意。

「さすらへ」よるべなくさまよふ。漂浪・流浪・流離。

「苫屋」苫（菅又は茅などを編んで作つた雨露を防ぐもの）で屋根を葺いた粗末な家。漁夫などの家をいふ。

「軒をならべて」相隣つて。相竝んで住み。

「おのづから」自然に。偶然に。

「こととふ」訪れる。「言問ふ」の義で、物を言ひかける・訪れる、などの意に用ひる。但し、玆の「こととふもの」は、友とするもの・見て慰みとするもの、の意にとるがよい。

「あま小舟」漁夫の小舟。

「わがふる里のしるべかと」わが故郷、卽ち、都への案内であるかと。煙の靡くのを見て、あの煙は都の方角を示してくれるのかななどと、お思ひになつたことをいふ。

「ながむ」物思ひに耽つてじつと見つめる。（古文では、殆ど、遠くのものを見る、といふ意には用ひてゐない。）

「それまでと」いつまでと。何月何日までと。

「月日をかぎりたらむだに」月日が限定されてあつたにしてでさへも。

「明日しらぬ世」明日はどうなるかわからない世。何時どうなるかわからない無常な人生。

「うしろめたさに」氣掛りであるので。日限が定めてあつても、それまでに死ぬかも知れぬといふ不安があるので。

【まいていつをはてとか、……口をしといふもおろかなり】まして上皇の場合のやうに、此處にをることが、何時を最後の日として、その日に出會ふ期限が定まつてゐるといふのでもなく、雲や靄のかゝつてゐる海上遙かに遠い孤島で、一生をお果てなさる筈の御境遇などを思ふと、殘念であると言つた位では、まだまだ言ひ足りないのである。

「まいて」まして。

「いつをはてとか」何時を最後として。何時を期限として。

「めぐりあふべき」その期限にめぐりあふことの出來る。一説に、「女院や皇子方にめぐりあふ」と解するが、如何。

「かぎり」期限。

「雲の涙煙の波幾重ともしらぬ境」雲や靄が幾重も立ち隔つてゐる遠い所。海上遙かに遠い所。

「雲の涙煙の波」雲煙千里の波。雲や靄を、波浪に見立てていつたものである。白居易の海漫々の樂府に「雲濤煙浪最深處、人傳中有三山。」とある。

「境」場所。

「世をつくし給ふへき」一生を御終り遊ばす筈の。

「御さまども」御境遇など。

「おろかなり」言ひ方が疎かである、の意で、言ひ足りない・不十分である、と解する。

九　新島もり（二）

このおはします所は、人離(ばな)れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山かげにかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に「柴のいほりのただしばし。」とかりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀨殿(みなせどの)おぼしいづるも夢のやうになむ。はるばると見やらるる海の眺望、二千里の外ものこりなき心ちする、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞しめして、

我こそは新島もりよ、おきの海の
あらき浪かぜこころして吹け。
同じ世にまたすみのえの月や見む、
今日こそよそにおきの島もり。

〔山かげにかたそふ〕〔たよりにて〕〔けしきばかりことそぐ〕

〔**柴のいほりのただしばし**〕〔**さる方になまめかし**〕〔**ゆゑづきてしなす**〕〔**水無瀬殿**〕〔**二千里の外ものこりなき心地す**〕〔**今更めく**〕〔**こちたし**〕〔**すみのえ**〕

○長崎高等商業學校
○東北帝國大學工學專門部
○專門學校入學資格試驗

要旨　後鳥羽上皇の隱岐の島に於ける行宮の御有樣及び御述懷を記してゐる。

釋義

【このおはします所は、……水無瀬殿おぼしいづるも夢のやうになむ】　後鳥羽上皇の御住ひになつてゐられる處は、人氣がなく、村里から遠い島の中である。假の御所は、海邊よりは少し引込んで、山の陰に、片方を寄せかけて、大きい巖石の高く立つてゐるのを利用して造られ、松の木の柱を立て、それに葦を屋根に葺いた廊下などがあつて、不思議と思ふほど簡略に出來てゐる。ほんたうに、西行法師の歌にもいつてある通り「小柴造の粗末な家に、假の宿りをするやうに、たゞ暫しの閒住むだけである。」といつたやうな閒に合せに造られたやうに見えてゐる御住居であるけれども、それはまた簡略といふ方面に於て、上品に趣を添へて造られてゐる。嘗ては榮華をつくして樂しく遊ばれた、あの攝津の國の水無瀨殿を思ひ出されるにつけても、あまりに御境遇の變化がひどい爲に、これは夢であるかのやうにお感じなされたことであらう。

「**人離れ里遠き島の中**」　一說に、「島の中の、人里遠く離れたところ」と解する。

「**海づら**」　海に面したところ、の意で、海岸・海邊。一に、海面(海)の意にとる。

「**少しひき入りて**」　少し內地の方に入りこんで。

「**山かげにかたそへて**」　山の陰に片一方を寄せかけて。

山かげ　山の北側。山陽の對である。

「**大きやかなる**」　大きな。

「**たよりにて**」　たよりにして。もたせかけて。利用して。

「**けしきばかり**」　不思議と思ふほど。なみ〳〵でなく。ひどく。

けしき　「怪しき」である。　一說に、「御殿といふ形ばかりで」とも解くが、如何。

「**ことそぎたり**」　手數を省いて簡略にしてある。「事殺ぐ」の義。

「**柴のいほりのただしばしと**」　「柴葺の小家に假の宿りをするやうに、ほんの一時住むだけである。」といつたやうな。新古今集に、西行の歌として「いづくにも住まれずばたゞ住まであらん、柴の庵のしばしなる世に。(柴の庵に假の宿りをするやうな短い人生のことであるから、どこにも安住することが出來ないのならば、安住しないで、雲水の身となつて暮さう。)」とあるによつて書いたものである。

柴の庵　「粗末な御住居」といふ意味を持つてゐると同時に、又次の「しばし」といふ語を喚び出す爲の序詞ともなつてゐる。

「**かりそめに見えたる御やどり**」　閒に合せのやうに見える御家。

「**さる方に**」　それはまたそれで。それ相應に。その粗末な方面の家相應に。

「**なまめかしく**」　氣をきかせて。上品に。優美に。

「**ゆゑづきて**」　由緒ありげに。趣を添へて。奧ゆかしげに。

「**しなさせ給へり**」　爲成させ給へりで、御造りなしになつてゐる、即ち、お造りあそばされてゐる、の意。

「**水無瀨殿**」　攝津國三島郡島本村の水無瀨といふ所にあつた離宮。後鳥羽上皇は、昔此處で榮耀榮華をつくして遊ばれたのである。

「**夢のやうになむ**」　下に「おぼす」を補つて解するがよい。

【はるばると見やらるる海の眺望。……吹きくるを聞しめして】　遙かに見渡される海の眺望は(海上がはるかに見渡されるにつけても、二千里外の遠い所までも殘りなく眺められるやうな心持がして、遠い京都にをる人々を思ひやられる事によつて、白樂天の詩句の趣を、今更のやうに、しみ〴〵とお感じなされた事であらう。さて風のひどく吹きくる音をお聞きなされて、次の歌をお詠みになつた。

「**二千里の外ものこりなき心地する**」　二千里外の遠いところまでもよく見える心地がする。隱岐から海上を眺めやりなされる御心を、白樂天の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心。」とある意によつて、描寫し申したのである。

「今更めきたり」　今更のやうに感じられる。此の景色について、白樂天の詩句の風情を思ふのも今更のやうに覺える、といふ意。

「**潮風**」　海上から吹いて來る風。

「**こちたく**」　ひどく。はげしく。「事痛し」の約。

【我こそは新島もりよ、云々の歌】　自分こそは、新に此の隱岐の島にうつつて來て島守となつたものであるぞよ。されば、隱岐の海を吹き渡る浪風よ、氣をつけて荒く吹かないやうにしてくれ。

「**おき**」「沖」と「隱岐」にかけてある。

【同じ世にまたすみのえの月や見む、云々の歌】　自分は今

こそ、あの住吉の月を餘所にして遠い隱岐の國に島守となつてゐるが、同じ一生の中に、またあの住吉の美しい月が見られるであらうか、どうかして見たいものである。

「**月や見む**」　月が見られるであらうか。

「**今日こそ**」　このこその結びは、おきの中にこめてしまつたのである。

「**同じ世に**」　存命中に。

「**すみのえ**」　攝津の住吉のこと。吉は、えともよしとも讀む。そして、此のすむは「世に住む」と「月が澄む」とにかけてある。

「**おき**」「置き」と「沖」と「隱岐」とにかけてある。

一〇　むらさめの露（三）

年もかへりぬ。所所浦浦あはれなる事をのみおぼしなげく。佐渡院あけくれ御行をのみし給ひつつ、猶さりともとおぼさる。隱岐には、浦よりをちのはるばると霞みわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方かきつくしおもほしいづるに、ゆくへなき御涙のみぞとどまらぬ。

うらやまし長き日影の春にあひて、
　汐くむあまもそでやほすらむ。

夏になりて、萱葺の軒端に五月雨のしづくいと所せきも、御覽じなれぬ御心地に、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふくかやが軒端に風すぎて、
　しどろにおつるむらさめの露。

〔佐渡院〕〔隱岐には〕〔をち〕〔ゆくへなき御涙〕〔所せし〕〔しどろに〕〔むらさめ〕

○明治大學豫科

要旨　翌年の春夏に於ける後鳥羽上皇の御感想を記してある。猶、土御門上皇や順德上皇や、其の他の皇子方のことも附記してある。

釋義

【年もかへりぬ。所所浦浦……おぼしなげく】　年も立ちかへつて承久四年となつた。諸所の里や海邊においでになる三上皇や皇子方は、あはれな御境遇をのみ悲しくお思し召してお歎ぎなされた。

「**所所浦浦**」　三上皇や皇子達を直接に指さないで、その場所を以て代表させたのは、間接にいつて敬意を持たせたもの。下の「隱岐には」も同樣で、後鳥羽上皇を間接的に言ひあらはしたのである。

おぼしなげく　**おぼす**は「おもふ」の敬語。それ故「なげく」に敬語が添へてない。

【佐渡院あけくれ……猶さりともとおぼさる】　佐渡の島においでになる順德上皇は、朝夕佛道の修行ばかりして、今こそかうしてゐるが、それでもなほ、今に都へかへることも出來ようかと、それを頼みにお思ひなされてゐた。

「**御行**」　佛道を修行なさること。

【隱岐には……汐くむあまもそでやほすらむ】　後鳥羽上皇に於かれては、海濱から、遠方の方まで一面にかすんでゐる空をじつと御覽になつて、過去の事を殘りなくお思ひ出しになると、前途如何になりゆくかと案ぜられて落ちる涙が、果しなく出て止めようにも止まらない。そこでこのやうな歌をおよみになつた。

あゝ美しい事である。汐を汲む海人は年中袖をぬらして居るわけであるが、この日の永い春にあへば、その汐にぬれた袖をほしてかはかす事であらう。然るに自分は常に悲しい思にかき暮れて、涙にぬれた袖を乾かす時がないのだ。

「**をち**」　遠方。

「**過ぎにし方**」　過去の事。

「**かきつくし**」　殘りなく。いろ〳〵と。

かき　接頭語。

「**ゆくへなき御涙**」　前途はどうなるだらうかと悲しく思はれて落ちる御涙。

【夏になりて……。……しどろにおつるむらさめの露】　それから夏になつて、萱葺の軒端に五月雨のしづくが、盛んに滴り落ちたが、その風情を、まだあまり御覽なされたこともないといふやうなお心持で、如何にも一風かはつてゐて、物珍しくお思ひになつた。そして、かう御即詠なされた。

今日は端午の節句なので、この粗末な萱葺の屋根にも菖蒲が葺いてあるが、この家の軒端を風が吹きすぎて、それが爲に五月雨の雫が、ぽたり〳〵と亂れて落ちる。あゝ之も變つた風情があつておもしろい。

「**所せし**」　頻繁である。餘り數が多い爲に、場所が狹く感じられるといふのが原義である。茲は、雨の繁く滴り落ちる事をいふ。

場合によつては、「窮屈である」と解する。

「**さまかはりて**」　一風かはつて。

「**あやめふく**」　五月五日の節句に、菖蒲を葺き飾ることをいふ。

「**しどろに**」　整はないさま。亂れてゐるさま。

「**むらさめ**」　一むらづつ降り過ぎる雨のことであるが、玆では、五月雨のことをいつたのである。

一一　最明寺入道

時頼朝臣は、康元元年に頭おろして後、忍びて諸國を修行しありきけり。それも國國の有樣人の愁など委しくあなぐり見聞かむの謀にてぞありける。あやしのやどりに立寄りては、その家ぬしがありさまをとひ聞き、ことわりある愁などのうづもれたるを聞きひらきては、我はあやしき身なれど、むかしよろしき主をもち奉りし、いまだ世にやおはすると、消息奉らむ。もてまうでて聞え給へ。

などいへば「なでふ事なき修行者の、何ばかりかは」。とは思ひながら、いひあはせて、その文を持ちてあづまへ行きて、しかじかと敎へしままにいひて見れば、入道殿の御消息なりけり。「あなかまかま。」とて、永く愁なきやうにはからひつ。佛神などのあらはれ給へるかとて、皆額をつきて悅びけり。かやうの事すべて數知らずありしほどに、國國も心づかひをのみしけり。最明寺入道とぞいひける。

〔**朝臣**〕〔**修行**〕〔**あなぐる**〕〔**あやしのやどり**〕〔**ことわりある愁**〕〔**よろしき主**〕〔**いまだ世にやおはすると**〕〔**消息奉らむ**〕〔**もてまうでて聞え給へ**〕〔**なでふ事なし**〕〔**何ばかりかは**〕〔**あなかまかま**〕〔**心づかひ**〕〔**入道**〕

○外國語學校

要旨　北條時頼が諸國行脚に託して、民情を視察したことを記してゐる。

釋義

【時頼朝臣】　鎌倉五代の執權北條時頼。

「**朝臣**」　姓（百官諸臣に賜ひて尊卑をあらはすもの）の一で、八姓中の第二に位する。そして後世は、三位以上には、藤原朝臣といふやうに氏の下に置いて名をいはず、四位の人には、榮平朝臣のやうに名の下に置き、五位の人には藤原朝臣某といふやうに、氏と名との間に置いたのである。

【康元元年】　皇紀一九一六年。人皇第八十九代後深草天皇御治世の年號。

【頭おろして】　剃髮（落飾ともいふ）して。最明寺で剃髮して佛道に入つたことをさす。

【忍びて】　かくれて。內密に。

【修行しありきけり】　佛道修行をしてあるいた。

「**ありき**」　あるきの古い形。

「**修行**」　佛道を修め行ふこと。玆では、佛道を修め諸國を遍歷すること、卽ち行脚の意である。

【それも】　諸國を修業し歩いた事も。

【人の愁】　人々のなげき・人々の困つてゐること。

「**愁**」　玆では、暴惡非道の者の爲に、人民の愁歎してゐることを指したのである。

【あなぐり見聞かむの】　「探り調べて見たり聞いたりしようといふ爲の」の意。

【あやしのやどりに立寄りては、……皆額をつきて悅びけり】　賤しい家に立寄つては、その家の主人の樣子を尋ね聞き、正當な理由のある訴訟などの、役人どもが取上げてくれない爲に泣寢入になつてゐるのを聞き出しては、「拙僧は賤しい身分の者であるけれども、昔は可成りな主人にお仕へ申してゐましたが、まだその御方は存命してゐられるかも知れぬから、その御方に手紙を差上げよう。この手紙を持つていらつしやつて、困つてゐる事情を申し上げなさい。」などと、いふと、さういはれた人たちは「別にたいしたこともない修行者の手紙などは、どれほどのきゝめがあらうか。」と半信半疑ながら、この手紙を貰つた人たちが、互に相談しあつて、その手紙を携へて、鎌倉にいつて、かく〳〵と云へと修行者（時頼）が敎へてくれた通りに、手紙を宛てた人に會つて話をして手紙を渡すと、それは時頼入道殿のお手紙であつた。その人は「あゝ、やかましい〳〵。」と制止して置いて、書面持參者のために、時頼の手紙通りに、永久に困ることのないやうに取計つてやつた。そこでそれ等の人々は、「神や佛などが假りに此の

世に現れて、自分達を救つて下さるのかと思つて、丁寧に禮拜して悦んだ。

「あやしのやどり」　賤しい宿所（家）。このあやしは、粗末な・みすぼらしい、などの意。

「家ぬし」　家主・主人。

「ことわりある愁」　正當な愁訴。道理のある訴訟。

此の愁には、訴へる意がある。

「うづもれたる」　有耶無耶に葬られてゐる。即ち、奸惡な役人の爲に妨げられて、上聞に達せずにゐる訴訟のことをいつたのである。

「聞きひらきて」　聞き出しては。

「あやしき身」　いやしい身分のもの。

「よろしき主」　可なりな主人。相當な主人。

此のよろしは、まあ善い・惡くはない・相當である、といふ位の意で、消極的である。之に對して「よし」は、美い・立派である、などの意で、積極的である。

「いまだ世にやおはすると、消息奉らむ」　まだこの世に生きてをられるかも知れぬと思ふから、御手紙を差上げよう。

消息　おとづれの手紙。

「もてまうでて」　持つて行つて。

「聞え給へ」　事情を申し上げなさい。

「なでふ事なき修行者の何ばかりかは」　「別にたいしたこともない行脚僧が、何ほどの事が出來よう」の意にもとる。

なでふ事なき　何といふ事もない・別にたいした事もない・いふに足らない。なでふ　「なんでふ」の約で、又「なんでふ」は「なにといふ」の約。

何ばかりかは　反語法。何ほどの事もあるまい。どれほどの效力があらう。（一に、たいした事は出來はしない。）

「いひあはせて」　手紙を貰つた人達が申しあはせて。

「あづま」　關東。茲は、鎌倉をさす。

「しかじかと教へしままに」　斯く〳〵といへと時頼の教へた通りに。

「いひて見れば」　その人に會つて話して見ると。

「入道殿」　入道時頼をさす。

入道　佛道に入ること。又、その人。古昔は、佛道に入つた三位以上の人の稱。四位以下の人の場合は、新發意と稱する。

「あなかまかま」　あゝ、やかましい〳〵・あゝ、靜かにしろ靜かにしろ、などの意。役人が事の面倒になるを懼れ、訴訟人を制止して置いて、時頼の手紙通りに處理する所。（一説には、役人等が、時頼の手紙である事を訴人に聞かれてはならぬといふので、互に

制止しあふ意にとる。）あな　は、感動詞。あい、といふに同じ。

かま　は、「かまし（喧）」といふ形容詞の語幹である。

「ながく」　いつまでも。永久に。

「愁なきやうに」　こまることのないやうに。心配のないやうに。

「額をつきて」　額を地につけて・丁寧にお辭儀して。非常に敬意をあらはす有樣である。

【かやうの事……心づかひをのみしけり】　かういふ類のことが、すべて無數にあつたので、諸國の守護・地頭等も施政の失態がないやうにと、ひたすら注意を怠らなかつた。

「ありしほどに」　あつたので。

「國國も云々」　諸國の守護・地頭（諸國の政廳の役人）等も暴政などをしないやうに、ひたすら注意した。

心づかひ　注意。

三　志賀の浦波

大納言師賢は都へまぎれおはすとて、夜ぶかく志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月隈なく澄みわたりて、寄せかへる浪の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへ、とりあつめ心細し。

思ふ事なくてぞ見ましほのぼのと
ありあけの月の志賀の浦波。

その後からうじてぞ笠置へ辿りまゐられける。

〔まぎれおはす〕〔有明の月〕〔隈なし〕〔とりあつめ心細し〕〔ほのぼのと〕

○專門學校入學資格試驗

要旨　藤原師賢が、比叡山から志賀の浦邊を通つて、京都に還り、後遂に笠置山に赴いたことを記してゐる。

釋義

【大納言師賢は、……笠置へ辿りまゐられける】　花山院大納言師賢卿は、敵に氣附かれぬやうにごまかして都へおいでなさらうと思はれて、まだ夜明けにはよほど間のある頃、琵琶湖畔の志賀の浦をお通りなされたところ、有明の月が、少しの曇りもなく照りわたつてゐて、浦邊に打寄せては返す波の音も淋しい上に、なほ松吹く風が身にしみるなど、色々の事があつて、卿は心細く感じられたことであつた。そこで、

心に何の憂もなくて、このやうにほんのりと明け行く空に殘つ

てゐる有明の月に照された美しい志賀の浦の波の景色を見たいものである。然し憂ある此の身には、折角のこのよい景色を眺めても、たゞ心細く感じるだけで、たのしくもない。

と述懐された。その後、やう〳〵の事で、笠置山へ道をさぐりさぐり參られた。

「**大納言師賢**」　藤原氏。家を花山院と號した。元弘元年に、北條高時が、後醍醐天皇をお遷し申さうとした時、袞龍の衣を着け、帝と稱して延曆寺に往き、それから、本文にあるやうに、笠置山に行き、遂に捕へられ、翌年下總に流されて薨去。文貞公と諡された。

「**まぎれおはずとて**」　敵に氣附かれぬやうに、ごまかして（人目をごまかして）おいでなさらうとして。

「**夜ぶかく**」　曉までによほど時間のあることをいふ。深夜に。

「**志賀の浦**」　近江國滋賀郡大津の湖畔。比叡山の阪本を下れば、湖畔に出る。そこが志賀の浦である。

「**有明の月**」　月が空に殘りながら、夜の明ける頃の月。明方に殘つてゐる月。陰曆十六日以後の月は、夜が明けてもなほ月が空に殘つてゐるからいふ。普通には二十日から廿五日の月をいふ。

「**隈なく**」　すこしの曇もなく。月の明るく澄みわたつた形容。

「**とりあつめ**」　有明の月・浪の音・松風など、あれやこれやといろ〳〵の事が集つて、の意。

「**思ふ事**」　心配事。

「**見まし**」　見たい。

「**ほのぼのと**」　ほんのりと。

「**ありあけ**」　この**あけ**には、「ほのぼのと夜が明ける」をかけてゐる。

一三　相模守高時

相模守高時といふは、病によりて、いまだわかけれど一とせ入道して、今の世の大事どもいろはねど鎌倉の主にてはあめり。心ばへなどもいかにぞや、うつつなくて、朝夕好む事とては、犬くひ・田樂などをぞ愛しける。これは、最勝園寺入道貞時といひしが子なれば承久の義時よりは、八代にあたれり。

〔**いろふ**〕〔**あめり**〕〔**いかにぞや**〕〔**うつつなし**〕〔**犬くひ**〕〔**田樂**〕

○東京高等師範學校

要旨　北條高時の性質や趣味などについて記してゐる。

釋義

【相模守高時といふは……鎌倉の主にてはあめり】　相模守高時といふ人は、病氣の爲に、まだ若年ではあつたけれども、ある年（先年）、佛門に入つて、現今では、天下の政治などには關係しない（天下の政務などは取扱つてゐない）けれども、鎌倉で最も勢力のあつた人のやうである。

「**相模守高時**」　鎌倉十四代の執權北條高時。

「**病によりて**」　病氣の爲に。下の「入道して」にかゝる。

「**一とせ**」　或年。高時は嘉曆元年二月に、年二十四で、病氣の爲に出家し、法名を崇鑒と號した。

「**世の大事**」　天下の政治。

「**いろふ**」　關係する。取扱ふ。

「**鎌倉の主**」　北條氏の嫡流で、鎌倉で最も勢力があつたから、主といふのである。

「**あめり**」　あるやうだ。「あるめり」の「る」の省かれたもの。「あんめり」ともいふ。

【心ばへなどもいかにぞや……田樂などをぞ愛しける】　氣質などは、どうしたものか、正氣がなく氣違ひじみてゐて、朝夕好んでする事といつては、鬪犬や田樂の舞などを愛してゐた。

「**心ばへ**」　心のおもむき。性質・氣質。

「**いかにぞや**」　どうしたのであるか・どういふわけか・どうしたものか、などの意。副詞句である。

「**うつつなくて**」　正氣で多くて。氣違ひじみてゐることをいふ。

「**犬くひ**」　犬のかみあはせ。犬を喧嘩させること。鬪犬。

「**田樂**」　歌舞の一種。もと農夫が耕作の勞を慰める爲に奏した一種の舞樂であつたが、後には、一種の藝となつて、專ら、法師の業となつた。囃子に、鼓・ささら・銅拍子などを用ひて、歌つたり、舞つたり、手玉を取つたり・高足に乘つて輕業などをした。鎌倉から足利時代の頃盛に行はれ、遂に本座・新座などの流派に分れた。

【これは最勝園寺入道貞時……八代にあたれり】　この高時は、最勝園寺入道貞時といつた人の子であるから、承久の亂の時の義時からは、八代目の孫に當つてゐる。

「**貞時といひしが子**」　貞時といつた人の子、の意。即ち、「いひし」の下に「人」を補つて解くがよい。

「**貞時**」　鎌倉九代の執權

「**承久の義時よりは八代にあたれり**」

氏—經時(四)—時頼(五)—時宗(八)—貞時(九)—高時(一四)。

（時政(一)）—義時(二)—泰時(三)—時

（右肩の數字は、執權の順を示す。）

承久　人皇第八十四代順德天皇御治世の年號。一八七九年―一八八一年。

義時は、承久元年に執權となり、第八十六代後堀河天皇の元仁元年（一八八四年）に、年六十二で卒したので、其の年、泰時が執權になつた。そして彼は、承久三年（承久の亂）に三上皇を遷幸し奉つたのである。

一四　楠木兵衛正成

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより、兵ども參りつどふ中に、事のはじめより頼みおぼしたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内國に、おのがたちのあたりをいかめしくしたためて、此のおはします所、若し危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意しけり。あづまのえびすども、やうやうせめ上るよし聞ゆ。もとより京にある武士どもも、我先にときほひまゐる。

〔笠置殿〕〔つどふ〕〔すくよか〕〔たち〕〔したたむ〕〔御幸をもなしきこえむ〕〔京にある武士〕〔きほひまゐる〕

○東京高等師範學校
○海軍兵學校

要旨　元弘の亂に於ける楠木正成の忠勤振を記したもので、即ち、主として、笠置の行在所が萬一危くなつた時には、自分のところへ後醍醐天皇をお迎へ申さうとその用意をしてゐたところを述べてゐる。

釋義

【笠置殿には、……楠木兵衛正成といふものあり】　後醍醐天皇のあらせられる笠置山の行在所には、大和・河内・伊賀・伊勢などから、武士どもが參集する中に、今度の事件の當初から、天皇が頼みにお思ひになつてゐた楠木兵衛正成といふ者があつた。

「**笠置殿**」　笠置山の皇居。後醍醐天皇の在らせられた笠置山の行在所。比叡山に行幸あらせられる筈であつた後醍醐天皇は、俄かに方面を變更せられ、木幡山・木津・奈良・和束等を經て、笠置寺においでになり、そこを行在所とお定めになつたのである。

「**參りつどふ**」　參集する。

「**事のはじめより**」　北條氏討滅の御企ての當初からの意。

「**頼みおぼしたりし**」　頼みにお思し召された。

「**楠木兵衛正成**」　河内の人。正康の子。「兵衛正成」とあるが、實は、「左衛門尉」である。

【心猛くすくよかなるものにて……用意しけり】　この正成は心が勇猛で剛健な者で、河内の國の我が屋敷の近邊を、嚴重に防禦設備して、今、帝のおいでになる笠置山の皇居が、萬一にも危くなるやうなことがあつた場合には、自分の屋敷に御出ましになるやうに致さうと用意した。

「**すくよか**」　しつかりした。剛健な。

「**おのがたちのあたり**」　自分の居館（屋敷）のある近邊。

たち　館のこと。　茲は、赤坂城をさす。

「**おごそかにしたためて**」　嚴重に防禦の設備をして。城柵を嚴重に構へたこと。

「**此のおはします所**」　後醍醐天皇の在する笠置山の皇居（行在所）。

「**御幸をもなしきこえむと**」　おいでを願はう、の意。おでましになるやうに致さうと。　行幸を仰ぎ申さうと。お迎へ申さうと。

【あづまのえびすども、……我先にときほひまゐる】　鎌倉の北條方の武士どもも次第に都に攻めのぼつて來るといふ噂であつた。また最初から京都の六波羅にをつた北條方の武士どもも、我先にと先を爭つて笠置山に攻寄せて來た。

「**あづまのえびすども**」　鎌倉の北條方の武士たちを指す。

えびす　は、「夷」で、蠻人の意。武士をいやしんでいふ語。

「**やうやう**」　次第に。だん〳〵。

「**せめ上る**」　都の方に攻めて來る。

「**もとより京にある武士**」　以前から都にゐた鎌倉武士。即ち、六波羅に居る北條方の武士をいふ。

「**我先にと**」　われがちになつて。先を爭つて。

「**きほひまゐる**」　先を爭つて攻めよせて來た。

きほふ　競ふ意。

一五　笠置落

あづまの武士ども、雲霞の勢をたなびかし、上る由聞ゆれば、笠置にもいみじうおぼしさわぐ。もとよりいと險しき山のつづらをりを、えもいはず木戸・逆茂木・石弓などいふ事どもしたためらる。さ

りとも、たやすくは破れじと、頼ませ給へるに、後の山より、御かたきどもくづれ參りて、木戸ども燒拂ひおはしますあたり近く、既に煙もかかりければ、今はいかがせむにて、あやしき御姿にやつれて、たどり出でさせ給ふ。座主の法親王御手を引き奉り給へるも、いとはかなげなる御有様なり。

〔雲霞の勢〕〔つづらをり〕〔えもいはず〕〔木戸〕〔逆茂木〕〔石弓〕〔したためらる〕〔さりとも〕〔くづれ參る〕〔今はいかがせむにて〕〔あやしき御姿〕〔やつる〕〔座主の法親王〕〔はかなげ〕

○海軍經理學校
○東京高等蠶絲學校
○東京高等師範學校

要旨　官軍利なくして、後醍醐天皇が、笠置をお落ちになつたことを記してゐる。

釋義

【あづまの武士ども、……石弓などいふ事どもしたためらる】　東國の武士（鎌倉の北條方の武士）どもが、雲霞のたなびくやうな澤山の軍勢を繰りだして、京都の方に攻上るといふ噂が聞えたので、笠置山にあらせられた後醍醐天皇方に於ても、非常に狼狽して騷ぎ立てた。元來、此處はまことに險阻な屈折の多い坂路であるのに、その上なほ、言葉では形容の出來ぬほど嚴重に、城の門やら、鹿砦やら、石弓などいふものが準備されてゐた。

「あづまの武士」　東國の武士。鎌倉の北條方の軍勢を指す。

「雲霞の勢をたなびかし」　雲霞のたなびくやうな澤山な軍勢を以て、の意。

たなびかす　雲霞の緣語。

「おぼしさわぐ」　狼狽して騷ぐ意。

「つづらをりを」　折屈つた坂路であるのに。

つづらをり　屈折の多いこと。九十九折・葛折ともかく。

を　「なるを」と同意。

「えもいはず」　何ともいひやうのないほど。茲は、「甚だ嚴重に」の意。

「木戸」　城門。きは城、どは門の義。木戸と書くのは借字である。

「逆茂木」　敵の侵入を防ぐために設ける防禦物。鹿の角のやうになつた剌棘（いばら）の枝を立てて垣を結んだもの。鹿砦の類。

「石弓」　石を彈き飛ばして敵を射殺す武器。銃などのない頃の重要な飛道具。

「したためらる」　用意される。準備される。

【さりともたやすくは破れじと、……いとはかなげなる御有様なり】　それであるから、たとひ大軍が攻寄せて來ようとも、容易には攻破られることはあるまいと、頼みにして居らたれのに、案外にも、御殿の後の山から、朝敵どもが、どつと入り亂れて押寄せて參つて、城の門などを燒き拂ひ、天皇の御座所の附近にも、もう煙が吹きかけて來たから、今はどうにも仕様がないといふ有様で（今は如何ともしがたいので）、天皇は、粗末な御服裝に改めて、如何にも見すぼらしい御姿となられて、途をさがし〳〵此處をお出かけになつた。天台座主であられる法親王が、帝の御手をお引き申し上げられたのも、たいさう頼みになりさうもない御有様であつた。

「さりとも」　それにしても・いくらなんでも。たとひ大軍が攻寄せて來ても、の意。

さり　「さあり」の約。

「頼ませ給へるに」　頼みにしてをられたのに。頼みにして居られたところが、

「後の山」　笠置の御殿の後方の山。

「御かたきども」　朝敵ども。

「くづれ參りて」　どつと入り亂れて押寄せる。

參る　は、賤所から貴所へゆくこと。

「おはしますあたり近く」　後醍醐天皇の御座所の附近に。

「今はいかがはせむにて」　今はどうしようぞ、どうにもしやうがないといふ有様で、の意。今はどうともしがたいので。

「あやしき御姿にやつれて」　みすぼらしい御姿になられて。

あやし　古文では、よく「いやしい・みすぼらしい」の意に用ひる。

やつる　漢字では「窶」とかく。茲では、「さまかたちのあしくなる・形が變る」意。

「たどり出でさせ給ふ」　たどりは、不案内な道に迷ひながらたづねたづねゆくをいふ。

「座主の法親王」　天台座主であられた尊澄法親王。後醍醐天皇の皇子、宗良親王を申す。

法親王　佛門に入られた親王をいふ。

「はかなげなる」　たのみになりさうもない。

一六　沈みはつべき報

かの承久のためしにや、遂に隱岐國へうつし奉るべしとて、彌生のはじめの七日に、都を出でさせ給ふ。今はと聞し召す御心まどひども、いへば更なり。所所のなげき、近うつかうまつりし人人の心地ども、おき所なく悲し。御門も限りなく御心惱むべし。いとかうしも人に見えじと、かつはおぼししづむれど、あやにくに進み出づる御涙を、もてかくしつつおはします。ふりにし事を思し出づるにも、立ちかへり、また、世を安く思さむことのいとかたければ、よろづ今をとぢめにこそと、思しめぐらすに、人やりならず、口惜しき契り加はりける前の世のみぞ、盡きせず恨めしき。

つひにかく沈みはつべき報あらば、
うへなき身とはなに生れけむ。

〔承久のためし〕〔今はと〕〔いへば更なり〕〔いとかうしも人に見えじ〕〔かつは〕〔おぼししづむ〕〔あやにくに〕〔とぢめ〕〔人やりならず〕〔口惜しき契り〕〔うへなき身〕

○廣島高等師範學校

要旨　後醍醐天皇が隱岐へ御遷幸になる日の御有樣と、その御述懷とを記してゐる。

釋義

【承久のためしにや、……御門も限りなく御心惱むべし】

かの承久の亂の例にならふのであらうか、遂に後醍醐天皇をば隱岐の國へお流し申さうといふことになつて、三月の七日に天皇は都を御出立なされた。今はいよ〳〵流されることになつた（都を去られねばならぬ）と、お聞き遊ばされた時の御狼狽のいかにひどかつたかといふことなどは、申すまでもないことである。諸方にあらせられた方々（女院・中宮・親王など）の御悲歎や、さては天皇の御側近く仕へ奉つてゐた人々の悲しい心持などは、身の置き所もないほどに、切なるものであつた。天皇も此の上なく御心をお痛め遊ばされたことであらう。

「承久のためしにや」　承久の亂の時の例にならふのであらうか。承久の亂の結果、後鳥羽・土御門・順德の三上皇を、それ〴〵遠島にお流し申したことをさす。

一本に「承久のためしとにや」とある。意味は略〻同じいが、これだと、「承久の例にならふといふのであらうか」と解く。

「彌生のはじめの七日」　元弘二年（一九九二年）三月七日。

はじめの七日　十七日を中の七日、二十七日を末の七日（下の七日）といふに對して、七日を初の七日（上の七日）といふのである。

「今はと」　今はいよ〳〵流される事になつたと。又は、今はいよいよ御遷幸と。

「御心まどひ」　御心のみだれ。御心のまどひ。御狼狽。

「いへば更なり」　今更申し上げるまでもない。わかりきつたことである。いふまでもない。

「所所のなげき」　諸方においでになる方々の御悲歎。即ち、女院中宮・親王などの御なげきをいふ。

「近うつかうまつりし人人」　天皇の御側近く仕へ申してゐた人たち。近侍の方々。

「置き所なく」　どうにもしやうがなく。ゐても立つてもゐられず。

「御門」　帝。後醍醐天皇。

「御心惱むべし」　御苦慮をなされた事であらう。

【いとかうしも人に見えじと、……盡きせず恨めしき】

然しこんなにひどく悲しんでをるのを、人には見られまいと思し召して、悲しみ給ふ一方ではまた、御心をしづめようとなさるけれども、意地わるくます〳〵出て來る御涙をば、隱し〳〵しておいでになつた。かの承久の亂後、後鳥羽上皇が、隱岐で崩御ましました前例をお思ひ出しになるにつけても、御自分も同じ運命に陷るやうに感ぜられるので、都に還つて再び天下を安らかにお治めになることは、甚だ難事であるので、何事も皆、今が最後であるといろ〳〵お考へになるにつけても、かうなつたのも、他人にさせられたのでなく、皆御自分の御心からなされた事であるとはいひながら、かやうな殘念な結果になる因緣のつきまとうた前世のみを限りなく恨めしく思し召された。そして次のやうに御述懷の歌をお詠みになつた。

「いとかうしも人に見えじと」　このやうにひどく歎き悲しんで居ることをまあ、人に見られまいと。

かうしも　「かくしも」の音便。

見えじ　この えは、受身をあらはす古い助動詞。

「かつは」　一方では。御悲歎あらせられる一方では、の意。

「おぼししづむ」　御心を鎭められる。御心を御制しになる。御心を抑へられる。

「あやにくに」　生憎に。意地わるく。

「進み出づる」　ます〳〵出て來る。
「もてかくしつつ」　隱し〳〵して。
もて　動詞に冠する無意味の語。
つつ　動作の反覆繼續する意をあらはす助詞。
「ふりにし事」　過ぎ去つたこと。昔のこと。承久の昔、後鳥羽上皇が隱岐に御遷幸なさつて、その地で崩御ましましたことを指す。
「立ちかへり」　再び都に還つて。立ち　は、接頭語。
「よろづ今をとぢめにこそと」　何事も今が最後であると。今が萬事窮した時であると。
とぢめ　最後・終局、などの意。
「人やりならず」　他人からさせられたのではなく、皆自ら求めてしたことながら、の意。又は、他人のしたことでなく、自分一人の責任である、の意。
「口惜しき契り加はりける前の世」　斯樣な殘念な結果になる因緣のつきまとうた前世。又、かやうな殘念な報がつきまとうた前世。
「北條氏の討滅を企てたのは、我が心から求めてした事であるが、その結果はかういふ殘念至極な事になつた。かうなるのも皆前世の約束事であるが、それを思ふと此の前世の約束が限りもなく恨めしくてたまらぬ」の意で、天皇の御心持をあらはしてゐる。
口惜しき契　殘念でたまらない因緣。惡い宿緣。

「盡きせず」　限りなく。
【つひにかく沈みはつべき云々の歌】　最後には、このやうに沈淪して身を終へなければならぬ運命であるのならば、どうして天子といふ、至上至尊の身などに生れて來たのであらうか。かういふ目にあふくらゐなら、むしろ普通の人間に生れてくればよかつた。

一七　さまことなる御幸

御道なかばになりぬれば、御送りの者ども、上下都出でしよりも、なほ花やかに、今めかしうさうぞきかへたり。大方はあやしうさまことなる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國國に心づかひしたる氣色などはかうざまの御ありきとは見えず、いとやむごとなくなむ。さはいへど、今まで國のあるじにて、世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらむ、いとねもごろにのみつかうまつれり。いにしへの御幸どもには、かうはあらざりけりとぞ、ふるき事知れる人人、いひ侍りける。

〔今めかし〕〔さうぞきかふ〕〔さまことなる御幸〕〔御まうけ〕〔かうざま〕〔名殘〕〔いにしへの御幸〕
○小樽高等商業學校

要旨　後醍醐天皇が隱岐へ御遷幸の際、鑾輿御通過の沿道に於て、國々が天皇を、誠意を盡くしてお迎へ申したことを記してゐる。

釋義

【御道なかばになりぬれば、……いとやむごとなくなむ】
京都から隱岐の國までの御道程が半ばになつたから（御道程を半ばお進みになつたので）、後醍醐天皇を護送申し上げた者どもは、官位の高い者も低い者も皆、都を出立した時よりも一層華美に（はでに）、當世風に裝束しかへた。大體に於て、配所に赴かれるのであるから、御裝束・御行列なども粗末な異式の行幸であるけれども、御道中の設備を國々で深く御注意申し上げてゐる樣などは、このやうにお流されになる行幸とは思はれい程、非常に懇切であつた。
「御道なかばになりぬれば」　京都から、隱岐の國までの御道程が半ばに達したから。
「御送りの者ども」　帝を護送し奉つた者共。
「今めかしう」　當世風に。
「さうぞきかへたり」　裝束をかへた。裝束を著かへた。
さうぞく　裝束を、か行に活かせたものである。裝束する意。
「大方は」　大體に於て。まづ。
「あやしう」　いやしく・みすぼらしう。玆は、御裝束や御行列などの粗末なことをいふ。
「さまことなる御幸」　異式の行幸。變則の行幸。鎌倉から御遷幸を迫り申した爲め、配所に赴かれるのだから、かくいふ。
「道すがらの御まうけ」　道中の設備。鑾輿御通過の沿道の所々に於て、御休憩所や御宿舍などの設備をしたことをいふ。
「國國に心づかひしたる氣色」　國々で深く御注意申し上げたありさま。
「かうざま」　このやうな。「かくざま」の音便。配流されておでましになる、の意。
「やむごとなくなむ」　懇切であつた。鄭重であつた。下に「ある」などの結詞が省かれてゐる。
やむごとなし　（一）止みがたい・打捨てておけない。（二）常竝でない・格別である。（三）甚だ尊い。玆は、第二義。
【さはいへど、今までの國のあるじにて、……いひ侍りけ

る】今こそ遠島へ御遷幸とはいふものの、今まで一國の君主として天下を甚だよくお治めになつてゐた結果であらうか、實に懇切にお世話申しあげたものである。その昔後鳥羽上皇が隱岐に遷幸になつた時などには、此のやうに設備が行屆いてはゐなかつたと、昔の事を知つてゐる人々が言つてゐた。

「さはいへど」 御遷幸とはいふものの。

「名殘」 餘波。物事が過ぎ去つて後、猶、その樣の殘つてゐることをいふのであるが、玆では「結果・むくい」などの意に見る。

「いにしへの御幸」 承久の亂の結果、後鳥羽上皇が隱岐へお遷されになつた事などを指す。

一八　おはしまし所

海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺をよろしきさまにとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさはかくてあるべき御身ぞかしと、おぼししづまるほど、なほ夢の心地して、いはむ方なし。そこら參りしつはものどももまかづれば、かいしめりのどやかになりぬる、いとど心ぼそし。昔こそ受領どもも、任のほど、その國をしたため行ひしか。この頃はただ名ばかりにて、いづくにも守護といふものの、目代よりはおぞましきをするゑたれば、武家のなびきにてのみ、おほやけざまの事は、よろづおろそかにぞしける。

〔國分寺〕〔よろしきさまに〕〔おはしまし所〕〔今はさは〕〔そこら〕〔まかづ〕〔かいしめり〕〔受領〕〔任のほど〕〔したため行ふ〕〔守護〕〔目代〕〔おぞまし〕〔武家のなびき〕〔おほやけざまの事〕

○專門學校入學資格試驗

要旨　隱岐の國に於ける後醍醐天皇の行在所の御有樣及び當時に於ける守護の態度を記してゐる。

釋義

【海づらよりは……いとど心ぼそし】海邊から少し陸へはひつた所にある國分寺といふ寺をよいやうに手を加へて、其處を行在所と定めた。もう行在所も定まつてしまつた上は、「吾はこゝでかうして淋しく月日を送るべき身の上であるのであるよ。」と、思し召して、御心が落著かれるにつけても、やはり夢のやうな御心持がして、何ともいひやうのないほど、心細く思はれるのであつた。御供として來てゐた澤山の武士どもも退出すると、ひつそりとして物靜かになつたので、帝は猶一層心細くお感じなされた。

「國分寺」 聖武天皇の勅願によつて諸國に置かれた寺。隱岐の國のは、知大郡別府村にあつた。

「よろしきさまに」 適當なやうに。然るべきやうに。

「とり拂ひて」 手入をして。塀などを取除いたり室を增築したりなどして、御所とするに適當なやうにするをいふ。

「おはしまし所」 行在所。後醍醐天皇のゐらせられる所。

「今はさは」 もうさうなつた上では。すでに行在所も定つてしまつた上は、の意。

「かくてあるべき身」 かうして行在所で月日を送らるべき御身の上。

「おぼししづまる」 御心が落著く。

「なほ夢の心地して」 御道中では、落著き所も定まらず夢のやうな御心地でゐられたが、行在所が定まつて御心が落著かれても、やはり夢心地でゐられたのである。

「そこら」「こゝら」と同じ。澤山の意。

「まかづ」 退出する。玆は、京都へ還つたことをいふ。

「かいしめり」 ひつそりとして。

かい「かき」の音便。

しめる しつとりする・活氣がなくなる・靜かになる、などの意。

【昔こそ受領どもも、よろづおろそかにぞしける】昔こそ國守たちも、任期の間は、自分の任國に赴いて、その國の政務を執り行つたけれども、近頃は、國守といつても、それは單に表面上の名前ばかりで、實際に自ら赴任することなく、目代(國守の代官)をつかはしてその國の政務を執り行はしめてゐたのであるが、何處の國にも、幕府から國司の副屬として、守護といふもので、目代よりは一層恐ろしい役人を置いたから、地方民などは、何事も武家の方にばかり畏服して、朝廷の方に對することは、萬事粗略にした。

「受領」 國守の最高官。之は朝廷から任ぜられるのである。

「任のほど」 定まつた任期の間。國守の任期は、四年間であつた。

その國をしたため行ひしか「自分の任國の政治を處理した。

したため行ふ 政治を處理する。政務を執り行ふ。

しか 過去の助動詞「き」の已然形。上の「昔こそ」の結である。

「この頃」 この後醍醐天皇の御代の頃。

「名ばかりにて」　名義ばかりで。國守の名義はあつたが、自分は任國に赴いて政治を執ることなく、代官（目代）をつかはして政治をさせたことをいふ。

「いづくにも」　どの國にも。

「守護」　武家時代の職名。國司に副屬して、兵馬及び刑罰に關する事柄を取扱つたもの。文治元年に、源頼朝が朝廷に奏請して置いたのが始である。

「目代」　國守の代理者。國守が任國に赴かずに、京都に留つてゐて、その子弟とか家人・郎黨などを、隨意に任國に遣して、國守の事務を代理させたのである。

「おぞましきをすゑたれば」　おそろしい役人を置いたから。目代よりも守護の勢力が強くて恐れられてゐた故に、かくいふ。

おぞまし　「おぞし」におなじ。情が強くおそろしい意。

すゑたれば　幕府がおいたので。

「武家のなびきにてのみ」　地方民が幕府の方にばかり畏服して。一に「武家の權勢に壓倒風靡されるばかりで」と解する。

「おほやけざまの事」　朝廷の方に對すること。租稅・課役などのことをいふ。

おほやけ　は、公。朝廷のこと。

「よろづおろそかにぞしける」　萬事粗略に取扱つた。

一九　大塔宮

大塔の法親王、楠木の正成などは、なほ同じ心にて世を傾けむ謀をのみめぐらすべし。正成は、金剛山千早といふ所に、いかめしき城をこしらへて、えもいはず猛き者ども、多く籠り居たり。さて大塔の宮の令旨とて、國國の兵を語らひければ、世に恨あるものなど、ここかしこにかくろへばみて居るかぎりは、聚りつどひけり。宮は熊野にもおはしましけるが、大峰を傳ひて、しのびしのび、吉野にも高野にもおはしまし通ひつつ、さりぬべきくまぐまには、よく紛れものし給ひて、猛き御有樣をのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、つき隨ひきこゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅にもあづまにも、いと安からぬ事ともてさわぐ。

〔いかめし〕〔令旨〕〔語らふ〕〔かくろへばむ〕〔さりぬべき〕〔よく紛れものす〕〔かしこし〕〔つき隨ひきこゆるもの〕

○高等學校

要旨　大塔の宮と楠木正成との活動振に就て記してゐる。

釋義

【大塔の法親王、楠木の正成などは、……聚りつどひけり】　大塔の宮尊雲法親王や楠木正成などは、やはり同じ心で、北條氏の世をくつがへさうとする謀ばかりを計畫したことであらう。正成は金剛山の千早といふ處に嚴重な城を築いて、そこには、非常に勇猛な武士どもが澤山に立籠つてゐた。そして、大塔の宮の仰言であるといつて、諸國の武士を說きつけて味方に引入れたので、北條氏の世に對して恨を抱いてゐる者などの、此處彼處に隱れてゐるといつたやうな連中は、殘らず參集した。

「大塔の法親王」　尊雲法親王。後醍醐天皇の皇子、護良親王を申す。

「世を傾けむ謀」　北條氏の世をくつがへして、後醍醐天皇の御世にかへす謀。

「金剛山千早」　河内の國、金剛山の西腹にある土地。

「いかめしき」　嚴重な。

「えもいはず」　いふにいはれぬほど。えは、能くの意。それ故「えもいはず」は「能く……せぬ」で「……することが出來ない」といふ意になる。

「令旨」　おほせ。御命令。東宮・三宮・中宮・親王の仰言。

「語らふ」　說きつけて味方に引入れる。

「世に恨あるもの」　北條氏の政治に對して恨をもつてゐる者。

「かくろへばむ」　隱れてゐる樣子である。

かくろふ　隱るの延音。

ばむ　さういふ樣子があらはれてゐるといふ意味の語。

「居るかぎりは」　居るほどの者は。連中ぐらゐの意に解く。

「つどふ」　あつまる。

【宮は熊野にもおはしましけるが、……いと安からぬ事ともてさわぐ】　大塔の宮は熊野にもおいでになつたが、熊野から、大峰を傳つて、また吉野にも高野にも往き來しておいでなされて、身をお隱しになるに都合のよい場所々々では、うまく敵の目をごまかして隱れておいでになつて、勇ましい御働き振りをお示しになつたものだから、諸國の武士どもは「この御方は、非常におえらい大將軍であらせられるに相違ない。」といつて、宮にお附き隨ひ申し上げる者が非常に多くなつて行つた。それで、六波羅

でも、鎌倉でも、甚だ不安な事であると騒ぎ立てた。

「**態野**」　紀伊國東牟婁郡にある。

「**大峰**」　大和國吉野郡にある山脈。

「**しのびしのび**」　内々に。こつそりと。

「**吉野**」　大和國吉野郡にある。

「**高野**」　紀伊國伊都郡にある。

「**おはしまし通ひつつ**」　通つておいでになつて。

「**さりぬべきくまぐま**」　然るべき隅々。　玆は、身を隠すに都合のよい、といふ意。

さりぬべき　然るべき適當な。

くまぐま　隈々と當てる。隅々のこと。隈は、蔭になつた所・暗い所、などの意。

「**よく紛れものし給ひて**」　うまく隠れてお歩きになつて。

ものす　は、前後の意味に應じて、如何なる動作をもあらはし得る動詞。

「**猛き御有樣**」　勇猛なお働き振。勇ましい御振舞。

「**かしこき**」　すぐれた。えらい。立派な。

「**つき隨ひきこゆるもの**」　親王にお供を申し上げてゐる者。

きこゆ　敬意をあらはす動詞で、申すといふに同じ。

「**六波羅にもあづまにも**」　京都の六波羅にをる北條方でも、關東の鎌倉にをる北條方でも、の意。

二〇　あまの釣舟

都にも、なほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづにおぼし慰めて關守のうちぬるひまをのみうかがひ給ふに、しかるべき時のいたれるにや、御垣守にさぶらふつはものどもも、御けしきをほの心えて、靡き仕うまつらむと思ふ心つきにければ、さるべき限り語らひ合せて、同じ月の廿四日の曙に、いみじくたばかりかくろへゐて奉る。いとあやしげなるあまの釣舟のさまに見せて、夜ふかき空の暗きまぎれにおしいだす。　折しも霧いみじう降りて、ゆくさきも見えず、いかさまならむと危けれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふかたの風さへ吹きすさみて、その日の申の時に

出雲の國につかせ給ひぬ。ここにてぞ人人心地しづめける。

〔**うちぬる**〕〔**御垣守**〕〔**ほの心う**〕〔**さるべき限り**〕〔**かくろへゐて奉る**〕〔**暗きまぎれ**〕〔**念ず**〕〔**吹きすさむ**〕〔**申の時**〕

○横濱高等商業學校

要旨　後醍醐天皇が、隱岐の島を忍び出でられて出雲の國にお著きになつたことを記してゐる。

釋義

【都にも、なほ世の中……いみじくたばかりかくろへゐて奉る】　都（京都）に於ても、やはり官軍の勢が强盛で、北條氏の世になりきつてしまひさうもないといふ噂が聞えたから、隱岐に在らせられた後醍醐天皇は、賊軍が亡びて再び都にかへられる事になるかも知れないと、前途に望を抱かれていろ〳〵と御心を慰めて、警固の武士の寢て油斷してゐる隙ばかりをねらつて、此の島を逃れ出ようと思し召しておいでなされたが、さうなるに好い時機が來たのであらうか、警固の武士たちも、逃れ出ようとしてゐられる天皇の御樣子をば、うす〳〵悟つて、天皇にお附き隨ひ申さうといふ心が起つて來たから、御味方を致さうと思ふ者が相談しあつて、同年（元弘三年閏二月）の二十四日の夜明方にうまく策略をめぐらして、人目につかないやうにして、天皇をこつそりお連れ出し申し上げた。

「**都にも**」　都でも。

「**なほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば**」　まだ楠木・赤松等の官軍の勢が强くて、北條氏の手にあまつて世間が平穩になりかねてゐる（北條氏の天下になり切つてしまはない）といふ噂が聞えたから、の意。天皇が此の事をお聞きになつて意を强うされたのである。

「**よろづにおぼしなぐさめて**」　いろ〳〵と御心をなぐさめられて。即ち、「北條氏が亡び、いつか都に歸つて帝位に復されることが出來るかも知れぬと前途を樂觀なされた」ことをいふ。

「**關守のうちぬるひまをのみうかがひ給ふに**」　警固の武士が寢て油斷をする隙をばかりねらつてゐられましたところが。

關守　關所の番人。玆は、警固の武士を指していふ。

うちぬる　寢る。　**うち**は、接頭語。

「**しかるべき時**」　好い時機。逃れでるに都合のよい時。

「**御垣守にさぶらふつはものども**」　玆は、北條氏からお附け申してある武士等を指す。

御垣守　禁中の御門を守る衞士。皇室警衞の武士。

「御けしきをほの心えて」　帝がこゝを逃れ出ようと企てて居られる御樣子をほのかに知つて（うす〳〵悟つて）。

「靡き仕うまつらむと」　天皇の御心に隨つてお供申し上げようと。天皇に歸順し奉らうと。

「心つきにければ」　心が起つて來たから。氣が起つたので。

「さるべき限り」　さういふ心を持つてゐる連中だけが。お味方をしようと思ふ者すべてが。同心の者全部が。

「語らひ合せて」　謀（しの）し合せて。相談しあつて。

「同じ月」　元弘三年閏二月。

「いみじくたばかり」　うまく計略をめぐらして。非常にうまく謀つて。　**た**は、接頭語。

「かくろへ」　**かくろふ**は、「かくる」の延音。　鼓では、下二段で、四段の**かくろふ**に對して、**かくろはせ**の意をなす使役的他動。「匿（か）くして」と譯してよい。「他の警固の武士に知れないやうに（人目にかゝらぬやうに）匿す」意。

「ゐて奉る」　お連れ出し申す。

ゐ　わ行上一段活用の「ゐる（率る）」の連用形。

【いとあやしげなるあまの釣舟の……ここにてぞ人人心地しづめける】　甚だみすぼらしい漁舟のやうに見せかけて、夜明にはまだ大分閒のある頃の暗さにまぎらして舟を漕ぎ出した。その時には霧がひどく降つて、行く先も見えないので、どうなる事かと甚だ危險に思はれたけれども、天皇が御心を鎭めて御祈念なされると、順風までがどん〳〵と吹いて來て、その日の午後四時頃に出雲の國に御到着なされました。此處で漸く人々も心持を落著けたのである。

「あまの釣舟」　漁夫の釣をする小舟。

「夜ふかき空」　夜明けまでには、まだ大分閒のある頃の空。

「暗きまぎれに」　暗さに乘じて。暗さにごまかして。

「押出す」　舟を漕ぎだす。

「いかさまならむと」　無事に渡ることが出來ようかどうかと。

「念じて」　心中に祈る。此の外に、「危さをじつと心に堪へてゐる」の意がある。

「思ふかたの風」　自分の望んでゐる方向に吹く風。おひて・順風。

「吹きすさみて」　吹きつのる・吹きまさる。

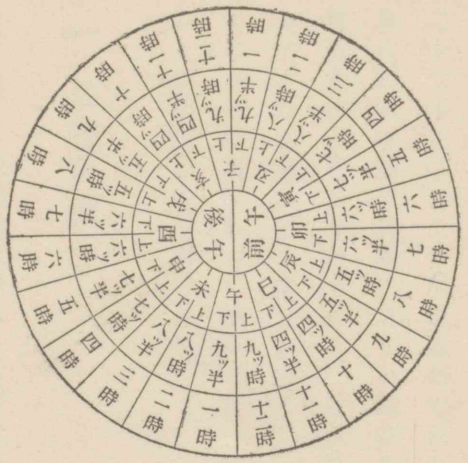
すさむ　「すさぶ」と同じで、だん〳〵度を增してはげしくなつて行く意。

「申の刻」　午後四時。

「心地しづめける」　**しづむ**は、おちつける。

備考

【時刻對照表】



太平記鈔

解題 太平記四十卷は花園天皇の文保二年(一九七八年)即ち後醍醐天皇受禪の年から後村上天皇の正平二十二年(一〇二七年)に至るまで凡そ五十年間の南北朝時代戰亂の始末を記述した雜史である。文章は彫琢に過ぎ潤澤に乏しい嫌はあるが、その雄偉暢達なことは遙に他の物語の右に出で實に和漢混淆文の上乘なものである。その記事は所々に慷慨の意を寓し、虛實相混じて稍々誇大に失してゐるが、之は戰記物語の常である。

著者については諸說あつて確かでないが、洞院公定の日次記には、小島法師の作としてある。小島法師その人の傳記も亦不明である。

一 公家武家

朝陽犯さざれども殘星光を奪はるる習なれば、必ずしも武家より公家を蔑にし奉るとしもは無けれども、所には地頭强うして領家は弱く、國には守護重うして國司は輕し。この故に朝廷は年年に衰へ、武家は日日に盛なり。

〔朝陽〕〔殘星〕〔公家〕〔所〕〔地頭〕〔領家〕〔國司〕

○上田蠶絲專門學校

要旨 朝廷の勢力が次第に武家の勢力に壓せられ、地方に於ては、朝廷から任ぜられた國司や領家の勢力が衰へ、幕府から置かれた守護や地頭の權力が次第に盛んになつた

ことを記してゐる。

釋義

【朝陽犯さざれども……武家は日日に盛なり】朝日が積極的に星の光を消さうとするわけではないけれども、夜明けの空に殘つてゐる星は強い朝日のために自然と光を奪はれて行くのが世の普通の例であるから、丁度これと同樣に、必ずしも鎌倉幕府から朝廷を輕蔑申し上げるといふわけでもないのであるけれども、幕府の權力が強盛になるにつれて、朝廷の御威光が、自然と衰へて行つたが、その一例としては、各莊園では、幕府の置いた地頭の勢力が強く、之に壓倒されて朝廷から任命された領家の勢力が弱くなり、又國々では、幕府の置いた守護の地位が重く、之に壓倒されて朝廷から任命された國司の地位が輕くなつた。かういふわけで、朝廷の御威光が年一年と衰へて行き、それに反して幕府の權力が日一日と盛んになつて行つた。

「朝陽犯さざれども」 朝日は強ひて星の光を奪はうといふ心はないけれども。

「朝陽」 朝日。武家に比す。

「殘星」 朝廷に比す。

「武家」 幕府を指す。

「公家」 朝廷。

「蔑にし奉るとしもは無けれども」 御輕蔑し申すといふわけでもないけれども。

「所」 莊園をさす。之は地頭と領家とを對比してゐることによつて推量することが出來る。

「地頭」 鎌倉幕府から、諸國の各莊園に置いた職で、徵兵糧米の事を掌り、盜賊兇徒の追捕をした。即ち、軍事と警察事務を掌つた。

「領家」 朝廷から、各莊園を支配するために置かれた政務官。

「守護」 幕府から、諸國に置いた職で、その國の軍事や警察事務を掌る。

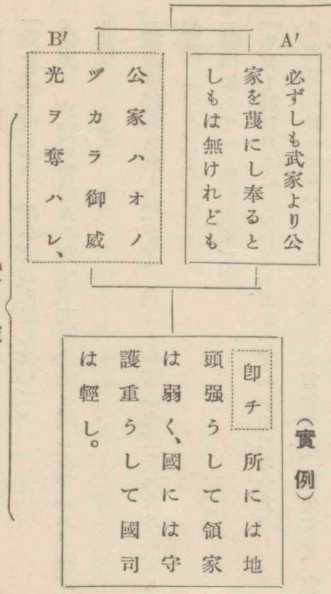
「國守」 朝廷から、諸國を支配する爲に置かれた政務官。

注意

【一】「朝陽」を武家に比し、「殘星」を朝廷に比し、地頭と守護（幕府の置いた職）と領家と國司（朝廷の置かれた職）との勢力關係を述べたものであるから、その意味がわかるやうに、必要な語を補つて解かなくてはならぬ。

【二】「所には地頭强うして領家は弱く、國には守護重うして國司は輕し」の二句は、幕府の勢力の盛んになるにつれて、朝廷の御威光が自然に衰へて行くといふ事の實例を示したものである。

【三】文脈を圖形にして參考に資する。（［……］の中は、補つた部分）



二 代代の聖主

代代の聖主遠くは承久の宸襟を休めむがため、近くは朝儀の陵廢を歎き思し召して、東夷を亡さばやと常に叡慮を回らされしかども、或は勢微にしてかなはず、或は時未だ到らずしてもだし給ひけり。

〔聖主〕〔承久の宸襟〕〔朝儀の陵廢〕〔もだす〕

○海軍兵學校

要旨 歷代の天皇が、後鳥羽上皇の御遺志をつぎ、且つは朝廷の權力の衰頽を嘆かれて、北條氏を討滅しようと計畫なされたけれども、その目的を達しかねられてゐたといふことを記してゐる。

釋義

【代代の聖主、……或は時未だ到らずしてもだし給ひけり】代代の天皇が、遠い時代の事を思うては、承久の昔後鳥羽上皇が北條氏を滅ぼさうと計られて之を果し給はずに怨を呑んで崩御遊ばされた其の御恨の心をおはらし申さうといふ爲に、又、近い時代の事を思うては、朝廷の議式の衰へたことを歎かはしく思し召して、東國の武士（北條氏）を滅したいといつも御苦心遊ばされたけれども、或はその勢が弱いのでそれが出來なかつたり、或は

よい時節がまだ來なかつたので、その儘だまつておいでになつた。

「聖主」 天皇を尊んで申す。

「承久の宸襟」 承久三年に後鳥羽上皇が北條氏を討滅しようとなされて、之を果し給はず、怨をのんで崩御ましました其の御恨の心。

「宸襟」 天子の御心をいふ。

「朝儀の陵廢」 朝廷の儀式の衰へたこと。

「歎き思し召して」 歎かはしく思し召して。

「東夷」 東國の野蠻人の意で、東國武士を賤しんでいふ。玆は、北條氏をさす。

「叡慮を回らされしかども」 色々と御苦心遊ばされたけれども。

「叡慮」 天子の御考。

「勢微にして」 勢が弱くて。

「もだし給ひけり」 そのまゝだまつておいでになつた。

「もだす」 「默す」とかく。口をつぐんで言はない。默止する、意。又、其の儘にしておく、の意もある。

文脈

主語
代代の聖主、
遠くは承久の宸襟を休めむがため、
近くは朝儀の陵廢を歎き思し召して、
東夷を亡さばやと常に叡慮を回らされしかども、
遠語
或は勢微にして
遠語
かなはず、
或は時未だ到らずしてもだし給ひけり。

三 延喜天曆の跡

後醍醐天皇、御在位の間、內には三綱・五常の儀を正うして周公・孔子の道にしたがひ、外には萬機・百司の政を怠り給はず、延喜・天曆の跡を追はれしかば、四海風を望みてよろこび、萬民德に歸してたのしむ。凡そ諸道の廢れたるを興し、一事の善をも賞せられしかば、寺社・禪律の繁昌爰に時を得、顯密儒道の碩才も皆望を達せり。

〔內には〕〔三綱・五常の儀〕〔外には〕〔萬機百司の政〕〔延喜・天曆の跡〕〔諸道〕〔禪律〕〔顯密〕〔儒道〕〔碩才〕

○秋田鑛山專門學校

要旨 後醍醐天皇が政務をお勵みなされた結果、萬民皆その德に歸し、諸道が一時に復興した事を記してゐる。

釋義

【後醍醐天皇、……萬民德に歸してたのしむ】 後醍醐天皇は、その御在位の間は、御一個人としては、三綱五常の道を守つて、周公や孔子の道を踐み行はせられ、表向の事では、天下のすべての政治を怠らず行ひ給うて、非常によく治まつた延喜や天曆の治蹟にならはれたから、日本全國はその德風を望み慕つて悅び、天下の民はその君德になつきしたがつてたのしんだ。

「內には」 一個人としては。

「三綱」 君臣・父子・夫婦の道。

「五常」 仁・義・禮・智・信。

「儀」 道の意。

「周公」 支那古代の聖人。周の武王の弟で、武王を輔佐して紂を伐ち、又、武王崩後、成王の爲めに攝政して天下を治めた人。

「孔子」 支那古代の聖人。魯の人で、儒敎を開いた人。

「外には」 表向の事では。國家國民に對しては、の意。

「萬機百司の政」 天子のすべての政治。

「萬機」 よろづの大切な事、の意で、よろづの政務。

「百司」 もろ〳〵の役人、の意で、百官のつかさどる道々のこと。

「延喜・天曆の跡」 延喜・天曆の治蹟。

「延喜・天曆」 延喜は、醍醐天皇の御治世の年號、天曆は、村上天皇の御治世の年號で、何れも、非常によく天下の治まつた聖代である。

「跡を追はれしかば」 治蹟（政治）の先例にならはれたから。

「四海風を望みてよろこび」 全國擧つてよい政治を慕ひよろこび。

「萬民德に歸してたのしむ」 すべての人民は、君德になつきしたがつて樂んだ。

【凡そ諸道の廢れたるを興し……皆望を達せり】 すべて學問技藝等のいろ〳〵の道の衰へたのを盛んにし、僅かに一つの善行でも、これを賞せられたから、もろ〳〵の寺社や諸宗はこの際繁昌するによい時機を得、從つて佛敎諸宗や儒敎・道敎などの大學者も思ふまゝに世に用ひられて、滿足することが出來た。

「諸道」 學問技藝のいろ〳〵の道。

「一事の善をも」 たゞ一つの善い事をも。

「禪律」 此の律・禪の二宗を以て、佛敎のすべての宗派を代表させたのである。

「禪」 禪宗。臨濟宗・曹洞宗・黃檗宗の總稱。

「律」 律宗。唐僧鑑眞の弘めた宗旨で、戒律を遵守するを主とした。

「繁昌爰に時を得」　この際繁昌するによい時機を得。

爰に　この際、の意。

「顯密」　此の顯密の二宗を以て、佛教のすべての宗派を代表させたのである。

顯　天台宗。法華經を根本の所依とした宗派。

密　眞言宗。大日經・蘇悉地經を所依とした宗派。

「儒道」　儒は、儒教で、孔子・孟子の教をいふ。道は、黃帝・老子の教をいふ。猶、道教は、後漢の張道陵に創まり、晉の時に天師道と稱し、後に道教と名づけたのである。

「碩才」　大學者。

「望を達せり」　滿足した。思ふまゝに世に用ひらたことをいふ。

四　十善の天子

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかかりければ、主上を始め進らせて、宮宮・卿相・雲客、皆歩跣なる體にて、いづくをさすともなく、足にまかせて、おち行き給ふ。この人人はじめ一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後の御供も申されたりけれ、雨風烈しく道闇くして、敵の鬨の聲ここかしこに聞えければ、次第に別別になりて、後にはただ藤房と弟の季房との外には主上の御手を援きまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫・野人の形に變へさせ給ひて、そことも知らず、迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。

〔卿相・雲客〕〔歩跣〕〔十善の天子〕〔玉體〕〔田夫・野人〕

〔そことも知らず〕

○山口高等商業學校

要旨　後醍醐天皇の笠置落の一節である。皇居に火がかゝりさうになつたので、天皇親王・公卿たちは、皆歩跣で逃げて行かれたが、風雨烈しく夜は暗く、敵の攻め來ることが急であつた爲、天皇の御供をする者は、遂に藤房・季房兄弟の二人ぎりになつたといふことを記してゐる。

釋義

【さる程に】　さうしてゐるうちに。

【類火】　燃え移つて來る火が。

【東西より吹かれて】　あちらこちらから風に吹かれて。

【餘煙】　のこりの煙。玆では、火の燃え移つたことを婉曲にいつたのである。

【皇居】　笠置山の皇居（行在所）。

【かかりければ】　「餘煙かかりければ」で、燃え移つたことをいふ。

【主上】　天皇。後醍醐天皇。

【宮宮】　親王がた。

【卿相雲客】　政治に預る高官の人。公卿・殿上人。卿は、大納言・中納言・三位以上の人・四位の參議。相は、宰相。因て、卿相は、公卿に當る。（猶、公は、攝政、關白・大臣の稱。殿上人は、五位以上及び六位の藏人の稱。）

【歩跣】　乘物にも乘らず、且つ履物もはかぬこと。

【體】　ありさま。

【いづくをさすともなく】　何處に行かうといふ目あてもなく。

【足にまかせて】　足の向くまゝに。

【おち行き給ふ】　にげて行かれた。

「おち」　逃げるをいふ。

【扶け】　手を取り、からだをさゝへる意。

【前後に御供を申されたりけれ】　前後につき奉つてお供を申し上げたが。

【鬨の聲】　戰の時、多人數が一度にどつとあげる聲。

【別別になりて】　はなれ〴〵になつて。

【後には】　おしまひには。

【藤房】　中納言。權大納言藤原宣房の子。

【季房】　參議右中辨。藤房の弟。

【援きまゐらする】　手をとり奉る。

【忝くも】　勿體なくも。畏れ多くも。

【十善の天子】　天子の意。前世に十善の行のあつた者が、此の世に天子となつて生れるといふ佛說に基いた語。

「十善」　殺生・偸盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見の十種の罪惡を犯さないことをいふ。

【玉體】　天子の御身體を尊んでいふ。

【田夫野人】　農夫や田舍者。

【そことも知らず】　どこがどうやらわからずに。

【あさましけれ】　呆れたことである。

五　萬仞の青壁

大塔宮は、十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。其の道の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高嶺の雲に枕を敧て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨無うして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。

〔枕を敧つ〕〔苔の筵〕〔空翠〕〔萬仞の青壁〕〔千丈の碧潭〕

○高等學校高等科入學資格試驗

要旨　大塔の宮の熊野落の一節で、宮が熊野から十津川に下向された其の旅の御困難な有樣を記してゐる。

釋義

【十津川を尋ねてぞ、云々】　熊野から、十津川を尋ねて、山路を分けて御いでになつた。

「十津川」　大和國吉野郡南部の廣大な地域で、熊野川上流地方の十津川鄕をいふ。今九個村に分れてゐる。古くは遠津川と呼んでゐた。

【其の道の程三十餘里が間には】　十津川までの道中三十餘里の間には。

【絶えて人里もなかりければ】　少しも人の住む村里もなかつたから。

【或は高嶺の雲に枕を敧て苔の筵に袖を敷き】　「或時は高い峰の雲のある所に枕を立てて寢られ、苔が筵のやうに生えてゐる所に袖を敷いて寢られ」の意。御困難な野宿をなさることをいふ。

「枕を敧て」　枕を立てて寢ること。

「苔の筵」　苔が筵のやうに生えてゐるところ。

【或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す】　或時は岩の間から漏れ出る水を飲んで、口の乾きを僅かに醫され、朽ちてゐる橋を渡つて、その危險に肝を潰して驚かれた。

【山路もとより雨無うして空翠常に衣を濕す】　山の路は、勿論、雨が降らなくても、山氣が常に著物を濡す事である。王維の詩に「荆溪出二白石一、天寒紅葉稀。山路元無レ雨、空翠濕二人衣一。」とあり、又、李東陽が鷄鳴山寺に登る詩に「獨向二亂山深處一寄、不レ勝二空翠濕一衾衣一」とあるに據つて書いた句。

「空翠」　樹木の茂るとこから起る空氣の濕。單に、山の氣の意にとつてよい。別に、空に聳えた山のみどり、の意もある。

【見上ぐれば萬仞の青壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり】　その道中に仰いで見ると、萬仞もあるやうな高い青色の崖は、劍を立てたやうに險しくきり立つてをり、見おろすと、千丈もあるやうな深い谷底の碧色の淵は、ものすごく、藍色に染まつてゐる。朗詠集、江澄明の句に「山復山、何工削二成青巖之形一。水復水、誰家染二出碧潭之色一。」とあるに據つた句である。

「仞」　八尺とも、七尺ともいふ。之は單に、深さや高さを測るに用ひる單位をいふのである。

「青壁」　青い斷崖で、草苔に青み渡つた意もあらうが、一つは下の「碧潭」の對句である。

「刀に削り」　單に、刀で削つたやうだ、といふのではなく、刀の如く削り立つ、即ち、劍を立てたやうにきり立つてゐる、の意。

「藍に染めり」　下の「藍に染めり」に對する語。

六　梁園の昔の御遊

主上は、「重祚の御事相違候はじ。」と尊氏卿樣樣申されたりし僞の詞を御憑みあつて、山門より還幸成りしかども、元來謀り進らむためなりしかば、花山院の故宮に押籠められさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱さる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を敧て、楓橋の夜の泊に御哀を副へられ、梢に餘る北山の雪に御簾を撥げて、梁園の昔の御遊に御涙を催さる。紫宸に星を列ねし百司の老臣も、滿天の雲に掩はれ、參り仕ふる人一人もなければ、天下の事如何になりぬらむと、尋ね聞し召さるべき便もなし。

〔重祚〕〔相違候はじ〕〔山門〕〔故宮〕〔蕭颯〕〔楓橋の夜の泊〕〔梁園の昔の御遊〕〔紫宸〕

○小樽高等商業學校

要旨　後醍醐天皇が、尊氏の重祚し奉ると申し上げた甘言を御信じになつて、都へ御還幸なさると、案に相違して

花山院の故宮に幽閉せられ給うた。そして遠寺の鐘の音を聞かれるにつけ、北山の雪を御覽になるにつけ、御悲しみはますばかりであられたといふ其の折の御心情を記してゐる。

釋義

【主上は、「重祚の御事相違候はじ。」と……寂寞の中に惱さる】 後醍醐天皇は、「天皇を再び御位にお即け申し上げますることは、屹度閒違は御座いませぬ。」と、尊氏卿がいろ〳〵と申し上げた虚僞の言葉を御信頼なされて、比叡山から都へ御還幸になつたけれども、もと〳〵尊氏卿の約束は天皇を欺き奉る爲であつたから、天皇は、花山院といふ古い御殿の内に押籠められなされて、風の音のものさびしく聞える中に、御心を苦しめておいでなされた。

「**重祚**」 退位あらせられた天皇が、再び位に即き給ふこと。

「**相違候はじ**」 閒違はありませぬ。確實で御座います。

「**尊氏卿**」 足利尊氏。**卿**は、大納言・中納言・參議・三位以上の者の稱。

「**御憑みあつて**」 御信頼遊ばされて。

「**山門**」 比叡山延暦寺を指す。

「**謀り進らせむ爲なりしかば**」 天皇を欺き申さうといふ爲であつたから。

「**花山院**」 近衛の南、東洞院の東にあつた御殿の名。

「**故宮**」 古い御殿。

「**寂寥を蕭颯たる云々**」 天皇は、御心を、風の音の物寂しく聞える中に苦しめられた、の意。

蕭蕭 ものさびしく吹く風のこゑにいふ。

【霜に響く遠寺の鐘に御枕を敧て、……尋ね聞し召さるべき便もなし】 霜を帶びた空に響く遠い寺の鐘聲を、御枕から頭をあげて御耳を傾けてお聞きになつては、唐の張繼が楓橋のほとりに夜泊つた時の旅愁を思ひやられて、一層ものかなしい情を加へられ、梢に積り殘つてゐる京都の北方一帶の山の雪を、御簾を上げて御覽なされては、その昔、御園で催された御遊樂を深く想ひ出されて、御涙を流された。紫宸殿に星を列ねたやうに、美しく並んだもろ〳〵の職を掌つた老功の臣下も、空一杯の雲に掩はれたやうに、その姿を御覽になることが出來ず、おそばに參つて仕へまつる人は一人もなかつたから、天下の事は一體どうなつたらうと、尋ねてお聞きなさり得る方法もなかつた。

「**霜に響く**」 霜をおびた空にひゞく。

「**遠寺の鐘に御枕を敧て——北山の雪に御簾を撥げては**」 白居易の香爐峰下新ト二山居一草堂初成、偶題二東壁一の詩句に「遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看。」とあるに據つて書いたものである。

枕を敧て 寢てゐて頭をあげて、耳傾けてよく〳〵聞く意。

「**楓橋の夜の泊云々**」 唐の張繼が楓橋のほとりに夜泊つて「夜半鐘聲到二客船一」と吟じた時の旅中の愁を思ひやつては、一層御哀の情を添へられた、の意。張繼の楓橋夜泊の詩「月落烏啼霜滿レ天。紅楓漁火對二愁眠一。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到二客船一。」

楓橋 支那の今の江蘇省蘇州府城の西七里にある地名。もと封橋に作る。張繼の詩以後、楓橋に作るやうになつたのである。此の地は、山に面し、水に臨み、南北往來の要衝。

「**梢に餘る云々**」 樹の梢の上に積り殘つてゐる北山の雪に對して、御簾を揭げて御覽になつては、宮中の御園での昔の御遊のことを深く想ひ出されて御涙を流された、の意。

北山 京都の北方一帶の山。

撥げて 上げては。

梁園 宮園の意。漢の文帝の子である梁の孝王が構へて、遊樂した苑囿の名で、廣さ三百餘里、こゝに竹を植ゑたから、梁の孝王の竹園といつた。此の竹園といふところから、單に、宮園・御苑の意にとる。唐の韋安石の詩に「梁園開二勝景一、軒駕動二宸衷一。」とある。

「**紫宸に星を列ねし云々**」 紫宸殿に星を列ねたやうに、美しく並んだ諸の職を掌つた老功の臣下も、空一面の雲に掩はれたやうに、その姿を御覽になることも出來なくなり、の意。

紫宸 古の宮中の正殿の名。南殿ともいふ。

七 阿部野の合戰

阿部野の合戰は、正平二年霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るる兵五百餘人、甲斐なき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖をぬぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。斯くの如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物の具失へる者には物の具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながら其の情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜむ事を思ひ、其の恩を報ぜむとする人は、軈て彼の手に屬して後、四條畷の合戰に討死をぞしける。

〔霜月〕〔渡邊の橋〕〔馬を引く〕〔物の具〕〔色代〕

○東京女子高等師範學校

要旨 楠木正行の阿部野の戰に於ける恩情を記してゐる。

釋義

【阿部野の合戰は、……色代してぞ送りける】 攝津國の阿部野に於ける戰は、正平二年の十一月（陰曆）の事であつたから、——渡邊の橋で楠木勢にくひとめられて橋から押落されて流れる兵士が五百人あまりあり、それ等の者が生き甲斐もない命を楠木方の者に助けられて、河から引きあげられたけれども、——秋の霜は肉を傷け、夜明けの寒さで肌膚に氷が結んで、命が助かりさうにも見えなかつたが、楠木正行は情深い者であつた爲、それ等の人々に下著を脱ぎ替へさせて、身を暖めさせたり、藥を與へて、その疵を治療させたりした。かやうにして四五日の閒皆の者を大切に取扱つてやつた擧句、馬に乘るべき身分のものには馬を與へ、甲冑をなくした者には甲冑を著せて、丁寧に挨拶して送りかへしてやつた。

「阿部野」 安倍野ともかく。攝津國東成郡天王寺村大字阿部野附近一帶の地名、天王寺村から住吉に至る閒長さ一里、幅半里にわたる洲丘。

「正平二年」 皇紀二〇〇七年。後村上天皇御治世の年號。

「渡邊の橋」 一名、大江橋。今の天滿橋と天神橋との閒に架けてあつた橋で、往時は、川幅が二百六十閒以上であつたといふ。

「かひなき命云々」 生き甲斐もない命を、楠木正成に助けられて。

かひなき命 生きる價値もないやうな命。

「楠木」 正行を指す。父正成の遺訓を守り、常に南朝の恢復を念とした。遂に正平四年正月四條縄手の戰で討死した。時に年二十三。明治三十四年從二位を追贈された。（一九八六—二〇〇八）

「小袖」 袖下を圓く縫つて小形にした著物。鎧の下に着たもの、即ち、下著。

「馬を引き」 馬を引出物として贈る。馬を贈る。

引く 人に物を贈るをいふ。もと祝宴饗應の終などに馬を引出して贈つたところから起つた語。後には諸物に通じて、主人よりの贈物をいふやうになつた。

「物の具」 (一)器具・調度。(二)戰陣に用ひる要具、即ち、專ら甲冑をいふ。玆は、第二義。

「色代云々」 禮儀を盡して、之を陣へ送りかへして。

色代 顏色を改めて禮をする所から、會釋・挨拶、の意。

【されば敵ながら其の情を感ずる人は、……討死をぞしける】 さういふわけであつたから、敵ではあるけれども楠木の情を有難く思ふ人は、今日以後、味方にならうと思ひ、又其の御恩がへしをしようとする人は、閒もなく、楠木の部下となつて後、四條畷の戰で潔よく討死した。

「四條畷の合戰」 正平四年正月のこと。高師直は六萬餘騎の大兵を擁して四條畷に陣した。楠木正行は決死の兵三千餘騎を以て、之と奮戰激鬪し、殆ど師直を得ようとしたが、遂に衆寡敵せず、一族郎黨悉く討死した。時に正月五日である。

四條畷 本來は、四條縄手とかく。河内國中河内郡枚岡村大字四條の野をいふ。飯盛山の西に當る。

畷 田閒の道の義から、その道にある一帶の野を總稱していふ。

文脈

【阿部野の合戰は、正平二年霜月二十六日の事なれば】 此の句は、下の「秋の霜肉を破り云々」に係る副詞句である。力說して、生徒に會得させられたい。

八 如意輪堂

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せむと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各〻名字を過去帳に書連ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとどむる。

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各〻鬢髮を切つて佛殿に投入れ、其の日吉野を打出でて、敵陣へとぞ向ひける。

〔新發意〕〔舍弟〕〔先皇〕〔過去帳〕〔逆修〕

○專門學校入學資格試驗

要旨 楠木正行等が、いよ〳〵足利勢を討ちに向はうと、吉野の皇居に參內して、その覺悟をのべ、その後、後醍醐天皇の御廟に最後の御暇乞をなし、更に如意輪堂に遺詠を留めて敵陣に向つたといふ誠忠悲壯なところを記して

ねる。

釋義

【和田新發意】　名は賢秀。楠木氏の一族。幼にして薙髮して新發意と稱した。

「新發意」　新に發心して佛道に入つた人の稱。但し、三位以上は入道といひ、三位以下を新發意といふのが例である。

【舍弟】　(一)自分の弟・家の弟。(二)人の弟の稱。玆は、第二義。

【新兵衞】　和田正朝。兵衞尉となり、新兵衞と稱した。楠木氏の一族。賢秀の弟。

【一足も引かず】　一歩も退かず。

【先皇の御廟】　後醍醐天皇の御陵。山陵志に「在二吉野山藏王堂東北。今呼二塔尾陵一。昔時以三陵前有二如意輪塔一名レ之也。」とある。

【如意輪堂】　吉野國吉野郡吉野の奥、後醍醐天皇の塔尾の御陵の下の山腹にある寺の名。藏王堂の東北にある。前項參照。

【過去帳】　寺院で、死亡者の法名・俗名・亡年月日等を記入し、忌日の讀經回向などする爲に備へる帳。鬼籍・鬼錄・鬼簿とも書く。唐の戒彈師が勅を奉じて、一箇月に三十佛を配し、毎日禮拜して人天の福を修したのに起るといふ。本文は、壁板を過去帳として書いたといふ意。傳によると、

楠木正行・同正時・同將監・和田新發意・同舍弟新兵衞・同紀六左衞門・子息二人・野田四郎・子息二人・西河子息・關地良圓。

各半蓮座臺、待我閻浮同行人
先だてて後るゝ人を待ちやせん
ひとつ蓮の中を殘して。

願以此功德、平等施一切、
同發菩提心、往生安樂國、
歸らじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞ留むる。

と、書き附けたといふ。

【かへらじとかねて思へば、云々の歌】　再び生きて還るまいと、今から覺悟をきめてゐるから、梓弓を射るといふ語の如く、亡き人の數に入る(即ち、亡き人の仲間になる)その死者の名を、こゝに書き留めて置く。(もはや生還を期せない身であるから、豫め過去帳に名を留める、といふ意。)

この歌は、毛利本太平記には「あづさ弓ひきかへさじと思ふより、云々。」としてある。

「梓弓」　下の句の「いる」に係る枕詞。

「かへる」　弓の緣語。入るに射るを掛け、かへらじに射た矢の反らないを掛けた。

「逆修」　人のまだ死なぬ前に、あらかじめ自己のために佛事を修めて、死後の冥福を祈ること。又、老いた者が、夭死者の冥福を祈ることをもいふ。玆は、前者の意。東鑑に「武州有二御病惱事一、頗危急之間、及二所療逆修等之儀一。」と。又、佛祖統記第三十四には、「豫修」ともある。

逆　あらかじめの義。玉篇に「度也、謂二先レ事而度レ之也。」とある。

標準問題　國文新鈔教授資料上篇(近古文)終

昭和四年七月二十日發行（上篇）
昭和四年十二月廿八日發行（中篇）
昭和五年二月六日發行（下篇）
昭和七年七月二十四日再版發行
昭和九年五月二十五日三版印刷
昭和九年五月二十八日三版發行

非賣品

編者　東京市神田區神保町一丁目五番地　光風館編輯所
發行者　東京市神田區神保町一丁目五番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區神保町一丁目五番地　光風館書店（電話神田三〇八七番）（振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍　根本力三

著作權所有

光風館編輯所編

標準問題　國文新鈔教授資料

標準問題　國文新鈔教授資料

洋裝全壹冊
和裝全三冊（非賣品）

標準問題　國文新鈔教授資料